
けんぷファー ~もう一つの物語~

しゃんぐりら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けんぷファー ～もう一つの物語～

【Nコード】

N0295V

【作者名】

しゃんぐりら

【あらすじ】

ある朝、南春佳は起きていつもしている寝癖チェックをするために鏡を見たら女の子が写っていた。当たり前だが鏡の世界なんかあるはずなくて……女になっていた！その時、春佳の平凡な日常は終わりを告げた。「平凡な日常に変化を求めていたが女になるなんて……」と驚愕する春佳。原作の登場人物&mp;オリキャラが織り成す新しいけんぷファーが始まる！と書いてみましたが始めて書くので面白いかは保証出来ません（汗）

設定

主人公は南春佳 です。

顔は平均のちよい上、身長は175?ぐらい。髪は茶髪ですが染めたわけじゃないです。地毛です。

使うのはツアウバーで光魔法です。

女に変身した時は、声と髪色も変わります。 性格は変化しません。

春佳の臍物アニマル：ジユウサツイタチ

特徴：腹を銃で撃たれたのか内蔵を出している。話によると散弾銃に撃たれたらしいです。

登場人物は春佳+原作の皆さんです。

ストーリーは本編に沿う予定ですが主人公が春佳なので、原作とは所々変えます。

これからどー弄るか決めてませんが、大変なことになるかも…

色々な人の視点で書いているので分かりにくかったら、すいません

(汗)

設定（後書き）

これは学校帰りの暇な時間や行きの間時間帯（基本、眠い時間帯）に書いていますので誤字は許して下さい。

または、コメントに書いて頂ければ直します。

因みに初めて書いたもんなんで、暖かい目で宜しくお願いします。

もしかすると、消して新しくしてまた投稿する可能性があるの宜しくお願いします（汗）

序章 『日常の終わり』

「ん？誰これ…」

朝起きていつもしている寝癖チェックをしよとすると、鏡の中には見馴れた男の姿ではなく、女の姿が写っていた。金色の髪の毛に唇は薄いピンク色、肌は白くキメが細かい。目はずっと見ていると吸い込まれそうなくらい澄んでいる。歳は同じ年か一歳年上ということころだろうか…しかもハーフっぽいときた。

これでは欠点無しと言っても申し分ないくらいだ。

「私、雑誌の専属モデルなの」と言っても誰も疑わないだろう。むしろ、渋谷の竹下通りを歩いたら一日で何回スカウトされるのだろうかと疑問に思う。

自分は平均よりは良いと思っているが中のちよい上なだけなので顔の出来が大違いだ。ホント羨ましすぎる。これだけ可愛いとさぞモテるであろう。

毎日モテ期みたいな。

「あれ？俺って女の子だったっけ？？」

…ってんなわけねーだろうって」

つい自分でボケてツッコムという一人漫才をしてしまう自分に苦笑する。そんなキャラで今まで生きていないので、こんなとこ誰かに見られたら恥ずかしい。

「何言ってるんだか、俺は…」

そんな訳はないか。俺は十五年間男で生きてきたんだから。第一にまず性転換をした覚えはないしこれからもする予定はない。目あにをとるため目をこすると、女の子も同じことをする。

あ、真似された…と思ったが可愛いので許す。少しえこひいきかな？と思うが俺も男だ、致し方ない。可愛いくて自分のタイプの女の子のイタズラだったら

、笑って許してやるさ。まあ、そんな絡みは今までなかったけど…と考えた辺りで自分の人生に萎えた。

頭をポリポリ搔いた。またマネしてるか気になったので、ちょっと顔を上げて見てみた。そこで見えたのは女の子の上目遣いだった。

「これが伝説の上目遣いなのか…」

俺の学校は一応女子はいるが教室も違うし校舎も別だ。男子の上目遣いなんて伝説と化している。

目が合い一気に心臓の心拍数が上がる。

正直、可愛い過ぎる…俺の好み補正が入ってるとしても、これはヤバイ。

「あれ？そういえば…なんかおかしくないか？」

前には女の子、そして行動を真似される俺。だんだんと眠気が消えてきた。

この状況何かおかしい…俺に姉や妹はいないし、悲しいが生きてきてこのかた、カノジョという人すら出来たことがない。

考えた結果、ある結論にたどり着いた。

「あ、そうか！これは夢だ。だから、こんなに可愛いくてスタイル抜群の女の子が前にいるんだ。」

自分で納得することは悲しいが納得する他ない。

夢で女の子に会うなんて、俺ただけ欲求不満なんだよってね今度は心の中で自分にツッコんだ。

というか、夢なら現実と一緒にだなんてダメだ、と思う訳で緊張しながら女の子に声をかけてみた。

「はは、キミ可愛いね。名前はなんていうの？」

と冗談を言ってみたが返答はない。緊張のせいで声が裏返ってしまったような気もするが、良かった気付いていないらしい。

（俺の声ってこんなに高かったかな？ん〜やっぱり緊張してたからだろうか…）

前の女の子も何かあったのか

あれ？という顔をしている。

その表情を見て、声が裏返ったのバレたかな？と思うがまあいいや。せっかくの可愛い子とのふれ合う夢なんだし、楽しまなくてわ損だ。因みに俺はけして痛い子ではない、とだけ先に言っておこう。

返答は返ってきてないが、気にしない。向こうも緊張しているのだろう、ちよつと笑顔がぎこちない。

次はどうしようか悩んだあげく、夢なら大丈夫だろうという考えのち触れてみることにした。

そーっと手を伸ばす。ぴたりと前に伸ばした手が肩ではなく、硬くて冷たい物にぶつかつた。

「ん？ああそつか、鏡か…」

（……………）

冷静に考えると、ある一つの疑問が浮かんだ。まあ当たり前だが、鏡はこちら側を写しているだけだ。鏡の世界なんてものはない。

―思考停止―

「…ええっ！？女っ！？」

脳がフリーズした。数分…いや数十分だろうか、すごく時間が経った気がした。

「うわわあっ！？」

この事態に驚き腰を抜かした。

盛大に後ろに転けたせいで、頭を柵の角にぶつけた。

「痛つてえ〜…」

痛みがするところに手を伸ばしてみると、柵の角にぶつけたところが熱を帯び盛大に腫れていた。

「夢なのにぶつけたところが痛いし、たん瘤までできてやがる…」

…もう一度自分が言ったことを心の中で繰り返してみる。夢なのにぶつけたところが痛い

夢は傷みを感じない。感じるのは現実だけだ。

焦りと共に心拍数がまた上がる。

「…っ、まさか！？」

痛みがこれは夢ではなく現実である、と伝えてくる。

背中に冷や汗が一筋ながれる。

急いで部屋を見渡したが女の子の姿を見付けることは出来なかった。

「はあ…なんだし。スツゲー夢見てたな…こっちが現実か」

これが現実でさっきのが夢か。

ややこし過ぎるぜ、夢野郎と夢に文句を言うがうんともすんともない。というか、夢で起きた間隔を味わうとか、変な気分だ。

春佳は床から立ち上がって、起きた時いつもしている寝癖チェックをしようと鏡が置いてある棚に近付く。

「ふあ…あ、眠い…」

夢でも同じことしたな、とデジャブを感じた。

大きめなあくびをしながら寝癖を確認すると、今日も盛大にあっちこっちにはねていた。

寝癖を直そうと思い、手で押し潰しながら、手櫛をする。

「あれ？こんなに髪長かったかなあ…」

昨日美容院に行き、髪を切ったはずなので短くなってるはずだが手櫛を試してみると長く感じる。いや、むしろ切る前より長い気がしなくもない。

『髪は短いと伸びるのが早い』ってどっかで聞いたことがあるけど、まさか実話だとは思わなかった。やっぱそんなもんなんかと納得。

「あ、そういえば…」

髭が伸びてきたから剃らなくちゃいけないことを思いだし、自分の顔に視線を下ろした。

そこには自分とは違う顔が写っていた。

「…誰デスカ、アナタ？」

胸のあたりを見ると付いてるはずのない二つの丘も鏡に写っていた。
急いで自分の身体を確認

やはりそこには丘があった。

確認のため二つの丘　通称むねを恐る恐る服の上から触ってみた。

「っ!？」

効果音が出るならふにゃんが適切だと思っぐくらい柔らかかった。今年初の驚きだった。
もはや人生最大の驚きだろう。

「…はああ!？、なんじゃこりゃ!？」

(これが…夢にまでみた、神から女性が授かった産物か)
人はパニックに陥ると意味不明な考えや行動をとってしまうらしい。さっきの衝撃的な感触で意識が飛びそうになったのをなんとか耐えた。まだ、確認してないものがあるのだ。
下の方に触れてみた。

(ない…やはりない。男ならあるはずのものが…)
形あるものが忽然となくなっていた。

「なんで俺、女になってんだよ!？」

状況が全く理解出来ない。目を瞑りとりあえず、落ち着け落ち着けと自分に言い聞かせる。今は冷静になることだけに努める。

「俺は南春佳で列記とした男だ!」

自分の記憶を探り、絶対男だったことを再確認する。そして、目を開けた。

身体は全く変わらず女だった。顔より少し下を見るとさっきから夢にまでみた物たちを触っていたことに気が付き鼻を急いで押さえた。…が一步遅かった。

「あつ…ヤバイ……」

上がってきた濁流は止まることを知らなかった。

ぶふあつと噴水並みに鼻血が飛び散り、意識が遠ざかっていく。

こんなこと…もはや、自分の身体？で興奮し俺は死に絶えるのか、とぼんやり考える。

そして、意識は完全に消えていった。

*

「あんなに驚かなくなつてねえ」

ぬいぐるみの口に相当する部分が笑みなのか、微妙に動いた。

（それにしてもこれはまた面白い人ですねえ…）

ふと、右腕を見ると血が付いていた。

「あ、私にも鼻血が」

先ほど部屋中に盛大ぶつまかれた血の一部だろう。

「ティッシュ、ティッシュ……」

拭くものを探したがない。しょうがないので近くに掛けてあった服

で血を拭く。

「春佳さ〜ん、大丈夫ですかあ？」

床に人生最大の衝撃を受けて気絶している男に向かって名前を呼ぶが反応は無い。

そんなに驚かなくても、と思うが、最終的にしようがないか…という結論にたどり着いたので考えるのをやめた。

「それより、これからどう起こしましょうかねえ…」

ぬいぐるみはゆっくりと立ち上がって、自分が居るところから下を見た。

人間から見ればそんな大したことのない高さの棚でも、ぬいぐるみからしたら半端ない高さである。

「…はい、降りるのは無理に近いですね。」

高さを確認して一秒とせず結論が出た。こんな高さから降りて起こしに行くのは無理なので、諦めることにした。

（さあ、困りましたねえ…学校とやらの遅刻しちゃいそうですし）学校もそうだが、今の現状やらも説明しなければいけないので、何とかして起こすしかない。

とりあえず、声が届かないだろうと分かっているても、呼んでみることにした。

「ねえ、春佳さん…南春佳さ〜ん学校遅刻しちやいますよ〜、起きなくていいんですかー??」

…起きない、それどころかピクリとも反応しない。このままではど

うにかして下に降りるといふ選択肢しかなくなってしまいそうだ。
ぬいぐるみは考えた結果、
プランB『物でも当てて起こそう』を。実行することにした。
投げる物がないか辺りを見渡す。

「えーっと、私が持てそうな物わ…」

厚さ10?ぐらいの広辞苑を見つけた。持ち上げるために近付く。

「よい…しよっ」

持ち上がらない…。もう一度力を入れて持ち上げようとするが、持ち上がらない…

というか、手が広辞苑と棚との溝に入らない…。

「私ならいけると思いましたが、やはり無理がありましたか…」

広辞苑を持ち上げることは出来なかったので、押して落とすことにした。

「んっ…」

腕に力を込めて思いっきり広辞苑を押す。ずるずると少しずつだが前に動いていく。

落ちるとドスツと鈍い音をあげた。

落ちた音で起きるかなと期待を募らせたが変化はなかった。まだ起きそうもない。

「はあ…諦めるしかないようですね」

プランB…いや、プランCが駄目だったので、他のプランを考えることにした。

だが、時計を見ると8時10分。時間もないのでプランAの『どうにかして降りる』しかなくなってしまうた。

「…さあ、どう降りましょうか」

ぬいぐるみは辺りを見渡した

一章『はじまり』

「ハル…ん、…ルカさん」

誰かが俺を呼んでる

ぼんやりとした意識の中で俺を呼ぶ声が響いてきた。

(学校もあるし、そろそろ起きないと…)

眠さとこれから着替えて学校に行かなくてはいけないという怠さに苛まれたが気合いで起きる。ここで目を開けなかったら、二度寝確定だ。重い目蓋をこじ開ける。

「ん…眩し……」

部屋の天窓から入ってきた朝日の眩しさに目を細めた。外からは小鳥のさえずりが聴こえる。

「やっと起きましたかあ〜春佳さん」

「…ん〜?」

何かが顔を覗いきた。しかし、逆光のせいで誰なのかわからない。光に慣れてきたのかだんだんと見えてくる。

「誰…?」

「私ですよ、わ・た・し」

向こうは俺のことを知っているらしいが、俺は聞いたことがない声なので誰なのか分からない。
顔を見るために太陽光が当たらない場所まで動く。そして、声の主をもう一度見てみる。

そこには「春佳さんがやつと起きた〜」と言いながら、てくてこ歩いているぬいぐるみがいた。

「はああ!?!なんでぬいぐるみが喋ってんだよ!それに歩いてるしさつきまで睡魔に負けて、二度寝をする一歩手前だったが一気に目が覚めた。そして、ぬいぐるみが喋り歩いていることに驚き、飛び起きる。」

「まさかの、次世代ドラ もん的な感じなのか!?!」

「…はい?何言ってるんですか、春佳さん。私はただのぬいぐるみですよ??」

「じゃあ、まさかの心霊現象…ポルターガイストか!?!」

幽霊なら座敷わらしだったら良いな…と思ったが、ウチの家は建てたばかりで全然古くない。

座敷わらしは昔からの古い家とかに出てくるらしい。なので、いるとしたら浮幽霊または地縛霊のどちらかだ。

(ま…まさかっ!?!?)

「いえ、幽霊ではなくて、ただのぬいぐるみです」

俺の心の声を読んだのか、疑問と回答が一致した。

「いやいや、“ただの”ってのはおかしいだろ。俺と話してるし」

「あ、はい。私はぬいぐるみですけど話せますよ」

ぬいぐるみはあたかも普通ですよ？とばかりに話した。

喋れて歩ける時点で“ただの”っていう枠組みからは逸脱してるよ
うな気がするが。

(もしかすると…俺は夢を見ているのか?)

生まれてこのかた、ぬいぐるみは話せる、なんて聞いたことない。
音を出す玩具ならあった気がするが。

ていうか、むしろ話せたらトイスオーリー級じゃないか。

「あはは、夢でもないし、それでもないですよ。あ、ついでに言っ
ときますけどさっきのも夢じゃないですよ?」

「人の心を読むな。ぬいぐるみのくせに」

「んな…そこまで」

人種差別…いや、ぬいぐるみ差別だーとか小さな腕を俺に向けてき
たが無視。意味分かん。

考えていることを読まれるってことは、俺って表情に出やすいのか
な〜、と思いながらこの話せるぬいぐるみにさっきのことを聞いて
みる。

「さっきのも夢じゃないってどういうことだよ」

ぬいぐるみが俺の顔を見ようとして頭を上に向けようとしたが、頭
が重かったようで後ろに倒れてしまった。

しょうがねーな、と思い、元の棚の上に戻してやる。

「あ、どうもありがとうございます。春佳さんは優男ですね」

「褒めても何も出ねーぞ。ていうか、続き話してくれ続き」

優男だなんて言われたのはぬいぐるみが初めてだったので、恥ずかしくなりさっさと話を進めさせる。

「えーと、さっきの話というのはですね…あなたが鏡で自分の女の姿見て「…ええっ!?女になってる!？」って言った辺りのことです。そして、頭ぶつけて…そのあとは…自分のむ」

「分かった!もう分かったから、それ以上言わないでくれ」

「続きを話せと言ったのは、春佳さんではないですか」

「…そこまでは別にいい」

それ以上言われたら触った感触を思い出してしまう。これは黒歴史決定だな、うん。

新たに自分の黒歴史が追加された。

もう本当に棚から降りるの大変だったんですよ。春佳さんと、ぬいぐるみのクセに文句をぶちぶち言っているがこれも無視。そんな問題じゃーない。

「あの、春佳さん?」

「……………」

ありえなさすぎて、信じたくない。俺は日常に変化を求めていたが

性別に変化が欲しかったわけじゃない。本当に欲しかったのは、彼女と過ごすきらきら光る青春だ。

「信じられないことでも、そのうち信じられますよ。」

ぬいぐるみは悟りでも開いているんじゃないかと思つぐらい、穏やかな口調で事実を突きつけてくる。

「はあ…、お前と話してる時点で既におかしいことなんだから、認めざる終えない…よな…やつぱ。」

「やっと分かってくれましたか」

「ああ…絶望的だつていうことだけはな」

「それでは変身の仕方ですが」

「いや、ちょい待ち。変身だとかの前にお前はなんで話せん?」

100歩譲つてあれは夢ではなくて現実だったということにする。だが、それとぬいぐるみが話すところの接点があるのかかが分からない。

「ええ〜私ですか…簡単に言えば天使的な」

「…黙れ」

ぬいぐるみは話を途中で切られたせいか、ムスツとしているような気がするが違うもんは違つて言わなきゃね。

俺はそう誰かに教わつた、ような気がする。

「え？こんなに可愛」

「いくないからね…何抜かしてやる」

またしてもツッコミを入れてしまった。だって身体から内臓だしてんのは、可愛い部類よりキモい部類だろ。審査員が100人いたら100人全員、こいつを見て“可愛い”とは言わないだろう。もしいるなら、このぬいぐるみをくれたあの人が、この伝説的なぬいぐるみ 通称臓物アニマルを売れると思えば製造しまくった会社ぐらいいだな。今は当初の予想利潤率を大きく下回り、経営が大変なんだとかどうか…さっさとこの事業から手を引けばいいのに、と思うがどうやら狂った社長がやっきになってるらしい。少し前にネッツトの掲示板で「新商品製作中」こう御期待！」なんて書いてあったが、何を期待すればいいんだ？というのが俺の率直な意見だ。

「冗談は置いといて本題にはいりますが…」

「お、おう」

(そうだよ、俺は早く本題が聞きたいんだ…)

こっちはこれからの人生がかかっている。もしこのことが誰かにバレてどこかの地下研究所に連れて行かれるなんてごめんだ。

「簡単に言えば私はモデレーターのメッセージを貴方に伝えるメッセージャーです。そして、あなたには変身して青と戦ってもらいます。そして、全員倒して下さい。」

「ちよつと待て、話をまとめて一気に説明すんな。いきなりすぎて全部頭に入らないんだよ。」

「あ、はいそうですね。春佳さんが手短かに話して欲しそうだったので、大雑把に説明しちゃいました。」

「…分かんないところ、質問していいですか？」

「あ、はい。どうぞ春佳さん」

「…まず、もでれーたーとはなんですか？」

「……………ふっ、モデレーターとは調停者のことですよ」

「…ふう〜んって、てめえ、今笑っただろ！」

「いえいえ、笑ってなんていませんよ？馬鹿にただけです」

ぬいぐるみは嘲笑うかのように

口が変形した。

俺は何も言わず、ふらふらと机にあるものを取りに行く。

「…？」

引き出しの中にあるカッターを探したがいつも入れている所に無かった。

「ちっ…命拾いしたな……………お前」

「え？春佳さん、何をしようとしたんですか？？」

「…うるさい、少し待ってくれ頭で整理したい」

ぬいぐるみの話を止めて、さっき聞いた話を頭の中で整理する。
ぬいぐるみは調停者っていう上の奴の使いでここにおいて、俺は青を
倒す為に選ばれた的な感じか？でも、なんだよ青と戦って全員倒せ
って…青って異星人的なやつのことなのか？
それに变身って何にだ？

意味不すぎて頭がショートしちまいそうだ。

「ああ…クソ。意味分かんね」

頭をボリボリかいた。どう考えてもこれがリアルとは思えない。

「ふふ、本当にものわकारいの悪いおバカさんですねえ〜春佳さんは
…」

ぬいぐるみは棚の上をぼすぼすと叩いて笑った。

クソ…他人事だと思いやがって…ゴミ箱にぶちこんでやるか？と思
ったが、一応女の子に貰った物だからやめた。ただジト目で睨むこ
とにした。

「…バカで悪かったな。」

ぬいぐるみは「まあ、そういうとこ嫌いじゃないですよ？」とお世
辞を言ってきた。ホント上手いお世辞だこと。頬が引き吊りまくる
ぜ。

「とりあえず、何となくわかりましたか??」

「お前に好かれても嬉しくない…とだけ先に言うておく…」

「あ、ツンってやつですか？」

「違うっ！…！」

ぬいぐるみがここまで色々な言葉を知っているとは以外だった。もつとごう、なんですかこれは…っというのを想像していたんだが。

「さっきの話については、とりあえず分かったことにしとく」

「まあ、何となく感じていいです。いずれ分かりますから」

ぬいぐるみは、はふうとため息をつく、口の部分が薄ら笑いの形に変わった。

「…何だよ、いずれって。」

「そのままの意味ですよ？」

…なんかスッゲーナメられてる気がする。だが、時計を見るとそんなことしてる時間は残されていなかった。

「もう一度聞きたいんだけど…これは本当にリアルなんか？」

考えるのを諦めるのと最終確認のため確認してみる。

ぬいぐるみは口元をピクツと動かして、含み笑いをしながら「現実ですよ？ツネツてみてはどうですか？？」と言ってきた。いちいち憎たらしいぬいぐるみだこと。

力一杯、右手の人差し指と親指を回転させた。
くいつ

頬にとんでもない激痛が走る。

「いたたたたたた!!」

力一杯つねったため、とてつもなく痛い…やはりリアルか。最近、つまらなくて何か楽しいこと起きないかな、とは思っていたがマジで起きるとは…。

「ところで、学校は行かなくていいんですか??」

「…行くよ。」

いつの間にか目覚まし時計の近くまで歩いたのか、ぬいぐるみは時計を見て「もうすぐ8時20分になっちゃいますよ!」と言っていた。

(うっ…でも、まだ聞きたいことが…)

「私も分からないことはありますが、質問には後でも答えますよ?」

「分かった。学校から帰って来たら、じっくり話聞くんか?」

「いいですとも!」とぬいぐるみは某番組のマネみたいないんトネーションで言うが、あれはいいともじゃなかったか?最近見てないから忘れたが。

「急いで支度しなきゃな…」

とりあえず今は諦めて、帰ってきてからじっくり聞くことにするか。考えがまとまったので、制服に着替えることにした。時間が無いのでネクタイは鞆にぶちこむ。

(飯は…いいか。売店で適当に買えば。)
そうこう考えているうちに着替えが終わった。慣れたので2分とかからなかった。

「じゃあ、行ってくるわ」

「はい、行ってらっしゃい」

懐かしいやり取りをして、少しはいい気分になったが、何せ相手が内蔵をぶちまけたぬいぐるみだからあまり嬉しくない。相手が彼女だったら〜と思うが、それは夢のまた夢だ。

階段を一段飛ばしで降りて、玄関までダッシュ。その後も走らなければいけないということに萎えたが遅刻魔になりかけているので、遅刻は出来ない。

ロンファアを急いで履き、学校に向かって走り出した

*

春佳が学校に向かって走って行くのをぬいぐるみは柵から眺めていた。

「さあ、初めはどんな人と出会っただろう…」

敵だったらヤバそうですね、とは思うが何とかかなるという予感がする。

春佳が見えなくなったので、柵から降りるとぬいぐるみは辺りを見渡した。

「さあ、これからどうしましょうか…」

(春佳さんが居ないと暇なんですよね…)
モデレーターからはこれといって、あれをしろ、これをしろとは言われてない。やる事がなく暇なのでとりあえず、やれと言われたことはちゃんとやったか思い出す

- 1、春佳さんを変身させる。
- 2、状況を伝える。
- 3、変身の条件を伝える。
- 4、変身すると何が使えるのかを伝える。

「…あ、変身の条件とか何も教えていませんでしたね」
時間も無かったせいもあるが色々伝えておかないといけないことを教えて無かった気がする。例えば、ケンプファーの姿で戦うだとか“青”というのは異星人ではなく人間だとか。

「まあ、春佳さんなら大丈夫ですよね」
大丈夫、と強引に納得する。

ぬいぐるみの耳が何かに反応してピクツと動いた。
(…っ、これは…)

「…遂に出会っちゃいましたか」

ぬいぐるみは不適に笑う。

(春佳さんはどう驚くんでしょう…)
春佳の驚き具合を想像しながら、ぬいぐるみは眠りに付くことにした

「はあ……はあ……」

疲れた…非常に疲れた。運動神経には自信があるが最近、運動してないから体力的にキツイ。それに高校に入って、これといってやりたいことなかったので帰宅部に入部した。なので運動という二文字には毎週、一回ある体育の授業以外にあまり関わりがなかった。やはり、疲れという敵に直ぐ捕まった。息とふくらはぎが限界を向かえそうなので、少し歩くことにした。

「はあ……はあ……っ、今何時だ？」

いつも左ポケットに入れている携帯で時間を確認しようとする。

(あれ?…)

左には何も入っていないかった。おかしいなと思い、右のポケット、後ろポケットと順番に探していくが無かった。

「……携帯がない!!」

家を出るときにいつものようにポケットにいれたはずなのに、ガムのごみしか入っていないかった。

まさかどこかに落としたのか?と辺りを見渡すが何も無い。

(…それとも鞆の中かっ!?)

急いで鞆を開けて、中身を確認する。教科書に筆箱、眼鏡。それとノートしか入っていないかった。

その後裏ポケットも探すがやはり、ガムや鏡、ヘアピンなどしかなく携帯は無かった。

「……やっぱり無い!!」

どこかに落としたりしたので、ここまで来る間にいつ携帯を使ったのかを思い出す。

(家を出て…そのあと、角を右に曲がって…また走って…)

「あっ！分かった！」

どこで最後に携帯を使ったかを思い出した嬉しさで、大声を出してしまった。そこまで大声を出した気はなかったが結構周りに響いた。春佳は少し恥ずかしくなり、周りを見渡す。

(良かった…誰もいなかったあ)

これが朝ではなく昼前だったら誰かしらいて、注目的になったなと思う。そして、こちら辺はお喋りが大好きなおばちゃんの巣窟だ…。良いネタにされて笑い者にされるだろう。

「さあ、問題はここからだな…」

そう、家を遅刻しそうな時間に出たため来た道に戻って探している。と一時間目の授業に完璧に間に合わないのだ。

だが、落とした物が筆箱とか教科書とは違うので、急いで取りに行くことにした。実際、教科書も駄目な部類だが…。

春佳はまたしても走る

「はあ…はあ…確かこの辺で…」

最後に使ったのはこの辺だろうという目星を付けた所に着いた。辺りを探す。

案外、携帯はすぐに見つかった。

「良かったあ…下水道のところに落ちてなくて」

携帯が見つかり安心したが落とした衝撃で画面が少し割れていた。また修理に出さなくてはいけないのかと落胆しながら、放課後の予定を編成する。

「学校終わったら即携帯ショップに行くことにして、今は学校に急ぐか…」

時間は分からないが急がないといけないと思い、またまた走る。

「なんかマラソン気分だよ、ホント…」

疲れているせいでゆっくりではあるがなんとかさっきの場所まで戻ってくる事が出来た。

ホント近いようで遠いよな…近道無いかな、とぼんやりと考えるがここ最近に新しい道が出来たという話は聞いていない。

少し休憩ついでに滝のように流れる汗を手で拭った。

…ン、バン、バン

遠くから爆竹のような、銃声のような音が響いてきた。

「ん？こんな朝早くから、何やってんだ？？」

また、鶺鴒でも追っ払ってるのかな…と呆れながら、当人のことを思い出す。

毎週、一回は聞こえてくる鳩を追っ払うための爆竹の破裂音。

いい加減近所迷惑だし、誰か文句をつけないかなと思っっているが今のところ変化はない。

昔、話したことがあるが正直あのおじさんは少し変わっている。どう変わってるかというところ、まず人の話を聞かないのである。そして、おじさんの若かった頃の自慢話が始まるともう終わりなのだ。1時間間は帰してくれない。だから俺はあのおじさんと関わるのが面倒なので、そんなことは絶対しない。お金をあげるから、と言われても勘弁だ。まあ、1万なら考えてしまうかも知れないが…

しょうがないので、いつも通り横を通りすぎようと速歩きで行こうとすると、女の子の姿が見えた

*

「はあ…はあ…くそっ」

ナツルは全速力で走る。別に体育で50メートル走のタイムを測っている訳ではない。もしタイムを測っているなら、こんなに死ぬ気で走ったりしない。

「…ヤバい、追い付かれる…」

後ろを向くと狂犬みたいに怒鳴りながら追いかけてくる女がいる。俺こと瀬能ナツルは、今日最大級の驚き…いや、事件と言ってもいい。朝起きたら、女になっていた。あなたは“ケンプファー”に選ばれました。その姿で敵と戦って勝って下さいと言われた。それも内臓を出したぬいぐるみ 通称ハラキリトラに。

もう何がどうなっているのか、理解出来ない。突然百円を渡されて、『これで世界を救うように』と命じられた気分だった…。

(おっと、こんなことを考えてる場合じゃない。)今は逃げなくては…

「おい、待たないとてめえの身体を蜂の巣にすんぞ！」

拳銃を持った女が叫びながら、ものすごいスピードで追いかけてくる。

「いや、そんなこと言われたって待ったら絶対俺のこと打つだろ…。」

どうせ止まった瞬間に蜂の巣決定だ。

「いや、だっ」

さつきからだんだんと腕輪の輝きが強くなり、点滅する間隔が狭まってきている。これがハラキリトラが言っていた変身の合図的なものではないかと思うが、どう変身すればいいのか分からない。

それは曲がりかどを曲がった瞬間に起こった。腕輪は点滅状態から常時発光に変わった。そして、青白い光が身体全体を包みこむ。

「何だ…？何が起こって…」

小さな輝きが広がり、全身

洗い流されるような感触があった。

ふいに光がおさまった。

自分の身体を見ると男には無いはずのもの、いわゆる双丘があった。

「うわっ、やっぱり女の姿になっちゃまった…」

朝と今で本日二回目だが、やはりショックの大きさは変わらなかった。

「はっ……あははははっ！」
後ろから馬鹿笑いが聞こえた。いつの間にか追い付いていた女は銃をゆっくりと向けながら、爆笑していた。

「こりゃあいい、やっぱりお前もケンプファーだったか！」

「おまつ、ケンプファーを知っているのか!？」

「知っているも何もあたしも、お前もケンプファーになっているじやねえか」

俺を指さして笑う。

よく見ると、彼女の腕にも俺と同じ契約腕輪が付いていた。

「ちよつと、待て！何でお前と戦うんだ？」

「…はっ、あたしがケンプファーでケンプファーが前にいるからに決まってるだろ」

彼女は今にもトリガーを引くのではないかという勢いで質問に答える。

(初耳だよ…)

ハラキリトラはただ敵と戦えとしか教えてくれなかったし、まさか人間と戦うなんて思ってたなかった。それに戦うと言っても向こうは銃を持っているが、こちらは何も持っていない。武器が無いからって、手加減して素手で相手してくれるようには見えない。むしろ、げらげら笑って「死ねばーか」と言われたのち、蜂の巣にされるのが落ちだ。

「なんだ？逃げないのか?？」

「え？見逃してくれんの？」

「バーカ…誰が逃がすなんて言ったんだよっ！」

放たれた弾は顔の直ぐ横に着弾した。

「うわっ、ちよっと待てって！」

「はっ、誰が待つかよ」

女は口元を不敵に吊り上げ、また引き金を引いた。

*

女の子に声をかけようと思ったその時、急に右の袖の中が赤く輝いた。

「えっ！？なんだ!？」

袖口をガバツと開くと、そこには赤く輝いている腕輪が付いていた。形は見たこともなく、不思議なデザインをしている。

「何これ…付いてるの気付かなかった。てか、付けた覚えがないんですけど……」

不思議な腕輪を触る。

(あれ？これ継ぎ目がなくね？)

継ぎ接ぎがないどころか完全に腕にフィットしていた。

赤い光は点滅し、どんどん光が強くなっていく。そして、点滅から

常時発光に変わった。
腕から順に光に包まれていく。

「な、何が起こってんだ！？うわっ…」

赤い光は身体全体を包む。

制服が粒子となって身体から離れる。そして辺りに散らばった粒子が身体の回りに集まり、再構築が始まった。
やっと光が収まり目を開けると

、女になっていた。

胸はペタンこから膨らみ、双丘が…制服はうちの学校の女子の
変わっていた。

「うわっ、変身するってこれのことか。すげえ…」

普通なら驚くところなのだが、ついつい変身したことに關心してしまつた。だって、あり得ないことじゃないですか。

二度目ということもあり、驚きは半分で残りは関心＋その他だつた。
(変身することはしょうがないとして…何で今変身したんだ?)

「…って、しょうがなくないことだな…」

女の子に変身出来るなんて知つたら、クラスの奴ら驚いてぶつ倒れるんだろなと思つたが、あいつらは神経が図太い奴らばっかだから逆にこつちが危ないかもしれない。

どこかの店に売られたり、地下研究施設に送られたりする可能性だつてある。

唯一驚く人がいるとしたら、先生ぐらいだろう…それ以外はない。

「なんだか、あいつが言つてたようにあんま気にしないもんなんだ

な。」

女に変身した姿を見る。

下を見ると丁度良いぐらいな胸が見える。触ってみたい気もするが流石に自分の身体？なのでやめといた。自分の身体を見て興奮なんかしたくないし、そんな変態にはなりたくない。

ガラガラと近くから壁の壊れるというか、崩れる音が聞こえてきた。

「なんだっ!？」

音がした方へ走る。

途中に何故か鞆が落ちていたが、交番に行ってる場合じゃないので無視。というか、鞆を無くすとか、そこまで抜けてる人はいないであろうと思いたい。

角を曲がるとうちの学校らしき女の子が三人いた。

よく見ると、拳銃を片手に持った女子と女をかばうようにしながら左手を前に出している女子がいた。ここまででおかしな点は1つだけなのだが、拳銃を持った女子側の壁を見るとおかしな点が増えた。

壁が崩れていた。それも粉々に…

これはヤバいと思い、すぐさま壁に隠れる。

「てめえ…ツアウバーか……発動ア 無しとは……」

遠いせいで向こうの会話が全部聞こえない。話は飛び飛びだが、どうやら言い争いレベルの争いではないらしい。拳銃を持っている女は手を振った。

「…っ!？」

手を振ると同時に銃はかき消すように消えた。
見間違いかつと思っただが、もう銃は持っていないのでさっきの本
当なのだろう。

女が立ち去った後にまた一人どこかに走っていった。残された女の
子はしばらくぼつんと立っていたが、何かを思い出したのか「あつ
！」と大きな声を出していきなりどこかに走りだして行った。

この状況に唾然としていると、また腕輪が光だした。だが光は点滅
ではなく、辺りに発光した。

「…っ」

光が収まり、また自分の身体を見ると男に戻っていた。

「…なんだっただ？」

なんで変身してそして急に元に戻ったのか考えたが全く検討が付か
なかった。

「あつ、やべっ！」

左のポケットに手を突っ込んで目的の物を取り出す。
携帯の画面を見るが何も写っていない。

「はぁ…そうだった…ホント今日は付いてないな……」

先程、落として壊れたらしいということを思い出した。

(しゃーない…走っても遅刻決定だろうから疲れたし歩こう)
再び学校に向かって歩き出す。

しばらく歩くと後ろからはたばたと走る音が聞こえてきた。

「春佳さん、おはようございますー！」

名前を呼ばれたので後ろを振り向くと、沙倉楓がパタパタと必至に走ってこちらに来了。

「ん？あ、おはよう沙倉さん」

「春佳さんはまた遅刻ですか？」と沙倉さんは、走ったせいで薄く蒸気した顔の汗をハンカチで拭きながら聞いてきた。

（はい…またですいません）

彼女はクスクスと笑う。どうやら、俺の遅刻回数は女子部にも広がっているらしい…いや、本当に恥ずかしいばかりだ。

「…うん、またやつちまった」

「どうしたんですか？顔色悪いですよ？？」

「あ、ううん大丈夫だよ。ただ眠いだけ」

ごまかす為に欠伸をした。

朝起きた時のことを思いだすがやはり女の子になっていたのはショックが大きかった。そして、黒歴史についても問題がありそれらが頭の中で渦のようにぐるぐる回っている。

「もうお互い遅刻組だからゆっくり行かない？」

「あ、はい私はそれでかまいませんよ」

沙倉さんと一緒に学校に行けることになった。聞いてみなきゃ分からないもんだな。

沙倉さんと昨日、男子側で起きた面白いことや女子側で起きたことなどを話した。

ふと、沙倉さんの胸を見る。沙倉さんの胸も確かに大きく、形もいいが女の自分も負けず劣らずのものだった。どちらの方が柔らかいのだろう…。っていかんいかん、何を考えているんだ。ごめんなさい、沙倉さんと心の中で謝っておく。

また、欠伸をしそうになったが頑張って噛みしめる程度に我慢した。

「確かに眠いですね、私も昨日は夜更かししちゃいました」

沙倉さんは俺の欠伸に気付き、クスクスと笑いながら小さく欠伸をする。

(うわっ、欠伸を噛み締めている姿可愛いな…)

いちいちドキツとしてしまう。そりゃそうだ、星鐵学院の2代美少女なのだから。可愛いと言う人はいても、不細工だと言う人はいない。いたとしたら、ファンクラブの奴らに消されて、東京湾に沈められ藻屑になるだろう。

「夜中まで何かしてたん？」

「いえ、何かしてたというか…」

沙倉さんは少し顔を赤らめた。

沙倉さん…そういう表情で男どもは惚れてしまうんですよ？と言いたかったがやめて、ただ見るだけにした。いわゆる目の保養ってやつだ。あ、因みに俺は沙倉さん推しって訳じゃない。

「ん？どうしたの??」

「いや、ちよつと…また昨日借りた臓物アニマルの映画を見ています…」

「へえ〜どんなの見てたの？」

「第17臓物船団が新たな地を求めて宇宙を旅するんですけど、そこにいきなりモツラという超時空生命体が襲ってきて、戦うんです！その時にですね銀河の妖精と超時空シンデレラの」

（ヤバい…やってしもた…）

（当分この話だな…）

沙倉さんは火が着いたかのように臓物映画の素晴らしさを伝えてくる。今、俺が沙倉さんに貰ったぬいぐるみが喋ったよと言ったら驚くだろうと思つたが信じてくれないだろう。もし皆喋るなら、沙倉家はハンパないことになっているだろう。何せ聞いた話によると…沙倉さんは大の臓物アニマル好き、もはや愛好家と名乗っても良いレベルまで達しているらしい。普通ならここで引かれるはずだが、ウチの男子共は一味も二味も違う。「素晴らしいです！沙倉さん」だとか「僕を沙倉さんの臓物アニマルのコレクションに加えて下さい」とか。後者に関しては、それは死人だろ…と思うがあえてつかまえない。そんなのがわんさかいるから、一人一人につっこんでいたら切りがない。

「あ、そう言えば…春佳さんなあげたジュウサツイタチさんは元気になっていますか？」

「うん、めっちゃ元気にしてるよ〜いつか喋るじゃないかってぐらいいにね」

（今は喋るようになってちゃったけど…）

「そうですね！ありがとうございます。親としては嬉しい限りです」
沙倉さんは余程嬉しかったのか、満面の笑みを溢した。

(うわっ、まぶしすぎる…)
あまりの神々しさに目を細める。この笑顔で何人射殺されたんだろうと考えた。

多分ざっと、100人はいるのではないだろうか…何故なら、沙倉さんを信仰しているのは2年生だけではない。全学年だ。一年生に關してはメチャクチャ可愛い先輩がいるという噂を聞き付けて入ってくるやつばかりだ。

「あ、臍物アニマルのグッズはまだたくさんあるんで他のもどどうですか？」

楓はごそつとバッグから何かを出した。

「え？なにそれ??」

「これはですねー、おととい発売された新商品の臍物ペンシルです」

「…すごい、デザインだね」

春佳は頑張つて笑顔を作るが上手くいかず、引きずる。

「この内蔵の形をしたグリップがですね、シリコンで出来ていてぶにぶにしてるんですよ?」

触ってみて下さいと言わんばかりに、臍物ペンシルを向けてくる。

「あ、ホントだ。造りがリアルだね」

臓物アニマル　またの名を内蔵など出したグロテスクの塊。そのぬいぐるみシリーズの愛好家の沙倉さんは、ぬいぐるみ以外にも色々な物を持っているらしい。

会社が潰れないのはこういった熱烈のファンがいるおかげだろう。

「そうなんです。そこも私の気に入っている部分の一つなんです」

楓は良かったらこれもいかがですか？と目をキラキラさせて聞いてくる。

「はは、大切な物は1つぐらいが丁度良いんで他は大丈夫ですよ」

やんわりと断る。これ以上増えたら、部屋がホラーだ。

楓は「そうですか」と気にしていないようだ。よっぽど臓物アニマルを大切にしているらしい。

丁度話が切れたのでどう違う話に切り換えるか考えていると前から大声を出して走ってくる大人がいた。

「こらー！お前らー、男女の一緒の当校は規則違反だぞ！！」

結構遠いのに何を言っているのか良く分かった。

(…！？)

「ヤバいつ！沙倉さん逃げて！！」

「はい？春佳さんどうしたんですか？？」

沙倉さんは、ぼーっとしていたのか状況を理解していなかった。急

いがないと先生に捕まってしまう。

「先生に見つかっちゃったんだって！だから、ここは何とかするか
ら逃げて！」

「え…でも、春佳さんが……」

沙倉さんは悩んでいた。捕まると悲惨なことになることを知っているらしい。

「沙倉さん早く！」

「あ、はい」

沙倉さんの背中を押してあげる。彼女はチラチラとこちらを気にして見てくるが少しずつ遠くなっていく。

春佳は彼女の姿が見えなくなるのを確認すると、これからどう逃げようか逃げ道を考えることにした

二章『ケンプファー』

「はあ、はあ……まぢ疲れた……」

春佳は小道に入り、辺りを伺う

が追っ手はいない。どうやらなんとか振り切れたらしい。

(…暑い……汗で服がヤバいって…)

自分の服を見る。この唸るような暑さの中をマラソン並みに走ったため、汗でびっしょりだ。濡れたワイシャツは当然のように身体に張り付いてくる。その張り付いた感が、気持ち悪いことこの上ない。なので早く風呂に入りたいと思うが、今は帰宅中ではなく当校中なので、帰って風呂に入るといふのは無理だ。

(朝から何やってんだか、俺は…)

何故俺こと、南春佳がこんな不幸なことになっているかということ…
始まりは朝だ。

朝、俺は起きると女になっていた。これにはマジで驚いた。驚き過ぎて二回も夢だと思ってしまう程だ。

自分で言うのもなんだが、運動神経以外の伸長、体重、テストの数などが全てが平均な俺の日常が今日終わりを向かえた…

そして、今はもうこれが現実だと認めることにした。何故なら、女に変身するのを体験し、その上むねというものを触ってみたら感触あったからだ。揉んだら軟らかく、身体の芯がもぞっとする変な感覚があった。もうこれでは認めざる終えないじゃないか。

その後、俺はある事情により鬼教師から逃げている。

以上の不幸をまとめるとこうだ。

俺は女に変身することを体験し、その後体育の鬼教師に終われる身

となったのだ。

「はあ…あの糞ゴリラめ……」

せつかく星鐵学院の2代美少女の沙倉さんと一緒に登校出来たかもしれないというのに、なんてことしやがると心の中で毒づく。こんなことは滅多にない。というか、俺の通う私立星鐵学院高等学校は一応共学と言われているが実際は全く共学でわない。

そして、男女一緒の登下校が校則で禁止されているのだ。もし見つけた場合は罰則が下される。

それが校則19条、男女一緒の登下校禁止令だ。こんな馬鹿げてる校則があつてたまるかと思うが、もっとスゴいことがあるのでこれについては何とも言えない。

今から十年前、星鐵学院は女子校だった。その卒業生達が共学になるのを頑固反対したのだ。

「そんな今更羨ま…いや、何が起こるか分からないから共学は駄目です」

などと滅茶私情混じりの訴えがいくつもあつたが学校側としては、古い校舎から新しい校舎に作り換えるため、予算が必要だ。と皆のためなのか自分達のためなのか分からない理由をだし、卒業生達の見解に反対した。

そしてOG達は反対が通らないとみるや、「せめて校舎を男女別に分けるべき」と言い出した。

OGと理事達が理事会で言い争った結果、この意見は僅差で可決されてしまった。広大な校舎は二つに分けられ、女子校舎と男子校舎が造られると柵と塀で隔てられた。二つの間は滅多に行き来できないように監視され、同じ高校なのに向こうが何をやっているのか全く分からない状況になった。

以上のことは、男子生徒の間で伝わっている星鐵学院の黒歴史である。女子の間では違う黒歴史があるらしく、噂によると共学になった頃は柵は無かった。だが、大半の女の子たちが我先にと授業を脱け出して男子の体育の授業を見に行くということが多発し、どちらの授業も成り立たないようになってしまった。それを見かねた学長が「男子校舎と女子校舎の間に柵を作れ」と命令を出した。そして、共学なのに男女別の校舎でその間には柵がある。という今の状況が出来てしまったらしい。

このとんでもないことは新聞に取り上げられたことがあった。「金を無駄遣いしすぎだ」とか色々と書かれたらしいがこの学校は毎年倍率が何故か高い。それは本当に謎で星鐵七不思議の一つだ。

「誰が糞ゴリラだ？」

後ろから誰かに質問された。それに春佳は反射的に答える。

「だから、あの体育の教師だよ…当たり前だろ？」

そんなのも分からないのかと思い、後ろを振り向くとそこには猿道大先生がいた。

「ゴ…猿道先生！」

「見つけたぞ、南。それに今、私のことをゴリラと呼ぼうとしたかったか？」

「…はい？何のことですか？？」

「白けたって無駄だからな？そう聞こえたぞ？」

「ティチャーの聞き間違いじゃないっすか？」

「いや、それはない。それにさっき南…ウチの学校の女子と一緒に登校してただろ??」

「え？何のことですか??俺は今登校して…」

「私は遅刻魔の連中の顔は覚えている。あれはお前だったはずだ」

（ヤバい…バレてたのか…名前が分かんないだろと踏んでのことだったのに）

春佳の顔から汗が一筋流れる。嘘を悟られないように慎重に言葉を紡ぐ。

「先生に顔を覚えてもらえるなんて、全く光栄じゃないですけどやっぱり勘違いですよ」

「…おい、南。本音が駄々漏れだ……そういうのは隠すもんだろ？」

「はい？何のことですか??糞ゴリラ」

話を反らす為に猿道先生を挑発していく。

「…キサマ…」

猿道先生がキレそうなのがよく見てとれる。

（よし、あともう一推しか…）

そう、これは作戦だ。俺がバレていたということは沙倉さんもバレているという可能性がある。それを忘れさせるために怒りの矛先を俺に向けさせるしか他に方法がない。

なので先生がキレそうなことを考える。

(…あ、アレがあつたわ！)

以前に友達とポーカーをした時に、バツゲーム無しでポーカーはつまらないので有りにしようと言いだしたやつがいた。

皆で話し合った結果、猿道に「あなたは何故、糞ゴリラなのですか？」とロミオとジュリエット風に聞くとバツゲームになった。

結局、バツゲームを提案したやつが負けて聞きに行ったのだが、それがまた猿道は滅茶苦茶怒ってその友達は生徒指導室に連れて行かれたということがあった。

春佳はあの時の俺たちに助けを求めてくる友達の顔を思い出し、唾を呑む。

「ていうか、ふと疑問に思ったんですが…なんで先生は糞ゴリラと呼ばれているんですか？」

「南：ちよつと来たまえ」

(よし、やっぱりキレたか…)

これで作戦が成功した。後は捕まらないように逃げるだけと思った矢先、糞ゴリラのごつつい右腕が春佳に向かって伸びてきた。

「なにするんですか先生？」

後ろに一步下がって、魔の手もといゴリラの手をかわす。

「何って…お前を生徒指導室に連れていくんだ」

「いや、意味分かんないっすから」

春佳は糞ゴリラの更なる猛攻をさらりと交わし、急いで猿道と逆方

向に走りだす。今捕まったら、確実に説教を聞かなければならない。それだけはなんとしても避けたい。

「こら！またんか」

「…いやっす」

後ろからドスンと怒り狂ったゴリラの足音が聞こえてくる。

（バーカ、てめえなんか捕まるかよっつと）

春佳は柵をハードルの用量で飛び越え、また走りだす。昔から運動神経には自信があつたので、柵を飛び越えることなんて雑作もない。糞ゴリラはまたんか！と怒鳴り散らしているが無視。沙倉さんと別れてから結構時間がたっている。

（早く学校に行かないと）

*

（春佳さんは大丈夫なんでしょうか…）

楓は学校に向かって歩きながら春佳が捕まった場合を考える。

校則19条、男女の一緒に登下校禁止を破った場合、まず反省文10枚書かせられる。そして、2日間の軽い監視がかかる。

監視について教師たちは軽い、と言うが実質、そんなあまい監視ではない。どこに行くにしても監視役の教師はついてくる。そして何より視線がうざいつたらありやしないとのこと。

楓はそれを考えるだけで、申し訳ない気持ちでいっぱいであった。

「春佳さんと一緒に登校しなければ良かったのかな…」

果てしなく凹む。

（ホント私って駄目だなあ…雫ちゃんみたいにちゃんとしなきゃっ

！)
気合いを入れるため頬をぺちぺちと二回叩く。
楓は自分の幼なじみの女の子のことを思い出した

楓と三郷雫は小学生の時に会った。雫と最初に会った時は、後ろ姿とか雰囲気がとても凛としても6年生には見えなくてとても驚いた。自分も6年生に上がれば雫ちゃんみたいに大人っぽくなれるのかなと思ったが特に変化はなく今に至る。雫ちゃん曰く、「楓はそのままでもいいのよ？」とのこと。

(でも、私は雫ちゃんみたいにかっこよくなりたいなー)
ふと、かっこいいに連鎖して朝の出来事を思い出す。

「あれは…なんだったのでしょうか」

出来事は朝だった。

朝、寝坊して遅刻しないように走っていたら曲がり角で人にぶつかってしまった。完全に自分の不注意だったのでごめんなさいと謝ると、「こつちこそすいません」と返ってきた。

優しい人で良かったと思い、顔を上げるとぶつかった人はなんと中学からの友達で同じ学校の瀬能ナツルだった。

(あの時は、ナツルさんで良かった、と言ったらいけないかもしれませんが、ナツルさんで良かったです)

楓はクスクスと思い出し笑いをする。

「あつ、話がずれちゃいましたね」

自分で自分にツツコム。少しそんな自分が恥ずかしくて、段々と自分の顔が暑くなるのを感じる。

「きゃー、ナツルさんはどこかに消えちゃいましたけど…あの方は

誰でしょう……」

ぶつかってしまった後に楓とナツルはナツルの案により一緒に行くことになった。

しばらく話しながら歩いていると、拳銃を片手に脅してくる女の子が現れた。

「制服が星鐵のものでしたので、同じ高校だったのでしょうか……」

本人は三嶋紅音と名乗っていたけど、どう考えても四組の三嶋さんには見えなかった。拳銃を向けてきた人はスゴい話言葉を使っていたが、四組の三嶋さんはそんな言葉を使うようには見えない。むしろ正反対だ。

「もう、分からないことだらけです……」

最後、三嶋と名乗る女の子に撃たれそうになった時に助けてくれたかっこいい人についても……

「あの方は誰なんでしょう……」

ふと、胸の辺りがきゅっとなり頬が熱くなるのを感じた。

そして、触ってみると本当に熱くなっていた。

(もしかして、私……)

「…あの方に一目惚れしちゃった？」

もう一度会いたいと思ったが、手掛かりは自分より身長が高く髪を上で結んでいるということだけだった。唯一の助けは同じ高校の制服を着ていたということだ。

「まずは自分で探してみましょってその前に…」

(春佳さんに謝らないと行けませんね)

まずは朝のことを春佳さんに謝らなくては…と昼休みのやることを決める。

「…あ、どうやって男子校舎に行きましょつか……」

「沙倉、…沙倉楓さん！」

考え事をしていた楓に上から声が降ってきた。誰に呼ばれたか分からなかったが反応的に答える。

「はいっ、なんでしょっ？」

「お前は教室の前で何をぶつぶつ言ってるんだ？」

「…えっ？」

楓は急いで周囲を確認する。そこは自分の教室の前だった。どうやら、考え事をしながら歩いてきたため教室に着いていたことに気付かなかっただらしい。

はっと我に帰り、教室を見ると皆が楓のことを見て笑っていた。

「あっ…あの、考え事をしてまして……」

急なことに対応出来ず、言葉がしどろもどろになる。

自分でも何がなんだか分からなかった。ただ恥ずかしかった。

「あ…沙倉さん赤くなってる〜可愛いー」

「これは…沙倉さんが天然ちっくになっただね」

「いららら、うるさいぞーお前ら〜私が言おうと考えてたことを先に言っな〜」

楓のことをからかうクラスの友達を大沢先生は注意をするが全然注意になっていない。むしろ、どんどん盛り上がっていく。

「…もう、やめて…下さい皆さん……」

恥ずかしさがピークに来て、消えている声でみんなに訴えるが聞こえてない。

耳まで赤くなってる〜と誰かが言った辺りで大沢先生がやっと話を終わらせてくれた。

「ほらっ、そこに立っていると授業出来ないから席座ってくれ」

「あ、はい…すみません」

「まあ、そこでずっと弄られたいなら話は別だけどな」

「それは嫌ですっ」

楓はぶくーっとなら顔を脹らまして、先生にやめて下さいとアピールをする。

「はっはっは、まあ席に着け。んで、沙倉には遅刻のペナルティー

としてこの問題を解いてもらうかな？」

大沢先生は黒板に書いてある問題1を指差した。

「あ、はい。これは微分して」

*

「ううああく疲れた……」

学校に着くまで色々あったが何とかたどり着くことができた。当たり前だが、1時間目には間に合わなかった。教室に着いたのは2時間目が始まって少し経ったあとだった。

春佳は教室に着き自分の椅子に座るなり、机に崩れるように顔をつける。

「うるさいぞ。南……」

遅刻にうるさいと評判な国語の前川先生が怒鳴る。

「ういゝすんませ〜ん」

だって、しょうがないではないか……糞ゴリラと早朝マラソンしてきただんだから、と心の中で愚痴る。だがけて、表立って言ったりはしない。理由は簡単だ。ただめんどくさいから。

「よし、次は昨日やった分の読み下し文をやるぞ〜」

先生は昨日書いたノート開け〜と言いながら黒板に字を書き始めた。
(うえ……俺、読み下し文嫌いなんだよね……当りたくねえ〜)

読み下し文が苦手ということもあるが、まず昨日の授業の内容を覚えていない。うつすらと記憶しているのは、最初の15分ぐらいだけだ。だが、その15分もとうとうとしてぎりぎり寝るのを我慢して、またとうとうとしての繰り返しだった。だから、ノートなんて書いていてもピカソ並みのクオリティーだ。自分で書いたのに全く読めたもんじゃない。

「昼休み後だからいけないんだよ…」

つんつんと後ろからつつかれる。なんだよ、と後ろの席の東田の方を向く。

「ん？どした??」

「いや、お前がどーしただよ。いきなり昼休み後だからいけないんだよとか言い出してさ」

「あゝうん。昨日の授業ん時に寝ちゃってさ。んで、ノート取ってなかったから、読み下し文が尚更分かんねーと思ってさ」

「はは、だったらあんま声出さない方が身のためだぞ?」

東田は笑いながら「ほら」とあるクラスメイトを指差した。春佳はその指の方向をみる。そこには高校1年の時に知り合って、何故か意気投合した瀬能ナツルがいた。

「ナツルがどうしたんだ?」

「あいつ、授業遅刻したから前川にそろそろ当てられるぞ?」

「へえ〜あいつも遅刻したんだ？俺より前だべ？？」

「おう、って言っても春佳とそんな大差ないけどな」

（ふう〜ん、そうなんだ。ナツルにしては珍しいな…いつもは遅刻だけはしないのに……）

東田とナツルの方を見ていると東田の予想通りになった。

「じゃあ、瀬能。この文を読み下し文にしてみる」

「ええ、なんで俺なんですか？」

「なんで？って遅刻した罰だ」

「うえ〜最悪……」

ナツルは教科書とノートとを交互ににらめっこしながら、少しずつだが読み下し文にしていく。

「まで瀬能。それは違つぞ？」

「うげっ…マジですか……」

「マジだ」

「じゃあ、これはどんな風になるんで……」

「それを瀬能が解くんじゃないか」

意気ピツタリのナツルと先生のやり取りは、さながら新人漫才コン

ビ並だった。

俺もそうだが、クラスの連中もクスクスと笑っている。

「…はは、ナツルの奴何回間違えれば全文終わるんだろな」

春佳はついつい笑ってしまふ。

これで2回目でもう3回目に達してしまいそうだ。

「これ面白いから、瀬能が何回間違えるか昼飯を賭けて勝負しないか？」

(東田のくせに俺の昼飯をたかろうつてか…)

春佳は勝負に勝った場合の利益と負けた場合の損害を考える。

勝った場合は何が貰えるか分からんが東田の場合は大体パンを昼に食べているから、貰えるならパンだな…そして俺は朝があるから負けても大丈夫そうだな)

「おーい、ぼーっとしてどうしたんだ？」

「ああ、すまんすまん。ちょっと考え事を…」

自分では数秒の考えだったが実際は数分の考えだったらしい。

「まあ、いいけど。とりあえずやるのかやんないのかどっちだ？」

「やるよ」

「じゃあ、あいつなら5回は行くな…」

「ん…俺は6回にするわ」

東田、俺の順番に自分の昼飯をかけてナツルの読み下し文の間違え回数を予想する。

「おい、南に東田！さっきからうるさいぞ！！」

遂に前川が怒鳴った。

「はい、すみません」

「それに余裕だな？…」

「何がですか？」

「…瀬能の次はお前だぞ、南」

「えっ！？読み下し文にするのはその文だけじゃないんですか？」

「ああ、これだけだが…どうしても南がやりたそうだから…瀬能、そこまででいいぞ？」

「あ、はい」

急いでナツルの方を見るといい様だとばかりにこっちを見て笑っていた。

(くそっ、やっちゃった…)

どーせ当てられるなら少しぐらいやっつけば良かったと思っが過ぎたことはしょうがない…やるしかないらしい。

「…東田、ノート見してくれ」

「しょーがないな…はいよ」

「おう、ありがとう」

読み下し文にするために東田のノートを見る。

(えーっと…何々?)

昨日書いたであろう文を探すがどこにもない。違うページかなと思
いページを捲るが何も書いていない。唯一書いてあるのは、「今朝、
お前佐倉さんと一緒に登校しようとしたらしいな?」とだけだった。

(…面倒くさい情報収集能力だな……伝達が早いなだよ)
一瞬、ツツコムか悩んだがコンマ一秒で結論が出た。

「…東田、お前のノートはいいや」

ノートを東田の机に叩きつける。

東田はてめえ、人のノート借りといてなんてことしゃがるなどと文
句を言っているが無視。何も書いてないノートなんて、借りた内に
入らないに決まってるだろ。

「ちよつと昨日書いた部分のノート見してくんない?」

右隣の三田君に昨日、ちゃんと書いたか聞いてみる。流石に東田の
二の舞は踏みたくない。

「字汚いけどいいかな?」

「そんなのは全然良いですとも」

今度はちゃんと書いてあった。それも答えらしきものまで。

(あざますっ！三田君)

「
です」

「おうちよつと違うところはああるけど正解だ。座ってよし。」

「ほーい」

周りからおおーと歓声上がる。だが実際俺が考えたわけではない。三田君が文の隣に答えらしきことを書いていたので、それを言っただけだ。

「ごめん、マジ助かった」

「ううん、別にいいよ」

東田とは違い丁重にノートを返した。今度から三田君は神様レベルの扱いをしなければ。

2時間目と比べて3、4時間目は特に何もなく順調に終わった。

ほぼクラス全員寝ていたというのを除いて。因みに俺は寝ていた側だ。催眠術でも会得しているんじゃないかと噂の社会学の先生の授業で起きている方が奇跡だ。

「ふあゝあ、よく寝たゝ」

春佳は固まった身体を伸ばす。ばきばきと身体から聞こえてきて、どーした！？と思うがこの感覚が気持ちいいのでやめられない。

「おゝい、春佳」

呼ばれて振り向くと妙ににやけた東田がこっちに歩いてきた。俺はこいつの下の名前が分からないという事実があるが、案外下の名前が分からなくても世の中やっていけるわけで未だに覚える気はない。

東田は星鐵学院美少女研究会というアンダーグラウンドな活動をしている部活の会長を自任している。彼は「星鐵学院美少女研究会は夢の橋を架ける部活だ!」と言っているが実際、非合法かつ学校に部活として認定されていない。なのでバレたら処分を受ける。

そして東田の言う、夢の橋を架ける部活というのはあながち嘘ではなくて、この共学なのに男女別の校舎の男女の出会いを作るのが目的だ。

聞いた話によると本当に男子の校舎と女子の校舎に脚立という橋を架けたことがあるらしい。その案を考えた奴もそうだが、それを実行してでも彼女、彼氏を作りたいという部員の度胸に驚きだ。俺も彼女は欲しいがそこまではいいや。

「…んあ?何?」

「お前、眠そうだな」

「まあ…早朝マラソンしてきたからな」

「…は?」

「それは置いといて、どした?」

確かに俺は早朝にマラソン並の運動をしてきた。だが、一緒に走ったのが糞ゴリラなので嬉しくないし、楽しいことでもない。だから、いちいちからかわれそうなネタをバラまくつもりはない。それにも

し、追いかけられた理由を聞かれたら酷だ。

「もう忘れちゃったのか？ 国語の授業の賭けの話だよ」

「ああ、完璧忘れてたわ… んで、どうだったっけ？」

「瀬能が言い直したのは5回だった。… だから、俺の勝ちだな」

「いや、あれは先生が途中で止めさせたからだろ」

「それとこれは別だな。春佳、お前の負けだ」

東田はビシツと人指し指を向けてきたので、春佳はやっぱり人指し指を掴むと曲がらない方向に曲げる。

「いてててててっ何しやがんだ！」

「ちよつとした、テロリズムかな」

さっきのとどんな関係が！？と東田が叫んでいるがスルー。

(俺って最近… スルーし過ぎかな？)

これ以上何かしても変わらなさそうなので潔く諦めることにした。

「はあ… 分かったよ」

鞆から朝買ってきた昼飯取り出して東田に渡した。

「おっサンキュー、じゃっ俺は部活があるからまたな」

「はいよ」

(…二度と帰ってくんな)

自分の鞆を開けて、朝飯用に買ったやつを探す。
朝のあれのせいで朝飯を家で食べてる時間がなくて、適当な時間に
食べようと買ったが結局食べる暇がなくて、手をつけていないサン
ドイッチを取り出した。

「まあ、足りないけど無いよりましか…」

サンドイッチを片手にいつも一緒に食ってるナツルを探す。

(…あ、いた)

ナツルはいつも通り自分の机に座ってパンを食べていた。だが、や
っていることはいつもと同じだが雰囲気は少し変わっていた。

「ナツルーなんかあったん？」

ナツルに近付きながら、質問を投げかける。

「ん、ああ…春佳か。まあ、色々あってな……」

春佳の問いに反応して、こっちを向いて答える。

(…!?)

「どーしたっ!? なんか、悟りでも開いたかのような顔してんぞ!」

「…そーかい？」

ナツルはこの人生は諦めたかのような、逆に清々しい笑顔をした。

「何があったのかしんねーけど、諦めんなって」

「…おう、励ましありがとう」

俺も諦めずに頑張るから、と言おうと思ったがやめた。何を？って言われても、今日から男として生きていくことが出来なくなっただけぽいと言っしかない。だが、そういうと春佳は性転換したとか勘違いされても困るから言わない。

「おーい、瀬能：ちよつとこつちこい」

「ん？何？？」

「瀬能を呼んでる人がいる」

「先生なら、俺は死んだって言うてくれ」

東田に呼ばれたナツルは廊下の方に歩いていく。

(先生に呼び出されるとか、何かしたんか？)

サンドイッチを食べながら事態の観察をすることにした。

「あ、ナツルが連れていかれた」

(こそこそ話しやがって何が起きたのかわかんねーじゃん)

春佳は残りのサンドイッチを口にぶちこんだ。流石に一気に入れすぎて焦っていると、また東田が寄ってきた。

「なふだよ？こふはおれのだふお」

「はあ？何言ってるかさっぱりだ…そんなことより、お前何した？」

「ふあふをしてないふお」

口の中のサンドイッチを呑み込もうとするがなかなか、呑み込めない。だから、東田にはこちらの言っていることが上手く通じてないらしい。

「はあ、まあいいや。ちょっとついてこい」

何があったのか分からないが東田についていくことにした。教室を出て廊下に出た。そこには生徒会直属の風紀委員が立っていた。

(なんか、ヤバイ…感じかも)

ヤな感じがしたので逃げようとしたが風紀委員に腕を掴まれた。

「逃げても無駄ですよ？」

「…何のことでしょう??トイレに行こうかと」

「嘘は駄目ですよ。バレバレです」

(ヤバイヤバイヤバイ…)

逃げようとしたが捕まってしまった。生徒会直属の風紀委員が来たということとは、たぶん朝のことを聞いてくるだろう。

「南さん、会長がお呼びです。ついてきて下さい」

「あ、はい」

(…あれ?)

職員室でも生徒指導室でもないらしい。おかしいと思ったが、行ってみることにした

*

生徒会室に一人の女の子がいた。彼女は生徒会長の椅子に腰掛け、妖艶に笑う。

「…次はどんな子がケンプファーになったのかしら」

調べによると青ではなく、赤らしいが女の子ではなく男の子だったとのこと。ケンプファーは女の子しかねないだろうという自分の予測を越えてきた。

(今まではそんなことはなかったのに急に何故…)
コンコンとドアを叩く音が静かな教室に響く。

「入っていいわよ」

向こう側からは、はいとだけ声が聞こえドアが開く。
葛原が連れて来たのはやはり男の子だった。

「あなた名前は？」

「…南、春佳です」

「なんでここに呼ばれたか分かる？」

「…さあ？会長に呼ばれる理由がさっぱりですね」

春佳の右腕を見る。だが、長袖を着ているので契約の腕輪は見えない

い。それらしき形はうつすらと見えるがまだ確証はない。

(まだこの子が新たなケンプファーと決まったわけではないわね)

「私は会長じゃなくて、三郷雫っていうちゃんとした名前があるんだけど」

「いや、知ってるけど…雫先輩って呼ぶより会長の方がしっくりくるというか……」

あら、雫先輩…ね。それは呼ばれたことないわねと雫は思った。

通常、先生も生徒も雫のことを生徒会長または会長と雫のことを呼ぶ。たまに雫様と呼び、群がってくる男子たちがいるが基本無視を決めている。かまうと逆に増えるからだ。

「んで、その会長様が俺に何のようですか？」

「そうね、あなたには聞きたいことが幾つかあるの。いいかしら？」

「俺が答えられることなら…」

その言葉を待ってましたとばかりに雫は笑った。

雫は春佳の後ろに立っている葛原に目配せをした。すると目配せの意味が分かったのか、彼女は生徒会室を出る。

生徒会室は雫と春佳の二人だけになった。

春佳は葛原を廊下に出したことが気になったのか、「そんなにヤバいことなのか？」と春佳は聞いてきた。

「ええ、あなたと二人で話したいことがあるの」

「ま、まさか…」

「まずあなたが考えてるようなことではないわね」

「告白じゃないなら、説教か…」

春佳の落ち込み具合から私ってそんな風に見られているのかしら…と雫は思った。

「説教でもないわね。ただ聞きたいことがあってあなたをここに呼んだの」

「……？」

(この子起動哀楽がハッキリしてて、なに考えてるか一目で分かるわね)

雫は頭の上が疑問符だらけの春佳を笑う。だが、その微妙な変化には親友の沙倉楓と家族以外はそう気付かないだろう。

「南君、最近あなたに変なことが起きなかった？」

雫は確信が出るまでケンプファーという名前を出さず、質問で揺さぶりをかける。単刀直入に「あなたケンプファーよね？」と聞くのが手っ取り早いかもしれない場合、学校中にケンプファーという存在が知れ渡る可能性がある。それだけはなんとしても避けたいと思う雫はなんとも答えられる質問をした。それで春佳の反応を見ることにした。

「…ん〜変化ねえ……」

少し動揺したように見えるがもっと動揺を得られなければ駄目だ。

「そう、例えば…女の子になって焦ったとか」

「えっ…?」

春佳はあからさまな反応を示したあと、視線が泳ぎ始めた。

(あら、こんなにあからさまに反応したらバレバレじゃない)
春佳の面白いぐらいの反応に雫は笑う。

「あら、当たっちゃったかしら?」

「…雫先輩は超能力者ですか?」

「いえ、あなたと同じ人間よ?」

「……………」

「…あなた意外と失礼なのね」

「だから、人の心読むなって!」

「南君が分かりやす過ぎなのよ」

「ほら、また顔に書いてあるわよ」

「んなっ!?!?」

ついつい春佳の反応が面白くてからかってしまった。
雫は当初の目的を思い出し、話を戻した。

「そんなことより、本題に戻るんだけど」

雫の腕輪が急に赤く光始めた。
袖を捲つて契約の腕輪を確認する。
腕輪は物凄い勢いで点滅している。

(近くにケンプファーがいるわね…)

「…えっ?…その…腕輪…」

春佳が驚いた顔で雫の右腕を指差す。すると今度は春佳の左の手首
辺りが赤く発光した。

そして春佳は赤い光に包まれていき、光がおさまった時には女に変
わっていた。

「うわっ!?またなんだ急に」

「あなたには全部説明してる暇はないようね…少しここで待ってて
もらえないかしら」

雫は席を立ちドアの方に歩き始めた。

「ちょ…ちょっと待って」

雫は春佳に強引に腕を引っ張られた。その勢いで春佳の方を見る。

「あら、あなた以外と強引なのね?驚いたわ」

「…そつちに驚くのか?」

雫は「ええ」とだけ答える。

変身するのはケンプファーだから当たり前だし、男だったら女に変身するのは普通なのかもしれない。だが、腕を引っ張られたのは本当に驚いた。

「…じゃあ！俺が女に変身出来ることは内緒にしてくれ！！俺はただ死にたくないし、地下研究施設行きは嫌だ！」

「あら、あなたケンプファーになると変身するって聞いてないの？」

「…けんぷはー??」

「ケンプファーね。私たちケンプファーは変身すると性別が変化したり、性格が変化したりするのよ」

個人差はあるみたいだけど、と雫は言葉を付け足した。

「じゃあ、雫先輩も変身したらどう変わるん？」

「私は南君みたいに姿は変わらないけど」

雫は契約の腕輪に力を込めるようにした。すると赤い発光が強くなり辺りを照らした。

「やっぱり、まぶしっ…」

「こんな感じかしら」

雫は髪を右手で靡かせた。

「…綺麗な銀髪だ…」

春佳は見とれているようだった。何回も、スゲエと連呼している。

「そうかしら？」

(そんなこと考えたことなかったわね…)

雫は口ではつつけんどんな言葉を言うが実際は少し嬉しかった。不意に手が伸びてくる。

「南君は何をしようとしてるのかしら？」

「あっいや、つい髪を触ってみたくなって…」

マジすんませんと春佳は一步下がる。

(私…さつきから南君の行動に乱されてるわね)
雫ははあとため息をつく。下 恐らく図書館にいるであろう敵と戦わなくては…でなければ先輩は…と考えたありで雫は考えるのをやめた。

戦闘中は如何なる考え事も命取りになるからだ。

「じゃあ、私は行くわね」

「何処に？」

「敵…のところよ」

「何っ！？遂に宇宙人が攻めてきたのか！なんてことだ」

「南君は何かを勘違いしてるわ」

「…へっ?…」

(ホントに何も聞かされてないようね…)

「まあ、いいわ。ついてきなさい。でも、一切手出ししないことが約束よ」

「…おっ、おっ……」

雫はドアを開けた。そして、春佳と下の階の図書館に向かった

*

ナツルはクラスまで自分を呼びに来た、三嶋紅音という女の子と彼女の要望により図書館にいる。

ここは校舎と独立している建物で、敷地内の男子部女子部の境界線上に建てられている。男女混合でしか出来ないものは全てこの建物にぶちこまれている。例えば生徒会室なんてそうだ。あれの運営には男女どちらも必需なので、この建物に加わった。ここは一種の憩いの場だが、出入口は当たり前のように男子用と女子用がある。その上にガードマンによる出入りのチェックが行われていて、そういう男子が女子部に行くのは無理だ。行く場合には学校からの許可カードまたは委員カードが必需となる。

二人は図書館にある勉強用の幅の広い机に、向かい合わせになって話し合っていた。

「んで、以上のことをまとめると

・ケンプファアの敵はケンプファアである。

・俺と紅音ちゃんは味方である。

・近くにケンプファアがいて、ひきずられて変身するか、または相

手が戦う気があると変身する。

・慣れれば自分の意思で元に戻ることが出来る。

・紅音の武器は『銃』（ゲヴエアー）で俺の武器は『魔法』（ツアウバー）でその他に『剣』（シヴユエアト）というものがある。

・武器の名前に使われている言葉はドイツ語である。

・一番重要であろう敵と戦う理由については何も知らなくて、ぬいぐるみに聞いても教えてくれない。

か……」

「はい…大体そんな感じですよ」

（ん〜紅音ちゃんのお蔭でかなり色々と分かったけど…なんか引つかかるといえば引つかかるな……）

ナツルは聞いた内容をもう一度頭の中で整理する。

「あの……わたし喋り過ぎましたか？」

「え？」

「ごめんなさい、出しゃばっちゃいました。わたしが知ってることを言わなきゃって思ったたらこんな喋っちゃって……」

紅音はまた泣きそうになり、目に涙を溜める。そんな紅音を見てナツルはあわてふためく。

「あ、そうじゃなくてちょっとさっきのを頭の中で整理してたんだ。こっちこそ、何も話さなくてごめん。」

「良かった……」

紅音は今のを聞いて、心底ほつとしたような表情をしている。とても朝に銃口を自分に向けてきて罵ったり罵声を飛ばしたりしていた人と同一人物には見えなかった。

「それです、その……あの……」

もじもじそわそわ。視線は一点に合わずきよるきよる。トイレに行きたいのではなさそうだ。

「せ…瀬能さん！私の呼び方はこれから、あ…紅音って呼んで下さい」

「へ？」

急なことだったので馬鹿みたいに声が裏返ってしまった。

「あ…やっぱり、失礼ですよね失礼ですよ。まだ知り合っただばかりですから下の名前呼び会つのはおかしいですよ…でも、やっと仲間が出来て嬉しくて、もっと仲良くなりたいから下の名前呼び会いましょうなんて言ったら、馴れ馴れし女の子だなんて思っちゃいますよね。ごめんなさい忘れて下さいっ！…」

紅音はほぼ息継ぎ無しで、一気喋りきっていた。お蔭でそんなことないよという言葉すら挟む余裕がなかった。

机に顔を埋めてわあわあ泣き出す女の子は初めて見た。テレビや映画ではよく見るシーンだが

目の前で繰り広げられるとすごいな…とついつい感動してしまった。だが、そろそろ周囲の生徒達がこの状況を変に思い注目し初めてきたので、この変にしておかないとヤバイ。

仕方ないので自分が唯一知っている解決策、「慰める」を実行する

ことにした。

「いや、いいから、その、顔を上げて？えと、紅音ちゃん？」

下で呼んで良いのが分からなかったが、彼女がこうなったのはこれが原因な訳でだからこう呼ぶしか手はなかった。

「うえう…今……なんて？」

「紅音ちゃんって。俺もどう呼ぼうか悩んでたから丁度良いよ。だから、俺のこともナツルでいいよ？」

「分かりました…ナツルさん」

彼女は何か泣き止んだ。作戦は成功だ。これで周りからめっちゃ冷たい目で見られる刑には解放されるだろう。

ちらつと壁にかけられた時計を見る。時間的にもうそろそろ教室に戻らないといけない頃合いだった。

(そろそろ教室に戻るか…)

ナツルは立ち上がった。

「もう時間的にヤバいから帰ろうか」

「あ、はい。わたし、ほとんど図書館にいます。何かをあら話しかけて下さい」

「ありがとう……あ」

今朝、ハラキリトラに言われたことを思い出した。

「いきなりで悪いんだけど、ちょっといいかな？」

「なんででしょう……？」

「ちょっと付き合っただけだ」

「え……あの……付き合っただけ……って……」

「うん」

「でも……ナツルさんと会ったのは今日が初めてで……その……」

(ん？…言葉足らずだったかな？)

ナツルは付き合っただけだ…欲しい内容について伝えた。

「いや買い物にね、付き合っただけだ」

彼女は意味が分からなかったのか初めきよんとして、それから意味を理解したのか肩を落とした。

「いや、当たり前だけど俺…女物の服がないからさ、誰かに見繕ってくれる人がいるとたすかるんだ」

「そうですか…私で良ければ、お手伝いしますけど……」

「ありがとう、頼むよ」

(何故か紅音は落胆しているけど、ひとまず一息だな)

これによりたくさんある問題の一つが解決された。まだ、腐るほど残っているが今は見ないことにした。

「じゃあまたね、紅音ちゃん」

立ち上がった背を向ける。出口に向かって歩き出そうとした時、突然視界の隅が青く光った。

まさか　　と思ひ後ろを振り向く前に後頭部に固くて冷たいものが当てられた。

「よー、クソ野郎。あたしをちゃん付けて呼ぶとは死にたいらしいな」

紅音はあのいがらっぽい声でそう言った。

ナツルはゆっくりと両手を挙げた。そして、これも相手を刺激しないようにゆっくりと振り返る。

そこには今朝の猛犬女姿の紅音が銃を突き付けていた。

「紅音ちゃん、か…ナメた口利きやがって。ちゃん付けて呼ばれるとか虫酸が走るぜ。」

いきなり呼び捨てはダメだろと思つてのちゃん付けだったのだが、どうやら火に油を注ぐだけらしい。

撃たれたら嫌だが苦情は言うことにした。

「お前が下の名前で呼べって言ったんじゃないか…」

「あたしがこの世で我慢出来ない2つのことに、あたしをちゃん付けて呼ぶことが入ってたよ。だからなナツル。仲間には親しみを込めて、呼び捨てでお互いを呼び合つて昔からそう決まってるんだ」

「…そんなこと決まってるのか？」

「文句があるのか？あるならハイと手を挙げる。そしたらどたまに鉛弾をプレゼントして、ハワイまで吹っ飛ばしてやるぞ」

「いや、別に文句はねえけど、味方同士でも仲間とは限らないかもしれないだろ」

「あたしもそう思ってるよ。けどな、あたしの頭の中でおめえと組めってささやくんだよ。だから、仲間だ。分かったか？」

「ずいぶん無理やりだな」

そんなの勘じゃないか。それとも頭の中でささやくぐらいだから、何処かから電波でも受信してるのか？と思ったが口には出さない。拳銃に撃たれるのはごめん被る。

「勘ねえ…」

ナツルは呟いてみた。

(確かにそのぐらい信じないとやっていけないのかもしれないな…)
不意に、その勘とやらが俺にも働いた。

「紅音。なんで俺たちは変身した？」

「あ？」

「お前が言ったことを思い出したんだけど、変身する場合は釣られてか戦う気があるかの」
図書館の中なのに、突風が吹いた。

「二種類なんだろう？」

何かが目の前を横切る。それは瞬きする暇もない一瞬の出来事だった。大きな音がして、目の前の机が鋭く抉られる。

(…何だっただんだ?)

その速さに紅音の銃は反応していた。

アメリカ製のガバメントそっくりなそれは物凄い速さで弾丸をいくつもはき出していた。だが、放たれた弾丸は全て何処かに消えていった。

「伏せるナツル！」

紅音の音が図書館に響いた

二章『ケンプファー』（後書き）

2章に関しては長くなってしまったので、途中で切りました。

正直ここで切って良いものか悩みましたがしょうがないということので無理やり納得しました（^o^;）（汗）

三章 『戦い』

バンバンバン

図書館内に連続的に銃声が鳴り響く。それと同等に刃物が何かを切り裂く音も響いている。

春佳は生徒会室のある二階から見ているのだが、図書館内はスゴいありさまだ。

まず始めに大人数で勉強出来るぐらいの大きさのテーブルが真つ二つに切り裂かれた。そして、敵が反撃として放った銃弾によりスチロール製の本棚のそこらじゅうに穴が空いた。

さながら戦争を見ているようだ。

日本では銃刀法があるため、もう拳銃は売ってない。あると言えばあるが、それにはライセンスが必要だし使うのは散弾銃だ。それにまず学校で使うものでわらないので俺は初めて銃声を聞いた。

ここは図書館だ。だから密閉空間であるあるからして、音が音楽教室並みに反響する。なので一発撃つだけでも相当うるさい。

しかし、敵のケンプファーは連射するのが好きなのか連続で撃つ。なので、銃声が半端なくうるさい。

春佳は耳を軽く抑えつけながら雫と敵の戦いを見ることにした。

「それにしても…相手の銃を持つてるやつは指が痙攣を起こさないのか？」

単発式をマシンガンのような連射式で撃つ場合、連続的にトリガーを引かなくてわいけない。

なので普通なら人指し指が疲れてくる。だが彼女の指は疲れを知らないのか、変わらないスピードでトリガーを引き続けている。

「あんなスピードでトリガーを引き続けていられるって…どんな指してんだよ……」

ついつい春佳は驚きのあまりに感想をこぼした。

(人指し指だけマツチヨになってそうだな…)

「もしかしたら…ワ　ピースに出てくる敵の技の“指丸”が出来るかもな…いや、そしたらいつか十指丸も…
つてんなわけないか」

自分のポケにツツコミをいれてくれる人がいないため、春佳は自分でツツコム。

「それにしても、雫先輩スゴいな……」

雫は無駄のない動きでま攻撃を繰り返して続けている。片方の短剣を投げて攻撃しては戻し、その瞬間にもう片方の短剣を投げるというやり方をしていた。なんだ単純じゃないかと思うかもしれないが、雫がそんな単純な攻撃パターンをするわけはなく、短剣の軌道が分からないように毎回狙う場所を変えている。なので敵は防戦一方だ。しかし、相手もバカではない。攻撃をずっとくらうのはマゾぐらいだ。敵はどうかやら隙を待っているらしいが全然来ない。

理由は俺が見たって分かる。これは俺がバカだからっていう訳ではなく、例えば話に俺を使っただけのこと。

短剣の柄には鎖が付いている。だから、動きは雫の思うがまま…まさに変幻自在だ。

だから相手はなかなか攻撃に転ずることが出来ないでいる。

俺も同じ武器ならあんな風に来るんじゃないかね？と一瞬考えたがすぐ無理だと諦めた。俺にはあんな器用なことが出来ないと分かるから

だ。確かに練習すればそこそこ操れるかもしれないが、あんな正確に防御の薄いところだけを狙うなんてそうそう出来ることじゃない。それもかなりのスピードでだ。

「本当にアレは同じ人間ですか？って聞きてーな……」

（いや、ケンプファー自体人間の枠組みから逸脱してるか……）
雫の短剣が足を狙って飛んでくのがうつすらと見えた。相手も気付いたのか発砲し、攻撃をはじく。

もし俺がケンプファーになっていなかったら、今の短剣の影すら見えなかっただろう。
気付いたらぶっすりみたいだな。

「あんなのは敵に回したくないな……絶対に」

春佳は雫が仲間だということに安堵する。

「練習っていつのか分からんけど、たくさんやっただらな……」

改めて雫先輩のことをスゴいと思った。

（ん？さっきから俺……スゴいしか言っていない気がするな……）
自分のボキヤブラリーの少なさに軽くショックをうける。

「てーか、俺こんな状況なのにめっちゃ冷静でいるな……ケンプファーって、思ってた程不便じゃないのかも……」

春佳は自分がとても冷静に物事を考えてることに気付く。

これにはケンプファーの便利さに感謝。普通だったら銃声近くで聞いたら逃げる。もはや怖くて腰を抜かすかもしれん。

だけど、今は流れ弾が飛んできても何とも思わなかった。

「んまあ、この姿を除いて…だけど…」

（これが女じゃなくて、男の姿だったらな〜カッコいいのに…）
ふと、図書館の出入り口を見ると腰を抜かしたのか歩けなくて泣いている女子生徒がいた。

（あちゃ〜…これはトラウマもんだな…可哀想に）
あの泣いている女子生徒とこの現場に居合わせた生徒全員に同情しますわと手を合わせて祈ってみた。気分的に。

顔の横を何かが通りすぎた。

何だろうと思いつき、横を見ると柱に短剣が刺さっていた。

先輩の方を見るとこっちを見ていた。というか、睨んでいた。

春佳は了解しました！とばかりに敬礼をし、雫に自分が何を見ていなければいけないかが分かったことを猛烈にアピールする。

「ケンプファアの戦いを見ておかないとな…」

（言うこと聞かないと、バーベキューの串肉みたいにされそうだし）
雫が怖いので素直に言うことを聞くことにした。

春佳は泣いている女の子から戦いの方に意識を集中した

*

「いいかナツル、よく聞け。このままここに居たら、防戦一方になっちゃう。だから、向こうの本棚の陰まで走るぞ」

その本棚を見ると百科辞典コーナーらしく分厚い本だけが収められている棚だった。ぎっちり収納されている上に、近づくに余計な人間もない。

（確かに、うまくすれば盾の代わりになるかもしれないな…）

「いち、にの、さん……てカウントしたら走るんだぞ」

さん、と言われたから走り出そうとしたナツルは足を滑らせた。

この瞬間湯沸かし女め…この状況でギャグ入れんな。俺はコントがしたいんじゃないんだ。と言ってやりたいが、口にチャックをする。じゃなきゃ、言った瞬間に蜂の巣決定だ。

紅音の顔を見るとやっかいなことに、どうやら冗談をかました気はなかったらしい。カウント無視したらアレに切り刻まれんぞ。しくじんな！と怒鳴ってきた。

紅音は犬みたいに瞳を左右に動かして偵察していた。ナツルも紅音の真似をして辺りを伺おうとした時、隣からいくぞ！とカウントを開始した。

「いち、に、さんっ！」

ナツルと紅音は同時にダッシュ。運動にはそれほど自信はなかったが、今はケンプファーなので常人の数倍は脚力がある。なので本棚までたいした距離ではなかった。

ダイビングみたいに本棚の陰に滑りこんだ。紅音もナツルと同じことをしたせいで、猛犬女の身体が被さってきた。因みに俺が下で紅音が上。

(むむ、意外と軽いな。それに柔らかい…)

「ちよつとどけて…」

ナツルは腕を伸ばした。

むにゅ

「…っ!？」

猛犬女バージョンの紅音は驚きのあまりに口を金魚みたいにパクパクさせている。しかし、ナツルは気付いていなかった。

「……………」

ふわっといういい香りが紅音からする。

普通なら『あ…あ、女の子の生足が絡まって…………』などと考えるところなのであるうが何故かそう思わないし、嬉しさがない。何でだろうと考えたのは半秒もなかった。

「あ、えと…すまん」

紅音の目つきは非常に悪かった。胸を触ってしまったので謝る。

「謝ってすんだら、警察はいらねえ…よな？」

紅音はナツルに銃口を向ける。

だんだんとトリガーにかけている指に力が入っていく。

(おいおい…ちょっと待って…)

キン、キンと金属音が鳴り響く。

「ははっ、野郎の武器じゃあ、この棚は抜けねえようだな」

ざまあみやがれと紅音は含み笑いをした。

(…助かったのか?)

「助かってねえーよ、馬鹿」

ナツルは頭をグリップの角で殴られた。

「いつつく…何しやがる！」

殴られた所を手で抑えて紅音に文句を言った。

「馬鹿か、あたりめえだ。それに、これは前払い分だ。後で殺す」

「いや、さっきのは事故だろ！？」

「いや、違うな。わざと触っただろ？」

「お前のなんか、わざと触るわけ」

カチャとまた黒光している銃口を向けられた。

「あ、いえ…何でもありません」

「そう、黙ればいいんだ。それより反撃といこうじゃねえか、変態の相棒」

いつの間にか仲間から相棒にレベルアップしていた。そして、変態がプラス されたようだ。相棒と呼ばれてもいいとして、プラスに意義を申し立てることにした。

「変態はいらねえだろ！相棒で充分だ」

「まあ、そんなことはどおでもいい。お前の出番だぞ？」

どおでもいい。ってお前が付けたんだろと言いたくなった、ナツル

であった。

「…俺の出番ってどういうことだ？」

「だからな…」と紅音は不気味に笑った。

「相手の居場所が分かんねえから、おめえがここから出て敵に姿を晒す。敵が攻撃してくる。んで、あたしが反撃して殺す。完璧だろ？」

「完璧じゃあない。俺はどうなるんだ？」

紅音の計画には、俺が囷になるだけで、その後の対処がすっぽり抜け落ちている。このままじゃ、敵は倒せるかもしれないが俺は剣にぶっさりだ。お前は嬉しいかもしれないが、俺ひ嫌だ。

「そんなことは知らない。自分で何とかしろ」

「自分で何とかしろって、ちつとも助けしてくれないのか!？」

「いいから、早く姿を晒せ!おめえのツアウバーなら剣を防げるはずだ。それでなんとかしろ」

紅音は後は任せとけ!と言わんばかりにニカツと笑った。

「頼りにしてるぜ、相棒」

ナツルは一瞬、紅音の笑顔にドキツとしてしまった。

(くそつ、笑うとちょっと可愛いじゃないか…卑怯だぞ) 目で抗議したが何も変わらなかった。

「…分かった。行つてやるよ」

「じゃあ、おめえの好きなタイミングで出てくれ。あたしはそれに合わせる」

ナツルは決意を固めた。

「よし…行くぞっ!」

床を蹴つて本棚から姿を晒す。

「……はっ!？」

ナツルは飛び出しと同時にあることに気がついた。

(『魔法』の発動つてどうやるんだ!?)

しかし、悩んでる暇はない。

いつ敵の剣が飛んでくるか分からない。

スーパードカでやるマグロの解体ショーが頭の中によぎる。

(バラツバラになったら、どーすんだよ…)

だがいつまで経つても、敵はナツルを攻撃してこない。

白刃のきらめきは、真後ろで起こった。

「野郎、見抜いてやがったかっ!」

紅音は飛んでくる短剣に発砲した。短剣は銃弾に弾かれ目標から大きく逸れて本棚に刺さる。

「柄に鎖が付いていたから、自在に攻撃出来たのか…」

ナツルはゴツツと銃のグリップで殴られた。

「何やってやがる。おめえ演技下手すぎんだよ」

「…はあ！？意味分か」

「分かんね」と言い終わる前に近くで派手な金属音が響いた。

「「なんだっ！？」」

そこにはスチール製の本棚が真つ二つになって倒れてくる。

（っ！？誰だよ、スチールは固くて抜けないだろなんて言った野郎わ）

「うおっ！？」

本棚は紅音に向かって崩れ落ちていく。

「危ないっ！」

ナツルは急いで彼女の腕を掴むと力一杯引つ張った。

短剣は本棚を切った後、切っ先をこちらに変えて向かってくる。

紅音はすかさず発砲。銃弾で弾かれた短剣は遠くに引っ込んでいく。

「我慢ならねえ。あの野郎、ぶっ殺してやる」

「おい待てって。相手がどこにいるかわかんないだ。こっちがやられるぞ」

紅音はいきなり元本棚があった方に銃口を向けた。

「おい、どいした？」

ナツルも紅音が見ている方を見る。

(ん？誰がいる……)

だんだんと煙りがなくなり人影が見えた。なんとそこに居たのは沙倉楓だった。

「てめえの仕業か！」

今朝に続いて銃口を突き付けられた楓は「あ……あの……わたし、図書館で調べものしてて……そしたら」と弁解をしているが紅音の耳には届いておらず、怒りのあまりにトリガーを引こうとしていた。

「バカつやめ」

短剣が楓の後ろから飛んできた。

紅音はそれに気付き、発砲。ナツルは沙倉の近くにいたので転がって避けた。

短剣はまた銃弾に弾かれ、くねくね動き回ると、またどこかに消えていった。

「危ない危ない。もう少しでやられてた」

「くそつ。苛々させやがって……楓はどうした？」

「今ので気を失ったみたいだな……」

猛犬女が躊躇わず撃ったおかげで、楓は気絶していた。眼前を死神

が何発も通過していったのだから、当たり前だ。
俺だってこんなにくらつたらなどと冷静に考えている自分に驚く。
(こういうのもケンプファーになつまた副産物なのだろうか…)
紅音はそんな楓を見て、「根性なしが」と文句を垂れているが実際
はこの状態が正しいのだ。おかしなのは俺ら。

キンコーンカーンコーン

昼休み終了を知らせる鐘の音が図書館全体にながれた。

「やべえ。昼休みが終わっちまった」

チャイムを聞いた紅音は嘆いた。

「真面目だな。俺なんか三回に一回は遅刻してんぞ」

「そんなこと自慢気に言うな」

「俺は目立たないし、良い子でもないんでね」

俺達はそこまで無駄口を叩いたのち、黙った。

敵の攻撃を待っているのだが、いつまで経ってもこない。

図書館内は静かだ。短剣の空気を切り裂く音も、鎖が摩れる音も何もない。

「敵の気配がねえ」

「そんなの元々無かつたけどな」

「うるせえぞ。どこ行きやがったんだ？」

ナツルも紅音も回りに警戒しながら、ゆっくりと立ち上がる。これはちよつとした賭けだったが敵の攻撃はこなかった。

「まさか、本当に消えたのか？」

「そうかもな」

「はっ、あたしに怖じ気づいて」

「いや、さっきの罠に気付いたくらいだ…それはないだろ」

「なめた真似しやがって。胸くそ悪い」

ナツルはふと思ったことを紅音に聞いてみることにした。

「…なあ、もしかしたら…敵はうちの生徒で優等生なんじゃないのか」

紅音は「なんだと!？」と言っているが、合点がいったのか拳銃を消した。

「あたしは女子部に帰るぞ。後は勝手にしろ」

「おいつ、沙倉さんはどおすんだ!」

ナツルは気を失って床に寝ている楓を指差した。

「おめえが運べ」

「なんだと」「と言おうすると、いきなり現れた銃口がこんにちわをした。

撃たれたくはないので楓を運ぶのを引き受けることにした

*

キーンコーンカーンコーン

昼休みの終わりを告げる鐘の音が響いた。

(昼休み終わっちゃったけど、雫先輩はまだやるのかな?)

敵と闘っているであろう雫を探す。

「何きよろきよろしてるの?」

後ろに人が来た気配がしなかったので、急いで後ろを振り向く。

「いや、ちょっと人探しを…って先輩?!?」

春佳はいつの間にも!?!という感じに驚く。

「まさか…雫先輩のことだから、瞬間移ど…」

「そんなこと出来ないわね。それより教室に戻らないと」

雫は腕時計を見た。

右手を振ると手に持っていた短剣がかき消すように無くなった。それと同時に体が光る。

「え?敵はいいのか??」

変身を解いた雫に春佳は、率直な質問をした。

上から見ていた感じでは、相手は二人組だったがこっちが優勢だった気がするのになんでだろう。もう一押しで勝てただろうに。

「私は一応優等生で通っているの。だから、授業遅刻は出来ないわ」

「あ、確かに…生徒会長が遅刻はマズイわな」

「それじゃ、またね南君。」

会長は身をひるがえして女子部側の出口に歩いていった。

その後ろ姿はとても凛としていて格好いいとさえ感じた。だが、誰も近付けさせまいとする何処か寂しい感じがした

三章『戦い』（後書き）

いや〜やっと完成しました。ていうか、かなりハシヨリ過ぎて原作通りにいけるかな？（＾o＾；）

つていうのが書き終わった時に思いましたm（――）m
たぶん、大丈夫ですよね（笑）

分からない人がいるなら原作一巻を読むと分かるかと…

また読んでくれた方、たまたま見つけて読んでくれた方々に感謝感謝です。

四章『捜し人』

「はぁ… ホントついてない……」

(やっぱり、正月のおみくじで出るはずのない大凶を引いたからかな…)

俺は今、図書館の中にあるトイレにいる。

これはお腹が痛くて出られないだとか昼休みをトイレで済ますトイレ族でもない。それにまず今は昼休みが終わり授業をおこなっている時間だ。

何で俺がこんな所に居るかというところ… 未だに変身が解けていないのだ。だから、教室に戻るわけにも家に帰るわけにもいかず、ここで元に戻るのを待っているのだ。

「あぁ… いつになったら元に戻るんだよ…」

(あの時は一瞬で戻ったじゃないか…)

春佳はこのどうしようもなくヤバい状況に頭を抱えた。

今いる場所がその頭を抱えなくなる理由の4分の3を占めている。

何故ならここはトイレはトイレでも女子トイレだからだ。

最初は普通に男子トイレに入ったのだが、まさかの小便をしている男子と出会ってしまった。

俺と目があつた相手はあわあわとした。何慌ててんの? と思つたが、考えてみたらすぐに理由が分かった。今の自分の姿が女だからだ。

「ごめん、間違えたみたい」と謝るが変身してるときは、声も女性の声に変わるみたいなので全然説得力が無かった。

普通この状況ならもっと驚く筈だが、俺は身体が女でも中身は男だ

から何ともない。むしろ、毎日見てるからなんてこともない。だが、実際はそんな感じではなく小便をしていた男の子は数秒間フリーズした後、手も洗わず叫びながら走って何処かに行ってしまった。チャックが開いていたので「社会の窓が全開だよっ！」と叫んだが届いたかどうかは分からない。

まあそんなことはどうでもよく、個室に入るとドアノブを回すと、壊れているのかドアノブが回らなかった。もう一つの方でいいかとドアを開けると、そこは掃除用具置き場だった。他を探すが個室トイレは無い。

これで男子トイレで隠れて時間をつぶすという計画が不可能となった。

それで俺はしょうがなく女子トイレにいるのだが、入ってから問題が発生したことに気付き今の状況に至っている。

(ヤバイヤバイヤバイヤバイ…)

もし今元に戻ったら男の姿でこの女子トイレから出なくてはならなくなる。男子が女子トイレから出てくることはまずあり得ないことであり、あり得るならトイレの修理屋か盗撮犯しかない。だが、俺は一高校生で修理屋ではない。だから、見付かった場合は確実に盗撮犯決定だ。

それだけはこれからの未来のため何としても避けたい。

「んねっ、きゃはは」

遠くから俺の人生終わりを告げる死神の声が聞こえてくる。

(来るな来るな来るな来るな…)

死神の団体の接近と同じタイミングに腕輪が点滅し始めた。

「…!?!?」

なんでこのタイミングでっ！？と叫びたいが叫ぶとこっちに來てしまふ可能性があるから、心の中で叫ぶ。

腕輪の点滅する速さは時間とともに速くなっていく。

(なんとか、止まってくれ！お願いだっ！)

春佳は右腕に力を入れてみる。だが、特に変化は起きなかった。

「ちょっと、あたしトイレ行ってくるね」

「うん、分かったー」

死神の団体は春佳の願いと裏腹に通りすぎてくれず、その内の一体が春佳を人生の終わりに突き落とそうと狙ってきた。

(お前はどーしても俺の人生を終わらせたいのかっ)

春佳の顔から一滴の汗が落ちた。

「くそっ！」

春佳は覚悟を決めて個室トイレから出た。

「きゃっ」

急にドアを開けて出たせいで、女の子とぶつかりそうになった。

春佳は倒れそうになった女の子を抱きかかえるように支えた。

「ごめん。大丈夫??」

「…あ、はい」

助けた女の子とバッチリと目が合う。

「…ありがとうございます」

「いや、こっちこそごめんね…って!？」

右手の腕輪を見ると赤い光が膨らみ始めていた。春佳は急いで右手を見られないように隠して走り出す。

「あ、あのっ!」つと後ろから俺を呼ぶ声が聞こえてくるがそんな場合じゃない。

急いで階段を上がり、二階の生徒会室に向かう。生徒会室に入ると同時に光が身体を包んだ。変身が解け、女から男へと戻る。

「っ……危なかったあ……」

自分の身体を見て胸を撫で下ろす。

「何が危なかったのかしら?」

後ろから声が聞こえた。

(…まつ…まさか!?!…誰かにバレた?)

春佳はおそろおそろ後ろを振り返る。そこには椅子に座って仕事をしている生徒会長の三郷雫がいた。

「なんだ…先輩か……」

春佳は「はあ」と大きなため息をついた。

「いきなり生徒会室に入ってきて、ため息つくなんていいご身分ね。」

暇なら仕事を手伝って欲しいぐらいだわ」

「いや、違うんですよっ！変身が解けるまでトイレに居たんですけど、元に戻りそうな時に女の子が来まして…」

「つまり…南君は、私に『俺は変態なんです』と告白しに来たの？」

「違うんだ！それには海より深い理由がっ！」

雫に何故女子トイレに居たのか理由を話すと「そんなことは分かっていたわ」と返された。分かってたならそう言うて欲しい。必至に弁解した自分が馬鹿みたいに思える。

「それは先に言うて下さいよ…」

力を振り絞って雫に文句を言った。

春佳は一気に緊張の糸が切れて、近くにあった椅子に座り込んだ。雫は不適に笑うと「南君が必至に弁解しようとしていたから」と言った。こっちとしてはこれからの学校生活がかかっていたから、いい迷惑だ。

「それより…あなた、何人に見つかったの？」

「…そんなこと言ったっけ？」

「それは苦しい言い訳ね。あなたがさっき私に説明してくれたじゃない」

雫は少し間を開けてから「嘘をつくならもっとマシな嘘をつきなさい」と付けたした。

(ここで“4人に見つかりました”なんて言った暁にはヤバそうだな…)
春佳は唾を呑み込むと、檸檬から汁を搾りだすように頭から言葉を搾り出した。

「ふ、二人…かな？」

雫にじっと見つめられる。

最初は対抗してじっと見つめ返していたのだが、気迫に負けてつい、春佳は視線をそらしてしまった。

「…二人以上のようなね」

「…はい」

雫にずっと見つめられると

視線をそらしてしまうらしい。

だって、あなたの嘘はお見通しよとばかりに睨んでくるんだもん。

正直、心を見透かされてる気がして怖い…

もうバレてしまった以上はしょうがないので、春佳は認めることにした。

「…4人には確実に見られたかな」

雫は春佳に呆れて、軽くため息をついた。

「あなたのせいでケンプファーの存在が露呈されるかもしれないわね…」

「それより俺達がなれる“ケンプファー”ってのはなんなんだ？」

昼休みの戦いを思い出す。

雫が倒そうとしていたのは、どう見ても人間だった。敵は二人組で二人共うちの学校の制服を着ていたので、うちの女子生徒だ。

「ぬいぐるみから敵は青だって聞いたぞ？でも、相手が人間だなんて聞いていない」

春佳は声をあげた。人間を倒したら人殺しもいいところじゃないか。

「ちょっと、落ち着いてくれないかしら。回りに聞こえてしまうわ」

「そんなこと言われたって…」

雫は春佳を冷静になだめる。

「南君が思うことは、ごもつともな意見よ。私もそれについては納得がいてないわ」

「じゃあ、なんで…」

「理由は言えないわね。それ以外のケンプファーのことは教えてあげられるけど」

「……」

「あら？不満だったかしら。知つとけば、今日みたいなことにはならないと思うわよ？」

雫の言うことは確かにそうだ。

戦うしかないなら相手を。そして、変身の仕方や戻り方。武器の出
し方だって知らなくてはならない。知らなくてはならないことは山程ある。

「…じゃあ、教えてくれ。ケンプファーのことを……」

雫は「いいわよ」と言つと不適に笑つた。

「でも、それには 条件があるわ」

「へ？」

つい変な声を出してしまつた。

(…先輩は何を考えてんだ？ 言いそうなことというと)

「…『ギャグで私を笑わせてごらんなさい』とかのムチャ振りとか
私の奴隷になりなさいとかはない…よな？」

言葉を言い終わる頃には、そうなるかもしれないという恐怖に苛ま
れる。

「…あなたは、いえ…あなたは私をどういう目で見ているの？」

「サディスト女王様」

「…予想はついていたけど、キャラの押し付けはやめて欲しいわね」

「…皆はどうだろな。今まで通りじゃね？」

「じゃあ、南君は違うつて分かってくれたようね」

「…どーだかね。それより、条件ってなんだよ」

雫に見つめられて、その目を見てみると吸い込まれそうになったので、春佳は目線と一緒に急いで話を戻した。

「あなたが知っているケンプファーについての情報を教えて欲しいの」

「…俺が知っている情報？」

「そうよ」

（俺が知ってる情報ねえ…そんなに知らないしさっき初めて聞いたことが沢山あったからなあー）

春佳は脳を総動員して、朝にジユウサツイタチが教えてくれたことを思い出す。

「あまり知らなそうね」

「うるさい。今思い出してんだ。少し待ってくれ」

敵は青だということ。そして全員倒せ。だけだった。あとは学校が終わって帰って来たら、続きを話すとの約束だったのを思い出した。

「朝は色々あって青を全員倒せとしか聞いてないけど、帰って来たら話しますよって言ってた」

「やっぱり全員倒せしか言わないわよね…私が直接聞いてみようか」

しら」

「誰に直接聞くん？」

「あなたのぬいぐるみよ。だから、南君の家にお邪魔しようかしら」

「…うえいつ!？」

驚き過ぎて変な声になる春佳。

「南君が聞くより、私が直接聞いた方がてっとり早いわ」

「でも、男の家だぞ!？」

「それがどうしたの?」

(うーん…そんなにさぞ普通ですとばかりに言われるとちょっと傷付くな……)

女の子が男の子の家に行きたいとか…理由がアレしか思い付かない。雫でもそんなことを考えることがあるのだろうか…
ちらつと雫の顔を見る。

「うん。それはないな」

「南君は何を考えてたのかしら」

雫の俺を見る目がとてもキツイ。その視線だけで気が弱い人なら死んでしまつんではなだろうか。

「いや、何でもありません、はい。…それでいつ来るんですか?」

「今日よ」

「今日っ！？それは急すぎないか？」

「家に親でもいるの？」

「いや、母親は基本的に帰ってくるの遅いからいないけど…部屋とか片付けてないからさ」

「別に気にしないわよ？私は南君の彼女ではないんだし、そこまで気にしなくて」

「いや、雫先輩は気にしなくても俺は気にすんだよ。それに」

雫は「…それに？」と俺に続きを早く言えと急かしてきた。

(くっ…女の子を家にあげるのは初めてだ、なんて口が裂けても言いたくねえ)

そんなこと言った暁には、それをネタに弄られるか脅迫されそうだなので春佳はそれと同等の理由を考える。

「…それは」

生徒会室のドアが勢いよく開く。

雫は訪問者の方を向いて挨拶をした。

「あら、楓が生徒会室に来るなんて珍しいわね」

「そつですか？」

ドアを勢いよく開けて入って来たのは沙倉楓だった。

楓は春佳に見向きもせず横を通りすぎ雫の元に歩いていく。

「そんなことより雫ちゃん！探している人がいるんですけど、どの学年にも見当たらないんです！」

「それはどんな人なの？」

「それは…背が高く、髪を上で結んでいるカッコいい人です！」

「楓、少し落ち着きなさい。その人は男の子なの？それとも女の子？」

雫は興奮している楓をなだめた。

「……ふう、女の子です」

楓が「女の子です」と言った瞬間、雫が俺のことを見てきた。

春佳はいいや俺じゃないからと手を振って猛烈に人違いアピール。じゃなきゃ、消されそうな目付きだった。

楓は雫の視線が気になったのか、後ろを振り返る。

「あ、春佳さん！」

楓はそこに居たの気付きましたと言いたげな驚き方をした。

「…こんちわ、沙倉さん」

とりあえず、気付かれていなかったことに心の傷を負わされたが特に気にしてないていを装うことにした。

「南君、バレバレよ？」

「…エ？ナンノコトデスカ」

楓はそんな二人を交互に見た。

「……？」

「南君とは色々あつてさつき知り合つたのよ」

雫が混乱している楓に説明する。すると、納得したのか両手を合わせて雫の元に走って近付く。

「……？」

（なに沙倉さんはニコニコしてるんだ？）

春佳は事態が飲み込めず頭を傾げる。

沙倉は雫に耳元に顔を近付けると、こそこそと何かを呟き始める。

「違うわね。楓の早とちりよ？」

「えーっ！違うのー？絶対そうだと思つたのに」

「…？」

（何の話をしてるんだ？）

急に始まつたガールズトークについて行けず春佳は途方にくれる。

もしその中に入れるとしたらチャラ男という進化した人間か爆弾を隠し持っているテロリストのどちらかだ。当然俺はどちらにも当て

はまらない部類にいる。それを皆は草食系男子と言うが俺はけして違う。女の子にはがつつり興味があるが、ただ話しかけられないだけだ。因みに雫は別。話しかけられるタイプ。

春佳は特にやることなく、ぼーっと仲良く談話している雫と楓を眺めた。

（沙倉さんも雫先輩も綺麗だよな。これで二人共彼氏がいないっていうんだからホントに不思議だな…）

そう星鐵2代美少女の名を持っている彼女らは彼氏がいない。彼氏の座を狙う男共は沢山いるのだが、すべて返り討ちにあっているのが今の惨状だ。沙倉さんに関しては、楓を落とせば東大だって受かるといふ噂が流れている。雫の場合はどんな男も近寄せないオーラを張っているので近付くと死ぬのではないかともしばらの噂だ。でも、そんなSなオーラが好きな奴は何処にでもいるらしく、神風特攻隊をするやつが絶えないらしい。あるゲームのラスボスが張るドリームオーラ並みに雫のオーラを破るの難しいんじゃないかと思う。雑魚では破れないってことね。

（でも、二人の場合は違うんだよな）と考えているうちに話はどつやら終わったらしい。

楓は春佳の方を向いた。

「どんな話してたの？」

楓は「それは…春佳さんには内緒ですっ」と言つと雫の方を向いて微笑んだ。

「…??？」

「そんなことより」と雫は話を変える。

「そんなことより？」

「そんなことよりとはなんですか？」

春佳と楓は揃って雫に質問した。

「探している女の子がどうしたの？」

「…あつ、そうでした！雫ちゃんも春佳さんも身長が高くて声がハスキーでカッコいい人見かけませんでした？」

「見てないわね」と雫は即答した。「先輩…もう少し考えようよ」と言いたいのがそれを言うのは野暮だ。雫の頭はいわゆるスーパーコンピュータ スパコン並みなのだ。大抵のことはすぐ分かるらしい。

「ん…ごめん、見てないかな」

「そうですか…」

沙倉さんはがっかりしたのかしょんぼりとした。そんな楓に見兼ねたのか雫はある提案を出した。

「それじゃあ、三人でその人を探してみましようか」

「えっ！本当に！？雫ちゃん」

「ええ、もちろんよ」

「ありがとう！雫ちゃん、春佳さん」

「あ、うん……」

春佳はうんともすんとも言っていないのに話しが勝手に進んでしまい、楓の人探しを手伝うことになった。

俺たち三人一緒に下校することは出来ないので、近くにあるコンビニで待ち合わせることにした。

「……ヤバい、緊張してきた……」

ぐるぐるとお腹が鳴り出す。

急いでトイレはあるのか店内を見渡す。雑誌が置いてあるコーナーの近くにWCのマークを発見した。

(良かったあ……あった)

安心したのもつかの間で、また腹痛が春佳を襲う。

「すみません、トイレ借りていいですか？」と近くで商品を陳列していた店員に訊いた。

「あ、はい。いいですよ」

店員は春佳を見て状況が分かったのかすぐ返事をしてくれたが、春佳は返事を受け取る前にトイレに向かっていた。

店員は大変だなとばかりに春佳の背中に苦笑いを送った。

(腹が……痛い……なんでいつもこんな時に)

運良くトイレは空いていたのでギリギリ間に合った。

「はあ……」

(危なかったあ……)
緊張するとすぐ腹痛を伴う自分の身体を呪いたい。
まあ、今日のはしょうがないかと苦笑いをする。

「だって、星鐵二代美少女と一緒に行動してるんだもな……」

全学年の生徒が一回はしてみたいと言われている、三郷稟と沙倉楓との買い物デート。俺の場合は買い物ではないが、そんなのは対して差はない。

男子と外を歩くことのない稟に関しては、この夢のようなことは絶対起こらない。だから出来たとしたら奇跡に近いだろう。

「俺って奇跡起こしちゃったのかな?……」

春佳はちょっと嬉しくなって、小さくガッツポーズをする。

ぐらぐるぐる〜

「く……クソっ……」

周りの『羨まし過ぎる…地獄に落ちろ』という思いがこの事態に陥った原因ではないかという考えが頭をよぎった。

(俺は…こんなことには負けない!!)
痛みが治まったので急いで拭いて、トイレから出る。

(さあ、ここが重要や。アレはどこだ?)
春佳は下痢止めを探した。

「あ、あった!」

天が味方してくれたのか、最後の一箱の下痢止めを発見した。急いでそれを掴むとレジにダッシュする。その途中でいるはずも手に取る。

「あら、どうしたの？」

天は味方してくれたと思ったが違ったようだった。精神的ダメージを増増させるため、上げてから落とすという卑劣な方法を用いていた。

「そ、そこをどいてくれ……」

「春佳さん、どうしたんですか？」

雫の後ろからひよこつと楓が出てきた。

「どうやら南君、お腹を壊したらしいのよ」

腰を少し曲げて、腹を押さえている春佳を見て状況が分かったのか楓に説明した。

「え、大丈夫なんですかっ？」

「……………」

いえ、大丈夫ではありません。もうヤバイです…と言いたいが我慢するので精一杯。

ぐるぐる……

「く…これお願い……」

春佳は一秒でも早くトイレに行きたいが、商品を持っては入れないので雲に預けた。

雲は何かしら？とばかりに見てくるがそんな場合じゃないので、無視する。春佳はまた店員に了承を得るとトイレに駆け込んだ

*

(…これは買ったといてってことかしら……)

雲は春佳から預かった下痢止めと水を見た。

(やっぱ、すぐ必要よね)

雲は下痢止めと水を片手にレジへと向かう。

「きゃっ、やっぱりそうなんじゃないですか」

「何かかしら？」

「だ・か・ら、雲ちゃんと春佳さんの仲っ」

「…そう見える？」

「はい、見え見えですっ！」

「……………」

雲はさっきの春佳とのやり取りを思い出す。これ持ってとりあえず持つてる、すぐ必要だろうから買っておく。

「467円です」

雫は「これで」と財布から500円玉を出した。

「楓の勘違いよ。私にはそんな気はないわ」

店員から333円のお釣りとレシートを受け取る。

楓は「え〜そうなんですか〜？」とまだ食いついてくるが春佳がトイレから戻ってきたのでそれについては終了した。

「あ、ありがとうございます」

「…ごじますわ？」

「…ありがとうございます。今すぐ飲みたいからくれ。それといくらだった？」

「素直で宜しい。はい、どうぞ」

「ん？ありがとうございます」

雫は春佳に袋を渡しお金をつけとると出口に向かって歩きだした。春佳にしか聞こえないような声を潜めながら、「これは貸しね」というと春佳は飲みかけていた水を吹いた。

「どうしたの？水を吹き出すなんて汚いわよ？」

「それはお前が…」

「あら、なんのことかしら？」

背を向けているので春佳の顔は見えないが、悔しんでいるであろう姿を思い浮かべたら少し笑いそうになった。

(…どうしたのかしら……)

自分の顔を触るが特に変化はなかった。

「どうしたの？ 雫ちゃん」

「いや、なんでもないわ。それより、楓が探してる人を探すわよ」

「あ、はいっ！」

楓は待つてましたとばかりに頷き、歩きだした。

暫く歩いていると急に楓が春佳に向かって「あ、そういえば朝はすいませんでした」と言いました。

(朝のことってケンプファーのことかしら……)

雫は疑問に思ったが口には出さず、二人の会話を聞くことにし。

「え？ ああ、あれか。大丈夫だったよ」

「あれかって忘れてたんですか？」

「ごめんごめん。今日は色々ありすぎてさ……」

「何かしら？ 南君」

「いや、なんでも」

春佳の反応を見ていると無性に弄りたくなる。

「南君が目でセクハラしてくるわ。楓」

「え〜春佳さん、雫ちゃんをそんな目で見ないで下さい」

楓は雫と春佳の間に立つと、雫を守るように両手を広げた。

「えっ！？見てない見てない！」

あわあわと慌てる春佳に雫は追い討ちをかける。

「流し目で見てたじゃないの」

「春佳さん最低〜」

春佳は誰が見ても『パニックに陥っているね』と思うくらい目がキョドっていた。そんな春佳をもっと弄りたい気もしたがそろそろ目的地に着きそうだからやめることにした。

楓の春佳への疑念をはらうため「楓、さっきのは冗談よ」と彼女の耳元で真実を言った。

「えっ？そんなんですか？」

「ええ。さっきのは全部嘘よ」

春佳は口をパクパクさせて「もっと早くそう言ってくれよ！」と叫んだ。

そんな春佳に小さな声で「静にして」「言つとと、雫はある方向を指さした

*

「ええと…」

ナツルは案内掲示板を見上げる。店名がびっしりと書いてある。

「この店です」

紅音がこれから行く三階を指をさす。

ナツル達はエスカレーターで目的の階まで昇る。紅音、ナツル、ますみの順に乗った。

「服、服」と息をあらげて、ますみはぶつぶつと徐祖を言っている。因みに“ますみ”というのは、今日沙倉さんを運んだ時に出会ってしまった子だ。彼女の名前は西乃ますみ。クラスは一年三組。血液型はB型。成績は中の下。趣味は音楽を聴きながら寝ること。スリーサイズは是非ご自分で触って確かめて下さいとのこと。一番最後のはセクハラになってしまいうではなか…いや、今なら女だし、女の子同士ならそれには当てはまらないかと考えが巡ったあと考えるのをやめた。まあとりあえず、これらは全て彼女が教えてくれたことだ。それも何度も…。そのせいで最初は全く覚えられなかったが、全部覚えてしまった。

当たり前だけど…スリーサイズ以外ね。

当初の話では紅音との二人で買い物だったのだが「何でここに？」と紅音に聞くと、「その…追及されちゃって、誤魔化しきれなかったんです……」と返ってきた。

最初は走って巻こうかと思ったが「逃げられないと思います…」との紅音ちゃんに助言を頂いたので諦めて三人で買い物に行くことにしたのだ。

「…はあ」

「…どうしたんですか？着きましたよ？」

紅音はエスカレーターから降りると、あるお店に入って行った。そこは可愛いというには落ち着いた感のある、セレクトショップだった。

(…高校生より年齢層高くない？)というのが最初の感想だった。ファッションについてはよく分からないので、紅音についていくことにした。

「ナツルさん綺麗だから、こういう所が良いと思って…」

紅音は若干顔を赤らめながら説明してくれた。

とりあえず「ありがとう」と礼を言った。正直、女の姿を誉められても複雑な感じだ。

(自分でも確かに綺麗だとは思っけど…)

真っ先にますみは「服ー、私も選ぶー」と叫びながら店の中に突入していった。その後、紅音は続くがゆっくりと入って行く。ナツルは未知の領域に踏み込むため恐る恐る店内に入った。

生まれて始めて女性向けのショップに入ったが、驚愕続きだった。壁から廊下まで、ずらりと服が並んでいた。

「……………」

(うわー、こんなに色々な種類の服があるのか…)

ある一つのコーナーに紅音とますみが品定めしているのを発見した。一応、品定めをしてもらっている身なので、二人の側に行くことにした。ナツルは特にやることはないので、ぼーっと女の子二人が服

を選んでいるのを眺めることにした。

(俺ってどんなのが似合うんだろう……)
ますみが紅音より一足先に「きゃー、きゃー」と叫びながらTシャツを持ってきた。

「ナツルさん、これこれ！」

広げられたシャツの正面には、二本のチェーンソーが組み合わされ、
「KILL Teacher, KILL Cop」と書かれていた。

「……………」

「絶対似合います。授業中に着て下さい！」

(…退学になったら責任取ってくれるんだろうな?)

言いたいことはもっとあるが、あまり声は出したくないのでひたすら黙る。そして、肯定・否定は行動で示す。

当然それは着たくないなので、黙って首を振った。
ますみはナツルの反応を確認後すかさず二着目を取り出す。

「これはどうでしょう!？」

今度は、十字架に磔にされた有名な宗教家が服にプリントされ、その下に「こいつ絶対ペテン師」とゴシック体で書かれていた。

「クリスマスイブの夜に、これを着て街を歩きましょう」

いくら日本人が宗教に鈍いから安心だと言っても、日本にだって宗教者はいる。その人たちに見つかったら痛い目にあわされること間

違いなしだ。

これもまた嫌なので、ナツルは首を横に振ろうとしたら、その前に新しい一枚を差し出された。

「…っ!？」

(なんでこういうのしか選ばないんだ…)

ますみの選んでくる洋服たちに驚愕していると、向こうから紅音が走って近付いてきた。

「これなんかは…ナツルさんに似合うかも……」

紅音が持ってきたシャツを広げてみた。肩が細い紐だけになっているワンピースだった。色は黒だ。

(確かに…こんな感じの服を女の子が着ているのを見たことあるな…)

「……………」

紅音が『どうでしょうか…?』と言いたげな目で見ている。

(…でも、銀色でドクロがびっしり刺繍されてるのは、抗議したいな……)

「だーめ。ナツルさんはこれがいい」とのますみの意見により、文句を言うタイミングを逃した。

ますみがナツルの前にTシャツを広げた。

「…っ!？」

ナツルは緑のウサビッチ並みにびっくり。背中に「ヴラド串刺し公

がトルコ兵を皆殺しにしている絵」がプリントされていた。

「こ…こっちの方が」

紅音が出したのはスカート。さっきのよりもう少しマシな物を期待したが、TVで言うとピーだった。

（あんたらは俺に何をさせたいんだっ！）と叫び出した衝動に駆られたが、何とか呑み込んだ。

「……………」

ナツルが何も言わない、いや、何も言えないのでついに紅音とますみの間で『ナツルさんに着てもらうのはどちらか』という戦争が始まった。

紅音はますみに比べ声は小さいが、ますみの声に負けじと頑張っていた。しかし、ますみ程は出ないようで負けそうになるが、頑固として引こうとはしなかった。

「買うのをやめる」

ナツルの一言に二人は驚愕する。

「え…やめちゃうんですか……………？」

「もったいないーい。買うのー買うのー買うのー。着てくれない、私死んじゃいますー」

（じゃあ、死亡フラグだな）

ナツルはそんな二人を無視して、無言で店を出る。紅音は文句を言わずついてきたが、ますみは「ご自由にお触り下さい」とプリント

されたスカート振り回し、「これ着てこれ着て、最後まで最後まで！」と叫んでいた。

（なんだそれは！履きたけりや自分で履け…）
結局、スーパ―に向かうことになった。

ますみはさっきのことをもう忘れたのか、「ナツルさんは今日、何を食べるんですかー？」と聞いてきた。なんかうちのクラスの奴等と同じ匂いがするな…。

「ねえ、君たち」

また軽い台詞が後ろから飛んできた。また東田かと思って後ろを振り向く。

「…？」

話しかけてきたのは、東田ではなくちやらい三人組の男だった。因みに、“また”というのは俺達三人がデパートに入る前の話だ。これもまた突然後ろから「ねえ」と東田が話しかけてきたのだ。それも滅茶苦茶馴れ馴れしく。あれは凄い気持ち悪かったので、まだ忘れられない。

「カラオケ行きたいんだけど、人数足りないだ。一緒にどう？」

（どうもこうもあるか。誰がお前らなんかと、カラオケに行くかよ）
こいつらはどいつもこいつも似たような格好をしており、目がちかちかする服を着ている。

「……………」

当然のことながら、質問には答えない。喋れないじゃなくて、こい

つらに言葉を発するのがめんどくさいだけ。

ナツルはますみ辺りがなんか言わないかと期待して見るが、彼女は露骨に嫌な顔をしているだけ。特にには言わないらしい。紅音は……うん、無理だろう。

「そのカラオケボックス行こうよ」

紅音が腕を掴まれる。

「……い、行きません」

「冷てえな。ちょっとくらい、良いじゃんかよお」

(うざ……東田より頭に来る奴だな……)

ナツルは連れて行かれそうになっている紅音の袖を掴み、こちらに引き戻した。その時に彼女から「きゃっ」と悲鳴が上がるが連れて行かれるよりマシだろう。一応、謝るのけど後で。

「そっちの可愛い娘も来いよ」

白色レグホンみたいな頭をしている野郎が喋り始めた。

(ニワトリ……みたいな髪型だな。すげえ……って……)

「……………?」

「……ナツルさんのことですよ」

紅音が小さい声で誰のことを言っているのか教えてくれた。

(一瞬誰のことを言っているのか分からなかったが、どうやら俺のことらしいな……)

ニワトリヘヤーが腕を掴もつと近付いてくる。どう対処したものと考えていると、良い案が浮かんできた。そう、変身後の紅音の台詞だ。

「おい」

相手の胸ぐらを掴んで、こっちに引っ張った。

「ざけんじゃねえぞクソ野郎。いちいちウゼえんだよ。汚い手で馴れしく触んじゃねえよ」

女から男の声が発せられたのに驚いたのか、ニワトリ頭はぎょっとしていた。

「おめえのくだらねえヒマ潰しに付き合っほど、こっちはヒマじゃねえんだよ。目障りだから失せる!…じゃねえと殺す」

男の腹に、固いものを押し当てる。

「ンだこのアマ…」

右手の力を込めてぐりぐりと押す。

「これ以上何か喋ってCO2出すなよ?地球温暖化が加速しちまう。だから、出した場合は……分かるよな?」

ナツルはニワトリ頭をぎろりと睨んだ。相手も睨み返してくるが、全然怖くない。まぢケンプファーに感謝。

「あ? どうする??削減に協力したいなら今すぐして殺るよ」

男達は悔しい顔をして去っていった。ナンパ共は去ったので手に持っていたライターを、ポケットにしまう。朝からずっと入れっぱだったのだが、こんなところで役に立つとは…以外だった。

「なんか女になると、途端に人から声をかけられるな」

「あだし、いつもはナンパされないんですけど…」

「けど？」

「ナツルさんが美人だからだと思います」

まずみも「そーそー絶対さっと思う。ナツルさん美人だから、男達がずーっとこっち見てんの。きゃー素敵今すぐ私を抱いてー」なんて騒いでいた。

(んー…これは喜んで良いことなのか？ 実に複雑な心境だな…)

「スゲーな、君、強いねえ」

別方向から聞き覚えのある声をかけられ、一気に頭が痛くなかった。

「ずっと見てたんだけど、あいつらこの辺りじゃ有名な連中だよ？ 追っ払うなんてやるじゃん」

「……そう」

(「ずっと見てたって…だったら助けに来いよ」って言ってやりたい…)

口では文句は言えないので、睨むことにした。

「ん〜良いねえ、その目付き。やっぱり、写真撮らせてよ。その彼女も一緒にさ」

「……………」

ナツルは無言のまま紅音の腕を掴むと引っ張って、東田から離れていく。追ってきそうなので若干早歩き。

「あー、待ってよ。一枚で良いからさあ」

やっぱり東田は追いかけてくり。追い付きそうになった瞬間、くるつと振り返った。そこで一言

「失せろ！」

目を丸くしてお口あんぐりになった東田を置き去りにして、ナツル達はずんずん進んでいった。

「ナツルさん素敵ー。口の悪さがたまんなーい」

「…ナツルさん、さっきの人、あんなことしちゃっていいんですか？」

紅音は心配そうな顔で聞いてくる。そんな彼女にナツルはこう答えた。

「あいつは鳥類と同種だから」

「……えっ？」

紅音はよく分からないと言いたげな顔をしている。そう男子部二年四組の連中は大抵そうだ。一ヶ月前にあった日本史の宿題なんか他のクラスと比べると圧巻で、クラスの内七割が全くやっておらず、残りの三割はやってているが分かれるところだけだった。と言っても後者も白紙に近かったらしい。教師はそれを見て金魚みたいに口をパクつかせて卒倒した。その後、担任は泣きながら説教をしたが、それすらも翌日には綺麗さっぱり忘れていたという体たらく。因みに俺は七割の方。

「そんなことよりおかず。スーパーどこ？」

ますみがウサギみたいにぴょんぴょん跳ねながら、進行方向を指さす。

「あそこでーす。そこから横断歩道を渡った方が近く……あーっ！」

ますみが近くで大声を出したので、心臓が跳ね上がった。

(こら！俺が心臓悪かったら、今のでぼっくり逝っちまったぞ)

「なんだなんだ!？」

「ナツルさんの手首が光ってるー！」

手首じゃなく、腕輪が光ってるんだがとっつこみたいがそんな場合じゃない。とりあえず彼女は勘違いしているらしく、「すごい、静脈って光るんですね。チョウチンアンコウみたい」と面白がっていた。

ますみがバカで良かったーと、一瞬安心してしまったがそれどころ

ではなくなった。発光が早くなってきたのだ。

「ナツルさん、大変です…！」

紅音は顔を青ざめさせていた。これは女から男に戻る合図なのだ。そりゃー男に戻るの嬉しいのだが、場所が場所だ。こんなところで性別がチェンジしたら、変態扱いどころじゃない。これからの人生がチェンジだ。

隣にはますみがいるので、こんなところを目撃されたら、それこそどこかの研究所に売り払われてしまう。

「うわっ、やばっ。紅音ちゃん、早くケンプファーになって！」

「こ、ここですかっ！？ますみちゃんがいいますから、無理ですよ…」

また発光するスピードが早まった。

（あ…やばっい！）

ナツルはますみに叫んだ。

「ちよっつごめん…！」

言い終わると近くにあった地下駐車場にダッシュした。中に入ると同時に青い光りが全身を包んだ

*

「栗先輩…もしかして……」

楓に聞こえないように声のボリュームを下げて要件を伝える。

「南君が思ってる通りよ」

「えっ？こんなことってあり得るんですか…？」

「分からないわ。だから、あなたのジユウサツイタチに聞きたいのよ」

流石の雫でも男から女に変わるといふのは今までに出会ったことはなかったらしい。少し驚いているようだ。

雫は頬を赤く染めて固まっている、楓に話しかける。

「楓…さっきの女の子でいいのかしら」

「……………」

楓は聞こえていないのか、まだ固まっている。

「…沙倉さん？」

そんな時、楓は話始めた。

「雫ちゃ…きよ…して…いい」

「……………」

雫と春卦の頭の上にはてなマークが出来る。まあ三分の二は春卦だが。

「雫ちゃん、春卦さん…協力して下さい！」

楓は凄い勢いでこっちに振り返ると叫んだ。

「ええ、いいわよ」

雫は何か考えがあるのか含み笑いをした

四章『捜し人』（後書き）

今回も長い話だったので切りがいい所で切りました（；|A
次の話で原作三章が終わります（*^^*）

実際読むとそんなに時間はかからないのに
書くと果てしなく時間がかかるんですね。（。 - - ）
ラストの6000文字が辛かったです（；、、）

そして、二度も書いたからもっと辛かったあ…（T|T）

今回は春佳が多めに出ています（笑）

これからも沢山出れるようにがんばります（^o^）v

五章 『三年一組』

春佳は鍵を開けて勢いよく家に入る。ロンファアを雑に脱ぎ捨てる
と、ドスドスと地響きが聞こえるのではないかといくらい、荒く階
段を昇る。

「……………」

バン！

自分の部屋に入るなり、開口一番に叫んだ。

「ジユウサツ野郎…どこにいった！」

「はいはい…帰ってきて早々、どうしたんですか？」

「どうしたもこうしたもあるか！」

「…ん？」

「『ん？』じゃねーよ！可愛くも何ともねえ。そんなことよりお前、
俺に説明しなすぎ！」

「ああーそのことでしたか。私も春佳さんが学校に向かったあと思
い出したんですよ」

「…はあ！？、なんだそりゃ……………」

(ぬいぐるみなのに物忘れとかあんだね。…うん、八つ当たりしていいかな？別にいいよね。このくらい。)
春佳は今日の出来事の復讐をする為に、ぬいぐるみが座っている机に向かう。

「は、ハルカさん？」

「…なんだい？ジユウサツくん」

「えつとですね、その…右手に握りしめている物は……なんですか？」

「…ん？右手には何も持ってないよ？」

ゆっくりと右手に持っていた物を左手に持ち変えた。このさえ利き腕じゃなくても、何とかして息の根を止めてみせるさ。

春佳は一歩一歩、着実にジユウサツイタチに近付いていく。

「…っ！！」

ジユウサツイタチが立ち上がって逃亡を始めた。すかさず左手に持っていた物を獲物めがけてダーツの要領で投てきする。

「逃がすかつ！」

「ひい…！」

投げたカッターは的をハズレ、壁に突き刺さった。

「あーあ…壁に穴空いちゃった……」

「……………」

ジユウサツイタチはガクガクと足を震わせ、床もとい机に座り込んだ。

「もうどーしてくれんだし…親にバレたら怒られんじゃん」

「…わ、わたしのせいです…か？」

「もちです」

「……………」

ジユウサツイタチは口を金魚みたいにパクパクさせていた。

（ん？ここに入れたら100点って言いたいのか？）

春佳は壁に刺さったカッターを抜くと少し後ろにさがった。

「さあ、レッツシューティングやな」

春佳は投げるモーションに入る。狙いはあのパクパクしているぬいぐるみの口だ。

（この辺かな）

「そ…れっ」

「ただいまー」

下で女の声が響いた。

「…誰ですか？」

「ちっ…帰ってきたか…あれは俺の」

春佳がジユウサツイタチに誰が帰って来たのか説明し終わる前にバ
ンと勢いよく部屋のドアが開けられた。

「たっだいまーって言ってんじゃん！」

「あーはいはい、おかえり。それといつも言ってるけど、それ…い
つかぶっ壊れるからね？」

（毎回言ってるのにやるんだよねこれ…）

春佳は部屋に入って来た女性の後ろの扉を指差す。

「えっ？…大丈夫！ わたしは…壊れましえーん！！」

（いや、あんたじゃねーし）

「…ていうか、武田 也みたいな感じで言うな」

このスツゴい昔の流行語とやらを改造して叫んだこの女の人の名前は南咲希、つまりは俺の母親のだが、何故かウチに遊びに来た友達は皆こう言う…「誰だ…この綺麗な人は…春佳の彼女さんなのか？」と。

俺の母親だっつーの！と説明するのだが基本友達俺の言葉を信じてはくれない。

別に俺が嘘つきで誰からも信用されていないとか、そういうことではけてない。ただ、顔が童顔過ぎるのだ。身長は158センチ。

髪は絹のようにさらさら、声は歳をくつたみたいな感じではなく高

かい。そして、このテンション…異常に高いのだ。肌艶もまだ生き
ている。

等々の以上のステータスをまとめると、20代前半〜中盤ぐらいと
いう見た目になる。

(皆、騙されている…こいつは)

「あはは、ごめんねっ。でも、何を考えてるの？」

ギクッ

「あたしの…年齢のこと……かな？」

ギクギクッ

「あははー、何言ってるのや、母さん」

春佳は昔していたバイトで会得した営業スマイルをした。

(母さんって、たまに勘が鋭いんだよな…)

「あっ！」と咲希(母)が叫んだ。

「ん？…どうしたの？」

「『どづしたの？』じゃないわ…どづして……」

「どづしてっ？」

「…母さんのこと“咲希”って読んでくれないの…？」

「……………」

「あんだ、マジで黙ろうか…」と咲希（母）に文句を言ってやりた
いが、毎度毎度このことで言い争いはしたくはないので、我慢して
苦笑い。

「…ところで、夕飯は何？」

気合いで話をねじ曲げる。

「えーっと、今日わね…作ったことないけどチキンオムライスかな
」

「『かな』って…それ大丈夫なの？」

咲希（母）は「大丈夫任せといてっ！」と平らな胸を頑張って張っ
て、敬礼をした。

（はあ…精神年齢いくつだよ…）と心の中でツッコム。まあこつ
い
う人だから、家が明るいのかな。

「とりあえず腹へったから休憩したら、飯早く作ってね」

咲希（母）「はい」と言っ、トコトコと部屋から出て行く。

「随分若い母親ですね。何歳なんですか？」

咲希（母）が居なくなっただので、またジュウサツイタチが喋り始め
た。

「…逆に何歳に見える？」

質問に質問はどうかと思うが、このぐらいは許容範囲だべ。

ジウウサツイタは「ん〜…」と唸ったのち、剣らしき物を後ろから出した。

「……………」

「あつ、いや、待つてください!」

「何が?今のは上手かったから、褒美に座布団の代わりに」

「いや、カッターだったら座布団が欲しいです!」

真剣に考えるから真剣…バラバラにしていかな?

「まあ、バラバラにしたら話聞けなくなるから、やめとくか…」

ジウウサツイタチは「バラバラっ!？」とある言葉に反応して驚愕しているみたいだが、如何せんぬいぐるみだから、表情が分からんいやホント残念。

「ところで」

春佳は下に居る咲希(母)に話声が聞こえたらマズイので、部屋の扉を閉める。

「ケンプファアーのことは三郷零っていう先輩に大まかのことは聞いたんだけどさ、まだ分かんないことがあるんだけど…」

「あ、仲間が出来たんですね。それは良かったです。…ですが、分

からないこととは？」

「えーつとな、『あなたはどんな武器が使えるの？』って聞かれたんだけど、俺は何が使えるの？」

「…え？まだ一回も発動してないんですか？」

「お、おう」

「…敵と朝会ったの？」

「会ったな。つか、そいつとはたぶん図書館でも会ったかもしんない」

（ん？“会ったの？”って何で知ってた？）

ジウサツイタチは春佳が疑問に思ったことが分かったのか「それはあなたのメッセンジャーですから」と言い、含み笑いをしてきた。

「なんだそりゃ…。お得な機能なこと」

「…確かにこれはお得な機能ですね」

春佳は“これは”という言葉に反応した。

「“これは”ということは他にも何かあんのか？」

「はい、あると言えばありますが、ないと言えないですね」

「……………」

(…あるのにないってどういうこと?)

ジユウサツイタチは意味深に笑っている。

春佳は頭の上に疑問符を浮かべていると一階から「ご飯出来たわよー 降りてきてー」と呼ばれたので、一時考えるのをやめて夕飯を食へに行くことにした

*

「三郷雫…」

ジユウサツイタチは暗い部屋の中で唯一明るい天窓の下にいる。端から見ると内蔵を出したぬいぐるみが見え、ステージでスポットライトを浴びてるような感じで、それは異様な雰囲気醸し出していた。

(いや、これは驚きですね…)

ジユウサツイタチは頭の中に入ってくる情報を整理した。

三郷雫

一年生の時にケンプファーになった。武器はシュヴェアトで双剣使い。大きさは小さく短剣よりちょっと長いぐらい。柄には鎖がついていて、それを使うことで自在にコントロールすることが出来る。今まで倒してきた敵の数

「今現在いるケンプファーの中で圧倒ですね…」

ジユウサツイタチは雫の戦歴を他のケンプファーの戦歴を比べて、驚きの声をあげた。

そう…これが春佳に「あると言えばありますが、ないと言えないですね」と言ったもう一つの機能だ。これはケンプファーの戦歴や能力が完璧ではないがだいたい分かる。だが条件があって、名前が

分からないと能力を見れない。そして、今現在いるケンプファアのデータはあるのだが、人物は特定出来ないというデメリットがある。

「春佳さんはとんでもない人を味方にしましたね…」

ジウウサツイタチは口元を上に向けて含み笑いをした。

（これだと赤の圧勝で終わりそうですね…）

データによると雫が出てくる前、雫はまだ中学三年生の時…いわゆる約三年前は赤も青も同じ撃破数で競り合っていた。どちらも倒されては倒してという感じだ。

そこに入学してきた三郷雫が戦局を一気に変えた。

だんだんと赤が伸び始めた。青はいきなり現れた強敵に次々に倒されていくが、黙って見ているわけはなく複数で一人ずつ倒していくということをし始めた。最初に強襲をかけたのは、どうやら雫と仲の良い先輩だったらしい。作戦は上手くいったのだが、その後に見られた雫のあまりにも強さに全滅させられた。

「どついう風に戦ったのかは、分かりませんか…」

「…何が？」

いつの間にか食事から帰って来たのか、後ろには春佳がいた。

「いえ、こつちの話です」

「ん〜何か怪しいな…」

春佳は疑うようなジト目で見てくる。そんな春佳をスルーして、ジウウサツイタチは話題変えた。

「それより、チキンオムライスでしたっけ？それは美味しかったですか？」

「……………」

下に降りてから随分と時間が経っていますかと付け加える。

ジユウサツイタチは壁にかけてある時計を見た。今の時刻は夜の8時半過ぎ。そして春佳が下に行ったのは、7時15分ぐらい。夕飯にしては随分と時間がかかっている。

「…あれは“普通の”チキンオムライスじゃない……………」

「…え？それはどういうことなんですか？」

ジユウサツイタチは俯いて手をワナワナさせている春佳に、質問を投げかけた。

「…量がハンパないんだ……………あれは大食い選手権並みの物だった」

春佳は思い出すだけでも辛いのか、「うっぷ……………」とゲップをした。

「でも、味は良かったんですね？」

「んまあ…………トマトケチャップの入れすぎを除いたら、別に実物と大差ないもの？だった」

「あはは、それは災難でしたね」

人の不幸は蜜の味という言葉どおりに笑う、ジユウサツイタチ。そんなぬいぐるみに体裁加えたそんな目で見てくるが、身体というか

主にお腹が言うことを聞いてくれないのか、「…はあ」とため息をはいて机の椅子に座った。

ジユウサツイタチは「あ、さっきの話何ですが」と春佳に自分は変身すると何が使えるのかを伝えるために話をきりだした

*

家のドアを開けると同時に「ただいま」と雫は言った。

「お帰りなさい、雫」

雫の帰宅に気付いたのか、女性がパタパタとスリッパを鳴らしながら玄関に向かってくる。彼女はリビングのドアを開けて今度はゆっくりと近付いてきた。

「今日は遅かったわね、どこか寄り道してたの？」

「楓と楓の友達と少し買い物に行ってたの」

「へえ、懐かしいわね。楓ちゃんは元気？」と雫の母、三郷静香が聞いてくる。顔は整っていてどこことなく雫に似ているが雰囲気はほわほわしている感じだ。おそらく、雫は綺麗な顔だけを引き継いだのだろう。

「ええ、中学生の時と変わらず元気にしてるわ」

「中学生の時ねえ…懐かしいわね。あなたたち二人はいつも一緒にいたわよね」

「そうかしら？」

脱いだ靴を綺麗に揃えると、静香（母）に続いてリビングに向かう。

「いつも『雫ちゃん、雫ちゃん』って学年も違うのに教室に会いに来てくれるって言うてたじゃないの。」

二人は話ながら静香（母）は台所に、雫は机に向かった。

「はい、どつぞ」

食事はもう出来ていたのか、温められたシチューが置かれた。

「ありがとう」

雫は両手を合わせて「頂きます」と言う。

「召し上げれ」

そんな雫を静香（母）はずっと見ていたが、「ふふっ」「っ」と笑うと近くにあるソファーに移動した。

『はい、明日の天気は』とテレビから聞こえてきた。いつもの男のニュースキャスターがあまり当たらない天気予報を出しているところだった。

「……………」

（これあまり当たらないから、信用出来ないのよね…今日だって）

昨日の天気予報では『明日は夕方から夜にかけてにわか雨が降るでしょう。なので、折りたたみ傘を忘れずに持っていきましょう』と

言っていたが、夕方は晴れていた。そして、夜の今もまだ降っていない。雫は念のために折りたたみ傘を鞆に入れていたので、いつもより重さは倍増しとても重かった。

教科書が沢山入っている鞆や生徒会の仕事で凝った肩を回すとコキコキと音がなった。

(…マツサージ椅子が欲しいわね)と思いながら、食べ終わった食器を持ち運び易いように重ねる。

「ご馳走様でした」

ソファアに座っている母静香に感謝の言葉を言った。

それに気付いた静香(母)は立ち上がり「あら、片付けはお母さんがやるからいいわよ?」と食器を片付けようとしている雫に言った。

「自分で片付けるからいいわ」

「そお?」と言ってまたソファアに座る。

食器を台所に持っていくとそこにはまだ洗っていない食器がぼつぼつと置いてあった。どうやらある程度まで溜まったら洗うことになっているらしい。

「片付けるついでに食器洗っちゃわね」

「えっ?悪いからいいわよ」お母さんが後で洗っとくから」

この台所はコの字のような型をしているので、リビングからはほんの少しだが遠い。なので、静香(母)は大きめな声で叫んだ。

「別に気にしないで。ついでよついで」

雫は制服が洗剤やらで汚れてしまわないように、棚にかけてあったエプロンを手に取った。

エプロンを着け終わると、スポンジに洗剤を浸けて、馴れた手付きで食器をシャカシャカと洗っていく。

「雫ちゃん、本当に助かるわ。いつも手伝ってくれてありがとね」
ソファーからリビングに移動してきた静香（母）が御礼を言った。

「ふふ、助けになって良かったわ」

「もう雫ちゃんを嫁に貰う子は幸せ者ね。こんなに美人で炊事洗濯も何もかも出来るのよ？お母さんホント嬉しいわ」

「そう言ってくれれば嬉しいわね」

そうこう話している間に食器洗いは全部片付いた。

雫は洗っている途中に飛んでしまった泡やら水を濡らした台布巾で台所を拭く。そして、台布巾を水で綺麗に洗い流した。その流れで手も洗う。

（これで全部終わったかしら）

雫は辺りを見渡す。うん、綺麗だ。

もう洗う物はないので、エプロンを外して棚にかける。

「じゃあ、もう終わったから部屋に行くわね」

食器を洗い始めて5分。山のようにあった様々な汚れ物は綺麗に片付いた。

「相変わらず早いわね」と驚きの声上がる。

「馴れかしら？」と言って雫はリビングを出て、自分の部屋のある二階に上がっていく。

電気を付けて机の上を見るとそこにはいつも通りの体制でぬいぐるみ 通称、臍物アニマルの『カンデンヤマネコ』が座っていた。急に「お帰りなさいませ、雫様」と声がどこから響く。

雫は声の発生源のカンデンヤマネコを見て、「ただいま」と言った。そう、これが雫のメツセンジャー『カンデンヤマネコ』だ。彼女なのか彼なのか分からないが雫のことを様付で読んでいる。始めて口をきくようになった時に質問したことがあったのだが、「私は周りのぬいぐるみと違うので」と言ってきた。雫としてはまだ会ったばかりだったので「どう違うのかしら？」ってというのが疑問だった。今になっては臍物アニマルにも個性があると分かっている。この子に関しては、分からないことがあると「私にも分からないことはありませんわ」とすぐ言う。質問するとほぼそれで返された。

「今日、二人も新しいケンプファーに会ったわ。何か情報は入っていないかしら？」

カンデンヤマネコは「…入っていませんですわ」と少し間があってから答えた。

雫はぬいぐるみをつかんで「本当に？」と聞いた。

「私にも分からないことはありませんわ」

カンデンヤマネコからいつも通りの返しが来た。

(やっぱり、本人に聞くしかないわね…)

雫はこの二年間ずっと戦う理由を探しているのだが全然見つからなかった。今まで倒して来た人たちにも聞いたのだが、皆同じように

「知らない」と言った。

「答えが出ないのは、キツイわね…」

「宿題が出来ないんですの？」

雫はカンデンヤマネコを掴むといつも通り押し入れにしまった。

「少し状況を変えてみようかしら…」

4人に見付かった南春佳という存在もどうかしないといけないが、変身すると男から女に変わるケンプファーが同時に二人現れたことは前代未聞なのだ。

(…良い案が浮かんだわ)

雫は妖艶に微笑むと自分の部屋にあるパソコンの電源を入れた

*

キーンコーンカーンコーン

本令…いわゆる遅刻まで残り10分の予令の鐘が鳴る。

(よっしゃ！間に合ったっ…)

校門を走り抜けたときの気分は長距離走でゴールテープを切った時みたいな感じだった。

まあ、実際にまた寝坊して家から学校着くまで全力疾走したんだけどね。

それも起きたというか起こされた時間は、あと10分で遅刻というギリギリの時間だった。

(なんか…間に合ったのが奇跡だな…)

「はあ、はあ…んっ……」

流石に二日連続で遅刻するわけにいかないの、春佳はまた走ることにしたわけだが

(昨日のルートを通らないで学校に行くのは…)

「無理だろ…気付けよ…俺」

そう、遅刻寸前でやばかったのだが朝また女の姿になっていた。ジウサツイタチの話によると俺がうつすらと目覚めた時に変身したとのことだった。

これにはデジャヴをマジで感じた。何とか元に戻してもらい、登校するときは違うルートを通って学校に来た。

(くそっ…殴られたみぞおちがまだいてえな)

「…帰ったらクロス」と誓いの言葉を忘れないように口に出して言った。

携帯で時間を見ると残り8分

歩いて行っても何とか間に合う時間だ。

(走って疲れたし、飲み物買ってから行くか)

春佳は息もだいぶ落ち着いてきたので、下駄箱に向かう。

下駄箱を開けると一枚の紙が入っていた。それを取って読む。

「ん？『生徒会室に来て 雫』だ？」

見た感じそれはラブレターには見えない。「なら雫先輩の殺害予告か何かだろう」というのが春佳の見解。

「よし…」

(これは見なかったことにして、さっさと教室に行くか)
先程自動販売機で買った缶の蓋をプシュッと開けると春佳は二階への階段に向かった。

ガシッ

「ん？何で前に進めないんだ…って…何この状況っ!？」

春佳は突然現れた男二人組に両腕をがちりロックされた。そのまま進みたい方向とは逆に引きずられいく。

「なに、なに!？」とパニックしていると窓からチラッと図書館が見えた。

「お前らまさか…」

男たちの腕を見るとそこには『生徒会委員 執行部』と書かれたテープを付けていた。

男たちは「執行部って何だよ！俺が何かしたか!？」という春佳の質問には答えず黙々と目的地に向かっていく。

キーンコーンコーンコーン

本令の鐘の音が校内に鳴り響いた。

(ああ…終わった…今日も遅刻くだ)

急に男たちは歩くのをやめた。

どうやらもつ着いたらしい。

ドサッ

「…もう少し慎重に扱ってくれ」という懇願も無念に生徒会のドアの前に落とされる。

「流石にウゼえんだけど…あんたら何様だよ」

相手はラグビー部に所属しているのではないか、というぐらいがっかりした体格をしているが男にはやらねばいかぬときあるって言うじゃないか。俺は負けると分かっているってやってやるぞ！

「南君、中に入りなさい」

「へ？」

「執行部は帰っていいわよ」

「はっ」「はっ」

執行部の二人は足の踵を揃えると敬礼した。そのまま背を向けて階段を降りていく。

（ここは兵隊の養成所かよってね…）

「そこですっと立っていたって何も変わらないわよ」

「はいはい、入りますとも」

ドアを開けて中に入ると雫はいつも通りに椅子に座っていた。

「あなたどこに行こうとしているの？」

はいっ

「生徒会室ですが……」

「嘘ね。教室に行こうとしていたわ」

「……………」

(どこで見ていたんだし……)

「いいえ、見てないわよ。ただ教室に行こうとしていたら、南君を連れて来てって言っただけよ」

(用意周到じゃないですか……ていうか、俺の行動バレバレじゃん)

「それより南君？私の書いた手紙は見たわよね？」

「……紙なんか見てないでよ」

「南君、言葉使い変わってるわよ。それでは坂本龍馬だわ」

普通ここで「何で知ってたんだし。仁でも見てたん？」という返しが出るのだが、雫の目付きやら雰囲気やらでそんな言葉は口が裂けても言える状況ではなかった。

(ヤバイヤバイヤバイ……めっちゃ睨んどるよ……めっさ怖いよ……ホント今すぐ帰りたいよ)

「……は、はは？」

とりあえず、場を取り繕うために笑う。たぶん笑えてない。笑おうとしているのだが、顔の筋肉が言うことを聞いてくれない…気持ちより、やはり身体は正直者らしい。

(ていうか、恐怖の大連鎖並みに次は汗が出てきたよ…)

「…それで考えを隠してるつもり？むしろ、丸わかりよ？」

「そ、そんなことより話ってなんだよ。用がないならもう行くぞ。こちら先輩のせいでまた遅刻したんだよ」と息継ぎ無しに一気に話した。そのせいで息使いが荒くなる。

雫はそんな春佳の心情をさしてか、少しの間を置いてからこう言った。

「あなた女子部に入りなさい」

「……………」

(こいつ悪魔だ…デビル雫だ…一瞬でも意外と優しいのかもと思つた俺が間違いでしたよ)

「何か不満かしら？」

「いや、不満じゃなくて…おかしいだろそれ」

雫は「そうかしら？」と言ったあとにニヤッと何が楽しいのか笑った。

「何が楽しいんだよ？」

「これからの南君のことを考えるとね」

「何企んでんだ？」

「いいえ、企んでなんかいないわ。酷いこと言うのね」

「私、傷付いたわ」と言い終わった後に付けたした。

「どこがだよっ！鉄 いや、何でもない」

(これ以上言ったらいくら生徒会長の雫様でも“一応”女の子であるからして傷付くだろうから、やめとこう)

「うっ…」

また雫の目付きが悪くなった。もう身体に穴が空きそうだ。

「でも、俺を虐めるのが目的だとしても納得いかないんだけど…」

「…何であなたはすぐそういう方向に話が進むのかしら」

雫は春佳の見るのをやめた。

(あれ？なんか呆れられた気が…)

「あなたがいけないのよ？」

「…？」

「4人に見付かったって言ったでしょ？それが情報を揉み消す前に男子部で広がってしまったの」

「…俺のせいだから自業自得…だと？」

雫は「ええ」とだけ言うと、机の引き出しを引いて何かを出した。

「これがあなたのもう一つの学生証よ」

「……………」

学生証を受け取って中身を確認。写真はやはり変身後の物だった。何で！？というのが最初の感想だった。

だが、考えてみると一応女子部用のだから当たり前のことだ。

「…一応言いますが俺、男の子ですよ？忘れてませんか？」

「忘れてなんかいないわよ。あなたがいけないの」

「それはそうだけど…それはヤバいでしょ？」

男子禁制の女子部 桃源郷が頭の中に浮かぶ。

『あつこいつ、また胸大きくなった！？その胸揉ませろ』

『きゃっ…あ、だめ…やめてよ』

身体をなめ回すように手を動かす。

それを近くで見っていた友達も『いいな、私も入れてっ』と叫んで、中に加わる。

『もう！ まで加わらないですよ』との叫びも届かず、脱がされて

いく布たち…

「はあ、はあ…もう、だめ……」

腕で隠してはいるが、間に間からチラチラと恥ずかしさで朱に染まった肌が見える

「春佳の妄想修了」

「……………っ!？」

(…いかにいかに。つい想像してしまった。俺は何を)

「…あなたは何を考えているの?」

「あ、いや…何も」

雫はすごい目付きで睨んでくる。いつもの睨みなのだが、いつもよりキツイ気がした。

「…はい、ごめんなさい」

「分かればよろしい。じゃあ、今日からいらっしやい」

「え?早くない!？」

「俺の心の準備は!？」と叫んだが軽く無理された。雫様に罵られる会の会員なら嬉しいだろうが俺は会員でもないしマゾじゃない。だから文句を言ってやるうとすると、雫から意外な言葉が漏れた。

「…綺麗ね」

雫は俺の生徒証の写真を見ている。

(…俺のことを言ってるのか?)

「はい」と差し出された生徒証を受け取り、中を開ける。そこには変身した時の写真が貼ってあった。

(うん、ナルシストではないけど…やっぱり可愛いな……)

「って、これいつ撮ったん!？」

「それは内緒ね」

「てか、学年が3年ってどういうことやねん…それに雫先輩と同じクラスやし」

「あら、私のクラス知ってたのね」

「そりゃあ、有名人だからな」

「そっかしら?」

「そっだよ。うちのクラスにも信者が沢山いる」

雫は“信者”という言葉聞いて、眉をひそめた。

「私は神じゃないのに勝手に担ぎ上げられても困るわ」

「…まあ、有名税みたいなもんだべ」

雫はため息を一つつくと、あなたは担ぎ上げてないようねと言って

きた。

当たり前だろ。スタイル抜群で綺麗だと思うが、俺は信者ではない。

「南君、話方変わってるわよ」

「いやちょっと、テンパリ過ぎまして…」

とりあえず何て言えばいいのか分からないので「はは」と笑う。

「じゃあ、話はこれだけだから」

雫はもう帰っていいわよとばかりに机に置いてある資料に目を向ける。

「いや、まだ言いたいことがいっぱいあるんだけど…」

「これでいいかしら？」と雫の周りが一瞬光った。それに続くように春佳の腕輪も赤く光り始め、数秒後には全身を包んだ。春佳は自分の身体を眺めた。

(…うん、女だね……)

「ってちがーう！っておい、どこに行くんだよ」

「一時間目はあなたのせいで参加出来なかったから、二時間目からは参加するのよ」

「流石、優等生」

ふむふむと納得する春佳。

「これから私たちは教室に向かうけれど　話方、気を付けてね」

「わ、分かった」

そう、変身した時に声も男の低い声から女の高い声に変わるのだが、喋るのは男なのでどうしても雑な言葉使いになる。雫はそれを言いたいのだろう。

「じゃあ、行くわよ。途中で逃げようなんて思わないことね」

ギクッ

どうやらこれからしようとしていたことはバレバレらしい。

（はあ、誰か助けて……）

春佳は女子部という未知の領域に向かっていく。階段を登る度に嬉しさが募るのではなく、何故か反対に不安が募っていくばかりだった

五章『三年一組』（後書き）

やっぱり、原作【三章】より文が長くなりそうです；；I A
なので 原作【三章】を当初の予定していた二分割から三分割にする
ことにしました。

なので序盤が『捜し人』、中盤は『三年一組』んで、ラストは『デ
ート（仮）』です。

これから春佳はどうなるんでしょうか…

第六章 『デート?』

「なあ、何で俺の名前変えたんだ？」

春佳と隼は三年一組の教室に向かっている。

「教室に着く前にあなたの名前を確認しておきなさい」と言われたので、春佳は新しく貰った生徒証を開けた。そこには『三年一組24番 南遥華』と書いてある。読み方が一緒なのだが字が全然違ったのだ。

「ん〜…」

「あら、南春佳（ ）が良かったかしら？」

「いや、それはないだろ…でも」

（遥華っていう漢字がな〜覚えられるかな？）

もし間違っって提出プリントに“南春佳”なんて書いてしまったら、バレルことはないだろうが「何で自分の名前を間違えたの?」ってなるはずだ。普通の高校生なら間違えるはずはない。

「漢字が難しかった？」

「…まあ、そんなとこ」

（…あ、考えごととして言っちゃまった…）

「って言うのは冗談で、プリントで名前間違えたらやばいなって」

と付けたして誤解を解きに入るが雫の表情からしてたぶんバレてる。でも、後半も確かなことで「絶対そんなへマはしない」とは言い切れないのだ。

「間違えなければいいことよ」

「そんな簡単に言われてもなあ」

（俺は雫先輩みたいに何でもこなせるタイプじゃないしな）

得意なことは何ですか？と訊かれたら、すぐ「運動ですっ！」って答えられる自信はある。でも、それとこれとは別。

何階か階段を上ったあたりで「そろそろ着くわよ」と雫が言ってきた。

（うつし！悩んでもしやーなしや。何とか乗り気つてやる）という気合いも自己紹介が始まると数秒も持たずに崩れ去った。

「あゝお前らは知らないだろうが南遥華さんは二年生の時に転校してきたんだが、その後体調を崩してな。三年の今になって来れるようになったんだ。だから、珍獣ハンター トみたいな勢いでハン トしないようにな」

担任が大まかに家庭の事情を説明した。

最後まで聞くと、なんか変わってる先生なのか？と思ったが気のせいだろう。

（それにしても、そういう理由できたか？何も説明しなかったから、どうしようか迷ったけど心配いらなかったらいいな）

「…えっと、始めまして…かな？ 南遥華です よろしく。あ、お願いします……」

「……………」

自己紹介が終わったので、何か質問が飛んでくると践んで身構える
遥華いや、春佳。だが、飛んでくるのは沈黙というプレッシャーだ
けだった。

「っ…っら…」

(な…なんだ、この沈黙は……転校生って辛すぎだろ)

春佳は率直な感想を漏らした。

しばらく沈黙が続いたと思うと、どこからか「美味しそうね」と聞
こえてきた。

「…!？」

(美味しそうってなんだよ!?!…俺の聞き間違えだよな!?)
どこかから聞こえてきた言葉に恐怖する。

「えと、何か質問とか…あつたら……どうぞ」

春佳は沈黙の打開策を打ち出した。

「…いいかしら?」と後ろの方で手が上がった。

「…どうぞ」

(っつて、お前かよ!)と手を上げた三郷雫にツッコミを入れたくな
ったが、あまり目立ちたくはないので心の中でツッコミを入れた。
ここは我慢するしかない。

「南さんは付き合っている人はいるの？」

「……………は？」

急というか、場違いな質問に驚く春佳。周りも雫がそんなことを質問するとは思っていなかったらしく、雫の方を見てポカンとしている。

「…い、いない……………です」

周りも一斉にこちらを向いてきた。所々で「え？何だつて？」とこそそ話をしているのが見て取れる。

(…しまったー！つつい、反射的に答えてしまった…)

あまりの恥ずかしさに顔に血液が上がるのが分かる。まさに『穴があつたら入りたい』という言葉通りだ。

(それもこれも)

春佳は事の元凶の雫を睨んだ。だが、当の本人は全く動じていない。むしろ頬を赤らめている春佳を見て楽しんでるよいにさえ見える。担任は腕時計で時間を確認すると「時間が時間だから、次の質問で終わりね」とこれからやる授業の準備をしながら、皆に聞こえるような大きさを言った。

ザッザザ

先生が言い終わったとたん、全員が一斉に手を上げた。

「…先生。これはどうしたら……………」

担任に助けを求めた。

「じゃあ、休み時間や放課後にでも南さんに訊きなさい」と言っ
話を切った。

「……………」

(先生…それ、全然助け船になってないです……………)
春佳のそんな心の叫びは担任の教師に届くわけはなく、無情に「席
はあそこね」と栗の隣の机を指さすだけだった

*

「ふああ…眠い……………」

眠すぎる午前の授業が終わり、今は昼休みだ。

(さあ、何食べようかな…売店でも行くか)

昼飯を買いに行こうと席を立つと走って近付いて来るやつがいた。

「おい、瀬能！なんか女子部に可愛い子が復学したらしいぞ！」

走ってきたせいなのか、興奮しているせいなのか、妙に息が粗い。
まあ、東田のことだから後者だろう。

「へえーそうなんだ。どんな子なんだ？」

「…お前はホント沙倉さんの情報以外は反応薄いよな」

「当たり前だ！俺は沙倉さん一筋だからな」

「……………」

東田が痛い子でも見たかのような哀しい顔をした。

(おい、何だよ。その可哀想な顔は…お前の方が可哀想な奴だよ)

「それで?どんな子なんだよ」

「何か三年生らしいんだが、金髪で顔はハーフっぽいらしいぞ!」

「らしい””ってことは、アレからの情報なのか?」

東田は「ああ。三年のメンバーからの情報だから、確かだ」と胸を張って断言した。

アレっていうのは、東田が会長を務めている星鐵学院美少女研究会のことだ。正式に公認されることのないこの部活は、今もアンダーグラウンドな活動をしている。

「ふう〜ん。でも、写真とかないの?言葉だけじゃイメージしづらい」

「…なんだ?興味でも湧いたか?」

「うるせえ。そりゃあ、男なら可愛いと聞いたら顔ぐらい拝みたいだろ」

「まあ、そうだな。だが、もう少し待ってくれ。俺もこれから動く予定だが、写真の受け渡しは明日だ」

「明日?遅くないか?」

「ああ。俺も遅いと思って色々調べたんだが、どうやら票様が近く

にいるせいでなかなか撮れないらしいんだ」

(ん？今、“雫様”って言ったか？もしかして…こいつは三郷雫様に罵られる会にも所属してんのか？)

「…会長が妨害してるってことか？」

「なんかそうらしい」

ナツルは「なんで？」と東田に質問する。

東田は「ん〜…」と唸ったあと、口を開いた。

「確かな情報じゃないが、その子があの副会長になるんじゃないのかって噂が流れてる」

「マジか…」

副会長ってというのは、生徒会長の補佐役のことだ。今はないらしい。

少し前まではいたらしいのだが、今の会長 三郷雫になってから、彼女の補佐を続けることが出来なくなつて副会長は着任して一週間ぐらいで辞めていくという呪いにも似たことが起きているらしいのだ。

「まあ、それはさて置き…俺はこれからその子を拝みに行く。瀬能も来るか？」

「俺はお前が撮ってきた写真で顔を拝見するわ」

「付き合いわりいなあ〜まあいい。行ってくるわ」

「あいよ」

「会長が近くにいたんだったら、写真なんか無理に決まってんじゃないか」というナツルの呟きは東田には届くわけはなかった。

「あいつ、こういう時だけ足早いよな…」

教室のドアからから少し顔を出して、東田が向かっていった方向を見るがもう姿は見えなかった。

「まあ、いいや。今日は春佳も来てないし、パンでも適当に買って食うか」

そんなこんなでパンを食べて眠いからまた寝て、昼休みは終わった。午後の授業はその延長で爆睡した。

先生に怒られては起きて、少し経ったらまた寝てを繰り返して今に到る。

（よし、さっさと帰ってハラキリをどつくとするか…）

「瀬能！」

名前を呼ばれたので、振り返るとそこにはいつの間にか帰って来たのか東田がいた。

「なんだよ早いな。一緒に帰ろうぜ」

「用があるんだよ」

「そう冷たくすんなよ。買い物に付き合え」

「またどうせ写真関係なんだろう？」

「ああ。さっきの三年の娘と、昨日見つけた星鐵学院の可愛い娘の準備は万全にしとかねえと」

「ん？さっき撮りにいったんじゃなかったか？」

「いやな、今日は先生にガツチリマークされてて行くに行けなかったんだ……」

東田は残念そうに悔しがっているが、実際こいつがやるうとしていることは盗撮だ。だから、逆に出来なくて良かったんじゃないかと思う。もし見つかったら休学もいいところだ。

「あつそ。んじゃ、俺帰るわ」

「つか、昨日見つけた子なんだけどな、無口で無愛想なんだけどな。すげー可愛いのに強いんだぜ？ナンパしてきたやつらを、脅かして追っ払ったんだからな」

「どうでもいいじゃねえか」

「馬鹿か、その強気な所が良いんだよ。ホント罵ってもらいたい……」

「……………」

(こいつの性癖に口出しする気はないけど、その表情ヤバイから早く元に戻せ。つか、その女の子俺だから)

東田に色々言ってるやうだが、昨日のことをバレたくはないので我慢。

東田の話しに付き合う気はないので、ナツルはさっさと歩き出した。後ろから「おいっ、まだ話は終わってない」と聞こえた気がするが俺の中では終わりましたと。教室を出ようとしたら、女の子とぶつかりそうになった。

「きゃっ……」

「うわっ、ごめん」

(ん？女の子？ 誰だろう…)と疑問に思ったが彼女の顔を見るとすぐに分かった。

「あの……」

そこにはうつむき加減で弱々しい声で話す普段の紅音がいた。

「あれ、また俺に用？」

東田の「誰々？」という疑問が後ろから飛んで来るが無視。

「はい……」

「なに？」

紅音は「えっとですね…会ってもらいたい人が……」と言って、ナツルの前からすっと退いた。

「ナツルさん」

なんと紅音が会わせたいと言った人は沙倉楓だった。

(昨日から立て続けに出会っているが、うん　美人と何回あつてもありがたみは薄れんな)

「お……おい……」

後ろを振り向くと東田は仰天していた。まあ、当たり前と言えは当たり前。かの沙倉楓が瀬能ナツルという平均男子を訪ねて来たのだから。

(うん、自分で言っても辛いもんは辛いな…)

「なんで、あの人が…」

東田が見ている方向　つまり、楓の後方を見た。

ナツルも東田同様「なんでっ!？」と驚愕した。

そこにいたのは星鐵学院の生徒会長にして天才三年生、三郷雫だった。昼休みに彼女の話をも東田としたが、実際に会うのは始めてだ。

噂通りの完璧少女。モデルのような体型と美貌。洗練された物腰。

抜群の頭の切れと運動神経。入試では全教科満点を叩き出して教師たちを驚かした。そして、入学するなり生徒会長の座を勝ち取りこの学校を大きく変えた。だが、石頭とか頑固者だとかではなく、生徒の権利だけは身を挺して守る。なので生徒からは多大な人望を教師からは一歩置かれるという今の状況を作り出した、パーフェクトガールだ。

よく状況が分からないので、小声で紅音に話かける。

「これは、どういうこと？」

「なんか、男子部に用があるみたいなんです。ついでに一緒に来てくれて言われちゃって、ナツルさんのクラスに…」

紅音も理由は聞かされてないのか、いつも以上に戸惑っている。

「え…どうして……？」

後ろにいる東田が言葉を搾り出すようにゆっくりとまた疑問を發した。それには同感した。彼女の役目柄、男子部にも結構顔を出す。但し余計な会話は一切しないというか、させないのだ。必要なことだけを伝え、用が終わったらぱっと帰る。しかもその間、相手に話をさせるような隙を与えないらしい。なので、「三郷雫と世間話が出来れば寿命が延びる」という噂も流れている。

「えー…あのー……」

雫と目があってしまったので、とりあえず話かける。

「……………」

話かけるが返事は返ってこない。

ただ雫は感慨もない目付きで、ナツルのことを眺めている。

後ろでは東田が「カメラカメラ」と呟きながら離れていった。

(クソ…俺も出来ることなら、今すぐここを離脱したい…)

だが、心で叫んでも何も変わらないのでこちらから来た理由を訊く。

「なんの用でしょう？」

ナツルが質問している間に周りがざわざわし始めた。「なんでツートップが!？」と叫んだやつもいた。そんな周りが気になったのか紅音はキョロキョロし始めた。

そんな中、ついに雫が口を開けた。

「聞きたいことがあるから、ついて来て」

どうやら周りがるさいせいか場所を移したらしい。ナツルはそんな栗の意見に反対するわけもなく「はい」とだけ言うと先に歩きだした栗について行った

*

「ねえねえ、南さんってハーフっぽいけど、どことどこのハーフなの？」

「そんなことより、お家どこら辺？今度遊ばない!？」

「ちょっと、どいてよー」

「携帯のメアドは？」

などと午後の授業のチャイムになるとバーゲンセールで良く見られる安物の奪い合いをするおばちゃん並みの勢いで、春佳の周りにクラスメイトが集まってきた。

（なんだなんだ!？）と驚いている間に周りを囲まれて逃げ道をカットされた。

「えっ!?!?...え!?!」

女の子たちはシャーペンとメモを片手に目を血走らせて、ジリジリと近付いてくる。

（く、来るな...それに逃げ道が）

春佳は昔見たあるテレビ番組を思い出していた。

『兎は恐がりなので、基本追いかけたら逃げます。なので、逃げ出した場合は周りを囲んで逃げ道を無くし、ゆっくりと追い詰めましよう』

それを聞いた時は「スゲー！簡単に捕まったよ」なんて感動していたが、今思うとなんと恐ろしいことをしていたんだろう。

俺は兎ではないが、兎がおとなしく捕まったのも何となく分かる気がする。なんていうか、周りを囲まれて上から見下ろされるこの怖さといったらハンパじゃない。

(…し、栗先輩はどこだ?)

春佳は栗にこの周りの女子を何とかしてもらったため、隣の栗の席に顔を向ける。

「…っ!?!」

時、既に遅し。

この言葉通り栗の姿はなかった。あるのは鞆だけ。

(鞆じゃ助けになんねえんだよっ!)

唯一の救世主こと栗がいないことに驚愕していると顔のすぐ近くから、気配を感じた。

「ねえ、話聞いている?」

その気配の主は後ろから抱き付いてきた。

「…っ!?!」

(っ…ひい!?なんかやわらかいのが背かに!?)

いきなり背かにやわらかい感触を感じビクツとする春佳。そんな反応をした春佳を可愛いく思ったのか、さっきより割増でぐりぐりと

押し付けてくる。

「あ、ずるいー」と周りからブーイングの嵐だが、彼女は抱きつきをやめなかった。

「あの…せん」

先輩と呼びそうになり急いで口を紡ぐ。

「…違うわよ、私は千紗。“せん”って呼んじゃだめっ」

「あ、ごめんなさい…」

(別に名前呼んだわけじゃないんだけどな…)
自分のことを千紗と呼ぶ彼女は

ふわふわとした話し方をするが未だに抱き付いていられるというこ
とは、かなり気も強いのだろう。俺だったらこんな周りに敵意
ある目で見られたら3秒で離しますよ。因みに3秒というのは、い
わゆる男の意地だ。とても、小さいが。

そんな春佳と千紗のスキんシップの長さに痺れを切らしたのが、一
人の女子生徒が引き剥がしに入ってくる。

「ちょっと、一人だけズルいわよ！私にもさせてよ」

「え？」

(「私にもさせてよ」ってこの人を止めるために引き剥がすんじゃない
なくて、自分が次にやりたいからやるの？)

「あ、待って！だったら、私もやりたい」

どこからかそんな言葉が飛んで来た。

「……………」

(なんなんだ…このクラスは……さっきまであんなに大人しかったのに)

クラスのあまりの変貌具合に驚いていると、閉めきられていた教室のドアが開かれた。

「千紗、話してあげて。南さんは話があるからついて来て」

ドアを開けて入ってきたのは、救世主 三郷雫だった。

千紗も雫の登場に流石に諦めたのか首に回していた腕を離してくれた。

春佳は「あ、はい」と言うと背を向けて歩き出した雫の後を追って教室を出る。

「なあ、今まで何処に行ってたんだ？」

「ちょっとした用事でね」

「用事って？」と訊こうとすると、「…話仕方」と注意される。

「これから生徒会室に行くのよ」

「仕事？だった…でしたら私は帰りますけど」

(うげっ！…流石に姿は女だけど、中が男だからこの話し方は気色悪いな……………)

「いいえ。あなたに書いてもらいたい紙があるの」

春佳は雫に言われた言葉を頭の中で再生した。

(……………うん、)

「……………遺書か…なんて書くのかな」

「どっしらそんなに話が湾曲するのかしらね…」

春佳の馬鹿さ加減に呆れたのが、声のトーンがいつもより低い。

「…え？違うのか？」

「違うわよ。」

春佳は生徒会室に入るなり一枚の紙を渡された。

そこには『私は生徒会副会長に立候補します』と書いてあった。そして下には、『推薦者 三郷雫』と記入してある。

「なんで俺が生徒会に入んなきゃいけないの？」

「同じ赤のケンプファーだから。って言えば私が考えてること伝えるかしら？」

「……………」

(うーむ、確かに仲間は近くにいた方が助かるかもな…特に俺に関しては…)

雫は「どうするの？」と返答を求めてきた。

「まあ、敵がいつ来るか分からないからな」

春佳は受け取った紙に自分の名前を書き、雫に渡した。

「本当に“これで”いいのね？」

雫は紙を見ながら「これでいいのね？」と春佳に再確認する。

「ああ。仲間だからな」

雫は「へえ、そう」と言っつて紙を机の中にしまった。

(ん？なんで再確認なんかしたんだ？)

「あ、それと明日の放課後は空けといて」

「え？」

「授業が終わったら、ここに来て」

「もう雑用か？」

「来ればわかるわ」

そう言っつと雫はさっさと生徒会室から出ていった。もう用は終わったから帰るわねとでも言いたいのだろう。

春佳は雫が言っつた意味が分からず立ち尽くす。

「おい…それっつて」

頭の中でさっきの会話が再生される。

『明日の放課後は空けといて』

『え？』

『来ればわかるわ』

(これはどう考えても…アレしかない。でも、そついう感じで誘われたわけではない気がする…)

「これは…デートなのか？」

*

「……ナツルさん」

楓は改まった。ナツルもそれに吊られて丁寧語になる。

「はい」

「あの…わたし、気になる人がいるんです」

ぴん、ときた。

紅音は気を利かせて教室から出ていき、残った女の子は顔を赤らめる。これはもう告白しかない。

(…ついに俺に春が来たのか!?)

「昨日もその人に会ったんです。なんか…忘れられなくなっちゃって……」

目を見れないのか楓は俯き加減に話している。ナツルの方はというと、嬉しさのあまり顔がほころびそうになるのを抑えるのに必死だった。

喜ぶなど言われたってこればかりは無理だ。校内二代美女の一人が、俺に告白しようというのだ。ハッキリ言ってこれ以上の幸せは無いだろう。あるとしたら、付き合ったあとの話だ。

「それですね、その…」

楓は言葉を搾り出すようにぼつぼつと話す。

（大丈夫ですよ、沙倉さん。俺の答えはもう決まっていますから）

「ナツルさん知らないかなって…」

「ん？」

「あの人……」

「は？」

「あの女の人…」

どういうことだ？と混乱していると、楓は身を乗り出しながら言った。

「あたしを助けてくれた格好いい女の人、ナツルさん知りませんか！？」

ガッシャーン

心の中で何かが崩れる音が聞こえた。
とりあえず、無視も出来ないので返事をする。

「お…女の人って、もしかしてあの乱暴者……」

「違います。すごく乱暴な人に銃を向けられたんですけど、助けてくれた人がいるんです」

「は!?!」

「素敵な人なんです。無口だけど格好よくて」

「そ…それって……」

頭は混乱しすぎてオーバーヒートする寸前だった。
(紅音じゃないなら、もう一人しかいないじゃん……)

「わたしはその人が……ナツルさん、紹介して!」

楓は目を輝かせている。対照的にナツルはカウンターをくらいダウン寸前だった。

「…っ…っん……」

*

「あはっはっはっは」

「笑いすぎだ、馬鹿……」

ぬいぐるみのくせに腹を抑えて笑いこけているジユウサツイタチを睨んだ。

「それは春佳さんの思い過ごしですよ。というより、そんなことがあるとお思いで？」

「…ないと思う……」

「なら完璧思い過ごしですよ」

ぬいぐるみに全否定されてしまった。悔しいがそれも本当のことなので、文句の言いようがない。

それより、なんでこんなに馬鹿にされているかというところ…放課後等に言われたことをジユウサツイタチに話したことが始まりだった。

最初は「静かに聞いているな…」と思ったのだが、実際は「笑いそうになるのを必死我慢していました」とのこと。ホントむかつく奴だ。

んで、今にいたり「そんなことはありません」とばかりに全否定された。

「はあ…お前がただのぬいぐるみだったら、今頃惨殺死体をゴミ箱で母さんが発見してるところだよ」

「はっはっは。ただのぬいぐるみじゃなくて良かったです」

「はいはい」

(あ、そういえば…)

「言う必要はないと思って言わなかったことがあるんだけど、いつ

か雫先輩がうちに来るらしいから」

「……………はい?…」

「だから、いつか雫先輩がうちに来るらしいから」

「……………」

(何となくだが空気が重くなった気がする…)

急に無口になったジユウサツイタチをじっと見るがぴくりとも動かない。

「まあ、いいや」

壁にかけてある時計を見ると

1時15分を針がさしていた。

(もうこんな時間か…寝なきゃな)

「じゃあ、もう寝るから電機消わ」

「……………」

ジユウサツイタチから何も返事が帰ってこない。

(…もう寝たのか?それより、こいつは睡眠とか取るんだ…)

そんな疑問が頭の中でぐるぐると回るが睡魔には勝てなかった

*

「遅いわね…」

雫は左手を裏返して時計を見た。15時40分。授業はとつくに終わって大半の生徒は下校中の時間だ。

もう来ていてもいい時間なのに春佳はまだ来ていない。

(ホームルームが長引いているのかしら…)
ガラスとドアの開く音が部屋に響いた。

「すみません！遅れましたっ」

「女性を待たせるなんて最低なことよ…と言いたいところだけどそこまで鬼じゃないわ」

「ホントに、すみません！」

春佳は平謝りを繰り返している。

「……………」

気になったので「ホームルーム？」と原因を訊いてみた。

「…あ、いや…その」

「違うの？」

「えーっと…寝坊しちゃって…」

「授業中寝るのは良くないわね。夜更かしも程々にしなさい」

春佳は「いや〜」と言って苦笑いをした。

「まさか、学校自体に来てないとか言わないわよね？」

「あ、あははー……」

「…気を付けなさいよ。仮にも副会長で成績だってそんなに良くないのだから」

「あーい……すいませーん……」

(まあ、説教はこのぐらいでいいかしら。そろそろだろっし……)

雫は「さあ、行くわよ」と告げると生徒会室のドアを開けて、歩き出した。

春佳は雫の後を歩きながら、どこに行くのか訊いてきた。

「敵のケンプファーのところよ」

雫は簡潔に答える。

「ついに殴り込みに行くのか？」

「いいえ、殴り込みはしないわ。それに戦闘は極力、誰もいない時間にしたいわ」

「まあ、バレたらヤバそうだもんな……」

「それより」と春佳は付け足してきた。

「なに？」

「何か俺、魔法『ツアウバー』が使えるらしい」

「へえ、そうなの」

雫は急に歩くのを止めた。

(南くんの能力を見といた方がいいかしら…)

右腕に力を込めた。

雫の周りが一瞬だけ光る。

「ん？変身したのか？」

近くにケンプファーが出現すれば最初のうちは吊られて変身してしまふ　それが普通なのだが春佳は一向に変身しない。

「……………」

春佳をじっと見つめた。

当人は言いたいことが通じたのか、自分の右腕を指さした。

「これのこと？」

「…ええ」

「何か俺のは他のと少し勝手が違うみたいなんだよね。よく分からないけど」

「……………」

「だから、もう自分の意志で変身出来るし」

春佳の身体が赤く光り、輝きが収まる頃には女の姿に変わっていた。

「慣れると他のケンプファーの影響も受けないし、与えない」

「なんかスゴいよな…でも、俺のって不良品なのかな？」と春佳は自分の契約の腕輪をまじまじと見始めた。

そのころ隼は（なんてことなの…）と驚いていた。男が女の子に変身するってことが今まで無かったのに、大体同じタイミングに二人も現れた。それも片方は理由は分からないが“普通”ではない。

「やっぱり、近いうちにあたなの臍物アニマルに会わないといけないわね」

「ん？別にいいけど、急にはやめて下さいよ？」

「気を付けるわ。それで能力は？」

隼はまあ右腕に力を込めて変身を解いた。また目的地に向かって歩き出す。

「“光”を扱って言ってたかな？」

「使ったことは？」

「まだないかな。家で使って母さんにバレたらヤバいし…」

隼は「変身は解かなくていいわよ」と変身を解きたそうにしている春佳に言った。

「んまあ、別にいいけどさ…視線が……」

変身してそんなに経っていないのに周りが注目し始めた。

「もうそろそろ着くわよ」

「早いな…」

商店街を抜けて住宅地に入る。

少し歩いていると予想通り、ある二人を見つけた

*

「あ…あの、わざわざありがとうございます」

楓は緊張しているのか、声のキーがいつもより高い。

（おお、あの沙倉さんが緊張している）

「この前助けて頂いた、沙倉楓です。本当にありがとうございます
た」

「……………」

当然極力喋りたくないのに、無言でうなずいた。

（…これで伝わったかな？）

「わたしがナツルさんに、紹介して下さいってお願いしたんです。
ご迷惑じゃなかったでしょうか？」

「……………」

ナツルは首を横に振る。

「良かった……」

彼女は目に見えて安堵していた。うなずいたり首を横に振るだけのジエスチャーで気持ち伝わって良かったとナツルも安堵。楓はモジモジし始めた。

「あの……その……どこか……」

ここは歩道の真ん中である。どこかに行こうというのだろう。行くところは決めていないが無言で歩き出す。

楓もそのあとを着いてきて、二人で並んで歩いた。

(ど、どうしよう……)

自分は喋れないし、楓も緊張しているのかお互い無言のまましばらく歩いた。

やがて意を決したのか、彼女が質問してきた。

「すみません……お名前は……？」

うなずいたり首を横に振るとかのゼスチャーでは名前は伝えられないので、もごもごと名乗った。

「ナツル……」

(……あ、やってしまった!!!)

ナツルはついつい何も考えずに本名を名乗ってしまった。楓は当然驚いていた。

「ナツルさん……瀬能ナツルさんと同じ名前なんです。あの人もわたしの友達なんです」

友達と言われて少し嬉しいが、それより直で言われているのと同じなので少し照れくさくなる。

「ナツルさん、星鐵学院の二年生なんですか？」

楓は制服を見てそう言った。

「……………」

また無言のままうなずいた。

楓は嬉しそうに手を合わせると「あ、わたし二年一組なんです。同じですね」

(…まあ、“二年”だけど男子部の方ですけどね)
同じ学年だということが良かったのか、楓の緊張がかなりほぐれてきた。

「ナツルさんみたいな綺麗な人がいたなんて、知りませんでした。目立って大変そうですね」

「別に…」

別に沢 エリカ風に言いたかったとか、素っ気なさを装ってるわけではない。他に言い様がないのだ。

「ナツルさんって、無口なんですか？」

「……………」

「いえ、喋れないだけです」と言うわけにもいかないの、うまい言い訳を考えていると「そこもクールで格好いいです」と褒めてきた。

彼女はどうも自分のことを知ってもらいたいらしく、色々教えてくれたりと話役をやってくれている。

一方のナツルは話すことはないわけではないが、「これっきり会えな」と言うタイミングが分からない。

(どうしたものか…)

「それですね、わたし色々な人に臍物アニマルのぬいぐるみをおげているんです。栗ちゃんの誕生日のプレゼントにもしちゃいました」

考え事をしている間に臍物アニマルの話になったのか、彼女はすごく楽しそうに話していた。

「……………」

「生徒会長の三郷栗ちゃんです」

「ふん…」

生徒会長の三郷栗も臍物アニマルを持っていると言われて、どこかひっかかるものがあった。

原因が思い当たろうとした瞬間、前方から騒ぎが聞こえてきた。

「なにかしら？」

楓が首をかしげる。どうやらビルの陰で、罵り合いが起きている

ようであつた。

「 なんだと!?!この女! 」

キレた男が拳を振り上げて、女の子に殴りかかったが余裕でかわした。

余程力を入れていたのか、反動でこっちに向かってくる。

「 きゃっ
」

楓は驚いていたのか小さい悲鳴をあげた。

ナツルはそんな声を聞く前に身体が勝手に動いて、近づいて来た男を放り投げていた。

「 なんだあ!?!てめえも仲間か!?! 」

(いや、別に…) と思いながら、どこかで見たような男たちの後ろを見る。

「 うがあっ!?! 」

後ろの女の子を見ると同時に男は崩れ落ちた。

「 「……………」
」

ナツルも女の子も無言で見つめ合う。

どうやら男たちとケンカしていたのは紅音だった。

(いやーうちの猛犬女が申し訳ないです…) と思うが男たちは既に全員ノックアウトしていた。

また紅音を見る。すると、彼女はナツルと楓を交互に見たあと、小

さな声で「バーカバーカ」と呟くと身をひるがえして去っていった。

「行くっ…」

ここにいてもしょうがないので、楓にそう言った。

ところが楓は酒を飲んだみたいに赤く、ぼおっとしていた。

楓は「素敵…」と呟くと続けて話す。

「ナツルさん、格好いいです。乱暴な人やあの人まで退治するなんて…」

「……………」

(いや、退治ってどうか…一応味方だしな)
楓はナツルと紅音が仲間だってことは知らないわけで、ナツルが解決したように見えたらしい。

「…………さい」

小さい声でゴニョゴニョ言っているの、最後の方しか聞き取れなかった。

「…………？」

彼女は歩道の真ん中にもかかわらず、ナツルに身を寄せた。

(っ！？…こ、これはまさか…………)

「お願いです、わたしとデートして下さい…」

「…!?!?」

意外なほどの大声と内容に、ナツルは気を失いかけたのだった

*

(なんてこった…)

まさかの予想外の転回が起きた。

敵のケンプファーを発見したのはいいのだが、楓にデートに誘われていた。

「…予想通りね」

「え？今なんて？」

「予想通りと言ったの。さあ、もう用はないし帰るわよ」

言ってる意味がよく分からないので、雫な後を追いかける。

「いつ頃から予想してたんですか？」

「少し前ね。丁度あなたがわたしのクラスに入ったときかしら」

「…もしかして、少しの間放課後いなかったのは…」

「そう、その時に図書館での事を訊くついでに楓も連れて行ったの」

「……………」

(…すげえ、策士なこと……全部お見通しだったか?)

「そういつところね」

「だから、人の心を読むなって！」

そんな話をしながらしばらく雫について行くと、見覚えのあるとい
うか見馴れた風景が見えてきた。

「一応聞くけど、この辺にすんでるのか？」

「いいえ、全く逆方向よ」

（逆方向なのになんで、うちの方向に？）

「……………」

「ここまで来たついでに南くんのうちに行こうと思って」

「へえ、そうなんだ……つてええ！？」

（なんでうちの場所知ってただよ！？）と驚いている間に玄関の前
に着いてしまった。

「開けて」

雫はさも当然かのように春佳に命令した

第六章『デート?』（後書き）

これで一応、原作三章は終わります。

いやー長かったです。たぶん、原作より長いんじゃないかって思います…

それにしてもこの三部だけで結構なオリキャラというか想像キャラというか、たくさんできましたね（。 - - ）

これらのキャラはますみみたいな感じです。

毎回出てくるんじゃないって、時々出てくるみたいなの（笑）

まあ、少ししか出ていないのでは謎キャラです。

それより春佳の家に訪れた事…ホントどうなるんでしょうか……

七章 『尾行』

眩しさで目を開けると、天窓から見る空は透き通るぐらい綺麗な青だった。

「……………」

(……はあ……………真っ青だよ)

今の気持ち的には曇り空が良かったのだが、空はおもいつきし願いを裏切って快晴にしてきた。

今日は日曜日。時刻は9時8分。本当なら11時ぐらまで爆睡したいとこだが約束というより命令があるのでそもいかない。

なんで約束じゃなくて、命令なんて言い方をしたかという相手がああ生徒会長の三郷雫様だからだ。

命令内容は『私と一緒に敵の尾行をすること』

敵を尾行するのは別にいい。なんかドラマみたいでワクワクする。

だが、相手のケンプファーは沙倉さんとデートをするらしい。

敵だからまた戦うのか?と思ったが、雫は“尾行”と言っていたので戦う気はないのだろう。

ということは…当然映画を観たり水族館行ったりとデートっぽいことをするはずだ。

だから、その尾行⇨雫とデートという方程式が成り立ってしまうだろう。

雫とデートということだけは、正直嬉しい。だって、美人

でスタイル抜群の女の子となんだから当たり前だ。一生の運使ってもこんな奇跡はもう起こらないだろう。

しかし、問題は別にある。

三郷雫には色々なファンクラブがある。それを代表とするのが『三郷雫様に罵ってもらおう会』だ。

あいつらは基本、雫が

男子部に現れると彼女の周りをストーカー並にうるうるとする。それで雫を怒らせて罵ってもらおうとするのだ。これだけならまだ“只の変態”ぐらいなのだが、男子に対しては違う。雫に近付いて仲良くなるうとする奴は直ぐ消される。だから、デートなんかしたら見付かりしだい東京湾にコンクリで固められ生きたまま沈められるだろう。

(どうしよう…バツクレても命はないだろうな…)

「…憂鬱だ……」

「…その気持ち分かります」

声の発生源を見る。

そこにはいつもより元気のないジユウサツイタチがいた。

「ぬいぐるみでもそんな日あるのか？」

「ええ、ありますとも」

「なんか…お前って人間みたいだな」

「まあ姿はぬいぐるみですけど、中身は人間に似たようなものが入ってますからね」

「…心臓とかそっいう臓器もか？」

「も〜違いますよ、気持ちとかそっいうものことです」

「飽きれるくらい馬鹿ですわね」とジユウサツイタチはボソツと言っ。

「お前…聞こえてるぞ？」

「え？何がですか？」

「……まあ、いいや。追求する気にもならん」

「はい、追求しないで下さい。今はそんなテンションじゃないです……」

「「はあ……」「」

二人 いや、一人と一個は長いため息をついた。

春佳とジユウサツイタチのこの以上なほどのテンションの低さは、一般的に使われる“寝不足だから”という理由ではない。全ては昨日の夕方起こった出来事が原因だ。

遡ること17時間前。

「「……………」」

（ど、どうしよう…部屋とか朝のまんまだし、それに親とかいたら……）

春佳は雫の言うとおりに鍵を差し込んで開けたはいいが、よくよく考えると問題があり、今の“ドアノブを見つめて固まる”という状況になっている。

汗が額から頬へと流れ落ちる。

「どうしたの？」

「いや、部屋とか片付けてないから汚いなと…」

「そんなこと気にしないわよ。男の子なら普通でしょう」

(いや、そういう問題では…)

雫が納得するように説明しなければ恐らく彼女は家に入ろうとするだろう。どんな言い訳がいいかと考えていると後ろの方でガチャと何かが外れる音がした。

「おつかえりー」

「ぐはっ」

ガチャという音に反応して振り向いたはいいが、丁度抱きついてきた彼女のおでこが春佳の溝内にめり込んだ。

「今日は早く終わったから、もう帰ってきたよ」

「いってえ…タツクルは無しだって言ったやん」

「タツクルじゃないよ！抱きつきだよっ！」

「俺からしたらタツクルなんだって」

「酷い…。あなたをそんな子に育てた覚えは」

この子共のような体躯にほわほわとした話し方をする彼女は、南咲

希という。つまり、春佳の母だ。

だが外見で判断すると、どこからどうみても一児の親には見えない。むしろ、幼馴染みとかそういう感じに見える。または兄弟。でも一人っ子だからそれはない。あるとしたら隠し子だとか小さい頃に生き別れたとかそういう類いだ。

「……………」

雫も彼女に対してどういう部類に当てはめればいいのか迷っているらしく、二人には話しかけない。

「あれ？春佳の後ろにいる人は誰？」

咲希（母）は春佳から覗くように雫を見つめた。

「この人はうちの学校の」

「彼女さんね」

咲希（母）は春佳が言い終わる前に勝手に納得した。

それを聞いていた雫は彼女が春佳とどんな間柄なのか理解したのか、閉じていた口を開けた。

「こんばんは。私は」

雫は言い終わる前に春佳を見た。

（ん？俺も同意しろってことか？）

ほんの一瞬の出来事で意思疎通が謀れたのか分からないが、雫はコクリと頷いた。

（よし…分かった）

「そうなんです」

「だから、気にしないで」

咲希（母）はびっくりしたのか、口は動いているが言葉が出てこないらしい。

（って…あれ…？）

「」「」

三人の中に長い沈黙が訪れる。

「あの…」と沈黙を終わらしたのは咲希（母）だった。

「婚姻はいつに…」

（…はあ!?!）

確実に話が180°ずれた。

“彼女ではない”と言ったのに彼女のこの返しはおかしい。話が噛み合っていない感じがする。

「いやいや、ちょっと待って!?!どうしてその話に!?!」

「だって…お互いに付き合ってますって言った」

「俺は言っていないからね!」

「……………」

春佳は勘違いの発端であろう雫を見た。彼女は目が合つと「面白いわね」とでも言いたげに妖艶に微笑んだ。

「お、お前、冗談とか嘘はやめてくれ！」

「どうして？」

「この人はそういうの信じちゃう派だから」

「…婚約ということは挨拶に行かないと行けないわね…式場の」

(おい、おい、おい……どこまで話し進んだよ母さん…普通そこまでいかないだろっ)

事態が収集しそうにないこの状況に発狂したくなつたが、しても何も変わらないことは既に経験済みだ。

春佳は「何でもするから早くなんとかしてくれ！」と雫に懇願した。

「…分かつたわ」

「助かる！早く誤解を解いてくれっ！！」

「ごめんなさい。さっきのは」

雫は混乱している咲希(母)に近付くと、ゆっくりと説明し始めた

*

「……………」

雫と春佳の間に長い沈黙がまた訪れた。

（「散らかっているから」と言っていたから、もつと悲惨な部屋を想像していたけど）

「…片付いていて、綺麗ね」

春佳の部屋に入ったのと同時に雫は感想を洩らした。

「あっはっはー…まあな」

「私が静香さんと話している間に、片付けていたのでしょうか？」

ビクッ

「……………」

「そんなに隠さなくてもいいわよ？」

「あ、ははー…バレてたか」

「ええ、ダンスの中のもの」

ビクビクッ

「さっきからどうしたの？」

春佳をジーツと見た後に、押入れをチラッと見た。その視線に気付いたのか、彼はカニのように移動し始めた。雫の視線の先に立つと話し始める。

「それよりさ、うちの臓物アニマルに用があつたんだろ？」

棚にあつた臓物アニマルのぬいぐるみを掴むと差し出してくる。春佳がどういふ心情なのか分かるから、尚更面白い。つついからかいたくなってしまうがやめた。

春佳からジユウサツイタチを受け取ると机に置いた。

「こんばんは」

「…こ、こんばんは……」

「あなたに訊きたいことがあるの。私たちは何故戦わなければいけないのか…その理由を知っているかしら？」

「……………」

「それはどういうことだ？」

春佳が質問してきた。

「あなたも青を倒せとしか言われていないのでしょうか？私もそうだったわ」

「栗先輩のもそうだったんだ？ 今は」

「今は必要が無いと思ったからないけど、カンデンヤマネコもそう言ったわ」

「……………」

雫と春佳は沈黙という返答をしてきたジユウサツイタチを眺めた。

(この子…何か知っているのかしら……)

「じゃあ、質問を変えるわね。…それは私たちの為？それともモデレーターの為？」

「……………」

雫はジユウサツイタチにもう一度質問をした。だが、返答は無し。ただ口を閉じて無言を突き通している。

「…無視は良くないわよ？」

ジユウサツイタチの目を覗くように見る。

(寝ているわけではないようね。どう情報を得ようかしら…)
雫は顔を上げて春佳の方を見た。

「ねえ、南君？この子はいつもこんな感じなのかしら？」

「…いや、いつもはもっと喋る。前なんか母さんにバレそうになっただぐらいだし」

「じゃあ、どうして何も話さないのかしら」

「…お、おいっ」

雫はジユウサツイタチの足を掴むと持ち上げた。

(振ったら何か喋りそうね)
軽く振ってみた。

「……………」

だが、ジユウサツイタチは沈黙を続けている。

次はさつきよりも強めに振ってみたが特に変化無し。最初の「…」
こんばんは……」しか喋っていない。

「なあ、振って何か出るのは貯金箱ぐらいじゃないか？」

「……………」

「あ、はい…何でもないです……………」

睨み付けると春佳は黙った。

何か聞き出す方法を考えているとコンコンとドアをノックする音が響いた。

『…少しいいですか？』

春佳がドアの方を指さすと「いいか？」と訊いてきた。

「ええ、いいわよ」

雫はジユウサツイタチを掴むと元に置いてあつた場所に戻した。

「…失礼します……………」

「何？母さん」

「違ーうー！……母さんじゃなくて、さ」

「そのやり取りは今は無しでお願いします!!」

「うう〜…まあいいわ」

「……………」

(変身した南君の顔に少し似ているわね)

二人の会話を静かに聞いていると咲希(母)と目が合った。

静香(母)はニコツと微笑むと、「ご飯出来てるから雫さんも食べて行って」と言った。

雫は左手の時計を見る。19時20分。

「ありがとうございます。でも、家でお母さんが待っているの今日はおいとまするわ」

「…じゃあ、待ってるなら止めちゃいけないわね。またいつでも遊びに来てね」

「はい、ありがとうございます」

春佳は二人のやり取りを見て「食ってけばいいのに」と言ってきたが、「そんな訳にもいかないものよ」と春佳にだけ聞こえる程度で話すと隅に置いてあった鞆を手を取った。

「お邪魔しました」

「はい 気を付けてね。春佳は送って行くのよ?」

「分かってるよ」

三人は階段を降りていく。

雫はロンファアを。春佳はスニーカーを履いた。

春佳がドアを開けて先に外に出た。そして、雫が出たのを確認すると「じゃあ、行ってくるわ」と言った。

「お邪魔しました」

「行ってらっしゃい&また来てね」

「はい」

春佳は歩き出した雫の後を追う感じに歩き出した

*

家を出てからの長い沈黙は「優しいのね」とそんな雫の言葉で破られた。

「そおか？普通じゃね？それより」

「何かしら？」

「…キャラ変わり過ぎじゃないか？話し方とか……」

雫は少し間を置いてから「そうね。優等生を演じるのも疲れたわ」と言った。やっぱり学校でも家でも優等生は疲れるらしい。まあ、当たり前だ。ずっと気を張っていなきゃいけないわけだから疲れちまう。

自分がもし雫だったら〜と考えたがやめた。答えは考えるまでもない。確実に発狂したくなるだろう。

春佳はとりあえず無難な感想を言う。

「ふう〜ん…そうには見えないけど色々大変なんだな」

「本当に大変よ。皆私に押しつけてくるのだもの」

「……………」

(…雫でも愚痴るもんなんだな…鉄面かと思ってたから、なんか意外だ)

春佳は雫の横顔を覗き見た。

「何かしら？」

ジーンと見すぎたのかせいなのか、それともたまたまなのかは分からないが、雫と目が合った。

春佳は急いで目を反らした。

「送るのここままでいいか？」

「最後まで送ってくれないの？」

「あんま戻るのが遅いと勘違いされそうで…」

「勘違いされるのがそんなに嫌なの？」

「あの人は勘違いが激しいからな…」

(…って…ん？…今何て言ったんだ？……………)

「あのさ、今」

「ここまででいいわ。もう着いたから」

「ああ、分かった。じゃあ、またな」

と以下略、回想はこんな感じ。

実際はこの後が大変だった。家に帰った瞬間母さんから質問責めに合うは、親戚の叔父さんから電話かかってくるわけで結局夕飯を食べたのは23時過ぎ。

当然食べた時間が遅いせいで、夜遅くまで寝れなかった。

「胃はもたれるし…気分も重めだし…ホントついてないな」

「ですネっ」

「……………」

(何が「ですネっ」だ。また漫画のキャラマネしやがって…) ジュウサツイタチは今日のことを他人事に思っているのだろう。さつきまでの憂鬱な気分はどこに行ったのか、いつものキャラに戻っていた。

「あははは」

「何笑ってんだよ？シバくぞ」

「…そんなことより」

「お前、最近動じなくなったよな」

「そう言われると…そう…ですね」

ジウウサツイタチは「うーん…」と声を発しながら腕を組んだいや、腕が短くて結局はちゃんと組めていない。

「一昨日なんか雫先輩に殺されそうな目で尋問受けてたのに、よく何も喋らなかつたな」

「アレはちょっと調べてたんです。だから、そっちに集中してしまして…」

「…まあ、“情報を持っているけど、なかなか口を割らない”みたいな感じに見えたから、たぶんもう一度来るぞ？」

「…ですよね……」

「やっぱり恐かったか？」

「はい…威圧感が凄かったです…だから、調べたんですけどね」

「だったら「今、調べるんで待って下さい」とでも言えば良かったじゃん」

「はっ…!」

ジウウサツイタチはまた何か見覚えのある驚き方をした。

「なあ、お前のそういうネタってどこで仕入れてくるんだ？」

ジウウサツイタチは「パソコンからです」と言うと机の上のパソコンを指さした。

「もうホントに大変だったんですよ。指いや腕がですね？」
時間大丈夫ですか？」

「ん？」

壁にかけてある時計を見た。時刻は9時半過ぎ。待ち合わせ時間まで、あと30分しかなかった。

「ヤバいつ急がなきゃ」

「…遅刻したら大変なことになる…ですネっ」

「……………」

正直「黙れ！」と言ってやりたいがそんな時間も惜しい。
春佳は急いで着替えを開始した

*

(ポジティブシンキングでいけって言われてもなあ…)

ナツルは大きく「はあ…」とため息をついた。楓との念願のデートなのだが、なかなかテンションが上がらない。男の姿じゃなくて、女の姿でデートをするっていうのも一つの原因だが、一番の悩みの種は 憧れの沙倉楓に女のナツルは実は男のナツルが変身した姿だったという、なんとも複雑なことがバレてしまわないかということだ。

バレた場合は彼女を傷付けること間違いなし。いや、最悪「最低です…わたしのこと騙してたんですね？…もう話しかけないで下さい」などと言われて、もう終わりだ。まあ、まだ始まってもないが。

「どいつもこいつも他人事だと思いやがって…」

「お待たせしました」

急いで振り向く。やはり声の主は楓だった。

(か、可愛い……)

少し緊張しているのか、楓は頬を赤くして微笑んでいた。制服姿もいいが、若干短めのスカートと半袖に身を包んだ格好もいける。

「ごめんなさい、退屈してました？」

ナツルは首を横に振った。

「可愛い沙倉さんを見れたから、そんなの気にしてない」と言いたいのが、長々と喋るわけにはいかない。ていうか、色々連れがいたから暇はつぶれた。

「良かった。服を悩んじゃって、遅れそうになっちゃったんです。初めてのデートなのに、いけませんよね」

「……………」

(いえいえ、沙倉さんと同じで俺も悩みましたから)と
とりあえず、「別に気にしてない」という意味で微笑んでみた。
彼女もその意味が分かったのか、微笑んでくれる。

「そういえば、私服初めてです。似合ってます格好いいです」

楓はナツルの着ている服を眺めている。下はデニムで幅広のベルトをつけ、上は薄手のシャツをまとっている。首には紅音に無理言って借りたシルバーネックレス。

（あ、あの…いつまで見ていますか？）
楓はブーツとナツルの私服姿を眺めていた。

「……………」

「あ、そろそろ行きましようか」

彼女の中で観賞タイムは終わったのか、それとも目に焼き付け終わったのかは分からないがどこかに歩き始めた。

（「どこに行きます？」と訊かないから、どこかあてがあるのだろうか…）」

とりあえず、二人で切符を買った。買った切符を見せるため、さりげなく振り返ると紅音に見せた。彼女は納得したのか切符を買おうとしているが、両手でぬいぐるみを二つ持っているため悪戦苦闘していた。

「……………」

（…紅音ちゃんは、天然なのか？）

「普通に片方のぬいぐるみを置いてから切符を買えばいいんじゃない」と言っただけの気が持ちはなったがそういう訳にもいかない。

楓が自動改札機に向かい始めたのであとを追う。

何とか買えたらしい紅音は、ここでも悪戦苦闘を強いられていた。
（…………だから、ぬいぐるみを離せと）

「ナツルさん、どうしたんですか？」

楓はそわそわしているナツルが気になったのか訊いてきた。

「…何でもない」

楓は「そうですか」と言うと、前を向いた。

電車を待っている間、二人の間に沈黙が流れた。だが彼女はそんなことは気にせず、ずっとここにこしている。

そんな楓を見ていて「嬉しそう……」とついつい呟いてしまった。

「あ、わかりますか？」

彼女は照れて赤くなった頬を抑えた。

「今日のことをずっと楽しみにしてたんです。昨日だってあまり寝れなくて…本当にナツルさんとデートができるなんて感激です！」

「……………」

(…か、可愛い！でも、出来れば男の時に同じ言葉を言って頂きたい) と思ってしまう分、複雑だった。

『二番ホームに各駅』

やっと到着した電車に乗り込む。

中は思ったより混んではいなかった。座席も半分ぐらいしか埋まっていない。なので適当な所に腰を下ろした。

「どうくへ…………？」

「その……お嫌じゃなければ、映画が観たいんですけど」

ナツルは「いいよ」と気持ちを込めて頷いた。

「良かった。楽しみにしていたのが、丁度上映中なんです」

（沙倉さんはどんな映画が観たいんだろう……）などと考えているうちに降りるよう促された。

着いた所は都心から、少し離れた所であった。記憶が正しければこの辺は再開発で、最近造られたばかりのはずだ。服の袖をクイ、クイと引っ張られた。

「あれです、あれ」

建物には大きな看板がかかっていた。タイトルは『詩人の恋人』。題名からして恋愛映画だろう。

（ふむふむ。デートにぴったりですよ）

二人は券を買うためチケット売り場に向かう。

料金は沙倉さんが出してくれた。流石に悪いので出すと言ったのだが「わたしが誘ったんですから」と取り合ってくれなかった。

「はい、どうぞ」

「ありがとう……」

受け取ったチケットを見た。

「……………!?!?」

「どうしたんですか？」

「いや……」

チケットの表側には「進め臓物アニマル 血まみれ獄門丸かじり」と書いてあった。これはどう見ても臓物アニマルの映画だ。

「臓物アニマルが映画になったんです」

ナツルが分からないと思ったのが、楓は補足として説明した。

「ずっと前から楽しみにしてて、どうしてもナツルさんと一緒に観たかったんです。早く入りましょう」

「……………」

彼女は呆然としているナツルの手を握るとチケットを従業員に渡した。
そして半券を受け取ると、上映しているスクリーンの扉に歩き始めた。

*

「はあ、はあ……思ったより全然間に合ったな……」

家を出る時には約束の時間まで残り10分という危機的な状況に陥った。だから家から全力疾走してきたわけなのだが、携帯で時間を確認するとまだ3分も余裕があった。

「これならカップヌードルが食えるな…って違うつつこの」

久しぶりの一人漫才。

(いやー懐かしいね。それより零先輩の方が早いと思ったけど、俺の方が早くて良かった…)

「フーか、どこで待とうかな？」

待ち合わせ場所は言われたが細かいところまでは説明されていない。春佳はとりあえず目立ちそうな所を探す。

「ん？」

広場の一角に人だまりを発見した。そこには女性を囲む様ようにチヤラチヤラした男やオタクっぽい人、スーツを着た男性。恐らくこの人は名刺を渡している辺りからしてどこかの芸能グループのスカウトだろう。そして、それを見にきた見物人まで集まりその一帯は人でごっちゃんがあっていた。

(どんな人なのか見たいけど、あの中に入るのはめんどいな…)

春佳はなんとかして見えないものかとジーツとその一団を見つめた。

「……………？」

男たちの隙間からチラッと見えた後ろ姿は零に似ていた。「まさか…」と思ってもう少し近付く。

「どんだけだよ…」

そこで囲まれていたのは、待ち人の三郷零だった。やはり噂通り、街中に出るとあまりの才色兼備さに人を集めてしまうらしい。

「ん〜…どーしようかな？」

どうやって人混みから連れ出すかと考えていると、「どいて」「と隼の声が聞こえた。

人混みを掻き分けて彼女は出てきた。

隼は「行くわよ」とだけ言うと歩き始めた。

「はいよ」

隼のあとをついて行こうとしたら誰かに腕を掴まれた。

「ちよつと待てよ」

腕を掴んできたのは、どこか懐かしのモヒカンヘヤーの男だった。

「……………」

春佳は掴まれた腕を見た。ジェスチャーで「離せよ」「アピール。だが、相手はそんなの気にせず突っかかってきた。

「おい、兄ちゃん…お前なんなの？」

「え？男だけど」

「っ！…お前なめてんのか？」

「は？舐めてねえ」

最後まで言い終わる前に春佳の前に隼が表れた。

「彼に何のようかしら？」

隼は威圧的な目で睨みながらモヒカン野郎に訊いた。最初は驚いた顔をしたが相手が女子なのですぐ強気な態度ででた。

「なあ、こんなやつと遊ばないで俺と遊ばな」

「あなたとは遊ばないわ。わたしにそんな暇な時間はないの。分かつたかしら？」

男の話が終わる前に自分の意見を相手に伝えると隼は身を翻して歩き出した。

「南君、行くわよ」

「てめえ」

「あつー!!」

キレた男が隼に殴りかかろうとしたが、それより先に動き出していた彼女によって男は宙に浮いていた。

「おおー…心配して損した」

「…心の声がだだ漏れよ？」

「あ、いやなんも言ってないです」

地面にひっくり返っている男を無視してまた歩き出した。春佳はあ

とを追うように歩き始めた。

「そついえば、どこに行くんだ？」

「映画館よ」

「どこの〜とか何を観る〜とか分かるん？」

「ええ、確認済みよ。時間もね」

「へえ…スゴい準備万端だな」

(それにしても、やはりこれはこっちもデートになってしまっんでわないか?) などと考えながら、雫の後ろ姿を観賞した。

彼女の私服は一言で言うなら大人っぽい。

下は足のラインが分かるくらいピッチリとした黒のデニムに上は七分のシャツに薄い紫のカーディガンを羽織っている。

(いや、なんていうか…)

「着いたわよ」

「あ…ああ」

ずっと雫の後ろ姿を見ていたせいで、いきなりの言葉にびっくりした。

上を見上げると大きな看板がかかっていた。そこには『詩人の恋人』と書いてある。

(やはり…デートというのだから)

「いいえ、こっちよ」

雫は春佳の視線に気付いたのかこれから観るものを指さした。
彼女がさしている方向に視線をずらした。

「…!？」

最初、目に入ってきたのはその大々的にアピールされた内蔵だった。

「…ま、まさか……」

ここにきて核爆弾を投下された。

看板には大きな文字で『進め臓物アニマル 血まみれ獄門丸かじり』
と書いてあった。

春佳はシヨックのあまり口をパクつかせた。

そんな彼に雫は「これから観るのは臓物アニマルの映画よ」とトド
メの一撃とばかりに言い切った

*

「面白いですね」

「まあ、少しは……」

「ですよ。良かった、臓物アニマルの面白さが分かる人って少ない
んです。ナツルさんに気に入ってもらえるなんて嬉しいです」

「そう……」

(気に入るのはまだまだ先かな……)

楓からまたスクリーンに戻す。そこではまた得体の知れない化け物

がビュンビュン飛び交っていた。形状からしてたぶん飛行機。

(うげっ…あいつ内蔵を引きずってるよ……気持ち悪る)

あまりのグロテスクさに文句の一つでも言いたくなかったが、楓を見るとスクリーンに見入っていたので、言えなかった。

ストーリーは滅茶苦茶だ。最初は江戸時代に降臨した臓物アニマルたちが悪党を退治するという、一種の捕物帖だったのだが上映開始から5分もしないうちにどこかに飛び去り、宇宙人やら怪獣やら色んなものが出てきた。だからもうストーリー性は無いに等しい。今なんか、バレーボールで臓物アニマルVS外科医が始まっていた。

(なんだこれは…)

外科医側のスパイクが点になる度に楓は悔しそうにしているのが見えた。

「……………」

(やっぱり沙倉さんは綺麗だな…こんな近くで見れるなんて思いもしなかったな)

ガチャン

扉が閉まる音が響いた。

また誰かが映画館に入ってきたのであろう。

(…物好きもいるんだな)

ふと手元を見ると腕輪が発効していた。

「…っ!？」

一気に心拍数が上がり、心臓の音が聴こえるのではないかというぐらいバクバクしている。

(おいおいおい、ヤバいじゃないか?)

腕輪が発効するのは、変身する時と元に戻る時だけだ。今はケンプファーの姿なので後者しかない。

急いで紅音の座っている場所を確認すると、手招きをした。だが彼女も楓同様にスクリーンに見入っていた。

(こんな身近なところにも臓物アニマルのファンが…)

紅音の意外な趣味に驚いていると、また点滅スピードが早くなった。

(…マジでシャレにならねえ)

(急いで外に…)と思った瞬間、点滅が止まった。

まさか…と思い身体をチェックするが、女のままだった。男には戻っていない。

「はあ…」

とりあえず変身が解けなかったことに安堵した。

(でも、なんで無事だったんだ?)

ナツルは記憶を探った。

『変身に関しては経験を積むしかありません。なのでナツルは、まだコントロールは無理でしょう』

とハラキリトラに言われた気がする。

とりあえず危機は去ったので、椅子に座り直した。スクリーンを見るといつの間にか映画はクライマックスに入っており、いきなり表れた子供が「臓物アニマルゲットだぜ!」と言いながら丸い玉を掲げていた。

「……………」

(こいつ誰だよ…)

映画も終わり、ナツルと楓は映画館を出た。彼女はしきりと「面白かったです。手に汗握っちゃいました」と語っていた。それは確かにそうで、クルマの臓物アニマルが「トランスフォーム!」と言って変形した時はマジで背中に変な汗が出てきた。あれは異様にリアルだった。

手の汗は別のところがかいた。危うく変身が解けかけたところでなのだが…何故だろう。

「ご飯、食べませんか?」とお腹を抑えながら楓は訊いてきた。

「……………」

ナツルは黙って頷いた。

「あそこ、有名なパスタ屋さんなんです。行ってみましょう」

そこは緑色の看板が掲げられている、イタリア料理屋だった。

昼時だがそれほど客はいなくて、すぐに席に座ることができた。

適当に料理を頼む。楓は椎茸と鱈子のスパゲッティ。ナツルは定番のカルボナーラ。

紅音もやってきて、何やら注文していた。相変わらず両手にぬいぐるみを持ったままだった。

(それでどうやってスパゲッティを食べるんだろう…謎だ……)

紅音のスパゲッティの食べ方について考えていると楓から「楽しかったです」と言葉が洩れた。

「ナツルさんとデートが出来るなんて夢みたい。わたし、こういうことしたことなくて…」

彼女は最後まで言うと、恥ずかしそうに俯いてしまった。

「……………」

（ほほう、今をときめく沙倉さんもデートは初体験ですか…俺もそうですよ。これがデートというのか分からないが）
注文した料理が来た。お互いしばらく無言で食べた。
食べ終わるのはやはりナツルの方が早かった。

「…あの…それで……………」

彼女は食べるのを一旦やめた。

「ナツルさんは、誰かお付き合いしている男性の方とかいます…か……………」

「……………」

ホモではないので、首を横に振って否定する。すると楓はあからさまにホッとしていた。

「その…わたし…初めてナツルさんを見た時から、忘れられなくなっちゃったんです…。昨晚なんか、夢に見ちゃって……………」

彼女は俯いたまま、はっきりと言った。

「もしよければ、わたしと付き合ってもらえませんか……………」

彼女は言い終わって、身の置き場に困ったのかもじもじしていた。

ぞっばーん！（心の中）

ナツルの中で波が岩に当たり、大きな水しぶきをあげた。
(これは、まさかの告白…なのかな?)

*

春佳と雫は楓たちが外に出て行ってから出た。

「……………」

映画を見たあとなのに何も感想が出てこない。このまま黙っていてもいいのだが、一応女の子と見に来ているので話題は出さなければいけない。なので、必死に内容を思い出す。

(ええーつと…戦争してバレーボールして…ってあれ?)

映画についての感想は?と訊かれれば「滅茶苦茶だった」といえるのだが、詳しく思い出せない。

(んー…それほど興味無かったのか…………)

雫を見ると無表情だった。恐らく彼女はスクリーンなど見ていないのであろう。見ていたのは敵のケンプファーと楓の二人だろう。

「そつえばさ、途中で変身した?」

「ええ、よく分かったわね」

「なんでだ?」

「ケンプファーの存在が露呈するのを未然に防いだってどこかしら

「ふうくん。よう分からんな」

(敵のケンプファアの変身でも解けそうになったんだろっか?でもなんで)

「楓たちのあとを追うわよ」

「おう」

どこかに歩き出した雫の後を追う。しばらく歩くとレストランが見えた。

「ここなのか?」

雫は「ええ」とだけ言う中に入っていた。彼女の堂々すぎる入店の仕方を見て、バツタリと出くわすとか考えていないのだろうか、と思ったがどうせバレることはないのだから。

(雫先輩って実はスパイかなんかなのか?)

店員に座席まで誘導してもらった。座って辺りを見渡すと意外と近くに目的の二人がいた。

周りの音が煩いせいで聞きづらいがなんとか話し声が聞こえてきた。

『…たし…と…付き……て下さい…』

春佳は「なんだって?」と雫に訊いた。

「たぶん、わたしと付き合ってくださいでしょうね」

「え?...マジか?」

雫が冗談を言うわけがないと思ったがやっぱりおかしいだろそれは。

(女の子同士だし...)

もう一度雫の顔を見た。

彼女は真剣な顔で「思ったとおりね」と言った。

ガタッ

『トイレ行ってくる…』

敵は席を立つとトイレに向かっていた。席に残される楓。

「じゃあ、行ってくるわね」

春佳の「えっ？」と言葉が雫に届く前に楓がいるテーブルに向かって行ってしまった。

「どーすんだよ、これ…」

七章『尾行』（後書き）

完成しましたー

微妙なところで切ってしまったような気もしますが、そこはご愛敬で…（笑）

今回は雫とまさかのデート！？いや、尾行だし…ってな感じに書きました。

さて、春佳はこのことについてどう思っているんでしょうか。

まあ、それはご自由にどうぞ。

これからの展開をこうして欲しいなとかご要望があれば、感想コメント下さい。

ストーリーに沿えなさそうな場合は、番外編みたいな感じで書くと思います、たぶん（＾・＾）（＾・＾）（笑）

『祝ユニーク2000人』

「栗先輩っ！ユニーク2000人超えたぞー！！」

「どうしたの？そんなに慌てて」

「だから」

「超えたのでしょうか？」

「……………」

(分かってるなら言わせるなし、サディスト生徒会長……………)

「……………」

「…はい、すいせんでした。今にも殺すような目で睨まないで下さい……………」

「分かればいいわ」

「…はい」

「ところで、生徒会室に来た理由はそのこと？」

「そうだけど？」

「そうっ」

「なあ、もう少し喜べよな」

「これでも喜んでるわよ？」

「……………」

「何か言いたげね」

「沙倉さんみたいに、『きゃっ、ホントですか？嬉しい…』みたいな感じで喜ばないの？」

「き」

「やっぱりやめようか…。先輩のキャラ崩壊するから」

(ていうか、やるんだな…)

「やってって言ったのは、南君の方でしょ？」

「やってとは言っていないませんが」

ガラッ

「わっしょーい」

「…っ！？母さん！？！？なんで！！！！」

「おめでとーうー！やっつと2000人いったんだね」

「ねえ、人の話聞いてくれてる!？」

「あら、栗ちゃんこんにちは」

「こんにちは」

「ちよつ、栗先輩まで……」

「今日はホントおめでとう」

「ええ、ありがとう」

「……!?笑ってる!?!」

「……………」

「…なんでもないッス」

(なんか最近……どンドン俺の立場がなくなってきた気がする……)

「それはしょうがないことね」

「だから、人の心を読むなって」

「あら?私のせいかしら?」

「そつだよ」

「むふ ちよつぱり仲良いじゃない」

「…母さんは少し黙ってて」

「っ！？」

「どっしたの？」

「…母さんじゃなくて、さ」

「その下りもうお腹いっぱいっス」

「…っ…………っ」

「南君って冷たいのね」

「うっ…………分かったよ。ごめんなさい」

「さき」

「ん？」

「咲希！」

「そう、呼んでもらいたいではないかしら」

「はあ…………分かったよ…………咲希」

「きゃー！ー！」

「ちよっ…………待って！ー！」

ドスッ

「ぐふっ…ホント何しに来たんだよ……」

「あ、そうだった 完璧忘れてたわ!」

「……………?」

「記念に番外編をやりましょう」

「どんな?」

「……………」

「えーっとね…『修行』か『ポーカー』のどちらかね」

「げっ…マジか……………」

「あら、懐かしいわね」

「うふふ 色々あったみたいね」

「どっちもありありだよ…出来ればそれはやめて欲しい」

「と言っていますが、無視して どっちがいいかな」

「私はどちらでもいいわよ」

「じゃあ、コメントで決めましょうか 多かった方を投稿すること
にします」

「勝手に話を…って、はあ…まあいいや。どうにでもなれ！」

「もう諦めたの？」

「ああ、もう諦めた」

「まあ二人は無視して…どっちがいいかヨロシクでも、どちらもすぐ投稿出来る訳じゃないのでそこはヨロシクです」

「ふふ、楽しみね」

「うん、楽しみですね」

「ではまたね！次はナツル君と紅音ちゃんと水琴ちゃんです！ユ
ニーク4000で会いましょう」

〈搭乗人物〉

南春佳

三郷雫

南咲希（母）

『祝ユニーク2000人』（後書き）

ユニーク2000人がスゴいことなのか普通のことなのか分かりませんが、やはり暇つぶしで始まったこの作品をこれだけ見て頂けたのは嬉しい限りです（*^^*）
ありがとうございます

これからも読んでくれる人たちのために書いていく所存です、
はい。

それと前回コメントして頂いた方々、ありがとうございます。

八章 『誘拐』

いきなりだが緊急事態が発生した。この難題を解決するには一人では無理だ。正義のヒーローでも三分しか地球にいられないウルト○マンでもいい、とりあえず助けてくれ。

…前者も後者も同じだって？そんなのどうでもいい。今は誰でもいいから、この危機的情况を打開する案を出して欲しい。

「あのナツルさん…」

女子トイレの扉がゆっくりと開き、ぬいぐるみを両手に抱えた紅音が入ってきた。

「紅音ちゃん…どうしたらいいかな………？」

ナツルは前置きもなく質問した。

「え…？何かあったんですか？」

「告白されたんだ…」

口を開いたのは、左手のぬいぐるみだった。

「うひひひひ。やっぱりか。なあナツル、やっぱりどーにもならねえってことはあるよなあ」

紅音のメッセージャーのセップククロウサギはそういうといかにも楽しそうにケラケラ笑った。

(こいつ…ホントに他人事だと思いやがって…)

「うるせえ。ポジティブシンキングはどうした？」

「あんなもんはただの気休めだからな。…んで、どうすんだ？」

「こいつの場合って、ちゃんと返事した方が嬉しいよね？」

使えないセツプククロウサギは無視して、紅音に訊いた。

「それは…多分そうです」

紅音はナツルの間に自信なさげな答えた。

「やっぱり、イエスの方が嬉しいよね？」

「…ノーと言われたら悲しいですから…」

女の子らしい返答である。まあ、男でも同じでノーと言われて悲しくない人はいないだろう。

「ん…」

(なんかこつ…沙倉さんを傷付けず、かつ女の姿で付き合うことなく、出来れば男の俺と)
追い詰められているせいか、虫の良い願望しか出てこない。今必要なのは打開策なのだが、そつちまで頭が回らない。

「はっはっは。完璧な解決策なんてありませんよ」

ハラキリトラが言った。

「何かを選択するためには、少しぐらい犠牲を払わないと。相手はあんな美少女なのに、全てを得ようとするなんて贅沢過ぎます」

「……………」

（分かっているけど、ぬいぐるみに説教だけはされたくないな…元はというとお前が原因なんだし…………）

「良い手がありますよ」

「どんな？」

嬉しさのあまりナツルの回りが華やぐ。

「男に戻って出ていくんです。それで、女のナツルは先に帰ったって言えばいいんです」

「…はあ……………」

（淡い期待をもった俺が馬鹿だった…）

華やいでいた分、どん底まで叩き落とされた。

ナツルは紅音にゆらりと近付くと、ハラキリトラの頭を鷲掴みした。

「アホ。どこが解決策だ。何も解決してないじゃねえか。これだと沙倉さんはガツカリするし、俺が出ていった話かけたら不自然だろ」

ハラキリトラに文句を言った。すると、「他に適当な手段がないんでしょ？」と言うため息をついた。

「っ……」

ぬいぐるみに正論を言われている分、腹が立った。だが、ここで八つ当たりをしても何も変わらないので、また悩む羽目になった。

「……よし」

決意代わりに、蛇口から水を出して顔を洗う。

「席に戻ろう」

「…返事をするんですか？」

「いや、しない。適当なことを言って引き延ばすよ。それで解決策を考える…」

そう紅音に告げると「そうですか…」と返ってきた。

結局、先送りしかない。「こうウジウジしてるから、女の子にモテないんだろうなあ」とは思うがやはり彼女は傷付けたくはないのだ。ナツルはトイレから出ると急いで楓が待つ席に戻る。店内を見渡すと入って来たときよりも、客の数が少なくなっていた。そのため座っていたテーブルまで迷わず行けた。

だがそこには、楓はいなかった。代わりに…

「お帰りなさい。長かったわね」

生徒会長の雫が、悠然と微笑んでいた

*

楓のいる席に行っただと思っただら、雫はすぐ戻ってきた。

「ん？忘れ物？」

「いいえ、違うわ。南君に楓のことを頼みに来たの」

「どういうこと？」

「ケンプファーに関係のない楓には退席してもらおうと思って」

「まあ、確かに。でも、デートの邪魔していいのか？」

「ええ。楓には人質になってもらうのよ。このままだと彼は戦わな
いでしょうから…」

そう言うと雫は女子トイレの方を見た。

「彼…？彼女の間違いじゃないのか？」

「彼女もあなたと同じ、元は男の子よ」

「俺と同じ境遇のやつがいたのか…」

「あら、驚かないのね。てっきり、すごく驚くかと思ったわ」

「驚いたけど、そんなのより同情が上回ってね…ってそんなことよ
り、沙倉さんをどうすんだ？」

「さっき簡単な催眠術をかけたから、駅で時間をつぶしてくれな

いかしら」

「催眠術って……」

(…あなたはマジシャンかなんかですかっつてね……)
雫の後ろから楓が現れた。彼女と目が合うが、視線はどこか違うところを見ているような感じがする。これが所謂、催眠状態なのだろうか。何も喋らずただぼーっと雫の横に立っている。

「おい、沙倉さん大丈夫なのか？」

「ええ、大丈夫よ。だから、楓を頼んだわよ。南君についていくように言っただから」

「どこでも？」

「……………」

考えが分かったのか、雫が春佳に向ける視線が痛い。別に暑くないのに背筋から汗が流れる。

「あ、いえなんでもありません！でございます！では、送ってきます」

「……………」

楓は「はい……………」とだけ言うと、春佳の後を付いてくる。さながらピクンのように。

そんな彼女を可愛いと思うが、和んでいる場合ではなかった。レストランから大分離れたのだが、背中がピリピリして嫌な汗が止まら

ない。

お互い一言も喋らず、駅の方
向に歩く。

「……………」

(ま、まさか…俺が何かしないか誰か見張っているのか!?)
春佳はキョロキョロと辺りを見渡すが、特にこれといって変な人は
いなかった。いるのは外回りが仕事のサラリーマンと買い物ついで
に世間話をする主婦だけだった。

「んゝ勘違いか…」

駅でと言われたが特にやることはないの、ホームで待つことにし
た。切符を二枚買い、一枚を楓に渡す。

「……………」

彼女は切符代として180円を出してきた。「いらなから」と伝
えて受け取りを拒否。しかし、彼女はお金を無言で押し付けてきた。
やはり、催眠状態でも性格は出るらしくがんとして引かない。

(んゝどうしたものか…)

ホームで待っていると向かい側に見覚えのある奴が現れた。

「げっ！なんであいつが…」

今まで気付かなかった辺りからして、来たばっかなのだろう。

東田は2リットルペットぐらいの大きなレンズを付けたカメラを弄
っていた。

(…あれで何を撮って来たんだよ……)

まあ、大体想像出来る。美少女研究会の仕事をしてきたのだろう。ホント仕事熱心の男だ。その仕事が可愛い女の子を撮ることではなかったらだが。因みに撮ると言っても撮影で、ではない。こいつがやってるのは、ガチで犯罪ギリギリな盗撮だ。前なんか「女子校の文化祭はハラハラして、スリル満天だった」とか言われた。ホント大丈夫？としか言いようがない。

その撮影もとい盗撮が“三度の飯より好き”と豪語する奴が目の前にいるとか昨日見た昼ドラぐらいヤバイ。俺が見た昼ドラは、復讐が復讐を生むという負の連鎖だった。見てて気分を悪くするぐらいドロドロとしていた。別にドロドロとはしてないがそのぐらいヤバイ状況だったことだ。

(ヤバイ…沙倉さんといるところを撮られたら、ビックニュースどころじゃないな…)

「何とかしなければ」

春佳は辺りに何か使えるものがないか探した。

(自動販売機に長椅子に…傘に鏡って使える物がねえー！)

「ってあれ……？」

ふと、記憶を巻き戻してみる。

自動販売機に長椅子に…傘に鏡

「これだ！」

春佳は楓の手を掴むとどこかに走り出した

*

「あなたに用があるの、瀬能ナツルさん」

「……!？」

(なんで俺のことを知っているんだ!?今は女の姿なのに)

彼女の瞳がゆらゆらと光る。明らかにナツルの正体を見抜いていた。

「そう驚かないで。あなたが何者か、私はちゃんと知っている。前からわけてわけじゃないわ。あなたがそうなった時から、気付いていたのよ」

背筋が冷たくなるのが分かった。

「まさか……」

雫はゆっくりと、右腕の袖をまくった。

そこには自分と同じ腕輪が輝いていた。ただし色は、赤。

「そう。私もケンプファー。あなたの、敵」

とっさに身体が“敵”という言葉に反応し動いた。座っていた椅子を蹴飛ばし、床に伏せようとする。

「焦らないで」

腰を浮かせたところで、止まった。

「ここで戦う気はないわ。出来るなら、映画館でやってるから」

「…つけていた？」

「あなたが元の姿に戻らなかったのは、私がいたから。感謝してほしいものね」

「……………」

ナツルは無言を突き通した。

楓の時みたいに喋れないとかではない。油断できないのだ。映画館だけではなく、今まで彼女がいたことに、全く気付かなかったのだから。

「座ったら？」と合図されたので、ここは言う通りにした。

「そこのあなたもどうぞ」

いつの間にか背後にいた紅音が、ビクツとした。

前回と同じように二対一の顔合わせだった。しかし、あの時より空気が殺伐としている。

「楓には退席してもらったわ。あの娘には、この話を理解出来ないでしょうからね」

「…生徒会長さん」

「凜でいいわよ」

「じゃあ…凜さん、あなた、何者なんだ？」

「言ったでしょう。赤だから、あなたの敵側のケンプファー」

「…図書館で俺たちを襲ったのも？」

「ええ、私」

途端に、右側から殺気がほとばしった。

瞬時に紅音の身体が変化して、猛犬女が現れた。

「ほう…それっあおもしれえ。あたしに喧嘩売りやがったのはてめえか」

紅音が腕を振ると、手の中に拳銃が出現した。

よく見るともうハンマーを起こしていた。ここがレストランかどうかなんて遠慮は存在しないらしい。ただ図書館でのことを根に持っていて、雫のことを撃ちたいだけだ。

そんな彼女を見ても、全く臆することなく雫は変わらぬ口調で話した。

「乱暴な人。同じケンプファーなのが恥ずかしいわね」

「なんだと!？」

紅音がトリガーを引こうとした瞬間、テーブルの下で、何かが煌めいた。

下を覗くとそこには、鎖付きの短剣があった。

「あなたの銃と私の剣、どっちが早いか試してみる？」

雫と目が合った。もう片方の短剣は、さっきからこっちを狙っていた。

「ナツルさんも何もしないでね」

「……………」

正直、何もしないと約束出来るが取り合ってくれそうもない。彼女は短剣をそのままにして、話し始めた。

「ここで戦う気はないから、安心して。ちょっと話が出たかったの」

「学校でいくらでも会えるじゃねえか」

憎々しげに紅音が言う。

「じっくりと話が出たかったのよ。変身した姿は昨日観察したわ。三人で歩いていたところをね」

「会長は変身してないように見えるけど？」

雫は「してるわ」と言うと、ロングヘアーをかきあげた。銀髪がさらさらと流れ落ちる。髪の内側だけ銀色に変化していたのだ。

「変身にも様々な種類や強弱がある。性別が変わったり、性格が変化したり。私はあまり変わらなかったの」

「……………」

雫は当然のように話すが、自分にとっては知らないことばかりでも言えなかった。

「で、用件ってなんだ？それともただこっちのツラを見にやってき

たのか？」

さっきまで黙っていた紅音が喋り始めた。

「用事ならあるわ」

「さつさと言え。あたしはおめえの能面みてえなツラが気に入らねえんだ。目玉が腐って落っこちまう」

「用件は、私たちケンプファーのこと」

生徒会長はゆっくりと切り出した。

「知ってると思うけど、ケンプファーは戦うための存在。二手に分かれて対立する存在を倒す。でも、なんで戦うか知ってる？」

ナツルは首を横に振った。何度かハラキリトラに聞いたが、教えてくれなかった。

「私も知らないの」

「はっそんなのどうでもいいじゃねえか。ケンプファーに理由はいらねえよ」

紅音は手を振って笑った。

「あなた、なんのために戦っているの？」

「銃をぶっ放すためだ。敵を見つける。バーン。それで話は終わり。分かりやすいだろ？」

「……………」

（いやいや、どんだけお前は戦闘主義者なんだよ。気の弱いはずの元の姿に戻って欲しい）

「そうね。単純だけど筋は通っている。じゃあ、あなたは？」

矛先が紅音からナツルに向いた。

しばし考える。

（そういえば、なんで戦うんだろうな…理由を知らないのにやらなきゃいけないのは、前にも悩んだことがあったな。でも結論は出てないし…）

「……………」

雫はくすりとする。

「分からないようね。私も同じよ。モデレーターにも、私たちを戦わせる目的が何かあるはず」

「どんな理由が…」

「それが私は知りたいの。どうしてケンプファーなんてものが存在して、戦わなきゃいけないのかね。一応生徒会長でしょう、そういうことを知るのも重要なもの」

流石は生徒会長の雫。話を聞く限り、彼女も巻き込まれてケンプファーになったようだが、考えていることは深かった。そこまでは考えに至らなかった。

「他のケンプファーと戦うこともあったのか？」

「この二年間で結構倒したわよ」

雫はテストの点数を答えるぐらい、あっさりと答えた。

「私は、戦い続ければ、何か理由が見えてくるんじゃないかって思っている。勝ち続ければ、いずれモデレーターの目にも止まることもあるでしょう。その時に、全てを理解出来るでしょうね」

「……………」

そう語る雫の顔は、なんだか哲学者みたいだった。

この生徒会長は、ときどき憂いみたいなどころも見せる。同じ高校生なのに精神年齢だけはずっと高く感じられるのも、マゾ男子と年上好きに好まれる理由だった。ま、沙倉さん一筋だから関係ないが、彼女はふと、微笑む。

「だから、あなたたちとも決着がつくまで戦うことになるわね」

そう言われて紅音はケラケラと笑った。

「おお、おもしれえ。やるうじゃねえか」

「いや、ちょっと待ってくれ」

ナツルは急いで話を止めにはいった。

「さっきと話が違わないか!？」

「戦い続けれるとも言ったわ」

「でもさ、戦う理由すら謎なんだぞ？そんな状態で」

「戦いたくない？」

「……んまあ」

「じゃあ、材料を一つ。楓は私が預かっているわ」

「なんだって!?!」

本日最大の驚倒だった。雫の言っている言葉の意味が分からなかった。

こちらは顔面蒼白なのに対し、雫は全く顔色一つ変えていない。

「あなたの憧れの人でしょう？」

「せ…生徒会長が誘拐？」

「我ながらあくどいわね」

「沙倉さんは、雫さんの友人じゃないのか!?!」

「そうよ。昔からの大事なお友達。こんなことをするなんて、胸が痛いわ」

口ではそう言っているが、恐ろしいことに見た感じちっとも痛そうにじゃなかった。

「こうしないと戦ってくれないと思ったから。私とやりあってくれたら開放するわ。あとはあなたの決断次第ね」

ここは覚悟を決めるしかないらしい。

ナツルは唾を飲むと、場所と時間を訊いた。

「明後日の夜。場所はそっちでどうぞ」

「…じゃあ、この近くに公園があるだろ。そこでどうだ？」

「楓とそこでデートする予定だった？」

「広いから、夜なら少しぐらい騒いだって平気のはずだ」

「いいわね。優等生たるもの、社会の迷惑にならないようにしないと」

そう言うと彼女は席を立った。何気ない仕草だが、そんなところで優雅だった。

「この支払いはしておくわ。明後日の夜、楽しみにしているわ」

悠々と立ち去る姿を、ナツルはぼんやりと見送るなか、紅音は「気取りやがって」と吐き捨てるのだった

*

鏡を見るとにデニムに紺のシャツを羽織っている女の子が写っていた。

「よし、これで完璧！」

格好的には女の子というより、男の子っていう服装だがファッションに文句を言っていられない。急いでトイレの前で待ってもらっている楓の元に行く。

「待った…かな？」

今は変身しているので口調に気を付ける。

「え？誰ですか…？」

「あ、えと…沙倉さんを送って行ってって南君に頼まれて……」

（っ…！…やつちまった……どんな言い訳だよ。つか、答えになつてねえ！）

当たり前のことを考えていなくて、あたふたする。
春佳は急いで付けたしに入った。

「あ、あの…わたしは遥華です……」

「「……………」」

楓はしばらくぼーっとしたあと、つぶやくように「…そうですか」と言っとホームに向かって歩き始めた。遥華もとい春佳も楓のあとに続く。

（良かったあ…沙倉さんが催眠状態で…でも、いつまでもつか）

プルルルルル

アラーム以外全く鳴らない携帯が急に鳴り始めた。
びっくりして携帯を線路に落としそうになる。

「おっとと、はい春佳ですけど」

「今は女の姿になっているのね」

向こうから透き通るような声が聞こえた。急いで出たため誰からの電話なのか分からない。どこかで聞いたことのある声のような気がするのだが

「あ、雪先輩!?!どうして、携帯番号を!?!」

「予定通りね。今、どこにいる?」

「軽くスルーかよ...まあいいや。色々あってまだ駅」

「そう。じゃあ、明後日...いや、明日のことについて話しておかないいけないから、そこで待ってて。すぐ行くわ」

「いや、ちょっと待ってくれ」

切られそう気がしたため、急いで止めにはいった。

「今、向かい側のホームに東田がいるんだ。だから、来たらまずいかも...」

向かい側まで声が届くことはないだろうが、一応小さな声で雪に現状を伝えた。

「…だから、変身していたのね。でも、声も変わるのだから電話とかは気を付けなさいよ?」

「あ、やべ…忘れてた……」

雫は「あと、声も」と付け足してきた。歩き方は治せても、口調だけはなかなか治せないのだ。つい、いつも通りに喋ってしまう。

「着いたわ。何番ホーム?」

「えーっと、二番ホームの先頭車両側にいます」

「分かった」

切れたので携帯を閉じた

後ろにいる楓を見るとさつきと変わらず、ぼーっと立っている。雫が催眠術をかけてからかなり時間は経っているはずだが、最初と変化はなかった。ずっと無表情。

変身したので東田にバレることは無くなって安心したのだが、彼女は特に話さないので暇でしょうがない。こっちから何回か話題を出したのだが、「そうなんですか」という一言で終わってしまった。

こういう状態だからしょうがないとは思っただが、沈黙は正直辛い。雫が来るまでやることがないので、彼女を観察することにした。

「……………」

(うん、可愛いな。それに制服姿しかしらないから、新鮮だ…スカートなんか、丈が短くて)

「どこを見ているの？」

背後から聞き覚えのある声が聞こえた。春佳はゆっくりと後ろを振り向いた。

そこにはやはり雫がいた。

「いや、何も。それより早かったですね」

「そうね。あなたの姿が目立つからかしら。階段上がって見渡したら、すぐ見付けられたわ」

「あは、それは良かった。見つけられなかったら、どうしようかと」

「ふふ、まあいいわ。それより楓のことだけど、私のうちに連れていくわ」

「親に連絡は？」

「さつきしたわ。それと明後日戦うことにしたのだけど、恐らく明日、楓を奪還しに来るでしょうね」

「なんで？」

雫の腕を組む姿はどこか様になっている。これでモデルをやったら、雑誌のトップは確実に物にするだろう。

(…おっと、考えがずれた……)

雫の話にまた集中する。

「あいては戦う理由も分からずに私と戦いたくないと言ったわ。当然一日では、分かるはずもないから人質の楓を助けにくる」

「そういうことね。じゃあ、俺はどうしたらいい?」

「あなたにはケンププアアの戦いを見てもらっわ。だから、戦いには参加しないでいい」

「…まあ、戦闘経験皆無だからな……足引っ張っても嫌だし、分かった」

「そんなに落ち込むことは、ないでしょう? 私にもそんな時はあったわ」

雫はどこか懐かしそうに話した。

「へえ、そうなのか。どんな」

最後まで言い切る前に「内緒よ」と塞がれてしまった。

到着した電車に一足先に雫が乗る。それに続いて楓と春佳も入っていく

八章『誘拐』（後書き）

このあとに本当はナツルと紅音は楓のことについて話合い「明日、助けに行こう」という展開があつたのですが、雫は既に気付いていたということにして、二人の会話はカットしました。

実際、原作の方でも奪還に来ると気付いていたっばいので別にいいですよ（笑）

m でも、そのせいで内容が分かりにくかったらすいません…m（――）

八章と1/2『修行』

皆さんは“修行”っていうのをしたことはあるだろうか。当然ないだろう。自分だっただけのことではない。

因みにお坊さんがする、滝に打たれるとか山籠りとかではない。それとあえて言うておくと、某アニメの修行の旅にでるとかそんな感じでもない。

まあ、修行っていうより訓練と言った方が分かりやすいだろう。俺こと南春佳は歳もケンプファー歴も先輩の三郷隼に、“訓練”という名の元に新入社員いびりの如くシバかれていた。

「うわっ!？」

隼の投げた短剣が耳元をかすった。サラリと切られた髪の毛が下に落ちた。

「魔法ツァウバーを使わないと死ぬわよ？」

短剣はジャラジャラと金属が擦れる音を出しながら、彼女の手に戻っていく。

「なあ、俺もそれの方がいいな。剣の方が格好良いし」

春佳は短剣と手の平を交互に指さし、「交換とか出来ないのか？」と訊いてみた。

「男の子が好きなカードゲームと一緒にしないことね」

と言いつわるとまた短剣を投げてきた。

(また右肩を狙ってきた…と見せかけて…)

「左だっ!!!」

短剣が左に曲がったのを確認すると春佳は右に転がる。だが、ザクつと音をたてて目の前に短剣が刺さっていた。

「なんで!?!」

「南君は反応はいいのだけれど、そのまた裏を忘れてるわ」

「…裏?」

「私には二本の短剣があるのよ?使い方によっては」

雫は右手の短剣を投げた。そして、もう片方の短剣を先程投げた短剣の鎖にぶつけた。すると最初に投げた短剣は向きを右から左へと変えて、近くにあった木に刺さった。

「おお…話しには聞いてはいたけど、実物はもっとすげえな」

春佳はふむふむと頷いた。

「聞いていたって誰に?」

「ん?ジュウサツイタチ」

「……………」

二人の間に静寂が訪れる。

(あ、やべっ…また口が滑っちまった)

「あ…今のは聞かなかったことに……」

「それは無理ね。話してしまったのは南君でしょう?」

「……………」

(ん)「内緒にして下さいね」とお願いされてたのに一日ももたないとは……)」

「まず南君はその口をどうにかしないといけないわね」

「そうなんだよ。言うなって言われ あ……」

「ほらまた喋ってる。そんなんじゃ、秘密を隠せとおせないわよ?」
雫が腕を組んだ。これをすると説教か考え事かのどちらかだ。今は当然前者である。

「へーい、すみません」

「これだと口の訓練もした方がよさそうね……」

「いや、それだけはやめてくれ。口は自分で何とかする」

「…あと表情もかしら」

雫は春佳の顔をジーっと見つめた。

(う…何が言いたいだ…?)

女の子　それも可愛いだとか綺麗な子の耐性が全くないので、こ
ういう時にどうしたらいいかかと悩む。いや、むしろ耐えられなく
なって目を反らしてしまう。

「…何が言いたいんだ？って言葉通りよ。南君は思った事がすぐ顔
に出るのよ。あと目にもね」

「……………」

(…あなたは超能力者かペガ スのどちらかに確定だな。実写版の
遊 王デュエルモンスターズが出来たら、推薦状送つといてやるよ)
春佳を見る雫の目付きが鋭くなる。

「ほら今も」

「んげっ！？また出てた？」

「ええ。また私のことを超能力者とも思ったわね…そうでしょう
？」

(はいはい、思いましたよ…でも)

「俺ってそんなに思ってるのが顔に出てるのか？」

ふと思ったとこを彼女に訊いてみた。

「ただ漏れって感じね」

「ん〜でも逆に考えれば、俺の良いところじゃね？」

「考え用によつてはね。じゃあ、また始めるわよ」

と言つと短剣を胸の前で構えた。

（考え用かあ…俺は良いことだと思つけどな〜）

雫はこつちに向かつて走り出した。走ると同時に短剣を投げってくる。片方は足の方に飛んできた。そして、もう片方は時間差で肩を狙ってくる。

「よつと！…ほっ」

サイドステップで足を狙ってくるのを避けると、雫に向かつて走り出す。肩に向かつて飛んできているやつをしゃがんでかわすと突進を仕掛けた。

「ふっ…まだツメが甘いわね」

雫は突進を避けると短剣を引き戻すために腕を後ろに引いた。

（それを待つてました…つてね！）

彼女に接近すると回し蹴りを叩き込んだ。

「これでっ…！」

雫に蹴りが当たったと思いきや当たらなかった。というか、空打つたとかそういうわけではなく、何故か春佳は転けた。

「いつつ！何が起こつたんだ!？」

下を見るとさつきまで何もなかったのに、足には鎖が絡まっていた。逃げる為に外しにかかる。

(くそっ！いつの間に……)

「…チエックメイトよ」

雫はいつの間にか接近したのか、短剣を春佳の首元にたてた。

「うゝわぁ…やっぱり無理だ……何回やっても歯が立たないわ」

緊張の糸が切れたように、地面に据わりこむ春佳。それに比べて彼女は何一つ変わらず立っていた。

「サイドステップの次にまた避けると見せ掛けて、突進。というのは良かったわね。最後まで短剣の行方を見てなかったのは駄目だったけど」

「んゝだって、間合いに入っちゃえばいけると思ったんだよ」

当初の予定では、足に飛んでくるのはサイドステップでかわし、肩に向かってくるのは突進しながらギリギリで避けて間合いを詰める。だったのだがまだ投げた短剣は戻って来ないだろう、という考えが甘かった。

実際は鎖によりものすごいスピードで戻された短剣は春佳の足に絡まるために、雫の手元には戻らずに一直線に足にきて、絡まってきていたらしい。

「…私はその対策を取ってないとも思ったのかしらね」

「あ…確かに……。つか、図書館での戦いのこと忘れてたわ」

「次からは気を付けることね。さっきのでもう三回は死んでいるわ」
「へいへい」

春佳は起き上がると、服に付いた汚れを叩いた。そのついでに鎖が巻き付いた足首を見ると、ものの見事に青くなっていた。

（うわぁ…何となく痛いなどは思ってたけど、こうなっているとは…）

「…それなら大丈夫よ。ケンプファーならすぐ治るから」

「そうなんだ？じゃあいいや。んで、次は何をするんだ？」

「次は魔法ツァウバーの発動訓練をしましょうか。これが使えるようになれば、戦略も増えるわね」

「うげっ…イマイチ発動の仕方とか力の入れ方とか、分かんないんだよね」

「やってみて」

「…あの俺の話を」

「やってみて頂戴」

「…はい、はい……」

（確かこうやって…）

ジュウサツイタチに言われたことを思い出す

『こんなことも分かんないですか？』

(…ってこれじゃない…このあとの……)

『まず、意識を左手に集中させます。そして光をイメージしながら力を入れると』

ポツと手のひらが明るくなった。

「……………」

「ど、どうでしょ…？」

「…小さいわね」

「うん…そうですね……………」

光の玉は出すことは出来たのだが、形が野球ボールぐらいだった。これではまだ小さい…目眩ましにも使えないだろう。

(む…どうしたものか)

「南君は光の性質とかがって知っているかしら？」

「…んー…反射とか？」

「…それは冗談で言ったわよね？」

「……………」

（あれ…？反射って光関係じゃなかったか？それとも、レンズだったか？……）

「まあ、いいわ。光っていうのは、波であり粒子でもあるの」

「ふむふむ…それで？」

「発動の時は光の粒子を球の形に凝縮するイメージでやってみたら？」

「そついうもんなのか？」

「おそらく原理は同じはずよ」

「…原理とかよく分かんないけど」

（えーっと、光の粒子を球の形に凝縮だっけか…）

春佳は左手に集中する。

（光の粒子を凝縮、凝縮、凝縮…）

しばらくすると手のひらにさっきとは違う小さな球が出来た。

「また小さいわね」

「…うつせい。んで、これはどうすればいい？撃つていいのか？」

「ええ」

「おらっ！」

腕を後ろに引いた。そのあと前に突きだと球は目標に向かって飛ん

でいく。

（これで良かったか？）

球は真つ直ぐ木に飛んでいった。シュツと小さな音をたてて着弾した。だが、そこで消えずに、当たると貫通した。

「…!？」

春佳は急いで木に近付く。穴はドリルで開けたかのように綺麗に貫通していた。

（マジかよ…）

球の行方を探すとその後ろの木も貫通していた。

「威力は十分過ぎるとして、あとは発動までのタイムラグね」

雫はこの異常な破壊力に驚きもせず、淡々と次の段階の話をし始めた。撃つた本人は未だに放心状態。想像していたのは、光の球が木に当たると爆発して、木の表面が軽く焦げるぐらいだと思っていた。だが、現実には直径30?以上ある木を貫通してその後ろまで届いていた。

さながら、よく映画や次世代アニメなどで使われる レーザー銃。昔でいうとスターウーズ、今は21世紀 年かな。後者場合はなんだかんだいって撃てなかった気がするが。

「タイムラグって…早く球の形状を作るとかか？」

「ええ、そうよ。やっぱり、変身したあとの南君は一味違うわね」

雫は腕を組むと微笑みながら、そう言ってきた。

前々から思っていたことだが、雫の腕を組む姿は様になっている。その姿はモデルのようで綺麗な。背筋はピンと伸びていて、ポーズ

が決まっている。

男から見ても「カッコいいな」と思ってしまうほどだ。

一瞬見とれていたのが恥ずかしくなり、雫に苦情を申し立てるふりをして違う方向を見た。

「…なあ…それって、誉めてんのか貶してんのかどっちですか？」

「誉めているのよ。順応性が高いって」

「順応性ねえ…」

（ただ今は何をしていたいいか分かんないから、修行しているだけなんだけどな…）

「それでいいのよ。生き残るためには強くてはいけないから」

「雫先輩も結構戦ったんか？」

「沢山戦い、沢山倒したわね。多いときは一日に2、3人と戦ったわ」

「一人で？」

「いいえ。何も分からない私にケンプファーのことを一から教えてくれた先輩がいたわ。今は死んでしまったけど…」

表情は変化ないがどこかいつもと違う気がする。最近、よく一緒にいるせいかなんとなくだが、分かるようになってきた。

恐らくさっきのは訊いてはいけなかったことなんだろう。

「…変な事訊いて、ごめん」

「あら、何がかしら？さっきのは全て冗談よ」

「…へ？」

「南君はケンプファーになって、感覚が鋭くなっているみたいだけど、今のは外れね」

「なんだし…心配してそんした。てつきり、大切な人が死んじゃったのかと思った」

「あら、心配してくれたのね」

彼女は意外にも優しい声でそう言った。
そんな風に帰ってくるとは思っていなかったので、童謡する。

「…してないです。今のは口からのでまかせです、はい」

「本当に？」

雫がじつと見てくる。

目が合い見つめ会う形になったが、心をまた読まれるんじゃないかと怖くなって目をそらした。だが、その行動が駄目だったのか問い詰めてくる。

「なんで、目をそらすのかしら。知られちゃいけない事でも考えてた？」

「知られちゃまずいっていうか…こう、俺にもプライバシーという

ものがありましたてすね……」

「私がプライバシーを侵してると?」

「んまあ、そういうところ。毎回、ここの俺のフィールドに」

春佳は手で自分の回りに円を描くようにして、説明し始める。
そんな春佳を雫は眺めて聞いている。

「んまあ、そういうことだから。心を読むのを控えてくれると助かる」

と雫に言った瞬間、携帯電話の着信音が辺りに鳴り響いた。
携帯を取り出して画面を見ると、「南咲希」と書いてあった。

(ん? 母さんからだ…なんだろう)

「はい、何?」

『「何?」じゃないわ! 家出して旅に出るのはまだ早いわ!」』

「…えっ? なんの話!?」

『母さんびつくりしたのよ? 家着いたら春佳は家にいないし、連絡待っても来ないし…』』

「ああ、ごめんごめん。連絡するの忘れてた。旅でも家出でもなんでもないから、ずれた心配しないで」

『そうなの…? てつきりマスターになる旅に出たのかと…』』

「……………」

『あれ？皆旅に出るんじゃないの？』

「まあ、とりあえず帰ったら説明するよ…」

『分かった　じゃあ、気を付けて帰って来てね』

「はあ…」

電話を切った瞬間、口からため息が洩れた。
雫の方を見ると目が合った。

「誰からとか説明しなくても分かったべ？」

「大体ね。咲希さんでしょう？」

「そうそう。TVの影響を受けたるみたいで、俺が旅に出たみたい
なことになってた」

「じゃあ、さながら駆け落ちね」

「冗談はやめてくれ。そんなこと言ったら、マジで信じちまう」

雫は「でしょうね」と同意すると腕をかえすと時計を見た。

「そろそろ、帰りましようか。時間が時間だし」

雫に言われて春佳も携帯で時間を確認する。時刻は21時を少し回

っていた。

修行を始めてから約3時間は経ったようだが、感覚的にはまだ1時間ぐらいだった。

空を見上げると木と木の間からいくつもの星が見える。

(ここ、元から真っ暗だからこんな経ってるなんて、気付かなかつたな)

「暗いし送ってくよ」

「そうね、良い心掛けだわ」

「はいはい。…家ってどっちだっけ？」

「こつちよ」と言うと雫は歩き始めた。春佳はその後について行く。しばらく歩いていると雫が口を開いた。

「横に来なさい。後ろにいられると話ずらいわ」

「ほいほい」

(これで「私の後ろに立つと危険よ」とかだったら、ゴル 13つぼくて面白かったんだけどな)

春佳は歩く速度を早めると、雫の隣に並んだ。

「ねえ、あなたはケンプファアの存在についてどう思う？」

「ケンプファアの存在?…んーいきなり訊かれてもなあ。何らかの理由で戦わなきゃいけないくて、その参加資格がケンプファアに変身出来ること、だとかは?ちょっと、マンガっぽいけどさ」

「そうね、それは私も考えたことがあるわ。ケンプファーに変身出来ることが資格があるって。でも、それだと何を基準に選ばれているのかが不明だわ」

「確かに…」

もし頭が良いやつだけが選ばれるなら、自分は論外だ。テストで上の方にいったことはなく、基本的に真ん中。頑張って勉強しても真ん中。はつきり言って努力したのに実らなかった時はホントに泣きたくなった。

唯一努力しなくても良い成績なのは体育ぐらい。昔から運動に関しては得意で、始めてやるものでも見よう見まねでやると出来てしまう。そのお陰で、今までで体育の成績は5から下にいったことはなかった。

「あ、もしかして…運動能力に関係があるんじゃないか？」

「それだとしたら変身した時に、運動能力を上げる必要性がないわ」

「ああ、確かに…つか、女が男の子になっちゃった！？とかないの？」

「……………」

ふと思ったことを質問すると、それは考えたことがなかったのか彼女は黙った。腕を組むと考え始める。

雫が歩くのを止めたので春佳も止まり、雫が考え終るのを待つ。しばらくすると考えがまとまったのか、口を開いた。

「男から女の子に変わる人が現れたのは、ごく最近よ。第一にあな

だが初めての人のよね」

「……………」

(初めての人って…言い方が…ヤバい)

雫の言ったことに童謡して、あたふたする春佳。そんな春佳を見て彼女はフツと笑う。

「急に落ち着きなくなったけど、“初めて”って言葉がどうかしたの？」

「いや、なんでもない…」

「なんでもないってことはないでしょう？さつきから、目も合わせたくないし。もしかして、トイレでも行きたいの？」

「違っって…ただ」

「ただ　なに？」

雫はこのやり取りを楽しんでいるのか、妖艶に笑っていた。どうにか話をずらす為に話題を出した。

「そんなことより、家はどこなんだ？」

「それはさっきの話より大事な事なのかしら？」

「ああ、大事だ！早く家まで送って、母さんがまた暴走する前に変な誤解を解きたいんだ」

「私との駆け落ちのこと？」

「だから、違うって…それじゃなくて」

「じゃあ私の初めての話？」

話をずらしたかと思ったが、雫はまた話を戻した。「言い方がエロかった…」なんて言えるわけではないので、話を変えようと春佳は頑張る。

「…俺が旅に出たって話。ホントいい加減怒るよ？」

冗談半分で怒ってみたが、やはり冗談で言っていると分かっているのか、雫の態度は変わらなかった。

「……………」

「まあ、いいわ。ここ、私の家だからもう帰ってもいいわよ」

雫は腕を組んだまま、自分の後ろにある家を指さした。

彼女の後ろにあったのは、一軒家だった。大きさは普通のよりちょっと大きめで、一軒家ならではの庭があった。

ざっと見た感じ、金持ちそうな家だった。

「へいへい。ありがとうございますか！…」

「何かお礼して欲しいの？」

お礼と聞いて振り向きそうになったが、何とか堪えた。何となくここで振り向いたら、よくないことが起きる気がする。なので、振り

向かずに手を横に振りながら立ち去ることにした。

「いいや。早く帰りたいし、ちゃっちゃんと帰るわ」

後ろから「…そう」と声が聞こえてきた。

しばらく歩いたあとに「…はっ!」となった。

(もしかして…俺って美味しいとこ逃した感じか!?)

少しお礼の内容について気になったが“ 栗先輩に限ってそれはしないだろ ” という結論が出たので考えるのをやめた。

「さて、急いで帰りますか」

歩くのをやめて家に向かって走り出した

八章と1/2『修行』（後書き）

誤字確認しましたが、まだあったらすいません（<|>）
若手の至りのな感じで許してくださいm（|）m

本編より先にこっちが完成してしまったので、こっちを先に掲載します。

遅れてしまって、すいませんm（|）m

これは本編では語らなかつた、春佳の修業の話です。物語りで少し出ますがここまでではつきりと出ません。

本編の方はもう少しで投稿出来ますんで、もう少しお待ちを（；>

|<:;)）

九章 『決意』

見上げると天気は昨日と同じぐらい晴れていた。雲一つない青空。俗で言う快晴。こんな気持ちいいぐらいスッキリした良い日は、テンションを上げたくなる。だが、またしても全然上がらないでいた。（なんだろう…：ケンプファーになってから、良いことが一つもないな……）

ケンプファーになる前と後を比較してみる。

なる前　平凡な高校生。運動神経以外ほぼ平均的。

誰かと付き合ったことはなく、特殊な校則のせいで女の子との絡み無し。

なった後　何故か自分が女の子になれる。理由が分からないのに戦えと言われる。

縁が無いと生きていた、雫と仲間になった。修業という苛めを受ける。

友達が倒すべき敵らしい。

「……………」

正直、疫病神でもどっかで拾って来てしまったんではないかと思うほど、最近ついてない。まあ、良いことと言えば…：女の子の裸がいつでも見られる。自分の身体だが。しかし、なるべく見ないようにしている。理由は簡単　自分の身体見て興奮するとか変態じゃないか。それにそれをしてしまったら、もう男として生きていけない気がするからだ。

因みに二度の鼻血に関しては、黒歴史として心の中に封印した。本当にもうこういうことが起きないことを祈る。

「はあ……」

春佳の口から長いため息がこぼれた。

毎日、使っている通学路なのに今日はいつもと違う気がする。

原因は何となく分かる。おそらく気持ちの問題と姿だろう。今は変身してケンプファー、つまり女の姿でいる。

なんで男の姿じゃないかっていうと、少し前に色々と問題が発生し、今日は女の姿で登校することにしたのだ。

それはいきなりかかってきた一通の電話が始まりだった

プルルルル

携帯電話の着信音が“さっさと起きて俺を確認しろ”と騒ぐ。

ナルシスト感がウザいが音からして電話なので、しょうがなく出た。

「は……い……どちら様ですか？」

「おはよう、南君。まだ寝てたの？」

「んああ？」

携帯を耳から離して時間を確認する。只今の時刻：8時15分。

今日が休日ならまだ寝てても大丈夫な時間。その反対に平日なら遅刻ギリギリの時間。あと15分で本令の鐘が鳴りアウトだ。

「あーやっべえー！完璧寝坊したっ。雫先輩、モーニングコールあざっす！」

携帯電話を片手にタンスから制服を引っ張り出した。着替えるには携帯が邪魔だが、ここで「じゃあ…着替えるから、切るわ」なんて

言ったらあとでなに言われるか分かったもんじゃない。肩で挟みながら話すことにして、着替えを始める。

『生徒会副会長なのに困ったものね。毎回遅刻ギリギリだなんて。私はそのために電話したわけではないのに』

『えっ？なんか俺に用事？』

『あなたの友達、瀬能ナツルについて 言っ てなかつたけど彼は私たちの敵。つまり、昨日の青のケンプファーよ』

『…えっ……？』

『それが昨日話した、今日楓を奪還に来るかもしれない。その意味分かる？』

(ま…まさか、「彼もあなたと同じよ」ってのはこのことだったのか…じゃあ)
このあとの言葉は分かっている。だが、それを最後まで口にしてしまったら事実になってしまふ気がした。だから、考えるのをやめたが、雫は春佳の返答を待たずに真実を言い切った。

『倒さなければいけないわ』

『いや、でも…実はそいつはナツルのくりそつで……』

『全て事実よ。だから、あなたは戦いに参加しなくていいと言ったの』

『……………』

雫の言っている意味が分からない。彼女の口から紡がれる真実が頭に入っていない。

ただ「どうしたらいいんだ…」と迷う自分しかない。

ここで悩まず答えを出せたら、格好いいのになんて思うがそんな簡単なことではない。ナツルをやらせはしない、ということは即ち、ナツル側に付き雫と敵対することを意味する。だが、そんなことも出来るわけなく『友達は…倒したく、ない……』と言葉を絞り出すように雫に伝えた。

しばらく二人の間に静寂が流れた。それを破ったのは春佳でもなく、雫でもなかった。

キーンコーンカーンコーン

電話の向こうから、鐘の音が聴こえた。

『…そう。じゃあ、もう授業が始まるから切るわね』

『……………』

春佳が何も返事をしないのを悟ったのか、ぷつりと電話が切れた。

（どうしたらいいんだ…友達に手をかけるなんて出来ない……でも、そしたら　　）

『クソッ！…なんで今なんだよ　　もっと早く教えてくれてたら…』

いきなりなことパニックになりそうになる。自分のちっぽけな頭が嫌になる。

『冷静になったら、どうですか？』

いつの間に起きたのか、ジウサツイタチがそう言った。

『なれるわけねえだろ…なれるんだったらなりたいわ』

『じゃあ、変身してケンプファーになればいいじゃないですか。なれば頭スッキリ、悩み事も即解決!…どうです?』

『薬勧めるみたいに言うなやっ』

春佳は契約の腕輪を眺める。今は何が先決か考えてみる。

(…今は変身しか頼るもんがないか。こいつに相談しても無駄そうだし…)

棚に座っているジウサツイタチを見る。頭が痒いのかポリポリとかいていた。

『ん?なんですか??』

『…今度、洗濯機にぶちこんで洗ってやるよ』

ちよっとした恨みも込めて、そう言った。ジウサツイタチはなんのことだか分かっていないようで、首を傾げている。当然曲がるわけがなく横に倒れた。

『馬鹿か』とだけ伝えると右手に集中する。

腕に力を入れると、腕輪が赤く光始めた。やがて光は全身を包むぐらいまで膨張した。身体が洗い流されるような感触が走ったと思ったらすぐ終わる。光が消える頃には女の姿になった。

『むむ、やっぱり何度経験してもこれだけはやだな』

変身して男から女になったせいか、胸の辺りがもぞもぞする。シャツは今までなかったものに引っ張られて大変な状態だった。

『…ふう〜……』

変身してケンプファーになったお陰か、頭が妙にスッキリしていた。

『…さて、時間もないしさっさと着替えますか』

『どつするんですか?』

『とりあえず、登校することにする。ここで悩んだってしょうがないし』

春佳は下、つまり家を指してジュウサツイタチにそう言った。

『ほら、変身した途端に考えがまとまったでしょう?』

『まあ確かにな。さっきまで悩んだのが嘘みたいだ…』

『あ、男に戻らない方が冷静に考えられますから、元に戻らない方がいいですよ?』

『…男の俺が馬鹿だっということが言いたいのか?』

『ええ。それに春佳さんののは特別製ですから』

『即答しやがったし…』

悔しいことだがケンプファーになると大抵のことはすぐ答えが出る。

だから、考え事には最適なのだ。

いつも通り服を脱ぎ始める。すると、自己主張の激しいものが衣服の下から現れた。

(…女の子の身体って、綺麗だな…。胸なんか触ってもいないのに柔らかそうな感じが)

ポタツと温かい何かが足の上に落ちてきた。ジュウサツイタチから『うわぁ…』と感想が洩れた。

『ち、違っつ！これは、赤いケチャップだ！』

『はいはい、興奮したのは分かりましたから早く着替えて下さい』

『だから、違っつて！のぼせただけだし』

『…もうボロが出るから喋らない方がいいですよ？』

『……………』

両手を口で紡いで、ジュウサツイタチを睨んだ。

『あっははは、可愛いですよ？』

『……………死ねや！このクソやろう！』

第二波がくる前にさっさと着替える。部屋を出るついでにジュウサツイタチを掴むと、ごみ箱に叩き込んだ

「はぁ…思い返すだけで、カオスだ…って急がないとヤバいか」

携帯で時間を確認すると、春佳は学校に向かって走り出した

*

「お、おい待ってくれ！」

ここは日本の星鐵学院にある図書館の一角。そこでニューヨークの路地裏並の脅迫事件が起きていた。額にいきなり拳銃を突き付けられ、戸惑う東田。ビビる東田を無視して、紅音は話を続けた。

「雫の情報と女子部に侵入する方法を早く教える。さもないと撃つ」「はっ…はい！」

東田は彼女の気迫にビビりながら、少しずつ話し始める。それによると、雫は生徒会で校舎の一角を借り上げ、そこに誰も近寄らせていないらしい。おまけにカーテンで中が見えないように閉めきっているんだそうだ。そこまで言うと東田は「あくまで噂の話しだから、間違っても撃たないで欲しい」と懇願してきた。

「俺が訊いたときは、そんなこと言わなかったじゃん」
ふと疑問に思ったことを訊いてみた。

「…それは、金で売ろうと思ったんだ」

「っ！……」

「そんなことはどうでもいいんだ。行き方はどうした？」

「た、体育倉庫の陰だ。あそこは女子部化学実験室の裏なんだ。窓の真下に出る」

「そんなのあったのか」

「二ヶ月前にやっと貫通したんだ。土の処理やらノイローゼになる奴は出るは大変だった」

東田は「うん、うん…」と昔を懐かしむ仕草をした。だが、そんな苦勞話にも付き合っている時間はないので、さつさと話を進める。

「その使い方はどうすればいいんだ？」

「体育倉庫の裏に、散水用の蛇口が埋め込まれている。そっくり外れてトンネルになってるんだ」

「へえ、そうなのか」

「でもまず、女子部に連絡を取って、向こうの出入り口の蓋を外さなきゃならない」

「じゃあ、さつさと連絡でもなんでも、やってもらおうか」

東田の回りくどい話し方に嫌気がさしたのか、また拳銃を額にに向けた。

“流石、拳銃だ”って感じだった。東田の行動はゴキブリの俊敏さに負けないくらい素早かった。女子部と連絡を取るために手紙を書き始めた。

ここ星鐵学院は何故か携帯電話で連絡が取れないように、常時妨害電波が流れている。もちろん男女間で連絡が取れないようにするた

めだ。だが、妨害電波を出すということは、緊急時に電話出来ない。そういうところもおかしいと思うのだが、一番おかしいのは妨害電波については「多少の犠牲は致し方ない」と言い切った校長だろう。そこまでの理由がどこに？ってやつだ。

東田は手紙を書き終わると、矢にくくりつけ女子部側に放った。

「いつも矢文で連絡取るのか？」

「今は緊急だからな。いつもなら帰ってから、パソコンのメールで連絡を取るんだ」

正直な感想としては、今は本当に平成なのか？だけだ。

しばらくすると矢文が返ってきた。そこには「準備を整える。しばし待たれよ」とだけ書いてあった。やることが戦国時代なら文章も戦国時代っぽい。これはわざとなのか本気で書いたのか気になる。最後に（笑）だとかwwを使ってくれると分かるのだが…。とそんなことを考えていると東田が喋り始めた。

「おし。これでいつでも使える。向こうで手引きしてくれるって」

「分かった。少し借りるぞ」

「あ…大事に使ってくれよ？」

「ああ、分かっているって。なるべくそうするから」

壊されるのではないかと心配なのか、東田は不安そうな顔で見えてきた。ナツルは「まあ、なんとかなる」と言い残すと体育倉庫の方に向かって歩き出す。

東田の言うとおり、鉄の蓋を開けてコンクリートの一部を引っ掻けるようにして持ち上げると、人が一人通れるか通れないかぐらいの縦穴が空いていた。水道管を辿って下に降りると、次は横穴のようだ。四つん這いにならないと通れないぐらい狭いので、しょうがなく四つん這いになって進んだ。

「なんだこれは…湿気で身体中はベトベトするわ、土臭いわで最悪じゃないか」

と文句を言ってみたが、そういうことに一々ケチを付けていたら女子部にはいけないので、しょうがなく我慢するしかない。東田が言うには、一応これでも大人気のルートらしい。ホント男共の欲望は恐ろしい。

女子部側の縦穴を抜けると、男女正常交際地下委員会の委員らしき子が待っていた。

「ようこそ。わたしが女子部側の委員の、西乃ますみです」

そう名乗った彼女はけらけらと笑うと顔の前でVサインをした。

「……………」

(これってきつと、最悪だと言ってもいいんだよね…)

ますみは一度ナツルの顔を見たあと、品定めをする人かの如くジロジロと見てきた。しばらくして何か納得したのかうんうんと頷いた。

「うわー、なんか地味な人ですねー。彼女いないんですかー？女子部には覗きに來たんですかー？ひゅーひゅーやるねえ」

「……………」

(怒っていいのかな……?)
色んな意味で大きなお世話。最後のなんて嫌味にしか聞こえなかったし。

向こうから女の子が走って近付いてきた。顔を見ると紅音だった。彼女はますみを発見すると、ぎよっとしていた。

「あー、もしかして、あの人ってあなたの彼女さんですかー？」

ナツルは首を横に振った。

何故ここで声に出して「違う！」と言わなかったかは……うん、察して欲しい。

「なあ、どうなってんだ。あたしにコントを見せてるつもりか？」

紅音はますみに聞こえないようナツルの耳元で囁いた。

「なんか女子部の委員なんだって」

「なんだそりゃ？ただの悪いギャグだ。どうする？」

「どうにもできねえよ。俺なんか下手したら、ここで変身しちゃうんだぞ！」

「それは面白いことになるだろうな」

「笑い事じゃねえからっ！」

ますみが手招きをしたきた。

「はいはい。話はこちらまでにして…ちゃっちゃと案内しますよー。まずはこっちです」

歩き出した彼女のあとについて行く。途中で「着替えを覗こうなんて考えちゃダメですからねー」なんて言ってきたが、そんな暇はない。

校舎裏を抜けると広場に出た。そこには噴水やら変なオブジェなどがあつた。

（ホント男子部とは大違いだな…）

そんな感想が洩れてしまうのも当たり前で、この学校は元は女子校というのも関係して、女子部側の優遇度はハンパない。少し前に「男子と女子を平等に運動」が何度か計画されたが、ことごとく潰されていった。

グラウンドでは体育の授業

が行われていた。今日はハードル走なのか、ハードルの準備をしていた。

なるべく他の生徒に見つからないように進んだ。

「なあ、もつと急げないかな？」

とますみに言った。授業中なら会長も教室から出てこられないけど、休み時間になったらやつかいだ。その前に人質を奪還したい。

「分かりましたー。こっちです」

女子部の校舎の裏に、視聴覚及び音楽専用校舎、通称専門校舎が建っている。東田情報によると、その三階の隅を生徒会が臨時で使っているらしい。

「ここに生徒会が借り上げた部屋がありまーす。けど…」

ますみは首を傾げる。

「なんの用があるんですかー？」

「えーっと……」

自分的には話しても良いのだが、何せ事が事だ。「沙倉さんが生徒会長の三郷雲に誘拐されたんだ！」言っても信じないだろう。むしろ「それって……お泊まりとかそういうことじゃないですかー？」と言われるだけだ。流石にケンプファーのことは言えないからそう言われたら返しようがない。

ますみを見ると、好奇心いっぱいですとばかりに胸の前にメモ帳とペンを持っていた。

（んげ……いつの間に……）

「ねーねー、教えてください」

戸惑うナツルの代わりに、紅音が言った。

「教えてやるよ」

「やったー」

「あそこ」

紅音はますみの背後を指さす。

「えー？」

ゴッソ

振り返ったますみの後頭部に、紅音は拳銃のグリップを叩き込んでいた。「きゅうっ」とか呟きながら、ますみは崩れ落ちる。

「おい、いいのか？」

「正当防衛だよ」

「……………」

(いやいやいや…その使い方は絶対おかしいだろ……)
とにかく邪魔物はいなくなったというか、退場したので先を急ぐことにした。極力足音が響かないように階段を上がった。

「あそこだな」

紅音は廊下の奥の教室を指さしてそう言った。
突然ナツルの身体が白くなる。紅音の力によって、ケンプファーへと変身した。

紅音が駆け出そうとするのを、慌てて止める。

「危ねえぞ。窓に身体をさらすな」

こここの廊下は第一校舎に面している。しかも離れているが、生徒会室から見えるようになっていたのだ。恐らくこの利点があるから、雫は借りたのだろう。

「まあ、任せな」

紅音は身体をかかめると、廊下の壁に身体を密着させ、窓の死角を

猫みたいに慎重に歩いた。猪みたいに突進するのだけが能じゃないらしい。

「ほら、おめえも早く来い。さっさと行くぞ」

「ああ、分かってるって」

慌てて彼女と同じようにした。

やがて教室に到着した。手を伸ばしてドアノブに触れた。ゆっくりと回転させる。

「お、鍵がかかってない」

「早く開ける」

言われるまでもない。ドアを開け放つと、『ミッション・インポッシブル』のトム・クルーズ並に飛び込んだ。

「沙倉さんっ！！助けに来た……よ？」

教室の中はがらんとしていた。

椅子もなければ机もない。あるのは掃除ロッカーだけ。もしやと思いつつロッカーの中を確認したが、沙倉の姿はなかった。

「沙倉はどこだ？」

俺も紅音も口をポカンと開けていた

*

(そろそろかしらね…)

雫は手首を裏返すと時計を見た。9時20分。

自分の予想が当たっていけばそろそろ敵のケンプファーの瀬能ナツルと三嶋紅音が、生徒会で貸し切った一室に着く頃だろう。誰かが来たら連絡を入れるように言っているもので、あとは連絡を待つだけ。

「じゃあ、三郷さん。ここ解いてくれますか？」

「はい」

雫は席を立ち、黒板に向かって歩き出そうとすると、コンコンとドアをノックする音が響いた。皆が「なんだ急に…？」と疑問に思っている中、雫だけは(…やっぱり来たのね)とため息をついた。静かに開いたドアから現れたのは生徒会委員だった。

「すみません…生徒会長の三郷先輩いますか？」

丁度立っていたので彼女の元に行く。

「来たの？」

「はい、女の子二人組が…」

聞かれてはいけないので、二人にしか聞こえない程度で話す。彼女が言うには女の子二人組が来た。それも片方は拳銃を持っているとのこと。これは確実に人質の沙倉楓を奪還しに来たのだろう。もし雫に奇襲をかけに来たのなら、借りた教室に現れるのではなく、帰り際に生徒会室に来るはずだ。

「先生、生徒会のことトラブルが起きたみたいなので、行ってき

ていいですか？」

「あ、はい。いいですよ。三郷さんは大変ですね。じゃあ、この問題は三郷さんの変わりに」

いきなりのことでざわついていた教室が、私は当たりたくないとはかりに一気に静かになった。

「あなたは教室に帰っていいわよ」

「あ…はい」

教室を出ると真っ直ぐ四階に向かう。ここは二階なので階段を上らなくてはいけない。なので、一段飛ばしで上がっていく。

楓がいる教室に着いたところには、既にドアが壊されていた。
(これだとドアノブの修理が必要ね…もう少し大切に使ってくれないのかしらね)

ドアを開けて中に入ると中には、変身したナツルと紅音がいた。短剣を出現させ、楓の前に投げた。座る椅子の前に突き刺さる。

「おやおや。ケンプファーのくせに、なんて行儀の悪い」

現れないと思っていた雫が現れたことに余程驚いたのか、たじろいでいた。

「優等生が授業をサボるなんて外見が悪いから、生徒会で用事が出来たことにしてるわ。それにね、下にいた女子生徒、生徒会の人間なの」

ナツルたちは納得がいったのか、呆けていた顔からいつもの顔に戻

った。

「それにしても 勝負の日付は明日。前日にやって来るなんて、感心しないわ」

「何綺麗事言っつてやがる。勝ちやいいんだ」

紅音が罵ってくる。相変わらずの口の悪さだった。

「人質取る方がよっぽど感心しねえよ。あたしの相棒は楓にご執心だ。取り返すに決まっつてんだろ」

「そうね。楓もナツルさんのことをたくさん話していたわ。女のあなたを気に入ったみたい」

ナツルは雫に言われたことがショックだったのか、悔しそうな顔をした。でも、言ったことは本当でデートが決まった時なんて、どうしたらいいかとか、どんな服装したら可愛く見えるかとか色々訊かれたあとに、永遠と女ナツルのカツコいい話を聞かされたのだ。だから間違っつたことは言っつてはいない。

とりあえず、楓から注意をそらすために投げた短剣を手元に戻すことにした。軽く指を動かすと鎖付きの短剣はジャラジャラと金属が擦れる音を出しながら戻ってくる。

「今日は帰りなさい。勝負はあくまで明日。見逃してあげるわ」

こんなことで帰るとは思えないが、学校では戦いたくはない。もしここで戦って誰かに見られたりしたら、ケンプファーという存在が世間に露呈してしまう。いけないということはないが、後々のことを考えると、それは厄介なことになるのでなるべく控えたい。

ナツルは引き返しそんな雰囲気だったが、彼女だけは違った。

「敵の情けを受けちゃいられねえよな」

「あら。じゃあここでやる？」

売り言葉に買い言葉　その言葉通りに戦いが始まった。

「当然！」

と紅音が言った瞬間、銃を向けてきた。

来るのが分かっている、狙いも分かっているれば避けるのは容易いものだ。床を蹴ると二人の背後に飛ぶ。弾丸は雫がさつきまでいた所を通過した。

「こっちよ」

と言うと同時に短剣を二人に投げた。

「どわわわわっ！」

二つのうち一つの短剣がナツルの服を切り裂いた。残りは紅音の方だが、彼女はとっさに銃を撃って攻撃を防いでいた。ナツルと目が合う。

「見とれてんな！　ずらかるぞ」

「やるんじゃないのか!？」

「場所が良くねえ!」

逃げようとする二人に戻した短剣をまた投げる。だが、紅音が銃で短剣を叩き落とすのでなかなか当たらなかつた。ナツルと紅音は教室から出ていった。投げた短剣を戻すと袖の中に締まった。

「……………」

(やっぱりこうなったわね。南くんはどうするのかしら) まだ登校していないであろう春佳のことを考えたがやめた。雫は戦いだけに集中し、逃げた二人を追跡することにした。廊下に出ると声がする方に走り出す。階段に近付くとナツルたちの姿が見えた。

「逃がさないわよ」

鎖付きの短剣を投げた。そのまま、鎖を使い追跡する。だが、あまり伸ばすと操作がしづらいという欠点があるため、ある長さまで伸ばしたあとは、一度手元に戻していた。三階に下りた辺りで、足音が消えた。

「……………」

どこかの教室に隠れたことは、わかっているが素直にドアを開けて中に入る気はさらさらない。そんなことをするのは正直者かただの馬鹿だけだ。相手は拳銃なのだからドアに近付いただけで、撃ってくるだろう。

とりあえず、目隠しの意味も含めて廊下の壁や天井に短剣を投げる。勢いよく刺されると壁を破壊した。それと同時に煤塵が辺りに舞った。ドアの開く音と相方を怒鳴る声が聞こえてきた。

「やっぱり教室に隠れていたのね。でも、そこは視聴覚室…真つ暗で無意味なところね」

声が聞こえてきたところに投げる。もう片方は自分の位置が向こうに悟られないように、違う方向に投げてから曲げて目標のところに向かわせる戦略をとった。

相手は雫がどこにいるのか把握出来ていないのか、手当たり次第に銃を乱射している。

「ナツルっ。そんなとこに隠れんな！ あのクサレ女が見えねえ！」

と煤塵に向こうから聞こえてきた。すごい言われようである。

「すごい言われようね。でも、大きな声で話してくれるのは助かるわね」

弾の飛んでくる方向だけでは、相手の場所を完璧には把握出来ないが、ここまで大きな声で話してくれると容易に二人のいる場所が分かった。

短剣を手元に戻すと、声が聞こえてきた方向に投げる。

当たった感触はあったが、擦った程度だろう。刃先に血がついていた。

「もっと近付こうかしら」

今、雫がいるところは階段を上がってすぐの所。ナツルたちがいるのは、ここから右の廊下の奥。距離にして20mぐらい。近いと言えば近い。今はケンプファーに変身しているので、走れば一瞬で向こうに着くだろう。

移動のために攻撃を止め、相手の出方をみる。どうやら敵の二人も同じ考えなのか、攻撃はしてこなかった。

(…どこかに隠れたようね)

雫は目を瞑って集中した。微かだが走る音が聞こえてくる。武器を構えると聞こえてきた方向に歩き出した

*

三年一組のドアを開けた。男子部とは違いカラカラと簡単に開く。意外と静かに開いたので、(入った途端に皆と目が合うということはないだろう)と思っていた自分が馬鹿だった。入って顔を上げた瞬間、クラス全員+教師と目が合った。

「すみません、遅れました」

「」「」……………「」「」

(なんだこれは…空気が重い…………)

妙な重圧感を感じながら、とりあえず自分の席に向かうことにした。椅子に座るまでの間、痛いくらい背中やら前やら全身でピリピリとする。

自分の席の隣を見ると雫はいなかった。

「あれ？」

「三郷さんならいないわよ」

腰に手が回されて後ろから抱き付かれる感じになる。

彼女はぐいぐいと背中に柔らかいものを押し付けてきた。

驚いて振り向くと、そこには前日も抱き付いてきた千沙がいた。

「ちよっ…千沙さん、なにやってん…ですか？」

「何って…朝の包容よ おはよのちゅうとかいってきますのちゅ
うとかとどろ意義の」

と耳元で囁くように言った。

「ちゅう…って……そういうことではなくて、席立っていいんです
か？って話…です」

「え…？そんなのはいいに決まっているわ」

「いや、ダメですから…とりあえず、南さんも鶴見さんも座って下
さい」

授業中なのに立ち歩く千沙と、遅れて来たのに授業の妨害をする春
佳に注意をすると出席名簿に何やら書き始めた。
春佳たちは「はい」と返事をするので席に着く。

「なんで南さんは授業に遅れたんですか？」

「それは学校来るときにチャラ男に絡まれたんです。それで学校に
着くのが遅くなっちゃって…ってなんで千沙さんが隣にいるんです
か？」

「それは、トツプシークレット 知りたかったら」

リップを付けているのか、ぷりつとした唇が近付いてきた。いやい
や、意味分かんないからと彼女の顔を掴むと押し返した。

「ひつどーい」

「別にひどくないです。それより…なんで雫先輩、じゃなくて雫さんはいないんですか？」

「ああ、それはね」

千沙が雫がいない理由を説明しようとする、先生からストップがかかった。

「そこ話さない。じゃあ南さん。この問題を解いてください」

(うげっ…)

ついに一番避けたいことが訪れた。なぜ一番避けたいかという、何が書いてあるのか分からないからだ。いや、字が読めないとかそういうことではなくて、ここは3年。自分は元はというか現役2年生なわけで、まだ習ってもいない範囲をいきなり解けと言われても正直困る。それもあと一年後に受ける授業内容をやっている、何が何だかさっぱりだ。

「…すみません。分かんないです」

「はあ、少しは考えなさい。即答はいけませんよ」

分かりませんと即答してしまったせいで、回りからクスクスと笑い声が聞こえてきた。

(く、分かんないのが当たり前なんだから…しょうかないじゃん…)

何だか恥ずかしくなってくる。

コツンと紙くずが頭にぶつかって机の上に落ちた。なんだろうと思
い中を開けてみると、『あゝ、顔が赤くなってる』（^q^）（笑）
』と書いてあった。

「なんだこれは!？」

（こ、これが…女の子同士の手紙のやり取りなのか）

「そこにびっくりするの？」

隣を見ると千沙が驚いていた。

「ん？」

「もつと下だよ…下」

彼女が言う通りに目線を下に下ろした。そこには『三郷さんは生徒
会の仕事に行っただつきり、まだ帰ってきてない』と書いてあった。

「なんだってっ!？」

ガタン

「授業中にどうしたんですか？席に座りなさい」

この内容と朝の電話　二つの情報からしてもう戦いは始まっている
かもしれない。雫がナツルに連絡を取りたいが、雫は携帯を持っ
ているのか知らない。ナツルは携帯を持っているが基本家に置いて
あるという、第二の子機状態。もはや携帯ではない。

（くそっ！とりあえず学校来たのが間違いだっただのか…）

拳を握り締めた。

「南さん。席に着いてください」

さつきから教師の言ってることを無視しているせいで、教室中がざわざわし始めた。

春佳はそんなことはお構い無しに立っている。

「どつすれば…」

自分的には戦いたくない。でも、雫はやめてくれと言っても戦いをやめてくれないだろう。だからと言って、雫の敵に回るのは気が進まない。出逢ってほんの一週間ぐらいだが、何となく雫のことが分かってきたのだ。

“俺はどうしたいんだ？”と心の中で訊いてみた。もしかしたら理由が欲しかったのかもしれない。妥当な理由が。だが、簡単には出てこなかった。

「ポジティブだ！…わ」

頭の容量を越えたことはいくら考えたって出ないらしい。こういう時はポジティブシンキング。

(前向きに、最初に思ったことをやってみればいい。そうすれば、自ずとなんちゃらってね)

「先生！お腹痛いんで、保健室行ってきます」

了解を得る前に走り出した。後ろから「ちょっと待ちなさい！」と聞こえた気がしたが空耳だということにした。これこそポジティブシンキング。いや、俺クオリティ。

行き先は楓がいる教室。恐らくその辺で戦っているだろう。

「俺がこの戦いを止めてやるっ！」

春佳は足に力を入れて走り出した

九章『決意』（後書き）

すいません。読み込みのあまりの遅さに寝落ちしましたm（
とりあえず、完成です。

でも、急いで書いたせいで内容がとてつもなく荒いです（<|>

（汗）

また、自分で読み直したときに新しくしてupします）、（
すいません（*TOT）

次回は十章『参戦』

春佳が三人の戦いの中に入っていくのですが、どんな風になるの
でしょうか…

十章『参戦』

静寂の廊下を二つの音がこだまする。階段をかけ降りる音と何かが鋭利な物で傷つけられる音。この二つは対になるように響いていた。

「窓から下に飛び出そう！」

雫の攻撃から逃れるために前を走っている紅音に提案した。だが、提案というには声が大きかった。

「おめえ、見せ物になりたいのか。バレたらまずいだらうが！」

「ここで戦ったら不利だろ！」

「しょうがねえだろ。雫もそれを計算してんだ！」

お互いすぐ近くにいるのに怒鳴り合うナツルと紅音。雫に会話が聞こえてしまうのではないかという考えはもうない。どうせ向こうはこっちがどうしたいか分かっている。今も彼女の企みに引っ掛かり、戦い難い校内で戦闘をしているのだ。

ナツルたちはある場所に向かってひたすら走る。背後からうねうねと短剣が追ってくる。牽制で紅音が発砲すると、短剣は戻っていく。その繰り返しをしていると一つの教室に着いた。

「やった、開いたぞ！」

急いで扉を開けて、教室に転がり込むように入る。中はまたしても暗かった。

「何にも見えねえ。ナツル、近くにスイッチがあるだろ」

何も見えないので手探りで電気のスイッチを探す。それは入口のすぐ横にあると相場は決まっているので、壁に近づく。

(…あ、あつた。これで明るく…)
スイッチを入れる。

「…つかねーぞ、これ」

「ちゃんと押してんのか!？」

スイッチの接触不良ではないかと思いカチカチとON・OFFを繰り返す試すが一向に教室は明るくならない。

「押ししてるけど、つかねえんだ。たぶん、改装中の大教室だからどこかで配線が切られてるんだ」

「ちっ、カーテン開けるか」

紅音が窓際に向かって歩いて行くのが微かに見えた。恐らく暗闇に目が慣れてきたのだろう。

「…おいっ、これカーテンじゃねえ。板が打ち付けられてるぞ!」

ナツルはツアウバーを発動させた。炎が板を舐め、焦げた破片が床に落ちる。すると、裂け目から日光が差し込んだ。

「っげ……………」

ナツルと紅音は同時にうめいた。

大教室の中に、荷物が積み上げられていた。ざっと見るだけで相当な量だ。それも机とか椅子とかではない。ロッカーやら流し台やら野球用具やら、色んなジャンルの物があつた。まるで倉庫。他の言葉で例えるならごみ捨て場（粗大ごみ）だろう。

「そつよ。倉庫なんだから」

背後から雫の音がする。振り向くと、入口に彼女の半身が見えた。

「女子は改装中。ここは倉庫代わりに使われている。今の私には、絶好の舞台ね」

「クソッ……」

紅音がこの状況に悪態をついた。

確かにこの状況はこちらには不利だ。普通なら迷路ばりに入り組んだ部屋は、鬼ごっこと同じ原理で逃げる側が圧倒的有利だ。だがどんなところにも侵入でき、おまけに操作することが出来る雫の短剣には、ただの利点でしかない。逆に直線的にしか攻撃出来ないこつちは、武器が思うように使えないので、不利だ。

「…陰険女が。追い込みやがったな！」

「勝手に逃げ込んだのはそつちよ」

「おめえのその言い方が、前から気に入らねえんだ！」

「犬みたいに吠える女性も、我が校にふさわしくない」

「ざけんな!!」

売り言葉に買い言葉。

ついに切れた紅音は雫に向かって走り出した

*

「くそっ…どこにいんだよ!」

ケンプファアの いや、雫とナツルたちの戦いを止めるため教室を出た春佳は、楓を監禁している教室に来た。だが、ここには真ん中にぼつんと椅子に座った楓がいるだけだけ。肝心の彼女たちは誰一人としていなかった。

(ここにいないということとは…もう始まってんのか…)(
背中に嫌な汗が流れる。早くしないといけないという焦りがせり上がってくる。

「はぁ…落ち着け…俺は今ケンプファアなんだから、考えれば答えが出てくるはずだ」

何か手掛かりがないか辺りを見渡すと、何かに削られたような痕があった。それを目で追っていくと、廊下に向かうにつれて傷痕が増えていた。

(こつちに向かったってことか?)

雫のメッセージという核心は無いが、時間も手掛かりも無い。今はこれに賭けるしかない。

春佳はドアを開けた。すると戦闘の痕が階段の方に向かっていった。

「よし、読みが当たったらしいな…急がねえと」

傷痕や弾痕の量からして戦闘は激化していると考えてもいい。急がないと決着がつきかねない。

傷痕を辿って下の階に降りる。戦っている音は聴こえてこないが、もうここはいわゆる戦場。壁に張り付くと注意して辺りを見渡す。

(…ここも違うのか?)

戦闘をしているには静か過ぎる。自分の記憶が正しければ、ナツルの相方は銃を使っていた。だからどこから発砲音が聴こえてきてもおかしくない。

傷痕以外に何か手掛かりがないか探した。すると、下の階から銃声が聴こえてきた。

「くそつ、この下だったのか!」

床を思いつきり蹴ると、階段に向かう。一段一段降りている暇はないので、ある程度まで降りたら跳んだ。

(っ…!と思つたらあんま痛くないのな…)と感想がこぼれそうになったがそんな状況じゃないので口を紡いだ。

階段を降りるにつれて、銃声の他に何かが切り裂かれる音も響いてきた。

「ここだな…」

階段を降りて一階まで来ると、一つの教室に辿り着いた。

扉を開けて中に入ると、そこにはやっぱり雫とナツルたちがいた。

「…ちよつと待ってー!」

そう叫ぶが誰にも届いていなかった。

そんななか、ナツルが紅音を踏み台に高く飛んだ。そして、天井に向かってツァウバーを使った。

(なんで天井に向かって…)という疑問はすぐに晴れた。

チリリリリリリ

火災警報器が、金だらいを坂道に落としたりみたいな音を発した。火事でもないのに「火事です。逃げてください」と騒ぎ立てる。それと同時にスプリンクラーが破裂した。教室の隅から隅まで滝のような水を降らせる。

「うわっ、冷たっ」

スプリンクラーから出る大量の水のせいで、全身が一瞬で濡れることになる。

ナツルの「紅音っ！」というかけ声が聞こえて、雫の方を見る。

雫の方に走り出した紅音は、飛んできた短剣の切っ先をうまくかくぐった。やはり濡れたせいで彼女の操る短剣は動きがいつもより鈍い。投げたもう片方の短剣は、ナツルが放ったツアウバーに弾かれた。

紅音は雫に突進をしかけて、彼女を押し倒すと額に銃口を向けた。遠い彼女が引き金を引こうとしているのが見えた。

「くそっ、マジかよ…間に合ええ!!」

人指し指と中指を前に突き出し、ピストルの形にする。

魔法ver2.0。光の玉を銃の弾丸みたいな形状に圧縮し、高い貫通力と速さを得られる。

片目を瞑って狙いを定めた。成功確率は70%。だが、雫を助けるには普通の光の玉では間に合わない。

(一か八かだ…当たってくれ!)

光の弾丸をイメージしていると、ふとジュウサツイタチに言われた

ことが頭を過った

『玉ではなく弾をイメージしてください。因みにここで言う“たま”ってというのは弾丸のことです』

『…分かってるよ。つか、普通の弾丸でいいんだよな？』

『普通の弾にするんですか？…いつそのことライフルの弾丸とかにしてみてもいいかがですか？』

『そんなことも出来んのか？』

『はい、出来ると思いますよ。普通なら銃口だとかバレルの長さの問題で無理ですが、春佳さんの場合は魔法ですから』

ジウサツイタチは短い腕を伸ばし、バーンと言った。

『…お前、よく知ってるな』

『まあ、予備知識ってやつですよ』

『……………』

『春佳さんなら出来ますよ。きっと』

辺りに散らばる光の粒子を弾丸の形に形成するイメージをすると、ぼやあと弾丸が形成された。あとは、それに回転を加えて目標に向かって放つだけ。

「当たれー！ー！ー！」

ありつただけの願を込めて撃った

ガキンツ！

「んなつ！？」

見事紅音の拳銃に当たり大破した。頭身は何かに撃ち抜かれたようにぽっかりと穴が空いていた。

紅音が放った弾は雫から外れ、彼女の耳元に着弾した。

「ナツル…おめえ、何やってんだ！」

紅音のドスの効いたハスキーボイスが教室に響いた。

「…止めようとは思ってたけど俺じゃない！」

「じゃあ、誰なんだ！？」

「よっしゃ、当たった」と叫びたいが我慢。相手に気付かれる前に次の行動に出る。

さつきとは違い大きな光の玉をイメージする。

ぼわあと手の上に球体が現れた。それを急いでナツルたちに向かって放った。

「うわっ…！」

目眩ましで放った光の玉が空中で爆発した。板で隠され太陽の光が届かなかった真つ暗な教室が、一気に明るくなった。その急激な変化に耐えられなくなり、ナツルも紅音も腕で顔を覆う。雫も例外な

く顔を覆っていた。

(すみません…栗先輩)と心の中で謝るとダツシュした。まずは近場のナツルを狙う。懐に入ると回し蹴りを入れた。

「ぐはっ…！」

見事溝内に入ったのかナツルから苦痛の音が溢れ、壁まで飛んでいった。

「ナツル、どうした！？ クソツ、目が…！」

二人の目が見えないうちに追い打ちをかける。紅音に接近すると銃をたたき落としにはいる。

だが敵が直ぐ近くに来たことを察した紅音は横に跳んでかわした。

(くっ…！逃がすか！！)

すかさず紅音がいる方向に向かって跳ぶ。

「クソツ…誰だ！」

「……………内緒かな」

そう紅音の質問にボソツと答えると蹴りを叩き込んだ。

「っ…！」

腕でガードされたが、蹴りの勢いを殺すことは出来ずに積み上げられていたロツカーに叩きつけられた。

「ふう……………」

終わったとばかりに身体に溜まっていた息を吐いた。

「…来たのね」

背後から雫の声が聞こえた。

「んまあ、はい」

雫を見ると目が合った。

ずっと見ているのもなんなので、視線をずらした。

「一応、ありがとうとだけ言っとこうかしら。でも」

「その言葉は無しで…」

「なんで？ 敵に情けでもかけるつもり？」

「いや、そうじゃない…ただ戦ったらどっちかが負けるわけで…」

「そんなの戦いだったら当たり前のことよ。今倒さなかったら次は負けるのはあなたかもしれない」

「……………」

「何も言えないようね。この子たちは私が倒すわ」

雫はゆっくりとナツルに向かって歩き出した。

「何かしら？」

「いや、ナツルたちを倒すのをやめて頂きたいなと」

春佳は霰に出ると手をピストル型にし向ける。こんなことしても霰の考えは変わらないと分かっている、これしか思いつかなかったのだからしょうがない。

「そんな物で私の足止めが出来るとでも思っているのかしら？」

「出来ますね。さつきこれの速さと貫通力は見たはずですから。だから、無用な戦いはしないはずですよ。それに、霰先輩と俺は仲間ですから」

と今度は霰から目をそらさずにそう言った。

「……………」

何か言うわけでもなく、ただお互いに見つめ合う。

彼女はふつと笑うと変身を解いた。手に持っていた短剣が消える。

「その二人の目が覚めたら、楓は開放するわと伝えておきなさい。」

「ええ！？俺がか？」

「当たり前じゃない。あなたが戦わないで欲しいって言い出したのだから」

「いや、だけど…俺もケンプファーでしたって言うのか！？」

「ええ、そんなとこね。じゃあ、私は生徒たちの避難があるから先行くわ」

「ちよっ…」

雫は春佳に背を向けると入口に向かって歩き出した。

(これって、ちよっとした戦闘を止めさせた俺への嫌がらせなのか…?)

「だったら、割りに合わねーだろ…」

ナツルと紅音を見ると変身が解けて、元に戻っていた。ちよっと蹴るつもりが焦っていたため思いっきり蹴っていたらしい。起こした後に謝るうかと思っただがやめた。

何故かと言うと 良い案が浮かんだからだ。

ポケットからシャーペンと小さく千切られた紙を取り出した。

「まさか、これがこんなところで役にたつなんてな…」

そうこれは千沙から貰った手紙。あの時は急いでいたので、制服のポケットにぶちこんだのだ。シャーペンは筆を持ち歩かない主義だから、いつもポケットに入っている。

春佳はその破れた紙に書き始めた。

「内容は、瀬能ナツルと…誰だっけこの子………」

宛名を書きたいのだが、ナツルの相方の名前が出てこない。

(んー…どうしたものか)

「まあ、ええかこれで」と内容を適当に決めると書き始める。

青のケンプファーたちへ

沙倉楓は解放します。

「以上。三郷隼つと…」

手紙の最後に自分の名前ではなく、隼の名前を書いた。あ、はい。ちよつとした嫌がらせですよ
紙をナツルの前に置くと春佳は入口に向かった

*

紅音が力任せに隼を押し倒す。額の真ん中に銃口を押し当てた。

『くたばれクソアマ!』

『やめろ!紅音っ!!!』

彼女はトリガーを引く。だが、発砲音とは別に何か壊れた音が響いた。

「なんだ!?!」

音の発信元を探すと、目の前で何か光った。あまりの眩しさに目を覆う。その瞬間、何か固いものが腹部にめり込んできた。アバラ骨が悲鳴をあげたのが分かった。

『ぐはっ!』

何が起きたか分からなかった。ただ一つ分かることは何か腹にめ

り込んできて、今自分は吹っ飛んでいるということだけ。
(この勢いで壁にぶつかったら、ハンパなく痛いだろうな…)
後ろを振り向くと、もうすぐそこまで迫っていた。
壁にぶつかると背中にも激痛が走った

「ナツルさん!…ナツルさん!」

紅音に呼ばれて意識が覚醒する。

「はあ…はあ、はあ……」

「…だ、大丈夫ですか…?どこか痛むところがありますか?」

彼女に言われて自分の身体を確認する。手を動かしてみた。変化無し。足を動かしてみる。特に痛くはない。

「うん、なんとも…っ」

起き上がるうとするとう腹部に激痛が走った。手で触り外傷を確認した。

「お腹が、痛いんですか…?」

「痛いって言えば痛いかな…それより、戦いはどうなったの?」

「……………」

ナツルが質問すると紅音は俯いて、押し黙った。声の代わりに一枚の破けた紙を渡された。

読んで下さいと言っても言うのだろうか。受け取ると開けて目を通した。

『青のケンプファーたちへ
沙倉楓は解放します。』

以上。

『三郷雫』

「……………」

「わたしが目覚めた時には、これがナツルさんの前に落ちていたんです…それで、開けて読んだら…」

今の状況がよく分からない。記憶を辿ると、あの時は確か…雫を追いついたんだ。そして、紅音が押し倒すと額に銃口を押し当てた。そこまでしか覚えていない。

「何が起こったか分かる…?」

「…記憶は定かではないですけど…わたしが会長を押し倒して、撃とうとしたらgevエバーが壊れて　そのあとは、分かりません…」

「俺もその辺から記憶がない」

「…そうですね。じゃあ、これは罠ですかね?」

紅音は手紙に目を向けた。ナツルも手紙を見る。ノートを破っただけの手紙。そこに割りときれいな字で書かれた言葉。

(ん?この字どこかで…)

「火災警報器が作動した部屋はここですか?」

入口の方から声が聞こえた。話している内容からして、消防士だろうか。

「やばい、逃げよう紅音ちゃん」

「あ、はい」

消防士の人に見つからないように大教室を出ると、避難していた女子生徒に紛れて外に出た。男の姿で大丈夫だったか？って当然変身して女の姿で出たに決まってるじゃないか。変身しなきゃ男子が女子校舎にいるなんておかしいからね。目立って大変だろう。まあ、女の姿でもあまり変わらなかったような気もするけど。

教室に戻る訳にもいかず、外をフラフラしている訳にもいかず、とりあえずうちに行くことにした。

「外を歩いてたら危ないし、家でいいかな？」

「ナ、ナツルさんのお宅ですか…？別にいいです…けど」

そう言うと紅音は俯いてしまった。

最後の方はごによごによ言っていてうまく聞き取れなかった。何がどうなったのやら、さっぱり。

なんでもない世間話をしているうちに我が家に着いた。

「おかえりなさい。今日は早いですね」

「まあ、色々あってな。途中で帰ってきた」

「ついに不良への第一歩ですね」

そう言うとハラキリトラはけらけらと笑い始めた。

「そついえば、今日はセツプククロウサギさんはいないのでですか？」

「あ、いま」

「おう、ここにいますぜ！」

紅音が鞆から出す前にセツプククロウサギは自分から飛び出てきた。すると開口一番に「こいつら会長に負けたんだぜ」と暴露し始めた。

「おいおい、負けたわけじゃねえぞ。その辺は微妙なんだ」

「どづいつことですか？」

ハラキリトラはセツプククロウサギに質問した

「それはな……」

「はい、はい」

セツプククロウサギとハラキリトラという内蔵を腹から随時こぼしている輩が肩を組んで壁際に向かって歩き始めた。

いちいちあいつらに付き合っていられないので、無視して紅音に話しかける。

「紅音ちゃんは麦茶でいいかな？」

「あ、はい。…ありがとうございます」

どこからか「俺はコーラがいいな」とか「わたしはオレンジジュースでいいです」とか聴こえてきたが、恐らく幻聴だろう。最近、疲れが取れないのだ。

部屋から出ると階段を降りて、リビングに向かう。

冷蔵庫を開け、中から麦茶を取るとコップに注いだ。丁度、二人分を入れた辺りで作っておいた麦茶が無くなってしまった。

「…あとで作っとくか」

とりあえず、喉が渴いているであろう紅音の元に飲み物を持って行くことにした。

部屋に戻るとぬいぐるみたちの話は終わったのか、部屋の隅から真ん中に戻って来ていた。

「どうぞ、麦茶だけど」

「いえ…ありがとうございます」

手に持っていたコップを手渡す。余程喉が渴いていたのか、受け取ると直ぐ口を浸けた。

「な、なんでしょうか…?」

「あ、いや…なんでもない。ただ、よっぽど喉が渴いてたんだな」と

「ハハハ、そんなことより 沙倉楓への返事はどうすんだ?」

横からというか、紅音の膝の上から声が飛んできた。彼女の下に視線を落とすとセツプククロウサギが座っていた。

「あー…、まだしてない」

「…どうするんですか…?」

(どうするんですか? って、出来れば沙倉さんにはこのことを忘れていてほしい)

ナツルが真剣に悩んでいるなか、部屋にセツプククロウサギとハラキリトラのげらげらと笑い声が響いた。どうやらいつの間にか付けたテレビを見ているらしい。画面には昔、売れていた「ゲッツ」を未だにやっている芸人が映っていた。いつの時代だよこれ。

「ナツルさんった、一人ぐらしなんですよね?」

紅音が辺りをきよるきよる見回しながら訊いてきた。

「まあね」

「ご兄弟はいないんですか?」

「いないよ。兄妹同然のやつなはいたけど…今は外国かな」

「へえ、女の人ですか?」

「そう…っっておいやめろ!」

ナツルが飲んでいたコップにポテトチップスを入れようとした、ハラキリトラを掴むとポテトチップスを奪って食べた。ポップコーンも入れようとするセツプククロウサギの耳を掴むと持ち上げた。

「お前らなにやってんだ!？」

「入れて飲んだらおいしいと聞いたので」

「大丈夫。お前なら飲める」

「……………」

(こいつらどこでそんな知識を…)と驚いている間にセツプククロウサギが持っていたポップコーンが麦茶に投下された。

「あつ……………」

紅音の驚きの声が洩れた。

麦茶が入ったコップにはポップコーンという変わったアクセントがプラスされた。

「じゃあ、これもですね……………」

いつの間にか降りたハラキリトラはセツプククロウサギに続いてポテトチップスを投下した。

「……………」

無惨な麦茶に沈黙するナツルと紅音。それとは逆にげらげらと笑い出すセツプククロウサギ。

「……………てめえら!」

ぬいぐるみ共を捕まえるため走り出すが、飛ぶは跳ねるはでなかなか

か捕まらず、この騒ぎはしばらく続いた。おかげで携帯の画面が光っているのに気付かなかった

*

「…まったく、何回鳴らしても出ないんだから」

少女は憤慨し、待ち受け画面に戻った携帯電話に毒ずいた。

「いーだ。かけ直したって、出てあげませんからね」

携帯を畳むとポケットにしまう。そして軽い足取りで歩き始めた。周囲の風景が懐かしい。なんの変鉄もない住宅街だが、彼女にとっては生まれ育ったところだ。わけあって外国にいたが、やはり故郷は良いものだった。

携帯電話が鳴った。(あいつかな…)と淡い期待を乗せたが別人だった。

「はい、もしもし……久しぶりー」

あいつではないが、昔からの友達からなので自然と声が明るくなる。

「……うん、もう終わったよ。だからまた一緒のクラスだよ」

電話の向こうは、かなり明るい女の子だった。

「二年生の女の人に素敵な人がいるって？　へー、そんな趣味あったっけ？」

軽い冗談を言うと、あははと笑う。

「やだなあ、冗談よ冗談。……そうなんだ。紹介してね」
何度か頷く。

「うん、分かった……学校で、またゆっくり話そ。じゃあね、ますみ」

電話を切った。いきなり中学からの電話でびっくりしたが、嬉しいものだ。やっぱり帰国を知らせておいて正解だった。
これからは、またここに住む。またあいつと同じ学校に通うことが楽しみだ。

（会ったらわたしだって気付くかな？）

この外国に行っている間で、結構変わった気がする。でも、気付かなかったら殴ってやると心に誓うとまた歩き始めた。
にやにやしながら、歩いていると男子に話かけられた。

「あれ？もしかして…水琴ちゃん？」

「えっ？」

名前を急に呼ばれて、後ろを振り向いた。そこにはナツルと一緒に学校帰りによく遊んだ南春佳が立っていた。

「久しぶりー！春くん」

「おっ！なんかその呼び方懐かしいな…つか、いつ帰って来たんだ？」

「今日だよ。なんか懐かしくって、散歩してた」

「へえ、今日帰ってきたのか」

「うん。それより…ナツルは元気にしてる？」

と訊いたとたん、春佳の肩がびくつとした。

（なんか怪しい…さっきとは違って変わって視線がきよるきよるしてるし…）

女の勘ってわけではないが、確実になんかあったらしい。

「ねえ」

「あははー、なんでもないよー。じゃあ、またね！」

そういうと春佳は走って行ってしまった。

ナツルとなんかあったわね。と疑惑を募らせるなか、明日どうやってあいつを脅かそうか考える。

「あ、良いこと思いついた」

（わたしって頭良いわね）と思いながら、また元気よく歩き始めた

十章『参戦』（後書き）

はい〜 やつと、原作一刊が終わりました（*^^*）

どうだったですか？春佳という心の叫びが多いキャラは面白かったですか？

色々訊いてみたいですが、やめときます。はい（、）（笑）

やはり、処女作なもんでして…心がナイーブなんですよ（<―>）
なんて（笑）

ただなんとなく面白い作品だなと思って頂ければ嬉しい限りです。

では、次回予告です。

原作二刊ですね（。・。・）

第十一話『変革』

雫とナツルたちの戦いを止めるなどが出来た春佳。

平凡な一日が戻ってくるわけはなく、違う意味で荒れる毎日。

その回りでは色んなことが変わり始めていた

十一章『変化』

俺は学校に向かうためいつものように坂をのぼっている。

歩く度に毛穴という毛穴から汗がにじみ出てくる。少し前までこんなに汗はかかなかった。

いつの間に変わったのか、春という季節は終わり、今は夏に差し掛かっている。遠くからは寝坊したとかではなく、早起きし過ぎた蝉がジージーと鳴いている。季節外れもいいところだ。

しばらく歩いていると坂の上に一人の女の子が立っていた。

遠くからでも分かる。例の彼女だろう。立ち姿は凜としていて、背中から腰にかけてのなだらかなラインは美しい。まさに曲線美。この言葉がピッタリだ。

俺はあえて声をかけずに歩き続ける。理由は簡単、恥ずかしいから。彼女は誰かを待っているのか、腕時計と辺りを交互に見てはきよろきよろとしている。そんな風景を毎日のように見ては、「馬鹿だなあ」と笑っている。笑顔が溢れるとはこのことだろう。

きよろきよろとしていた彼女が止まった。目が悪くてよく分からないうが、とりあえず笑う。すると、こちらに走って来た。

逆光でいまいち見えないがだんだんと慣れてくると、彼女の顔がうつすらと見えた。

『…あ、春佳っ』

近くまで走って来た彼女は、止まらずにちゃんと胸に抱き付いてきた。長くてさらさらな髪がふわりと中を舞う。

『春佳、遅いわよ。もう10分も待ったわ』

『えっ？余裕で間に合う予定だったんだけどな』

急いで左のポケットを漁って、携帯を取り出す。時刻を見ると約束の時間まで5分も余裕があった。ここで「まだ余裕あるじゃん」なんてことを言うとは機嫌を損なう。もう経験済みなのでそんなへまはしない。いつも通り謝る。

『ごめんごめん、結構待たせたね』

『そうよ、早く行くわよ』

ひらりと俺の前から横にずれると、腕に手を回してきた。

『はいはい、行こうか。零』

「……って、誰だよお前……！」

あまりな衝撃的な出来事に叫んでしまった。上がってしまった心拍数をなんとか宥めると、辺りを見渡す。いつも起きたとき最初に見るもの。それらが目の前に広がっている。さっきまで見ていた風景とかなり違った。ここまできるともう考えるまでもない。

「さっきのは 夢か……」

そんな悪い夢を見ていたわけではない気がするが、汗でびっしょりに濡れたTシャツは気持ち悪かった。生乾きの服を着るぐらい、たちが悪い。

「大丈夫ですか……？春佳さん」

声が聞こえた方向に顔を向ける。そこには何故か喋れて、俺こと南春佳をケンプファーにした、臓物アニマルのジユウサツイタチが座っていた。こいつらのコンセプトは酷いもので、基本内臓が腹から出ている。

少し前に「何故ぬいぐるみなのにこんな奇妙な物を作ったのだろう」と考えたことがあったが、俺の出した結論から言うと…世界中の子ども達を恐怖のどん底に叩き落としたかったのではないだろうか、にたどり着いた。でも、あながち間違っではないだろう。事実、この某おもちゃ会社が世にばら蒔いた臓物アニマルたちはこども達に畏怖され、陳列棚から1つもなくならないという、歴史的な偉業を成し遂げた。今ではこれを棚に置いている店の方が珍しい。

「なんか唸ってましたよ？ 最初の方はニヤけてま」

急いでベットから飛び起きると、ジユウサツイタチをゴミ箱に叩き込んだ。

「って酷いじゃないですか」

「うるせえ、黙ってる」

「そうやって、何かあるとすぐ私をゴミ箱に叩き込んで」

「ごそごそという音がゴミ箱から聞こえてきた。昨日いらぬプリントなどを捨てたから、それを踏み台にして外に出ようとしているのである。」

「（いつ出てくるのだろう…）」とゴミ箱を監察していると、音が急に止んだ。

「あちゃ〜…三年一組、南遥華さん。小テストの結果は」

「うわっ、それはやめろ！」

急いでゴミ箱からジュウサツイタチを取り出す。その手には昨日抹消した数学の小テストを持っていた。ぬいぐるみだから字は読めないだろうと鷹を括っていたが読めるなら、話は別。もうゴミ箱にぶち込めなくなってしまった。

とりあえず、ジュウサツイタチが持っているプリントは奪取する。

「ああ…まだ全部確認してないのに」

「しなくていいわっ」

「わたしは春佳さんの成績を把握する義務が…」

「いやいや、どんな義務ですか。ケンプファーに小テストは関係ないでしょ」

そう喋るぬいぐるみとバトルを繰り広げていると、ドタドタと階段を上がってくる音が聞こえてきた。

「マズイ！母さんだ」

急いでジュウサツイタチをいつもの棚に放り投げるとベットに潜り込む。それと同時にドアが勢いよく開かれた。

（ああ、またドアが壊れる日が近付いた…）

もう何度も勢いよく開かれたドアは限界がきていた。寿命とかではなく人為的な出来事により、ドアと壁を繋ぐ金具が天に召されようとしている。

(ドアが壊れた場合は、どうするんだろう?) (というのが最近の悩みだ。まさか、ドア無しってことはないだろうが…。)

「はふう……春佳っ!」

咲希は一息ついてから俺の名前を呼んだ。

「んあ……?」

“今まで寝ていました”を装うため寝惚けた声を出す。目を擦りながら布団から顔を出すと、目の前に彼女の顔があった。

「……………」

二人の間に長い沈黙が流れる。このまま沈黙を続けていてもらちが明かないので、俺は口をあけた。

「…何やってんの?」

「シンパシーいや、テレパシーだったかな? とにかくそれ…」

「後者の方であってると思うけど、何がしたいの?」

「春佳に訊きたいことがあって、心に訊いてるの」

「……………」

真剣な眼差しで俺の瞳を見てくる南咲希(母)をぼーっと眺める。

(テレパシーって受信側も送れなきゃ意味ないんじゃないかね……?)

色々な疑問が頭に浮かんできては消える、を繰り返す。

しばらく咲希のテレパシー送りに付き合っていると、彼女は断念したのか離れた。

「…やっぱり無理ね、諦めるわ。それより、栗ちゃんが下に來てるから早く出てあげてね」

「…なんで？」

「理由を考えるより、早く行った方がいいんじゃないかな？ わたしが出てから結構経ってるわよ」

「へ？…それって俺のせいになんの？」

「起こしてくるね としか言ってないから、そうなるんじゃないかな」

「マジかよ…」

ベットから出ると急いで玄関に向かう。階段を降りると栗の姿が見えた。彼女は鞆を肩から降ろさずに玄関に立っていた。流石優等生いや、完璧生徒会長。

「起きるの遅いわね」

「まあ休日ですから睡眠を貪らなくてはいつか、寝溜め的な感じですよ」

栗の俺の頭の上を見る視線が気になり、自然さを装って盛大にはねてしまった寝癖を手具して直していく。だが直しても直しても、カエルのようにぴょんと元に戻る部分があつて苦戦する。

「……………」

「あはは ……」

(雫先輩の視線が気になる…このウパールーパーみたいな寝癖が気になるのか…?)

しばらく彼女は沈黙を貫くと何かぼつりと呟いた。

「ね」

「……………」

「なんでもないわ。それより今日は何の日か知ってるかしら?」

「今日…何かの日だけ? ただの休日じゃないのか?」

「…やっぱり迎えに来て、正解だったわ。今日はあなた 生徒会副会長の初仕事よ」

一瞬彼女が何を話したのか分からなかった。記憶を巻き戻して頭の中で反芻させる。

『あなた 生徒会副会長の初仕事よ』

(俺が、生徒会副会長…?)

寝起きでまだ頭が考えるのを拒否しているのか、それともただのストライキなのか分からないが反芻しても言葉の意味が分からなかった。

ぼーっとしている俺に雫は無言で一枚の紙を差し出してきた。それ

を受け取り、読む。

「私、南春佳は生徒会副会長に立候補します。 推薦者、三郷零。それを受理します。生徒会長三郷零」

「これで思い出した？じゃあ、着替えて行くわよ」

「いやいや、ちよい待ち！」

俺は振り返って何食わぬ顔で、二階に上がろうとしている彼女の手を掴んだ。

「なに？」

「いやいや、「なに？」じゃないしっ」

「じゃあ、朝から元気なのね」

「だから違っつて！俺が言いたいのは何で推薦者と受理する人が同一人物なんだよってとこと、今何食わぬ顔で俺の部屋に向かおうとしたよねってことっ」

「ええ、そうね。生徒会は全て私に任されているからこういう感じになるの。家についてはさっき咲希さんが「気にしないで上がっちゃってくれていいから」って言うてくれたわ」

「これで分かったかしら？」とでも言いたいのか、彼女はいつものように腕を組んだ。

「…はいはい、じゃあ着替えて来るわ」

俺は反抗するのを諦めた。どうやってもこの人を論破する事は到底出来やしないし、体力の無駄だろう。俺が反抗出来るのはゆっくりと着替えることだけ。

「それと」

「はいはい、何か？」

階段を登るのを止めて後ろを振り向く。

「先に伝えとくけど生徒会の仕事の時、変身しなくていいから。生徒会副会長になったのは、“男の”あなたよ」

雫はリビングにいる咲希（母）に聞こえない程度の声で俺に死の宣告を下した

*

「何か変わったことはないかって？」

「はい…」

紅音はシュークリームの皮をかじりながら頷いた。さながら木の実をかじって、中身を取り出そうとしているリスのようだ。

因みになんで我が家 厳密にいうと俺の父親だが、休日にこの瀬能家に紅音が居るかというと、学校での図書委員の仕事帰りに寄ってみたとのこと。理由は特に無い。

（仕事熱心なのは分かったが、何故うちに？）という疑問が解けていないがまあいいか。

(うん、これは旨いな)
紅音が買ってきてくれたチーズケーキをフォークで切っては食べを繰り返す。

「特には無いと思うけど…」

そう言った瞬間、腕 正確に言う腕に填まっている契約の腕輪が発光し始めた。光は点滅に変わり身体を包んだ。

光が収まる頃には女に変わった。そう俺、瀬能ナツルはケンプファ―というものになれる。変身すると超人的な感覚と運動能力を得られる。恐らく、格闘技の大会に出れば優勝は間違いないだろう。そして、一番の特徴として、一人に一つ武器が与えられる。拳銃 ゲブエアー、剣 シュヴアト…そして、俺が使う魔法 ツアウバーの三種類。

ハラキリトラの話によると、どれが選ばれるのかはその人の性格などによるらしい。「じゃあ、魔法が使えるとどんな性格だと判断されたんだ？」と訊いたら、「それは分かりません。私はメッセンジャーであって、モデレーターではないので」なんて返ってきた。なんて生意気なぬいぐるみなんだろう。

「…まさか、敵が近くににいるのか!?!」

「…いや、いないと思いますよ…?」

俺と比べて冷静に話す紅音。

(近くに敵がいるから変身したんじゃないのか…?) とそんな疑問が出てくる。

「紅音ちゃんは前教えてくれたよね? 変身するのは敵が近くにいるときか、自ら変身するのどちらかだって」

「はい…言いましたね」

「じゃあ、なんで？」

「だから、何か変わったこと…なんです」

紅音は“何か変わったこと”を強調して喋った。
彼女はまた一口シュークリームをかじる。

「私たちケンプファーは、経験を積むと自分の意思で変身が出来るようになるんです。それは自由意思の一步手前なんです」

「じゃあ、紅音ちゃんもこんなもんだった？」

「いえ、私はもっと時間がかかりました。だから、ナツルさんは早いですよ」

「……………」

俺は自分の手を眺めた。戦闘経験はたったの三回 経験を積んだ
というには少な過ぎるのは、自分でも分かる。

「…ナツルさんは、特別なのかもしれませんね」

「特別か…」

考えても特別そうなところが出てこない。あえて言うなら、モデル並みにスタイルが良くて、顔が俺の惜しい線を通っているぐらい。なんで惜しいかと言うと、中学から同じの沙倉楓という人が俺の好

みのタイプにドンピシャなのだ。だから、良い線をいつているとは思うが一番出はない。

自分の顔の女の子がタイプだということのも変な話だが。

「でも……」

紅音がぼつりと言う。

「ナツルさん綺麗ですね…やっぱり、特別なんでしょう……」

「んーどうなんだろう…」

もう一度改めて自分の身体を眺めた。腰はくびれていて足は細い。そして何より胸にぶら下がっている2つのものが大きい。俺から言わせてもらうと、「おお〜」の一言に限る。女の子から見たらどうなんだろう。やっぱり羨ましいのだろうか。

「なんだか悔しいです…」

(やっぱり羨ましいんだな…俺的には肩が凝るからもう少し小さめが良かったが…)

ふと紅音を見ると、頬を膨らませていた。やっぱり彼女はこういう仕草をさせると可愛い。普段は地味の見本なので、我が校の地下部活動である美少女研究会の発行する『星鐵学院美少女便覧』から漏れているが、十分魅力的だ。

時間と共に、紅音の頬は元の膨らみに戻っていった。

「…そろそろおいとまします」

彼女は腰を少し浮かすと、広げられたシュークリームの箱を、きち

んと片付けた。

「そつだ、思い出しました」

階段に差し掛かる否や、何か伝えることを思い出したのか紅音は振り返った。

「学校で聞いたんですけど…なんか明日、転校生…？が来るみたいですよ？」

彼女もその辺はよく分からないのか、あやふやに話した。

「ふーん。じゃあ、その子によろしく」

俺は適当なことを言った。女子の動向を掴むのに忙しい東田ならともかく、こっちはほとんど関係ない。(いつか世間話ついでに訊くか…) そう考えながら、紅音を見送った

*

「ああ、心の休息が足りない…」

今日は月曜日。そして登校中

「ゆとり教育を強化して月曜日も休みにするべきだ！」と叫びたくなる。

今思うと、土日は長いようで短かった気もする。でも実際は地獄のような二日間だった。

土曜日は学校が休みだ。だからいつまでも寝る予定だったのだが、変な夢を見て目覚めてしまった。気分は最悪、ではないが複雑な感じだ。何せあの完璧生徒会長が、俺こと南春佳にデレていたのだから

らびつくりだ。

まさかの夢の雫にびつくりして目覚めたあとに、本人が我が家に登場するとは誰も想像しないだろう。俺もその中の一人。

彼女の目的は生徒会副会長の南遥華ではなく、“春佳”を向かいに來たらしい。ややこしいことこの上ない。まあ、署名を書き間違えてしまったところまでは許せたのだが、学校に到着してからが地獄だった。

「はあ…噂になってそうだな…もしそうなら」

（“殺される”…）

「おーい。顔が大変なことになってんぞ？」

「っ…!？」

「おお、どうしたんだ？」

声が出た方を振り向くとそこにはナツルと水琴がいた。二人とも「何かあったのか…？」とでも言いたそうな表情をとる。

「なんだナツルか…」

「なんだってなんだよ…俺じゃなかったら誰だと思っただんだ？」

「ヘタレのナツル」

横からひよいと言葉が転がってきた。

そう言ったのは水琴だった。フルネームは…何だっけな？一回は聞いたはずんだけど、忘れた。初めてあった瞬間から「水琴でいい

よ」と言われてしまったため名字で呼んだことがない。彼女はナツルの幼馴染みだから当然、呼び捨て。だから、なかなか名字を聞かないので忘れてしまった。

でも世の中は名前を知らなくても会話は成り立つわけで、クラスの半数しかフルネームで呼べる奴はいなかったりするのだが、今の俺の現状だ。

「ナツルがヘタレってなんの話？」

最悪の場合ばかりを考えていても、しょうがないので今は忘れることにした。楽しそうに笑う彼女の話に乗っかる。

「それはねー、ナツルが」

「馬鹿っ！そんな大きな声で俺のことを言いふらすなって」

「なっ、別に良いじゃない。私たち友達でしょ？」

「そういう問題じゃないだろ。お前の場合、声が大きいから他の人にまで聞こえちゃうんだよ」

ナツルと水琴はもう学校が見えるところまで来ているにも関わらず、ぎゃあぎゃああと騒ぎ始めた。

「あんまりヒートアップすんなよ」

そう茶々を入れながらも周りに教師がいないかを確認する。なんでこんなことをしているかっていうと、我が校星鐵学院は鉄の柵で男女の敷地が別けられるぐらい男女について厳しい。男女一緒に登下校をしているところなんて見付かったら、タダではすまない。中学

生の買い食いがバレて呼び出したとか、部停だとかそんなあまいものではない。まあこのことに関してはまたの機会に。

「ホントお前ら仲が良いよな。俺も幼馴染み欲しかったわ」

まだぎゃあぎゃあ騒いでいる二人を見ていると思わず笑ってしまった。

「いや、海外ぽんぽん飛び回って、滅多に会わないのは幼馴染みって言わねえだろ」

と、すかさずナツルが訂正を求めてきた。

「いいの。わたしたちは幼馴染みの！ ……てか、春佳くんってそういうのいないんだ？」

「ん…まあ、いないかな」

（つか、どこからが幼馴染みかかんねえし…）と幼馴染みについての定義を考えていると、生徒の間で限界領域と呼ばれる男女が一緒に歩くとマズイ道に差し掛かる。

「じゃあな、水琴。ここからはマジで無理だ」

「ええ、最後まで一緒に登校しようよ」

「馬鹿か。こっからはマジで無理なんだ」

「確かに。敵は先生だけじゃないからな…」

そう…敵は教師だけではない。恋愛がしたいが出来ない生徒たちも敵なのだ。あいつらは別に恨みがなくても、一緒に登校が羨ましいといって学校側に通報する。生徒会の仕事でつてわけでもないから、一層たちが悪い。

「あ……………」

(そういえば…俺も生徒会の人間じゃん。それも生徒会の副会長…一番大事なことを忘れていた。俺は少し前に生徒会に入ったのだ。これも話すと長くなるので、割愛。あえていうなら、赤のケンプファーの雫が生徒会役員だから仲間同士で固まった方がいいんじゃないかという考えから入った、ことにしとく。ここ重要。特に自分で決めたとこ。じゃないと、男としての面目がたたない。

「どうした？ ……つて、ええ!？」

ナツルは何かを見たのかあたふたし始めた。

そんなナツルを俺と水琴は不思議な目で見つめる。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。それより先行くな」

そう言うつと走り始めた。

「ちょ、ナツルー！ 帰りも一緒に帰るんだからねー！！ 忘れないでよー」

角を曲がったため、後ろ姿が見えなくなる。あの角を右に曲がった先が男子校舎なのだ。それと反対に左に曲がれば女子校舎。即ち、

男子と女子の門は真逆に作られている。

「…行つちまつたな。なんか用でも思い出したのか？」

「どうなんだろう？ それより、春佳くんは大丈夫なの？」

水琴は道の先に立っている体育教師の糞ゴリラこと、猿道先生が行く手を阻むかの如く、仁王立ちしていた。

「…大丈夫じゃない系かな。俺、あいつにマークくらってるからこつち来る前にさっさと行くわ」

「そつか。じゃあ、またね」

水琴に「おう」と告げると男子校舎の門に向かって走り出した。

教室に入るとクラス全員と目が合った。今まででこんな一気に目が合ったことはないので、ドアを開けてすぐに閉めた。

「あ、あれ…？教室間違えたかな…」

教室を確認する。プレートには『二年四組』としつかりとゴシック体で書かれていた。自分の教室の場所を間違えるはずはないが、念のためプレートを外して中を確認する。中には二年四組と書かれた一枚の紙しか挟まっていなかった。

(…俺が間違えたわけでもないし、苛めでもないっとな…)
先程、開けてすぐ閉めたドアを眺める。

「何が起こったんだ…？」

うん、と唸っていると教室のドアが開いて一人の男が出てきた。その男は東田だった。

いつも口元がニヤけているのに、今回に限っては真剣そのものの顔だった。

「…なあ、訊きたいことがいくつかあるんだが、いいか？」

(…まさか!?)と昨日、一昨日のことが頭の中でフラッシュバックしてきたが、今回だけは顔に出すわけにはいけないので、無表情を貫くことだけに集中する。

「…なんだ？」

「1つ…お前が生徒会副会長に選ばれたことは本当か…？」

「え…？」

「『え…?』じゃない、俺が聞いているのはイエスかノーどっちかだ…。どっちなんだ？」

何故か東田の真剣な眼差しに堪えられなくなり目を横にずらした。

「…!？」

横を見ると微かに開いた窓から覗くクラスメイトたちが見えた。

(なんでこいつらはこんなに真剣な目でこんなことを質問してくるんだ…?)

とりあえず考えていても、らちが明かないので東田に質問してみる。

「なんでそんなことを訊くんだ？ …それにクラスのやつらも」
東田は顎に手を持ってくると、真剣な面持ちで話始めた。

「それにはマリアナ海溝より深いわけがあつてな…美少女研究会の情報網強化に関係があるんだ」

そう話すと余程知りたいことなのか、顔を近付けてきた。

「……………」

「ん、どうしたんだ？」

あまりにもくだらないことに色々考えてしまった自分に呆れる。そうだ、そうなのだ。こいつが真剣になることは唯一つ。女の子の情報だ。それを忘れていた。

「いや、自分の馬鹿さに呆れてた」

「何を言っている、お前が馬鹿なのは皆知っていることだ。それよりどうなんだ!？」

また顔が近付いてくる。それを押し返すと一歩離れた。もうこいつの顔というか男の顔をあんな間近で見たくない。

「…ああそつだよ。色々あつて生徒会副会長をやることになった…」

「……………」

そう東田に告げた瞬間にさっきまでざわついていた教室が静まり返

ったのが分かった。東田に関しては立つたまま硬直していた。

「なあ…それは本当なのか？」

東田の硬直が溶けるまで、壁に寄りかかってしばらく外を眺めてみると、横から掠れたような、無理矢理絞り出したかのような声が聞こえてきた。

「…まあ、一応。まさか休日まで返上するとは思っていなかった

、あ…」

「……………」

口が滑った。いや、滑ったどころじゃすまない。もはや滑ったあとに近くの車をも巻き沿いに盛大に事故った。

土曜日は普通に生徒会メンバーの自己紹介やら仕事の説明やらで終わったのだが、日曜日は穴埋めをやらされた。たぶん、この穴は美少女研究会が作った秘密の通路だったのだろう。栗に「これを埋めてちょうだい」と言われた時は何だか分かんなかったが、「これはなんだ？」と彼女に訊いたら「知らないのね。隠し通路よ」なんて普通に返された。まあ俺は美少女研究会でもないし、女子にめっちゃ飢えてるってわけではないので、丁重に埋めさせて頂いた。横を向いて東田の顔を確認すると、顔面にパンチでも喰らったかのような表情をしていた。

「…んまあ、南から入る情報を考えたら…まだプラスのはずだ……」

東田は徐祖でも唱えているのかぼそぼそと一人で喋っている。

「それで、もう一つ訊きたいことって何…?」

俺は恐る恐る訊く。なんでこんなビビりながら訊いているかという
と、穴を埋めたあとの事が関係しているからだ。
東田はゆっくりとこっちを向くと、喋り始めた。

「…ああもう一つはいいんだ。今解決した。それと今決まったと
こがある…」

「決まったこと…?」

「南…南春佳を 美少女研究会の特別情報顧問に推薦することに
した!」

「……は?」

そう春佳の気の抜けた声が静かな廊下に響いた

*

「おお…南が生徒会副会長兼美少女研究会の特別情報顧問か…あ
いつすげえ出世してんな」

「いや、出世どころじゃねえって。あれはもはや革命だよ」

などと教室のあっちでもこっちでも春佳の話で持ちきりだ。
でも、申し訳ないことにあの隠し通路がバレたのはたぶん俺のせい。
沙倉さんを助けに行く時に使ったから、会長にバレたんだろう。

(東田、わりい。バレたのは俺のせいだわ)と心の中で
手を合わせると、教室を出た。

廊下に出るとまだ春佳と東田は話していた。別に用はないのでその

ままトイレに向かう。男子トイレは廊下の端の方にある。この周囲にだけは何故か照明がなく、昼間でも薄暗い。

少し前に薄暗いから電球を付けて欲しいと生徒会に申請したら、「男だからそのぐらい我慢しろ」と軽くあしらわれた。ホントこの学校はケチなのか金の使い方が荒いのか分からない。

(んー…毎回思うけど、ホント暗いな…)

中途半端な時間帯のせいか、他に人影もない。ここはお化けが出るんじゃないかとの噂が前々からあって、新聞部が特集をしたことがあった。そういうこともあって一時期、肝試しをしようという話もあったのだが、どうなったのだろう。

因みに噂によると、結構昔に自殺した女子生徒の幽霊が出るんだそうだ。

紅音にこのことを話したら「女子部にもそういうの、ありますよ？」とのこと。でも、みんな「幽霊なんて出るわけないじゃん」と笑い飛ばされているらしい。ほんとタフだねの言葉に尽きる。

俺はスイング式のドアを開けようとすると、後ろに人の気配を感じた。(まさか…！？)とは思いが“こういうときは振り向いてはいけない”とどこかで聞いた気がするので、気付いてないふりしてドアを開ける。

「あ、あの…」

背後から女の子の声が聞こえた。振り向いてはいけないのだが、自分には後ろには誰もいないと言いついて聞かせて、ゆっくりと振り向く。俺の願いは見事に却下され、廊下の隅に女子生徒が立っていた。

「なっ……！？」

心臓が口から飛び出る寸前だった。いくら幽霊のことを考えていたからって、まさか現実に出現するのはやりすぎだ。これが夜中の3

時だとか丑三つ時だったなら納得がいく。それに噂だとトイレの中だった気がするが…。

「ナツルさん…」

幽霊は俺を見て口を利いた。むしろ名指しできた。俺単体を呪いにくたのだろうか。

「よかった…ナツルさんでほっとしました」

「へ？」

幽霊が近付いてきた。段々と顔が見えてくる。

（さ、沙倉さん…？）

そう、そこにいたのは幽霊ではなく俺らのアイドル、星鐵学院二大美少女の一人、沙倉楓さんだった。補足として言っとくと、今では三年生に現れた遥華という女の子のせいで星鐵学院二大美少女から三大美少女になるのではないかというのが、男子の間で噂になっている。まだ噂の範疇から抜けていないので、どうなるのかは美少女研究会会長の東田しだい。

それについては今は置いといて、沙倉さんとは以前、ある事件で拘わった。あのときのシヨックが残っているのではないかと思っただが、元氣そうでなにより。こんなことを紅音に言ったら怒られるだろう。「そんなことより、急に攻撃してきたもう一人のケンプファーの存在の方が気がかりだ」と言うこと間違いなし。俺的には沙倉さんが解放されたから、結果オーライ。もうその事を考えるのはやめた。向こうも襲ってこないのだから、戦う意思はこっちと同じで無いのだろう。

（そんなことより…）

「さ、沙倉さん。こんなところでどうしたんですか？」

「ナツルさんにどうしてもお願いがあつて……」

そういうと彼女は廊下に顔をちょこつと出して、きよるきよると見回していた。

「すみません、ここじゃなくてどこか……」

沙倉さんをこのまま男子トイレに居させるには申し訳ないので、場所の移動を促す。だが、彼女口から出た言葉は「ここでいいです」の一言だった。一回は食い下がったが、沙倉さんは断固として意見を曲げなかった。彼女は意外と神経が図太いのだろうか。

「あの、沙倉さん、どうしてもこんなところに？」

「無理言つて、許可証を発行してもらいました」

沙倉さんは首にかかっているカードを見してくれた。

「本当はこんなに長く居ちゃいけないんです。でも、どうしても知りたいことがあつたから……」

俺たちみたいのに比べて優等生な沙倉さんの場合、許可証の発行の際ある程度審査が甘くなる。しかし、あまりにも長い時間いると話は別だ。もう発行出来なくなる可能性が高くなる。でも、彼女はそのリスクを冒してまで男子部にいたいのだ。

「ナツルさん……」

沙倉さんはすがり付くように俺を見ていた。
思わず生唾を呑み込む。

「はい……?」

「あの人…ナツルさんと同じ名前の女の人に会いたいです」

「は……」

返事というよりは、口から空気が抜けたみたいだった。

沙倉が言う女のナツルというのは、俺が変身したケンプファーの姿のこと。彼女は女の俺に惚れているらしいのだ。

「あたし、あの人を探しているんですけど、どこにもいないんです…制服からして絶対星鐵にいるはずなんですけど、誰にきいても知らないって……」

そりゃあ、知らないだろう。俺には身体は二つもないし、変身した姿で外を練り歩いたりなどはしてない。

しゅんとしている沙倉さんを見ると、何とかしてあげたい気持ちになるが、こればかりは無理だ。

「ナツルさん……」

「…はい?」

「あの女の人に、もう一度合わせてーもらえませんか…?」

彼女は泣きそうな顔で懇願してきた。

「えーつと…」

「お願いします」

彼女は頭を下げていた。

（なんていうのかな…会おうと思えば会えるけど　　）
そう、ただケンプファーに変身すればいいのだ。でも問題は別にあって、恐らく沙倉さんが女のナツルに会いたい理由はあれだ。『告白の返事が訊きたい』だ。

それは俺も困るわけで、沙倉さんを傷付けずに付き合わない方法を探しているのだが、なかなか浮かばない。

「はい」とは言えないので、適当に言い訳を沙倉さんにする。

「彼女は男女問わずにモテるから忙しいんだ…」というところに彼女は目を見開いて大きく反応した。

「じゃあ、早く合わせてください！」

「え……えっ？」

「またの機会に」と言おうとしていたので、沙倉さんの変わり具合に驚く。

「他の人に邪魔されたくありません！ ナツルさん、早くナツルさんに合わせてください！」

ナツルがナツルに合わせる。なんかコントみたいで可笑しかったが、言った当の本人は真剣そのものだった。恐るべき意思の強さだった。沙倉さんがたまにしか見せない部分を見れて、少し幸せな気分になる。でも、数秒と経たずに現実に強制送還された。

「お願いします！ ナツルさんには迷惑はかけませんから」

（迷惑もなにも、ねえ…）

正直言おうと断りたい。でも、これを断ったら沙倉さんはとてもしょんぼりするだろう。唯一の女のナツルと連絡が取れる俺が拒否したら会う手段がないからだ。そんな彼女の寂しそうな姿は見たくない。

「…わ、分かった。連絡取ってみるよ」

俺は（もうどうとでもなれ！）と心の中で叫びながら、彼女にそう言った。すると沙倉さんの表情は一瞬にして明るく輝いた。

「本当ですか！？ ありがとうございます！」

そう言うと満面の笑みを俺の心に届けてくれた。別に廃れてまはないが、幸せな気持ちになる。

「やっぱり持つべきものは、お友達ですね。ナツルさんって本当に頼りになります」

お友達宣言されて、胸に何か刺さった気がするが無視。

彼女は何回もお礼を言った。俺はそれに機械的にうなずきながら、男子トイレを出る。

キーンコーンカーンコーン

授業開始のチャイムが学校中に響き、沙倉さんは急いで女子部に急いで帰って行った。

（いつも思うけど、チャイムって刑務所の『作業開始』の音に似てるよな…）

実際に聞いたことはないが、なんかの映画のワンシーンにあった気がする。

「まったく…今の俺の心境にピッタリだよ……」

そう自分の意思とは関係なく口からこぼれた

十一章『変化』（後書き）

箸休めのエレメンを書いて投稿した分、こっちの投稿が1週間遅くなりましたm(――)m

待っていた人がいたらすいません、お待たせしました(;´・`・)

今回は『変化』ということ春佳の立場もナツルの立場もガラッと変わりましたね。(。・。・)

とは言ったものの、ナツルに関しては原作通りに少しだけ手を加えただけです…

いや〜大学に小説を持っていくわけにはいかないので、やっぱり、春佳の話ばかり書きちゃうんですよね(´・`・)

他のキャラも書きたいとは思うのですが、原作を読んでからじゃないと、キャラ崩壊しそうで…

って無駄に長くなりましたが、次回予告です。

第十二章『女ナツルと遥華』

女ナツルの探索が始まる中、遥華(女)こと春佳は女ナツルに出会ってしまった

さあ、どうなるんでしょうか。(。・。・)

十二章『女ナツルと遙華』

みんなに聞いて欲しいことがある。「なんでこんな冒頭に悩み相談的なことなんかしてんだ？」って思うかもしれないけど、それは誰かに聞いて欲しいからだ。

(じゃあいつも通り、ここから始めますか、と…)

「はあ、なんでこうなるのかなー。生徒会副会長になったかと思つたら、次は美少女研究会の特別情報顧問ですか…」

特別情報顧問 通称生徒会の内通者の最高顧問。やはり、生徒会というのは美少女研究会から見ると強敵 いや、狩人であり、情報源でもある。なので、色々と送り込んでいるらしい。当たり前だが、見つかれば生徒会執行部に罰則をくらつか生徒指導室送りだ。なんで見付かつたらいけないかは、美少女研究会が“地下”委員会つてのが関係してんだけどそれはまたの機会に。

(どうしたものか…)

覚悟を決めて男子部に戻るか、変身して女子部に行くか悩む。普通に男子部に行きたいのだが、戻れば戻るで東田が教室で待ち構えている。

因みに告白されるとかでは、けしてない。そんなことになったら、マジで人生の終わり。東田をこの世から抹殺するか、俺がもう女として生きていくか、のどちらかを選ばないと、精神的に残りの人生を生きていけない。

「どつちにしよっかな…」

ここは図書館の中にある、生徒会室。

女子部と男子部どちらでも行けるこの場所は、今の俺にとっては最高の場所　英語で言うなら、ベストプレイス。
女子部側のゲートを通るには男なら通行書が必要だが雫から貰っているのに、男子部から来ても問題はない。
だが、今はそこは関係ない。

「よし、女子部にしよう」

（東田なら何日か経てば、忘れるだろ…たぶん）
自分でも拍子抜けした。もっとどっちにするか悩むのかと思ったが、意外とすぐ決まった。

「誰もいないよな？」

変身するのを誰かに見られてはいけないので、生徒会室から顔を出すと辺りを見渡す。

いないのを確認すると腕輪に力を注ぐように意識する。
すると、全身が光に包まれた。

男子の制服から女子の制服にチェンジする。それと同時に今まで平地だったところに、二つの山が出現した。それは自己主張が激しいほど大きくなく、控え目でもなくらいの大きさだった。

男の性なのかついつい目がいつてしまう。

（…やっぱり、こはある気がするな……）

しばらく変身した自分の身体に見とれていたが、邪念を振り抜って三年の教室に向かうことにした。

「よし、行くか…いや行きましょうか」

ついつい通りに話してしまうが、今は女の姿なので喋り口調には気を付けなければいけない。めんどくさいことこの上ない。「喋ら

なければいいんじゃないね？」と思うことがたまにあるが、（そんなこととしたら、絶対零先輩 いや、零さんは話かけてくるだろう）という結論にたどり着き、なかなかどうしようもない。

女子部側のゲートを出るとふと不安が頭を過る。

（アレって…東田の一任で強制的に入れられるんじゃないのか…？）
東田はへらへらしたやつだが、あれでも美少女研究会の会長だ。もし生徒会会長と同じような権限を持っているのなら、本人の意思に関係なく入れることはできるだろう。

「…やっぱり、男子部に行こう」

きびすを返して来た道に戻ろうとすると後ろから黄色い声が聞こえてきた。具体的にいうなら

「きゃー！あの人、カッコいいんだけど」とか「告白してきていいかな！？」とか後者に関してはコメントのしようがない。

「……………」

ただ黙ってその場を立ち去る。

「待ってくださいよー！」

後ろから俺を呼ぶような声が聞こえてきたが無視。あの手のしゃべり方をするやつらに関わると良いことは一つもない。いや、あるにはある 女の子と仲良くなれる。
だが、俺は無視を突き通す。

「……………」

「先輩、待ってくださいよー」

「な…なんでしょう?」

腕に手を回されてびくつとなるが、気を取り直して後ろを振り向き「なに?」を女の子っぽく言う。別に「なんだよ?」でもいいのかもしれないが、一応初対面だし、自分は今女の子だしで適当にそれっぽくふりまうことにした。

「わたし西乃ますみっていいいます。先輩三年生なんですわー。ていうか、カッコいいし可愛いですね。何処とのハーフですか? あ、それと付き合っている人っているんですか?」

「……………」

西乃ますみと名乗った子は、自分の自己紹介を終えるとさん 御殿の司会者並みにマシンガントークを炸裂させた。

いくつか質問されたような気がするが、喋るのが早すぎて上手く聞き取れなかった。

「ごめん、なさい…。早くて何を言っているか聞き取れなかった、わ」

「た」で終わらせられなくて、雫の言葉使いの真似をする。

「きゃっ。声も透き通っててカッコいいんですけど、なんか可愛いですねー。わたし驚きっぱなしです!」

「…えと、ありがとう」

とりあえず、男の自分のことではないが褒めてくれたので、お礼を

言う。ついでに『めんどくさそうな人には、笑顔を送つとけば何とかなる』とどこかで聞いたことがあるので、それを実行に移す。すると、彼女は何も喋らなくなった。

「……………」

(効果テキメン…？ いや、ただボーツとしているだけの気がするのは、俺だけ？)

彼女の前で手を振ってみる。

だが、反応はない。むしろ、さっきから視点が俺の顔からずれていない。

「じゃ、じゃあ、急いでるから。さようなら」

フリーズしたのか考えごとをしているのか分からないが、今は急いでいるのでますみ置いてさっさと来た道を戻り図書館の中に入っていく。

生徒会室の鍵は現生徒会長の雫から、スペアーキーを貰っているのでも開けられる。

「思ったけど、これって…」

(…信用されてるってことか？)

雫から渡されたスペアーキーをまじまじと見てしまう。

東田から逃走中に何故か男子校舎の中で雫に出くわした。

彼女曰く、『南くんを探していたとのこと』

(信じられん…鉄壁と恐れられたいる、完璧生徒会長が俺に……いや、待て 少しは落ち着け。それは無理ですね…)と脳内会議

を繰り広げている俺に雫は『楽しそうね』と呟いた。

『え……？』

『はい、これ渡しとくわ。生徒会室の鍵だから無くさないように。じゃあ、私授業あるから』

「さっきなんて言った？」と訊く前に彼女は女子部に行ってしまった。

「まあ、細かいことはいいか。とりあえず教室に行かないと」

変身を解くために腕に力を込める。
腕輪は赤い光を 出さなかった。

「……え……？」

さっきまで出来たことが出来ない。
もう一度やってみるが腕輪に変化はなかった。

「……まさかっ!?!？」

一度だけ雫に聞いたケンプファアの特性を思い出した。

「変身が自由に出来るようになったけど、元に戻れない。その時は敵が近くににいる可能性が高いわ」

急いで窓際に近付くと、外を見渡す。時間帯が時間帯なので、人は誰もいない。

息を殺したまま、周りの気配を探る。

「……………」

(やっぱり、外にはいないか…)

ケンプファーになって日は浅いが色々出来るようになった。

Version 2.0とか目眩まし 周りの気配を探るなどなど。

「 ……ホント、ゲームの世界だと主人公になれそうだな」

外はもう確認したので、廊下側に移動する。壁にへばり着くと、集中する。向こう側の音を聴くためだ。

「……………」

カチカチと生徒会室の壁にかけられた、レトロな時計が何秒たったかを教えてくれる。

しばらく意識を廊下に集中するが、誰もいない気がする。

(『百聞一見にしかず』 そんな諺があったようだな…)
気配を探った感じ、誰もいなかったたので廊下に出た。

生徒会室に来るには階段を上ってくるしか道はないので、階段の方を覗く。

「誰もいないな…。でも、なんだったんだ？」

誰もいないことを改めて確認すると、生徒会室に戻る。

また腕輪に力を込めるが身体はまだケンプファーのままだった

「なんで、戻れないんだ…？」

静かな教室の中、ただ俺の言葉だけが小さく響く

時刻は12時を少し過ぎ、今は待ちに待った昼休み。

東田が追っかけ回したあと、春佳は帰ってこないが、毎日のように一緒に食べているわけではないので、さっさと昼飯を口に頼張る。

今日の昼飯はパン。いや、ほぼ毎日昼はパン生活。

一人ぐらいしをすることになった頃は「俺が作った弁当で、みんなをあっと言わしてやる！」と意気込んでいたが、いざ作るとなるとめんどくさくなって、途中でパンをかうことにした。その繰り返しで、もう弁当を作って持ってこうという考えはやめた。

それに今日は行きたいところがある。

コンビニの袋にパンの包みをまとめるとゴミ箱にぶちこむ。燃えるゴミの方は満タンだったので、燃えないゴミの中に入れた。

教室を出る時に「南はまだ帰ってこないのか？」と東田に聞かれたが「らしいな」と適当に返して目的地に向かった。

男子部側のゲートをくぐり図書館の中に入ると、貸し出しカウンターに一直線に行く。

目当ての女子生徒に、少しだけ手を上げる。

「…ナツルさん」

紅音は微笑んで、頭を下げた。カウンターから出てくる。

「本を借りるんですか？」

「じゅん。他の用事で…」

「他の用事ですか？」

俺は隅へ行こうと合図した。代々生徒たちの間で引き継いできた秘密の密会場所に移動する。

この場所は唯一学校で男女がフリーに会える図書館の中でも一つしかない死角。いわゆる二人だけで話せる空間だ。

紅音に登校途中の出来事を簡単に説明した。

「原因分かる？」

紅音は首をかしげた。

「いえ……。妙な気配がしたのなら、敵がいたんじゃないかって思うんですけど……」

「けど？」

「変身せずにすんだ、ということは、ナツルさんの意志が関係あるんじゃないかって……」

(なるほど…その理屈なら分かる)

今までだったら、腕輪が光だしたらジ・エンド。即変身していた。でも、今回はしなかったのだ。

「じゃあ、俺はもう自由に変身が出来るようになったのか？」

「そこまでは…。ただの偶然かもしれない。帰ったらセツプククロウサギさんに訊いてみますけど……」

このセツプククロウサギというのは、彼女のメッセンジャーだ。紅音はよくケンプファーのことについて、相談するらしい。前にうちで話をしたときに持って来ていた。そのせいでやっかいなハラキリ

トラが二匹に増えたんじゃないかと思うほど大変だった。

「あと、沙倉さんが休み時間に来た」

「またですか…」

俺はざっと説明した。女の俺にどうしても会いたいとのこと。そして、俺を頼ってわざわざ男子部まで来たということも。それを言った途端に紅音の顔色が変わったが、胃腸の調子でも悪いのだろうか。悪いのなら、胃腸薬を進めなくては。そのあとも漏れなく説明する。

「沙倉さんは諦めてないんだ。だから彼女を傷付けずにすむ方法はないかな？」

「…知りません」

彼女は話が面白くないのか反応も薄いし、返しの口調が冷たい。

（むう、前から紅音が沙倉さんのことを嫌っているんじゃないかと思っていたが、どうやら当たりらしい。いずれ仲直りの機会を設けなければ…）と考えながら話を続ける。

でもこの後は何度相談を持ちかけても、彼女は知らん顔をするばかりだった。

「だからね、紅音ちゃん」

「ナーツル！」

背中に衝撃が走る。だが何となく柔らかいからして、何者かが抱き付いてきたらしい。

「でえええええ!?!」

「やだなあ、なに驚いてんの? わたしだよわたし」

後ろを振り向くと、にこにこしているショートカットの女の子。水琴だった。俺の首にしがみつくように両腕を回している。

「なにするこら、手をどける」

「なに恥ずかしがってんのよ。バカみたい」

馬鹿はお前だ。こんなところ教師に見つかったらタダではすまない。それは全校生徒が知っていること。

現にこの状況に出くわしたというか、巻き込まれたというか…当の紅音は目を丸くして、ドン引きしていた。そりゃあそうだろう。俺だって彼女の立場だったらそうなる。

一方の水琴は屁とも思っていない。俺とのコミュニケーションで、照れるとか恥ずかしいという発想がないのだ。恐らく、こいつの血管には水銀が流れているに違いない。

にしても、水琴は意外と胸がある方だから余計に意識してしまう。

「なーに、見られて興奮する?」

「しねーから。とりあえずいいから離せ、紅音ちゃんがドン引きしてんだろ!」

「…紅音ちゃん?」

水琴は俺に言われて、もう一人の存在に気付いたらしい。

(ん？ 反応的に知り合いなのか？)

紅音と水琴の目があった。

「やっぱり、紅音ちゃんじゃん！」

首に回された腕は離れ、紅音の肩に移動する。

「…水琴さん」

「お前ら知り合いなのか？」

水琴、紅音の順に顔を見渡す。

「そうよ。中学の時、近くに住んでたもん。だから、友達 ね？」

おどおどしながら頷く紅音。

どうやら水琴の家 通称ヤドカリ家の一部の近くに紅音は住んでいるらしい。

なんで、ヤドカリ家って呼ぶかって？それはこいつの引っ越し理由から俺が命名したからだ。

水琴の両親は二人とも本が好きで、特に学術関係の本を大量に持っている。そのため部屋がなくなり、寝るスペースがなくなりで最後は自分たちだけ新しい家に引っ越す。

だから、ヤドカリ家。

身体が大きくなったら、新しい家を探すのと同じ。

「だから紅音ちゃんとは前からの知り合いで、お友だちなのです。ねー？」

そういうと水琴は胸を張った。

こいつは他人と仲良くなるのが以上なほど得意で、友達っていうのは本当だろう。

それに対して紅音は「：はい」と小さな声で言うだけ。

ちらつと彼女の顔を見ると、どこか申し訳なさそうな顔をしていた。はて、俺の呼び方を気にしているのだろうか…別に気にしなくてもいいのに。

「ナツルも紅音ちゃん知ってたんだ。偶然？」

「そんなもん」

「へー、やっぱり偶然ってあるんだね」

「まっただくだ」

ここだけは本当に同感。ケンプファーのことがなかったら、紅音とは出会ってなかっただろう。

するりとまた水琴は俺の首に両腕を回してきた。「蛇かお前は」とツッコミたいがこいつの場合はあり得なくはない。小学校のころ、ハリー ツターに影響された水琴は蛇と会話をしようとしたことがあった。最初は（…無理だろ）と思っていたがしばらくすると本当に蛇と意思疎通をしていた。あれにはマジで驚かされた。

ほんの少しだが、紅音はむっとした表情をとった。そう、彼女は沙倉さんのことが絡んでなくても、たまにこっぴどい表情をとる。どこか痛いのだろうか。痛いのなら、俺のことは気にせず病院に言ってほしい。

水琴がくすりとした、ような気がした。

「紅音ちゃん、ナツルとはどういう風に知り合ったの？」

「え…？ 普通にですけど…」

紅音は若干だが、戸惑う。

「嘘言わないで。ナツルは今まで私以外の女友達なんて、いなかったの。だから、普通なんてありえない」

「なっ…！？」

水琴は俺に女友達が水琴一人しかいなかったと断言した。

「もつといたさ！」と訂正を願いたいが、女友達が思いつかない。

紅音は紅音で、はつきりと分かるぐらい汗をかいていた

「え、えと…ですね……」

「うん…」

「…た、ただの友達……です……」

「だから、どういう風に知り合ったの？」

「……え、えと……」

紅音と目が合う。彼女はどう説明したらいいか、悩んでいるらしい。「ケンプファー繋がりで知り合いました」と言ってしまうと、こっちはスッキリするのだが、水琴の方はなおさらスッキリしないだろう。むしろ、「ケンプファーってなに？」と逆に興味を持ちそうだ。

「…な、なんでもない、です……」

紅音は塩をかけたナメクジの如くしゅんと小さくなった。こら、なんでもないってなんだ。友達になった理由ですらないじゃないか。

「なんでもないの？」

「はい……」

「ふーん。そうなんだ　まあいいや」

(まあいいやってなんだよ。「なんでもない」って言わせたの自分
だろうに)

「じゃあ、聞かない代わりに、紅音ちゃんにお願いがあるの」

「なんでしよう……」

「人探しをしているの。　まあ、わたしじゃないけど…その探している人が気になってね」

「誰なんだ？」

水琴に質問を投げかけると同時に、本棚の影から一人の女の子が出てきた。

「西乃ますみです。カッコいい先輩を探していました」

「「……………」」

硬直する俺と紅音。西乃ますみとは女子部に行くときに、会ったことがある。流石にもう会わないだろと鷹を括っていたが、すぐ会ってしまった。どうやら、世の中は案外狭いらしい。

「あー、あの時の人ですねー。お久し振りです」

ますみは米つきバツタみたいに繰り返して頭を下げた。

「瀬能ナツルっていうの。わたしの幼馴染み」

「へえーナツルさんですかー。わたし、ナツルっていう女の人知ってますよー」

「そうなんだ。俺と同じ名前だね」

「そうなのよ。その人を探してるってわけ」

「同じ制服着てて、紋章からして先輩のはずなんですけどー、いないですよー」

「もう全部探したの？」

「職員室に行って先生に確認したけど、そんな生徒は居ませんって
おいかえされたわ」

ますみではなく、水琴が俺の質問に答えた。

「何か知らない？」

「……………」

俺は知らない態度を取るが、紅音は反対に雲行きが怪しい。

「紅音ちゃん？」

「は、はいっ！　なんでしょう……」

名前を呼ばれて反応したのはいいが、声が裏返っていた。これでは『わたし知ってますよ』と相手に伝えているようなものだ。

「紅音ちゃんは何か知ってる？」

水琴は紅音の顔を覗き込むように見る。

「し…し、知りません……」

顔面が引きつっていた。

（はい、死亡フラグだった〜）と思った。刑事ドラマで言うところの、犯人逮捕目前。

「本当に？」

「はい……」

「ふーん。知らないんだ。　ならいいや」

水琴はさっきよりもあっさりと諦めた。こいつにしては珍しい。

昔から気になったことは諦めずに聞いたり、調べたりしていたのに。どういふ心境の変化なのだろう。

そう思ったのも束の間だった

「だったら協力してよね」

水琴は紅音に命じた。

「……なにでしょう?」

「女版ナツルを探すこと、をよ」

そう言うところを回って、俺の方を見た。

「あんたもね、ナツル」

「「はい……」」

承諾以外の選択権は、俺たちにはなかった。もし何か別のことを出来なら教えてほしい気分だよ

*

ぎゅるぎゅる

腹の虫が「お腹へったぞ」と喚き散らす。でも、俺にはどうしようもない。

「変身さえ解けてくれれば……」

(せめて、財布さえあれば……)

弁当も財布も2-4に置いてある鞆の中。財布を持ち歩かなかった

ことに後悔している。

「あら、どうかしたの？」

俺のつぶやきを聞いていたのか、隣の席の女子生徒が訊いてきた。

「なんでもないよ」

そう雫に言う。ずっと気を張って丁寧語だと疲れてしまうので今は標準語で話している。しかし、誰かに聞かれるのはまずいので相手に聞こえる程度の声で喋る。

「口調」

そういうと彼女は自分の口を指差した。話し口調を気を付けろってことらしい。

（そもそもなんで、いつも通りのしゃべり方をしてはいけないんだろ…）

というのが最近の疑問だ。声は変身すると女の子の声に変わるし、男口調でも問題ない気がするが。

でも、雫は口調に気を付けなさいと何度も言ってくる。というか、言わせている感じ。俺が忘れていて、普通に話そうとするから。

（それにしても、困ったな〜お腹が限界…）

今は五時限目の世界史。第二次世界大戦の前の産業革命はどのくらいのスクリーンを使用しながら、説明している。もっばら俺はまだ習っていない事なのでいまいち理解出来ない。

因みにここは女子部。

昼になっても何故か変身が解けず、図書館にいても仕方がないので女子部で授業を受けることにした。

雫曰く、出席日数は何とかなるけど、テストに関してはどうしよう

もない、とのこと。
だから、こうして授業に参加して休んだ回のプリントを貰いに来ている。

「お腹でも空いたの？」

「…空いてない」

ぐるぐるぐる

俺のお腹はとてもと言っていいほど、正直者らしい。本人とは違い嘘をつけない性分みたい。「…空いてない」と俺が言ってからの訂正が早すぎる。

「お腹は正直者ね」

「うるさい」

「あら、なんでかしら。 私は南君のお腹が言ったことを代弁しただけよ?」

ぐるぐるぐるぐる

「……………」

また俺の意思とは関係なく、雫の問に腹の虫が答える。

もうここまでくると、お腹の中になにかいるんじゃないかと思ってくる。エイリアンだとか。昔やっていたエイ アン2辺りでお腹から子供が産まれてくるってシーンがあったような気がする。

(うげえ…考えただけで、気持ち悪い……………)

いくら昔の作品でリアリティが無いにしろ、それを見た歳が歳だ。小さかった俺に対して、それは衝撃的過ぎて夜も寝れなかったものだ。それは今では笑い話として思い出せる。大人になるってすごいな。

「そういえば」

さらっとお腹の虫の抗議は無視して話を剃らそうとすると、ぐるぐるとまた鳴った。

もう訂正不可能。「お腹空きました」と認めることにした。

「昼食ってないから、腹へったー」

そう言うと机の上につ伏す。

ちょっと胸が机に当たり違和感MAX。

「だから、半分食べる？って訊いたのに」

そういうと雫は呆れた顔をした。

（だって、そこで食べたらなんか条件みたいなもの付けられそうだし…）

「そうね。何にしようか考えるのが楽しかったわ」

「……………」

そう、元に戻れなくなっただけから俺は女子部に行くこともなく、生徒会室でポーツとしていた。最初は（家に帰ろうかな）と思ったが女の姿では家に入れないのでその考えは断念した。

しばらく何かすることはないかと、考えていると静かにドアを開けて雫が入ってきた。

「何をしているの？」と聞いたそんな顔を一瞬したが、すぐいつもの表情に戻った。

『あなたから生徒会室に来るなんて珍しいわね』

そう言うと彼女は腕を前で組んだ。

『別にいいだろ。俺だって生徒会副会長だし。それに暇なんだ』

『昼休みが暇なのはいいことね。少しでも生徒会副会長に手伝ってほしいものだわ』

雫は“生徒会副会長”というところを強調した。手伝えつてことが言いたいらしい。

『はいはい、分かりましたよ。　ボーツとしてんのも飽きたし俺が出来るところならいいですよ』

『“あなた”じゃないわ。生徒会副会長の南春佳に手伝ってほしいって言ったの』

『同じじゃねーか。春佳も遥華も』

自分の名前を二回も呼ぶなんて、変だが致し方ない。女の俺も漢字だけ違う“はるか”なのだ。そのせいで間違えて男の俺が生徒会に
って言ってるこつちがややこしくて混乱する。

『手伝ってくれるのなら、男に戻って』

雫は含み笑いをした。

(まさか…もう気付いたとか?)

『だいたいかしらね。元に戻れなくなっているのでしょうか?』

『…まあ、隠すこともねえし。そういうこと』

『でも、変ね…。少し前に自由に变身出来るようになったって言うてなかったかしら?』

そう言いながら彼女は自分の弁当の蓋を開けた。意外と手の込んでそうなおかずがたくさん入っていた。

今は昼休み。お腹も空いてくる時間なわけで、つつい話の途中なのにガン見してしまった。

『なにかしら?』

『いや、おいしいそうな弁当だなと…』

レタスに包まれるかのように唐揚げが2個入っていた。その他は

『食べたいの?』

いつの間にか雫の座るとこまで移動していた。自分でも驚いて、数歩後ろに下がる。

『欲しいなら唐揚げあげるわよ?』

そう言って唐揚げを上品に掴むと、落ちないように手を添えて前に

差し出してきた。

ゴクリと音が出てしまつんじゃないか、と思うくらいの量の生唾を呑んだ。

唐揚げに吸い込まれるように卑に近付いていく。あと少いで食べるというところで意識を取り戻した。

『いや…やっぱりいい。気持ちだけ貰っておく……』

『…そう。いらならなら、いいわ』

差し出していた唐揚げを口に運び食べた。

(う…やっぱり貰つとけば良かったかも……)
と後悔するが、気を取り直す。

卑のことだから絶対食べたあとに条件をつけてくるに違いない。また新たな誘惑に出くわす前に生徒会室を出ることにした。

ドアを開けて出ようとすると、後ろから呼び止められた。

『テストのこともあるから、たまにはこっちにも顔出さない。テストの点数だけはどうにもならないわ』

『分かった。今日は参加するわ』

と、まあこんなことがあって女子部にいる。

でも、時間が経つにつれ(あの時食べておけば良かったと…)と考えてしまう。

すでに空腹も限界を突破しそうだ。

何か打開策はないかと無理にでも頭をまわす。

「あ………」

今頃気付いたことだが、二年四組は午後は体育の授業があったはずだ。その教室が空の時に鞆を取ってくればいいんだ。

(そうと決まれば……)

時間を確認する。まだ授業が終わるには時間がたつぷりあった。

ゆっくりと席を立つと教師に「化粧室行ってきてもいいですか？」と訊いた。すると「いいですよ」とすぐ返ってきた。

何故だか周りからヒソヒソ話が聞こえるような気がするが、今はちよつと遅めのお昼が先決。教室を出るともうダッシュで男子部に向かう。

ゲートで生徒会のバッチを見せて、難なく通過。あとはあまり目立たないように教室に向かうだけだ。

教室に着くなりゆっくりとドアを開ける。

すると クラス全員と目があった。

「なっ!?!」

「マジかよ……」

「そんな……」

これは俺。思いの外早く授業が終わったのか、俺以外が全員集合していた。はい、これで南春華こと春佳も教室に入ったから、全員集合(……ってそういう問題じゃないってね……)

教室を見渡すとほぼ全員唾然としていた。まあ、それは当たり前だ。男の俺だったからこそもならなかっただろうが、今は女。学年も違うし、性別が違う。そんなやつがいきなり教室のドアを開けてみる。こうなるんだぞ。気を付けなさい。

「な、なんで…星鐵学院三大美少女候補の遥華さんが……」

そう言いながら近付いてくる男子生徒がいた。よく見るとそいつは東田だった。

東田は気持ち悪い笑顔を作ると、ゆっくりこっちに向かってくる。

「誰かに用なんですか？ もし良かったら一枚写真でも撮らせて頂いても」

「ちよっ……」

あまりのキモさに一步下がりそうになるが何とか堪える。気を取り直して、自分の席に向かう。横からバックを取ると出口に向かう。クラスのやつらは「何をしてんだ」とばかりにぼかんとしていた、東田だけはしつこく話しかけてきた。

「先輩がなんでここに？」

「…用事がありました……」

ポーツとしている奴らの間をくぐりながら、適当に答える。

「春佳の鞆をどうして持っていくんですか？」

「…いえ、それは……」

（クソっ！……しつこいんだよ、こいつ……俺はさっさと帰りたいんだ！）

腹が限界に減っているせいで、へらへらとした話方と馴れ馴れしい態度にイラつきを感じる。

クラスの間中はそんな俺と東田を交互に見ながら、見守っている。

「もしかして、春佳の彼女だったりします?」

ぶちっ

「違います。春佳はっ」

「春佳は...?」

「っ... お、わたしの...弟です!」

「「.....」」

静かだった教室がもつと静かになる。クラスのやつらは何かをするのをやめて、俺の方を見てくる。

「.....あ、いや.....」

訂正をしようとするが、女の俺と男の俺との関係を表す良い言葉が出てこない。その間も意識があるのか分からないクラスメイトたちは無数の穴が空くんじやないというぐらい、俺を見てくる。

俺は耐えられなくなり、走って教室を飛び出す。

(俺はなんてことをしてしまったんだあああー!!!!!!!!)

声にならない心の叫びをあげながら、俺は走りだした

*

「おい、聞いたか瀬能！ 南のやつあんな美人なお姉さんがいたんだな！！ お前知ってたか！？」

東田は興奮しているのか、いつものへらへらとした顔ではなかった。はあ、はあ、と息づかいも荒い。まるで変人いや、訂正。元から変人だった。

「んじゃ、俺帰るわ」

「おい、待て瀬能！」

教室から出ようとした瞬間、誰かとぶつかりそうになる。

「あ、ごめん」

なんとか回避した。向こうも少し驚いた表情をとったが、すぐ無表情になった。

「瀬能ナツルさん、会長がお呼びです。忙しいですが、生徒会室までご足労願います」

ぶつかりそうになった男子生徒はそれだけ言い残すと、回れ右をして去っていった。

「は？ どういうこと？」

「おい、瀬能…お前会長の勘に障ることしたのか？」

「…まあ」

生返事だけすると、生徒会室に向かう。

(結構色々としちゃってるんだよ、これが…)

生徒会室がある図書館までの間、(あの会長のことだから、俺一人を呼び出して倒そうって魂胆じゃねえよな…)とか(いや、また沙倉さんを誘拐したとかだったら…)と色々考えてしまう。だって、あのパーフェクトソルジャーの三郷雫だぜ?一般ピープルの俺を呼び出すなんて、何か裏があるに決まってる。そう考えているうちに、図書館に着いた。

生徒会室はこの四階。

階段を警戒しながら上がると、ドアの前に一人の女子生徒が立っていた。中学生っぽい雰囲気を残した、背の低い一年生である。目が合うが彼女はすぐ視線を元に戻した。

「瀬能ナツルか?」

「はい」

突然名前を呼ばれたことにも驚いたが、年下とも思えないキリツと話方に思わず緊張してしまった。

「会長が中でお待ちです」

「あ、ああ」

門番らしき生徒がドアの前から退くと、ドアを開けてくれた。一瞬彼女に睨まれた気がしたが、気のせいだろう。

「失礼します」

中に入ると雫と、紅音がいた。

「ナツルさん……」

と彼女は言ったが、それほど驚いていないので、事前に知らされていたのだろう。

「いらっしやい瀬能君。かけたら？」

紅音の隣に椅子があつたので、そこに座る。俺たち三人しかいないせいか、妙に静かだ。むしろ緊張感が漂っている。主に俺と紅音の回りに。

「話づらいわね　葛原、もう帰っていいわよ」

と雫が言うと廊下から「はい」と女の子の声が聞こえてきた。どうやらさっきの子に向かって言っていたらしい。

「顔が怖いわよ」

「当たり前だ」

雫はうつすらと笑ったが、俺は笑わなかった。別に我慢しているとかなではない。ただ、警戒しているだけ。

はつきり言って雫はめちやくちや強かった。前に戦ったときは、ちよつとした機転で倒す一歩手前まで追い詰めたが、負けたらしいらしいというの俺の記憶が曖昧だからだ。雫を紅音が押し倒した後の記憶が抜けている。紅音もその辺の記憶がないらしく、勝敗についてのことは不明。

「変身したら少しは会話が進むかしらね」

一瞬だけ、生徒会長は光に包まれた。

光が収まると、彼女の内側の髪の毛の色がプラチナブロンドになっていた。やっぱりケンプファーへと変身したらしい。

直後に、俺と紅音も光に覆われた。そして紅音は目付きの悪い猛犬女に、俺は女の姿へとチェンジした。

「ふざけんなよ優等生」

そう紅音は声を荒げると、立ち上がった。だが、いつものように拳銃を出して発砲しない。トリガーハッピーの猛犬女なのに今日はどうしたのだろう。銃声の変わりにドスのきいた声が、生徒会室に響いた。

「今日は戦う気はないわ。安心して」

「笑わせるな」

俺も紅音に同感だった。雫はいつでもクールビューティー。つまり何を話しても口調に変化がない。なので嘘かホントか分かりやしないのだ。

「今日はその事じゃないの。女子部で今起きている問題をなんとかしたいの」

(…問題?)とばかりに俺と紅音の頭の上に疑問符が2つ浮かぶ。

「楓もそうだけど、西乃って子と近堂って子たちが気になる女子生徒を探しているんですって。背が高くて寡黙で格好いい人。瀬

能君なら分かるわよね？」

雫は「あなたが原因なの」とばかりに名指して俺に誰のことを言っているか訊いてきた。

「俺にどうしろと？」

「それは簡単なことよ」

雫は含み笑いをしながら、続けてこう言った。

「瀬能君、女子部にきなさい」

「は？」

オベ スクの巨神兵並の鋼鉄の顔を持つ人がまさかこんな冗談をかましてくるとは思わなくて、変な声を出してしまった。

「何を」

「私は正気よ。あなたが女子部に顔を出してくれれば問題は解決するの」

「噂の火消しってことか？」

「まあね」

雫は肯定した。だが、簡単な話ほど裏に何かあるということを思い出した。

また警戒し始めたところで、生徒会室のドアが開いた。

「ただいま」

後ろを振り向くとドアの前には一人の女子生徒が立っていた。

「…え？」

状況が飲み込めていないのか、間の抜けたような声が聞こえてきた。紅音の方を見ると彼女はいきなり現れた女子生徒に警戒していた。

「良いとこに来たわね。遥華さん」

雫が女子生徒の名前らしきものを呼んだ。呼ばれた方は何故かあたふたしている。呼び方からして、仲が良いのだろうか。そこでふと思い出した。

今日、いきなり俺の教室に現れた。春佳の姉だと名乗った人。当人だった。

「こ、こんにちは。何だかお邪魔な感じですね。わ、私はすぐ立ち去ります、はい！」

彼女は一気に話すと回れ右をして、この場を立ち去ろうとする。

「ちょっと、待ちなさい遥華さん」

「は…はい」

さっきとは違い、ぎこちない動きでこっちを向く。

「この瀬能ナツルさんって人が明日から復学するんだけど、二年の

始めから休んでたみたいで、自分の教室が分からないみたいなの」

「…それで…なんでしよう?」

「明日行くクラスまで案内してほしいのよ」

「…え……」

遥華と呼ばれる彼女は、それだけはやめてほし心底と言いたそうな表情をしていたが、雫の「お願いね」と言う言葉を聞いた瞬間にそっこ首を縦に振っていた。

見ていたこっちとしては、可哀想にの一言に尽きる。

「ちっ…帰るぞ」

紅音は吐き捨てるように言うと、さっさと歩きだした。

「瀬能君これ」

雫が俺に近付いてくるとゲートを通過するために必要なIDカードと生徒証を渡してきた。

中を開けて確認すると、やっぱり女の姿の写真が貼られていた。

「いつの間に撮ったんだ?」と訊こうとするが、既に彼女は仕事に目を向けていた。どうやらもう話すことはないらしい。

「で、では行きましようか」

南遥華　俺も知らされていなかった春佳の姉弟に女子部を案内されるという、なんとも不思議な時間の幕開けと共に、これから始まるかもしれない女子部での生活に（なんでこうなったんだろっ…）

という疑問を残しながら生徒会室を出ていくのだった

十二章『女ナツルと遥華』（後書き）

はい、どうでしたでしょうか？

俺的にはちょっと時間が無かったので、内容が薄くなっちゃったような感じです（、、、）
すみません…m（――）m

次の話からはテストだとかが終わったあとだろうから、もう少し濃く書きます、はい。

読んでくれる人がいる限り頑張ります（^-^-）v

では、次回予告…

ナツルは女子部へ連れていかれる。春佳はそんなナツルを見て笑っていたのも束の間…雲に捕まって

さあ、次回の春佳はどうなるのでしょうか。

十三章『女子部へ』

十三章『女子部へ』

朝から大声をあげるの、なにもニワトリだけの専売特許ではないらしい。いや、ニワトリの専売特許はおいしいってところか。

そのことはともかく、起きて学校に行くには少し早い時間に起こされた。

「ナツル、起きろー!」

「うわっ!?!」

お亡くなりになった目覚まし時計の代わりに、女の子の生音が耳元で盛大に炸裂した。もはやこれは嘯きなんてもんじゃない。まるで爆竹のようだ。

普通、女の子が朝起こしてくれるシーンを思い浮かべるなら、アニメとかのような「ねえ、起きてっばー」と言いながら肩を揺すってくる そんなイメージをするだろう。だが、現実はそのような甘くない。

こう…! 厳しいんだ。

「ほらー、遅刻するじゃない。起きるの!」

渋々、目を開けるとベッドの脇には、呆れ顔の水琴が立っていた。また、激しく肩を揺さぶられる。

「早くしないとご飯食べてる時間もなくなるよ。朝はしっかり取らないと、一日中ボーツとしたままになるんだから」

「食つよ」

目を擦りながら言った。こう見えても俺は、貧弱な食生活の割に朝食はちゃんと食べるのだ。

というか、昔からの癖だ。朝食べないと、一日が始まった気がしない。これも小さい頃から何がなんでも朝食は抜かせなかった母親の賜物だろう。そのせいで、急いで走ればギリギリ間に合った授業がいくつもあったのだが、それはまた別の話。

ベッドから降りつつ、（何をつけて食べようかな…）と考える。イチゴジャムにマーガリン、砂糖と色々浮かんで消える。

（まだ、眠いな……）

「ふあゝあ、あ……」

口をカバの如く大きく開けて、欠伸をする。

水琴も俺のにつられたのか、欠伸を噛み締めていた。

「……つてか、水琴！」

何だか昔に帰ったみたいで、特に気にしていなかったが重要なことを思い出した。

「なーに？」

「なーに？じゃねえ！　なんで俺んちにいんだ！」

今、両親は仕事の都合で家にはいない。なので、自分以外の誰かがここにいることがおかしいのだ。

「起こしに来てあげたじゃん」

「そうじゃねえ。　どうやって入ってきた」

「そりゃ…鍵を開けてに決まってるじゃない」

平然と水琴は言った。家の鍵を

渡した覚えはないから、自分で開けたのだろう。実はこいつの解錠技術は天才的なのだ。某番組でやっている、昔の金庫を開けてみせる、という企画より断然早い。水琴から聞いた話によると、「業務用の大型金庫でも数十秒あれば開けられるよ」とのこと。いつかルパン　世みために大泥棒になるんじゃないかと考えてしまう。それ以外なら、怪盗　ツトとか。でも、この解錠技術は考古学のフィールディングに使うらしい。泥棒の間違いじゃないだろうか。

「せっかく一緒に帰ろうって約束したの破ったから、朝来た」

「悪かったよ」

「小学生のころはさ、毎朝起こしてあげたじゃん」

「今は一人でも起きられる」

「照れなくていいから。　これからわたしが起こしてあげるよ」

「いらんわ」

どこまでが本気か分からん。昔起こしてくれたのは本当で、小学生の時なんかほぼ毎日来てた。友達の間で水琴はナツルの『第二の母親』、なんてあだ名が流行ったこともあった。ホントあだ名を消す

のは大変だった。

「何、感慨に浸ってるのよ。いいからご飯食べな」

「おい、そんな用意までしたのか」

「うん、もち。だから急いで」

そういつと彼女は下の階に降りていった。

それを確認してから、俺は机の上の、ハラキリトラを捕まえる。

「なあ、あいつはいつ来たんだ？」

俺と水琴が話している間、ずっとぬいぐるみのふりをしていた片目のトラは、もそもそと動きだした。身体の動きに合わせて、外に飛び出している内蔵も動く。正直、連動しなくてよかった。朝から内蔵を見るなんて、いい気分ではないからな。

「ナツルさんを起こす一時間前くらいですね。鍵が開けられる物音が下から聴こえました」

「トレジャーハンターから泥棒にジョブチェンジしたんじゃないだろな」

「本当に起こしに來ただけじゃないんですか？ 特に物音を聴こえませんでしたし。それにそんなに通帳に入っていないのでしょうか？」

「うん……」

ぬいぐるみに事実を言われるのは癪だけど、本当のことなので文句を言うのは諦めた。確か今の残金は数百円しか入ってない気がする。

「まあ、通帳に金が入ってなくても、盗まれるのだけは勘弁だけどな。アレが無かったら、俺は食ってけなくなる」

そう、あの通帳に親からの仕送りが入ってくる。つまり、命の次に大切なものだ。

「確かにそうですね。 ……それより、早く行かなくていいんですか？」

「あ……」

正直、忘れていた。

俺は急いで着替えると、台所へ降りていく。テーブルの上には、朝食がきちんと並べられていた。ご飯に味噌汁。それにアジの干物とお新香。

俺の朝ごはんにしては豪華。

「…数日前に買った食パンとジャムは？」

「あれじゃ栄養不足になるじゃん」

さらっと水琴は答える。冷蔵庫に材料は無かったはずだ。基本、空かペットボトルやら飲み物類が入ってるだけ。

材料をわざわざ買ってきてくれたのだろうか。ついしみじみと食卓に並べられた品々を眺めてしまった。

「昨日の残り物だけど、我慢して」

(…つまり、自分の家からおかずを持って来たのか 納得)
ずっと立っているわけにはいけないので、椅子に座ると「いただきます」と言って食べ始める。

「む……」

水琴は正面に座っていた。さっきから俺の顔を見て、にやにやと笑っている。

(そんなに変な顔して食べてたか…?)

「どう？ おいしいでしょ」

「……………」

ハッキリ言っただけは悪くない。というか旨いと思う。どこがと言うなら特に塩加減がいい。しょっぱすぎず、薄くもない。だが素直に白旗を上げるわけにはいかないじゃないか。とりあえず、「朝飯を作ってくれって頼んだわけじゃない」と心に言い訳の部屋を作った。

「……………ふん」

「それだけ？」

「……………」

「ほー、おいしかったみたいね」

ぐぬぬ。見抜かれている。水琴はニシシと笑いながら、「何年あんなの幼馴染みをやっているとってんのよ」と自慢気に言った。俺は

この屈辱が一刻も早く晴れるようにと、願いながら全速で食べることにした。

「そうだなツル、昨日聞いたんだけど」

「なんだよ」「、と言おうとしたが、アジの小骨のせいで台詞にならない。

「女子部に転校生がくるんだって」

「…それはお前のことだろ」

「わたしじゃないよ…あ、そういや転校生じゃないや。なんかね、病気でずっと休んでいたんだけど、復学するんだって。因みに話によると、二年生みたい」

「げほっ！」

俺は食べていたアジを吹き出した。
驚いて吹き出すなんて、ありえない、と思っていたけどありえるんだね。

「あー、もう汚いなあ」

水琴はそう言いながらも、机に飛び散ったアジの残骸を台布巾で吹いてくれた。

「ありがと。ってそれより…その話、どこで聞いた？」

「ますみから。でも、女の子はもうみんな知ってるよ」「

「そうなのか…」

そりゃあ、めでたいことだ。言いふらした奴を連れてきてほしい。嬉しいから魔法で黒焦げにしてあげたいと思う。

「どんな女の子か…知ってる？」

「いや、知らん」

「それが面白いのよ」

そう言うと水琴はぐいっつと顔を近付けてきた。小さい頃からこういうことをするが、いい加減その癖を治した方がいいと思う。ちょっと、こっちから近付けば、あーら大変なことが起きるだろう。

「上の名前は知らないけど、下はナツルっていうんだって。ほら、図書館で聞いたでしょ？　まずみが探していた人なのよ」

「……ほう」

俺はそう反応するのが精一杯だった。理由は察してほしい。アレだ。

「あんとと同じ名前ね」

「世の中は広い。俺と同じ名前なんて、百万といるだろ」

「口から魚の骨をだしてると説得力がないよ。まあ、これで探す手間が省けたわ」

「良かったな。これでナツルさんとやらも喜んでるだろ」

俺は適当なことを言った。どこをどうしたら喜ぶのだろう。俺自身も喜んでない。

「わたしは喜んでるわよ。もう見付かったんだから。ますみは絶対に会うって張り切ってるし」

「それは困るな」

「なんであんたが困るのよ。あたしも早く女版のナツルの顔、早く見たいわ」

俺は、もう何回心の中でつぶやいたか分からない言葉を、もう一度つぶやいた。

そいつ、お前の前にいるよ

*

俺こと南春佳は今日も走っている。

毎日、どこかしらで全速力で走っているせいか体力がついてきた気がする。別に駅伝選手に選ばれたからとかではないし、彼女が出来て筋トレ精神に目覚めたわけでもない。

あえて言うなら…そう、ケンプファー柄み。モデレーターとやらに変身が出来るようにさせられてから、一日一回は何かしらの理由で走っているのだ。

最近で言うと昨日 俺は何故か自由意思で変身が出来ていたのに、も関わらず、急に戻れなくなった。それが原因で昼飯を抜きになり、我慢出来ず男子部に取りに言ったのだが…。

それについては、猛烈に後悔している。

青春の良い思い出はウェルカムだが、黒歴史はノーセンキュー、いりませんと断言したい。

(それにしても…なんだよ……「春佳さんは他のケンプファーの人達とは違う」って)

ナツルを案内するという地獄を突破したあと、すぐ我が家に向かった。幸いに家に到着する前に変身は解けたのは、好都合。母さんに女の姿で会ってしまったらと考えるだけで、鬱になる。

早速ジユウサツイタチを捕まえて、一から全部説明した。

『そうですか』

ジユウサツイタチは頭をかきながら、そう言った。

『「そうですか」じゃないっつうの。これはどういっことだ!?!』

『まあまあ、少しは落ち着いて下さい。別に男子部で急に変身してしまった、とかそういうわけではないじゃないですか』

『まあ、そうだけどさ。つい最近まで、自由に出来てたのになんで?って話』

真剣に考えてくれているのか分からないが、今はこの喋るぬいぐるみしか頼るものがないので、細かいことは我慢。

『んまあ…あえて言うなら、春佳さんは特別だっけことですよ』

ジユウサツイタチは意味深に笑った。

『…どこが? 男から女ならナツルだっけそうだ。どこら変が特別

なんだ？』

『それはそのうちわかりますよ。 たぶん』

『たぶんって、お前な』

玄関から『ただいまー』と元気いっぱいの子の女の子のような声が聞こえてきた。母さんが仕事を終えて、帰ってきたらしい。

『なあ、とりあえずどうしたらいい？』

『戻れなくなる話ですか？』

時間もないので、こくりとつなずく。

『そらなら時間が経てば、いつも通り元に戻ったり変身したり、出来るようになりますよ』

『マジか…分かった』

そう言った瞬間、俺の部屋のドアが勢いよく開かれた。

『ただいまー』 話し声聞こえたけど、誰か来てるのー？』

(また、ドアの寿命が減ったなこれは…こいつはあと何回耐えてくれるんだろう……)

と心配しながら、ドアの破壊神こと南咲希の方を見る。

『来てないよ。 ちょっと電話してたんだ』

携帯を手を取って電話してたアピールをする。

『へえー、珍しいね　いつもその辺に携帯を放置してるのに』

『そうかな？』

『そつだよ！　母さん知ってるもん』

咲希（母）は右手の親指を立てながら、満面の笑顔でハッキリと断言した。

『ちよっ』

『相手はあの雫ちゃんかな？』

『ち、ちげーって！　ナツルだ！』

『んもっ　照れちゃって。　ほどほどにしないと、やきもち焼いちゃうからね』

そう咲希（母）言つと、とととと階段を降りていった。

『……………』

『照れてないし！　それに誰が誰にやきもちを焼くの！？』と言いたかったが、言うタイミングを逃した。

『あとから言っても誤解は広がるでしょうね』

俺と咲希（母）話を聞いていた、ジユウサツイタチからいらぬお告

げを頂いた。

そんなお告げのことはさっさと忘れることにして、当分ケンプファ―に変身するのはやめることにした。戻れなくなるのはマジで御免だ。

しばらく走っていると、見知っている男子生徒を見付けた。だが、そいつは男子部の校門に向かって歩いていった。

（あれ？ ナツルって今日女子部に行くんじゃないかなかったっけ…？

だから、昨日案内したのに）
雫の脅しに負けて“案内させられた”から、“案内した”に脳内変換する。

よく見るとナツルは勝ち誇った顔をしていた。どうせ（会長の言う通りに誰がするか）などと考えているのだろう。

（バカだな…あいつ……反抗して男子部に来たって、どうせ連行されるに決まってるのに）

話かけるのはやめて、傍観することにした。だってそっちの方が楽しそうじゃないですか。

しばらくあとをついて行くと校門を抜けた辺りで、男子生徒二人組がナツルを取り囲んだ。

「ほら、やっぱり来たよ」

来たってというのは生徒会の犬と呼ばれている 執行部のことだ。

男子部風に言うなら、雫様の奴隷。

奴隷とも言い難い難い男達は、軽々とナツルを取り押さえると問答無用で裏庭へと引きずって行った。

（引き釣った顔で引きずられていく、ナツル…）
心の中でギャグを飛ばしてみる。

「うん、我ながらにしてキモいな……」

自分のギャグに感想をこぼしながら左のポケットに手をつ突っ込む。中から取り出した携帯を流れるように開けると、メニュー画面を開いた。そして、カメラのアイコンを選んだ。

ぶひ

何とも気が抜けるようなシャッター音が響いた。

少し前に何か面白いものはないかと、携帯を弄っているとシャッター音という設定を見付けた。これに替えてからもうすぐ二年になるというのに今まで知らなかったという奇跡。まさに俺クオリティー。撮った写真を保存すると携帯を閉じて、ポケットの中にしまった。

（それにしても、なんだよあの顔。刑事ドラマの「俺は無罪だー！！」みたいな感じだったし）

「お疲れ様です。じゃあ、俺は関係ないんで」

そう、今日は生徒会の仕事があるわけでも、雫に呼ばれたわけでもない日。つまり、自由の日。アメリカで言うなら、独立記念日。そんなわけで、意気揚々下駄箱に向かう。

（さっ、まず今日俺がやることは……）
どう言ったらあいつらの誤解を解けるか考えながら、自分の下駄箱を開ける。

「あれ……？ 下駄箱間違えたかな？」

俺は考え事しているとよくしでかす。なので、閉めて番号を確認した。

(…25番…俺のとこだな)

確認のためもう一度開ける。

だが、さっきも見たようにもぬけの殻だった。

「まさか…小学校で流行るといふ…上履き隠しか」

「いえ、違います」

独り言に返答があった。(はい、これで独り言という枠から抜けましたよ)なんて感想は置いといて、後ろを振り向いた。

「ああ、すいません。上履きが消えた、みたいな顔をしていたので」

「上履きはこちらです」と“南”とあまりキレイとは言えない字で書かれた上履きを差し出してきた。

相手はどこかで見たことはある顔だが名前が思い出せない。よく見ると、胸に交差した刀を模した徽章を付けていた。

俺と同じ生徒会の人間のようにだ。

「今日は生徒会は休みじゃないのか？」

「ええ、休みです。ですが、生徒会長が副会長をお呼びです」

「なんで？」

「それは私たちは聞かされていません」

そうです。理由を訊いた俺がバカでした。生徒会の人間は生徒会長

に絶対服従　つまり、ああしろと言われたらその通りにする。こ
うしなさいと言われたらこうするのだ。理由は気にせず。それが生
徒会にとってプラスのことだから。イコール、自分達の将来のため。

「まあ、いいや。今からじゃないといけないの？」

「はい。裏庭で待っているそうです」

「はいよ、分かった。じゃあ、上履き返して」

「いえ、副会長が裏庭に来たら元に戻してとの命令ですので」

ここまで雫に絶対服従するとは、恐るべし生徒会だ。それはさてお
き、なるべく早く女の俺が男の俺の姉だという誤解を解きたいので、
さっさと裏庭に向かうことにした。
裏庭に着くなり雫に用件を訊いた。

「何か問題でもあったのか？」

「会うなりそれなのね」

雫は呆れたような顔をした。

（最近、雫の表情の変化が分かるようになった気がするのは俺だけ
だろうか…）そんな疑問を抱えながら、また質問した。

「まあ、急いでいるもので… それでなんですか？」

「簡単に説明するならこれかしらね」

雫の周りが一瞬光った。髪の内側がキラキラとしている。どうやら

ケンプファーに変身したらしい。それに釣られて俺も女の子へとチエンジした。

「げっ!？」

「どう? 元に戻れるようになった？」

そついうと隼は腕を組んだ。

冷静の隼とは反対に俺は焦る。

「あゝもう、なんで自分の意思で戻れないって時に！」

東田たち、クラスメイトの誤解を解く唯一の手段が断られた。もうこれで今日一日を過ごさなければいけないなら、誤解を解くチャンスは無いも同然。あの言葉は定着するだろう。

「やっぱり戻れないのね。でも、どうしてかしら。南君は他のケンプファーと違っつてこと？」

「…分かんない。ジュウサツイタチは特別だって言ってたけど…」

頭を抱えたいぐらい、今の状態はヤバイ。ゲームなら即ロード画面に飛ぶか、電源を切つてるところだ。

「…そつ、なら話は色々まとまるわね」

「え…? 何が？」

「色々よ。とりあえず、元に戻れないっていうなら女子部に来な

さい」

「…はい」

猛烈に帰りたいと思うのは、俺だけだろうか。今ならホームシックに陥った人の気持ち分かる気がする。

だが、しばらくしたら男に戻りました〜という場合も考えられなくもないので、今は流れに身を任せることにした

*

さて場所は二年四組の前。

昨日も来た場所だ。今は放課後と違い教室の中は騒がしい。復学する生徒がどんなやつかで、会話が弾んでいるのだろう。俺だってそうだった。転校生がうちのクラスに来るって聞いた時は、ワクワクしたものだ。

若干緊張し、女教師に続いて教室の扉をくぐる。話声がピタリと止んだ。

「じゃあホームルーム。　えー、本日からこの学校に復学した瀬能ナツルさんです」

とりあえず頭を下げる俺。

「お前達は瀬能を、傘の先でつついたり、珍生物扱いして虫眼鏡で観察したり、地震だーとか言って机を揺らしたりしないように。

なお瀬能は身体が弱いので休みがちで、場合によってはまた休学するってさ。　えーと、席は…」

女教師は事務的に説明を終えると、あくびをした。

「ま、適当に空いてるところにでも」

恐ろしくいい加減な女性だ。これが本当に教師なのか。ただのオル明けのアル中にしか見えん。
女の子たちは無言。視線がピリピリとして痛い。

「…よろしく」

とりあえずそう言った。

しばらく無言が続いたのち

「…格好いい」

一拍おいて。

「きゃー！…」

女の子たちが、激安ワゴンセールに飛びつくおばさま方のように、俺の所に走ってきた。

「かつこいいかつこいい！」

「超美人！ 身長何センチ！？ バストいくつ！？」

「彼氏いる！？ いなかったら彼女は！？」

俺は女の子の渦に巻き込まれ、窒息寸前だった。女教師は「新作のゲーム買お」と呟いて去っていく。どうやらアル中ではなくゲームマ―だったらしい。

そんなことはどうでもいい。とりあえず、押し寄せてくる女の子たちを止めることにした。

「まっ…待った！」

何とか頭を出した。

「俺…じゃない、わたしはただの生徒だ。そんなこと聞かれても……」

再び沈黙が訪れた。

(ふう…助かった…これで)

“脱出できる”と思った俺が間違っていた。逆に彼女たちはヒートアップした。

「すっごーい！ 声がハスキー！」

「男の子みたーい！ 超かっこいいー！」

バーゲンのおばさまからヌーの群れと化した女の子たちはなおも俺に群がっている。

俺はとにかく逃げだそうとし、失敗して転びかけた。どの子もものすごい粘り腰だ。さぞかし将来は、歴代のおばさまと良い戦いをするだろう。

紅音も俺の元へ来ようとしているが、人間津波に囲まれて往生している。弱気な彼女にはきつかるう。俺だって窒息しそうだ。

女子部二年四組の中で、とりわけ目立つのが三人いた。

「瀬能さんはどこにすんでいるんですか？ あたしの近所だったりしません？」

この、さつきからしきりに人のプライベートに首を突っ込もうとする女の子が、一番元気だった。一見真面目そうなので、“委員長”と名付けておく。

「素敵、素敵、もうとろけそう。匂いかいでいい!？」

この娘は奇怪なテンションをしていて、俺のスカートにしがみついて離さない。“委員長”にどこかしら似ているから、“副委員長”にしよう。

「瀬能さんあなたは神を信じますか？ 信じなくても構いませんから入信してください。あるいは分割で壺を買うのです。改名も可」

どさくさ紛れに新興宗教に勧誘してきたり、金関係のことをブッシュしてくる娘もいた。彼女は自分を見失ってはいないようだが、このクラスで一番変だ。特に金についての話が多かったので、“会計”ということにしよう。

(これで残りは書記だな…)と考えると教室の扉ががりり開いた。

「はい。皆さん、そのへんでやめましょう」

パンパンと手を叩く音が教室に響いた。タイミングが良かったためか、ピタリと収まった。

声が出た方に顔を向けると、やって来たのは沙倉さんだった。

「ナツルさんは休学から復帰したばかりなんです。あまり迷惑をかけちゃいけません」

「あ…あの…沙倉さん」

恐る恐る発言したのは紅音だった。

「瀬能さんはうちのクラスです…。みんなお友達になりたいと思っ
っているだけで…二組の人がそんなことを言うのは…」

弱気モードの紅音にしては攻撃的な台詞である。他の女の子も彼女
に賛同した。

すると、沙倉さんはぴしゃりとはねのけた。

「ナツルさんのピンチは見過ごせません」

「ピンチじゃないです…。そんな風紀委員みたいないな…」

「あたし、栗ちゃんからナツルさんの面倒を見るように言われてい
ます」

「え…なんで生徒会長が、そんなこと…」

「言われたんです!」

沙倉さんはこっちに近付いてくると、女の子の波を掻き分けて俺を
見付けると、強引に引っ張り上げた。

「さあ、ナツルさん。女子部を案内します。こちらへ」

俺は引きずられるように教室の出口へと連れていかれる。あと少し
で廊下だ、というところで紅音が叫んだ。

「瀬能さんは、昨日…南先輩に女子部を案内してもらったので、その必要はないと思います……」

周りの女の子たちがざわつく。あちらこちらから、

「うそっ…あの南先輩と知り合いなの!？」

「いいなー…わたし会長のガードが固すぎて話したことない……」

などと俺と南先輩は知り合いだった説が浮上する。

(知り合いというより、昨日が初めてなのですが……)

それにまず昨日なんか、「はい……」とか「そうなんですか……」とか頷く系しか喋っていない。向こうだって、こっちと同じであまり喋らなかったのだ。

まだ知り合いというわけには……なるか。

「本当なんですか……? もう案内してもらったってというのは……」

「……まあ……」

(この教室までの来方ですけど……)

沙倉さんを見ると俯いていた。さっきまで俺の腕をつかんでいた手も、今は宙ぶらりんだ。

「……だから、もう案内は大丈夫だと思います……」

紅音は最後のとどめだ、かのように言い切った。

「……」

沙倉さんは背を向けると扉を開けて出て行ってしまった。むむ、やはり紅音は沙倉さんのことが嫌いなのだろうか。もしそうなら人生損をしている。今度、沙倉さんの誤解を解かなくては。しばらく教室に静寂が訪れた。(どうしようかな...)と考えていると、ある異変に気付いた。

俺の腕輪が光っていた。変身が解ける合図だ。

紅音ちゃんに事情を、と思ったが、そんな時間もないらしい。どんどん点滅するスピードが早くなっていく。

「ごめんっ！ちょっと...」

二年四組の扉を勢いよく開けると、安全な図書館へと翔る。

後ろから「修羅場...？」と不穏な言葉が聞こえた気がするが勘違いだったことにする。

階段を駆け降りて一階へ。外へ出ると芝生を走り、図書館へと向かう。なんとしてでも男子部まで行かないと、ガードマンに取っ捕まる。

まだここは女子部だというのに、腕輪の光は全身に及ぼうとしていた。

(ちよい待ち!! あと少しだけっ!!)

そう思った瞬間、今にも身体を包もうとした光は消えた。その代わりに銃声が響いた。

「なっ.....」

足元に穴が二つ開いた。俺は前につんのめり、前転するように転がった。

「誰だっ!!...」

俺は意識もせず、そう叫んだ

*

「ねえ、知ってた？ 南さんには弟さんがいたらしいわよ」

「二年四組の南って子らしいよ」

「そうなの？ 知らなかった。んで、どうなの？」

「実物見たわけじゃないけど、写真でなら見たわよ」

「えー！ いいなー！ どうな感じだったー？」

とまあ、説明しなくても分かって頂けただろうか。

俺が教室に来てからずっとこの話で持ちきりなのだ。それも本人に直接聞くわけでもなく、男の俺に確認を ってそれは無理か。俺は一人しかいないのだから。

「なあ…もしかして、この噂を払拭させるために俺を呼んだのか？」

雫にしか聞こえない大きさを話しかける。

「それもあるけど他にもあるのよ」

「他には何が？」

「ここです言っほど私は馬鹿じゃないわ。 そのうち分かるわよ」

そういうと雫は話を終わらせた。そのあと何度も話しかけてみたが、無視。つまり、あなたは早く誤解を解いてきなさいと言いたいのかもしれない。

「…はいはい、分かりましたよ」

ホームルームも終わったので、席を立つと噂をしている女の子たちの所に歩いていく。彼女たちは俺がこっちにくると分かるやいなや、話を直ぐ止めた。どうやら雫がいるため、この手の話題はしにくいらしい。

まだ話したことがない相手だったが、ここは選り好みしている場合じゃない。とりあえず話しかけてみることにした。

「おはようございます」

まず気さくに挨拶から初めてみた。向こうも俺からされるとは思っていないかったようで、少し驚いた顔をしたが、すぐいつもの表情に戻し挨拶を返してきた。

「おはよう」

「おはよー」

と多種多様な挨拶を返してくれた。でも、まだ緊張しているような気がする。やはり復学生だからだろうか。ちょっと距離を置かれている気がする。

「今日の一時間目ってなんでしたっけ？」

「忘れたやった」と付け加えながら、フレンドリーに話を繋ぐ。

その効果が少しうまくいったのか、段々と話が盛り上がっていく。昨日見たテレビ番組から学校の話。もう少しで訊けるかなと思ったとき、横からスツと腕が伸びてきた。

「ひゃあっ!」

胸の辺りがざわざわした。

(何事っ!?)と自分の身体を見下ろすと、胸まではいかないがその下辺りを触られていた。

「きゃっ! 可愛い声 びっくりしちゃった?」

そう言ったのは毎度悪戯をしてくる千紗だった。

指をクネクネとさせ段々上に上げようとしていた。俺はそれにいち早く気付くと彼女の手を振り払った。

「ちょっ! やめろ……やめてって何回言ったら……」

「いや〜ん、けち……」

(おい、その言葉な使い方は古くないか…?)とツツコミたくなつたが我慢した。ここでツツコミをいれたら、千紗のペースに話が進んでしまう。

「けちじゃないです……」

「それより、また少し大きくなつたでしょ?」

彼女のそんなふとした言葉にクラス全体が反応したような気がした。因みに雫だけはいつもと変わらないみたい。

「そんなことより、何ですか？」

彼女のペースに流されないため、ということもそうだが千紗ならあの噂、『女子部の南遥華は男子部の南春佳の姉だったらしい』について容赦なく聞いてくるはずだ。そんな確信がどこかにあった。別にこの娘がKY 空気読めないとかだとかではない。多少読めないところはあるが、千紗はマイペースな子だからしょうがない。俺はそこにかけた。

「ねえ そういえばさ……」

「はい…？」

(来るか、来るのか…?)

期待値に比例して心拍数が上がっていくのが分かる。

ドクン、ドクン

千紗は続けて口を開く。

「わたしも大きくなった気がするのー 見てみてっ」

「……………」

周りの女の子たちは「きゃー！ いいなー」とか

「触らして〜」とか黄色い声をあげているが俺はこっぴど叫びたかった。

「そんな話どうでもいいわー!」

うん…男としてそんなこと叫んではいけない気がするが、いかんせん今は女の子。そういう所を見ても「ヤベー！」だとかあまり思わない。それならここにもあるし、となってしまう。
見たいときに見える　というのもヤバいが…
とにかく、女の姿のときはそれほど興奮しないのだ。元は男なので悲しいことこのうえない。
きゃっきゃしてた千紗が俺を現実世界に引き戻した。

「触ってみる？」

「はあっ!?!」

「うふふ」

と変な声を出しながら千紗と何故か数人の女の子たちが、じりじりと近付いてくる。

(だ、誰か……!!)

と助けを求めて周りを見るが、クラスの女の子たちは笑ってこっちを見ていた。「くそー！俺はみせもんじゃねーぞ！」と叫びたくなる。

いっそのこと逃げようかと思った瞬間、

「それより、遥華さん。男子部の南君と姉弟って本当なの？」

と透き通るような声が聞こえてきた。

後ろを振り向くと、「これは貸しよ」「とでも言いたげな顔をしながら、こっちに近付いてくる雫がいた。

「で、どうなの？」

生徒会長も知らなかった情報だったことにみんなも気付いたのか、彼女たちの目付きが変わった。

「え…と、あの時は」

「どうしたの？」

冷静になるために脳を総動員した。そして、出てきた言葉は

「男の子たちに囲まれて恐かったから、つい口からでまかせ…みないな」

「じゃあ、男子部の南君の鞆を持って行ったのは何でなの？」

千紗が訊いてきた。

「それは…」

「考えてません」なんてことが言えるなら、どれだけ幸せなことか…だけどそんなこと言った暁には、どっちの俺も後が大変なことになるかもしれない。それだけは勘弁だ。

「栗先…さんに南君の鞆を取りに行つてあげて、と言われて…」

「」「」……………」

クラス全体が静まり返った。

（あれ…？ これってまずかった系……か？）
しばらく沈黙が訪れたあと千紗が喋り始めた。

「へえーだからなんだ〜、恐かったでしょ〜」

やんわりと彼女は抱き付いてきた。柔らかいものが顔に押し付けられる。

（な、なんだこれは！？）

と顔に押し付けいる物の感想を溢していると銃声のような音が聞こえた。

（まさか……）と思って雫見ると彼女は頷いていた。

「この子の行動を見張ってほしいのよ。あなたなら出来るでしょう?。」

雫はケンプファアの俺にだけ聞き取れるような小さな声でそう言った

十三章『女子部へ』（後書き）

すみませんm(_____)m

冬なのに食中毒にやられて投稿遅れました…

って季節は関係ないか(´・`・´)

とりあえず、上も下の雨あられみたいなの

あえて言うならカエルです。

まあ、それはさておき…完成しました

最近雫サイドとか書いてないなーと思い始めてきた、わたくしですが…書いた方がいいかな？

それともナツルの案内とか色々と簿かしてるところを書いた方がいいかな？

と色んなことを考えていますが、とりあえずこの章はこんな感じですよ。

楽しめて頂けたら幸いです。

はい、では次回予告ですが…

遥華は雫に無茶な命令をさせられる 「そんなの無理だって！」と返すが「貸し」と言われてしまう。

そのころナツルは女子部に戻っていた。

そして新聞部のますみが現れ連れていかれ、「この写真の人わ、誰ですかー？」と聞かれる

ナツルはまだ原作通り進むとみせかけて、少し違います。たぶん。

てか、波乱にし過ぎでしょうか。(´・`・´) (笑)

平和がほしいですねww

十四章『中立』

「ナツルの相方をどうやって見張るんだ？」

外の気配を探りながら雫に訊く。外では戦っているらしい。味方同士が戦うわけではないので、赤と青だろう。もう少し情報が欲しいので集中した。

ほによん

その効果音がピッタリだった。

「ちよっ!?!…何やって!」

「え? 私の話聞いてなかったから、悪戯を的なの」

千紗が俺の胸を揉んでいた。もう鷲掴みという言葉通り、いつの間にか前屈みになった彼女は前から堂々と触っていた。周りから「きゃー! いいなー!」とか「それって順番!?!」とか叫んでいる女の子たちがいたが、雫の一言で黙った。

「千紗やめてあげて、遥華さんが困っているわ。それと、遥華さんを少し借りるわね」

そして俺に「ついてきなさい」と伝えるとさっさと教室を出て行ってしまった。

俺も後に続いて教室を出る。

俺が出てきたことを確認すると雫は歩き出した。

「三嶋さんじゃないわ。あなたに見張ってほしいのは別の娘よ」

「え…?」

雫の考えが分からなかった。敵のケンプファーを見張らないなら誰を見張るんだらう。もしかして、東田率いる地下美少女研究部の動向だろうか。

(…それならありうるかも)

と納得。あいつらの行動には目に余るものもあつたりする。例えるなら、穴を掘って男子部と女子部を繋いだりとか。聞いたときは本当に驚いたものだ。ここまでして異性とコミュニケーションを取りたいとわ、と。わざわざ学校でじゃなくて、学内外で連絡をとって会うという考えはないのだから。その方が安全だし、こそこそしなくてもいいのにと俺は思う。

「…あなたが考えてる人じゃないわね。この写真の子よ」

と雫は言つと一枚の写真を見せてきた。そこに写るのは、前見たナツルの相方でも、東田でもなかった。顔を半分覆うぐらい長い髪をしていて、目付きがキリツとしている、見るからに小柄の女の子だ。(…あれ? この娘どこかで……)

「そうよ、一回はどこかで見たはず。生徒会執行部の子よ」

もう雫の“人の考えてることを覗く”ってことには慣れたが、本当にどうやってたらあんな曲芸みたいなことを出来るのだから。俺が思ったことと会話している気がする。とてもじゃないが変身してケンプファーになつたとしても、俺には出来そうもない。

彼女の執行部の子という単語で、ぴんときた。歓迎会とか会議で何

度があつた。まあ、いわゆる全部男の俺がだ。
そこでふと疑問が浮かんだ。

「…待て、その娘は味方？じゃないのか？　なんで敵じゃなく味方
なんかを見張るんだ？」

雫は立ち止まらず話を続ける。

「簡単に説明するなら、私のことをモデレーターに報告してるから
つてところかしら」

「……………」

(モデレーター…?)
モデレーターっていうのは、俺たちをケンプファーに選んで戦わし
ているやつらのこと。つまり、全ての元凶ってやつだ。

「じゃあ、しばいてそいつから情報を貰えばいいじゃんねえか」

「訊くつもりだけど、その前にやっておくことがあるの」

そう言うと雫は妖艶に笑った。

この笑みを見たあととはろくなことが起こらない。それは経験上分か
ったことだ。もうこの笑みは“悪魔の微笑み”と言ってもいいかも
知れない。

「…また企みが？」

(三國志に出てくる　諸葛亮じゃなかった…司馬懿かつ)と
心の中でツッコミを入れておこう。じゃないと口に出してツッコミ

をしまいそうだと。

急に雫は歩くのをやめた。俺の方を向くと、彼女は真剣なまなざしでこう言った。

「仲間の私を裏切って戦って。そして、あなたには中立の立場になってほしいのよ」

「あーはいはい。分かりましたよ」

「……って、えっ!?!」とびっくりするのが一転歩遅れてしまった。ついつい反射的に頷いてしまったが、雫が言っていることは彼女と戦うということ。そして、赤も青も敵という中立の場所に立て、ということ。

なんでそんなことをしないといけないのか理由が分からなかった。

「意味が分からないって顔をしているわね」

「そりゃあ、するさ。俺が中立の立場になってなんのメリットがある」

別に俺のメリットだとかそういうわけじゃなくて、雫のメリットの話だ。もしそうだったとして彼女に特があるとは思えない。

「なんのためにそんなことを？」

と俺は雫に訊いた。

すると彼女は背を向けてまた歩き出した。歩いている方向に決まりが無いので、別にどこかに向かっていているわけではないらしい。とにかく今は雫の話が気になるのであとを追いかける。

雫の横に並ぶと彼女は喋り始めた。

「理由は、ここでは言えないわね」

「じゃあ、俺は嫌だ。意味が分からずに戦わされるのはもう勘弁だな」

と俺は言い切った。

本当に理由も分からず戦うのは嫌なのだ。ジユウサツイタチはそんな俺に『そのうち気にしなくなりますよ』なんて言ったが、そんなの死んでもごめんだ。

「貸しを返して、と言っても駄目そうね。でも、私はここではと言ったのよ？」

「……………」

雫の言葉を飴のように舐めるように頭の中で転がす。“ここでは”と強調した辺り、説明する気はあるのかもしれない。とそんな風に考えられるのは今がケンプファーだからだろう。変身前の俺だったらこんな冷静に聞きながら分析なんて、器用なこととは出来ないだろう。出来るなら聖徳太子か俺の前にいる彼女だけ。とりあえず、それを待つてみることにした。

「…分かった。雫さんの貸しは貯めると後が大変そうだから、今のうちに精算しときますわ」

(それに…討論しても負ける気しかしねえーし)

「顔と言っていることが違うわよ。まあ、それだけ私を信用してもらってるってことにしとくわ」

「でも、私のことを雫さんと呼ぶようになったのね」

「それは今は俺、いや私　女ですから」

そう言いながら、通り過ぎた女子生徒に微笑んだ。だって、ずっと見てたんだもの。しょうがないじゃないか。

「　そう」

雫の表情は変わってないが、一瞬くすつと笑ったような気がした。じっと見ていると逆に雫がこっちを見てきた。

「なにかしら?」

「んや、なんでもない…それより、いつやらかす?」

「私と南くんのこと?」

「…違います」

なんかさっきと話が変わったのが分かった。俺の言った「やらかす」と雫が口にした『やらかす』では、大分意味が違いそうだ。

「じゃあ、何をやらかすの?　男と女同士で」

「今は女ですので、それは　」

頑張って笑顔を作るが頬が引きつっているのが自分でも分かった。たぶん相手から見たら酷い笑顔だろう。ここではスーパージョーカーのバイト

で養われた営業スマイルこと、作り笑いがちゃんと機能しなかった。

「あら、私はそっちの趣味はないわね。 遥華さんにはそんな趣味があつたなんて初耳だわ」

「おい、話をややこしくするな。 俺はそんな変態じゃない。 レズの趣味なんかねえ」

丁寧語を使うと色々疲れるので、雫にしか聞こえない程度の大きさを否定した。

「すごいカミングアウトね。 そうすると、あなたは男の子が好きだつてことになるわよ？」

雫は俺がああ言えばこう、こう言えばああ言つと終わりなき迷路かのような、やり取りを始めた。 やつてて混乱してくるが、ここで引いたら俺が変態つてことになりそうだった。 負けじと気合いを入れたときだった。

まだまだ続くと思つていたものは、案外すぐ終わった。

「まあ、男の子は変態だものね」

「ちよい待て！そこでまとめるなっ！」

「じゃあ、どういう風にまとめて欲しいの？ 南くんは女の子が好きで、遥華さんは」

「そこがややこしいんだ。 そこは必ずしもどちらかを好きじゃないといけないのか？ どちらも嫌いという選択肢は…？」

「あら、人間不信に陥っているわね。可哀想に…でも、それだと」

「じゃあ、どうすればっ…！」

キーンコーン、カーンコーン

俺の叫びと共に学校のチャイムが鳴った。

「そのことについては　南くんの家で話しましょう」

「なんでうち!?!」とか色々聞きたいことがあったのだが、口が勝手に動いて違うことを訊いていた。

「何について…?」

「なぜ中立になるのかを聞きたいのでしょうか?それなら、二人つきりになれるところの方がいいからよ。それより、早く戻るわよ。」

私、授業は遅刻したくないの」

そう言うと雫はぼかんとする俺をおいて、さくさくと歩いていってしまっ

*

会長の仲間と思われる赤のケンプファーとの戦闘から、はや数時間が過ぎた。俺は女子部に戻っていた。変身が解けて男の姿にもどりませんように、と神様に祈りながら、授業をなんとかやり過ごしたのだが

廊下側の扉から、じっと教室を覗く影。

一人や二人ではない、十人、いや二十人ぐらいだろうか。休み時間

の度にその数は増え続けていた。

しかも、その視線たるや、全てが俺を向いていたりする。別に俺が前代未聞のナルシストだから、とかではけてない。檻の中にいるパンダを見にきた客みたいな感じになっているのだ。ちなみにパンダは俺だ。そんで見てくる女子生徒は客。

(今ならパンダの気持ちに分かる気がする…)

俺も見に行ったことがある客だったが、この状況を体験するとなんだが申し訳なかった気になる。

「ねえ、なにあれ」

どついうわけだと、思い紅音に相談した。ちなみに俺の席は紅音の真横である。あの時担任は

「適当に」とか言っていたが、これも会長の差し金だろうか。

「女の子が俺を見てるよ…」

「……………」

紅音は聞こえてないらしい。どんな病気にかかっているのか、そろそろ心配になる。もしかしたら、難聴なのだろうか。

「瀬能さん見張られてますね」

「うおっ」

突然真横から囁かれ、俺は飛び上がった。

薄笑いを浮かべているのは委員長さんだった。

「あらやっぱり、男の子みたいなハスキーボイス」

「な……なに……?」

「ご忠告してあげたの。あなた狙われてますよ」

(…狙われる?)

とそんな言葉が頭の中で反芻する。

確かにケンプファーの俺は、常に危険に身をさらされている。「我常二戦場ニ在リ」と読み下し文で書きたくなるくらいだ。しかし委員長さんの台詞は、いくらなんでもそのことじゃないだろう。

「女子部には楽しみが少ないの」

何故か足下から声がした。見ると、副委員長さんが寝っ転がっていた。しかも、猫みたいに俺の靴下に頬を擦り付けている。

「だから新しい人が来ると大変なの。しばらくはその人の噂で持ちきりになるわ。しかも美人だったら、ねえ」

「そんな馬鹿な…話が……」

「いいえ、ここはそういうところ」

「つまり瀬能さん、あなたは時の人なのです」

真っ正面から言ってきたのは会計さんだ。何度見ても為替のディーラーみたいな顔をしている。大人っぽいというか、現実味がない。

「今頃は二年生だけではなく、全学年に知れ渡っているでしょう。」

噂の美人がどんな人なのか、一度くらい見てみたいのはむしろ当

然

「え……」

俺はもう一度扉に目をやった。流石に他クラス、ということもあり中には入っては来ないが、確実にさつきよりも増えていた。

「あれは……俺……わたし目当て？」

「そうです」

三人が声を揃えた。

娯楽が少ないというのは分かる。ここではゲーム機はおるかトラップでさえ見付ければ即没収され、反省文を書かされる。そのこともそうだが、何か刺激が欲しいのだ。十代なんて楽しいことがいくらあっても足りない。でなけりゃ男女問わず、危険を冒してまで境界線を越えたりしない。東田が写真を撮るのに血眼になっている理由はこれだ。あ、いや訂正。東田の場合は別の理由があるかもしれない。

しかしだな、娯楽が少ないからといっても、その相手が俺なのはどいうことなのかと訊きたい。

「今頃は男子部まで噂は広がってますよ」

「そうそう。生写真が出回ってるかも」

「ふふふのふ」

実に楽しそうな三人組だ。芸人でもないのに喜ばせるなんて、俺にはお笑いの才能があるのかもしれない。

だけど俺には、吉本やたけし軍団にも所属するつもりはなかった。ケンプファーになっているだけでも一杯一杯なのだ。他の特徴はいらない。

(って、ちょい待ち…「生写真が出回ってるかも」って……)

「そうは言ってもここから出られませんね」

「腹を空かせた鮫がわんさかいる中に、血を流しながら飛び込むのと同じようなもの」

「ふふふのふ」

どうしてこんなに楽しそうなんだこいつらは。

まるでこれからのことを予期しているかのようだ。なんて腹の黒い女子生徒なのだ。黒いのは生徒会長の三郷雫だけで十分間に合っているのだが、どうにかならないのだろうか。

キーンコーン、カーンコーン

休み時間の終了のチャイムが鳴る。同時に、扉に貼り付いていた女の子たちは、潮を引くかのようにいなくなった。とりあえず、俺はほっと息をつく。

「安心して無駄ですよ。瀬能さんのことは、みんな興味があるんですから」

「女の子だけじゃなくて」

「ふふふのふ」

「……………」

(聞こえない、聞こえない…)
実際は全部聞こえているけど聞こえなかったことにする。

俺の心は暗くなった。考えてみれば、今までの人生においてここま
で女の子に注目されたことなんてないから、喜んでもいいことであ
る。でも、注目して欲しいのは男の俺の方なので、トータルで見れ
ばマイナスにくい込んだ辺りだろう。

というわけで、貴重な休み時間は強制的に奪われた。ホント返して
ほしい。

時間割表を見ると次は国語だった。あの「ゲーム買お」とだけ言い
残していなくなった女教師の授業である。教卓の方に目を移すとい
つの間にかいた。欲しかったゲームは買えたんだろうか。

この教師は実に面倒くさそうに、教科書片手に板書し始めた。

「……………で、この去っていく奥さんを見守る旦那さんは、いったいど
んな気持ちでいるのか誰かに答えて欲しいんだけど」

教師のそんな言葉に、クラスの女の子たちは一斉に顔を伏せた。俺
はといえば、馬鹿みたいに黒板を眺めていた。
そんな俺を見付けて、ニヤリとする教師。

「ふっ。動きが鈍いわね。では、ナツルちゃん！ 答えなさい」

(うげっ！ 俺かよ…それもちろん付けだし…)
女教師は腕組みをして、実にふてぶてしい。こいつは何を考えてい
るんだ。

「答えられなければ、次のテストは無条件で赤点にするわよ！」

「なっ!?!」

(な、なんていうパワハラ…)
もはや職権乱用だ。こんなことで赤点なんかくらいたくない。これは訴えたら勝てるレベルだろう。

「まあ、それは無しにしてあげてもいいわ。でもそのためには、先立つものが必要ね。具体的に言えば…賄賂かしら」

「ひ…ひでえ……」

これが教師のやることなのか。どこの世界に、答えなくていい代わりに金を要求する担任がいるんだ。いや、ここにいたけども。

「お金がないのよ。新作のFFとお酒を買ったら財布が空になったわ。ホント酒税とか消費税とかいららないと思わない?」

「……………」

(税金がこの世からなくなったら、国や企業が潰れるっつうのとちよつと頭良いことを考えてみたり。

そんなことをしていると、周囲から「動きが鈍いわね」「素人ね」との呟きが聞こえてきた。

(いいよ、素人で。つか、金なんか払えないし)

「先生……」

「観念したのね。早いわね」

「いえ、普通に問題に答えたいのですが」

「間違ったら即罰金よ。一回につき…そうね、500円ぐらいに
しとこうかしら。んで、回数が増えると加算ルールにして」

「……………」

(この教師の頭はどうなってんだ？　つか、意味わかんねえ)

「払いたくなければ、何か秘密を話さない」

「は…………？」

「昔男に騙されたとか、男に捨てられたとか、男にされたこととか、
そういうの。なんか売れそうな情報が欲しいわね」

(結局、行き着く先は金が)

この女教師の頭は腐っているらしい。いつか天下りでもするんじゃない
だろうか。教師でそういうのがあるのか知らないが。

「どうしたの？　早く秘密を話してくれないと、赤点よ」

「……………」

ここで「私、男にも女にもなれるんです」なんて言ったら、変態の
極みとして晒し者である。または地下研究所に売られてバラされる
かもしれん。ていうか、こんな目に遭うのも全部会長の阿呆のせい
だ。どういっつもりで四組所属にしゃがったんだ、おい。

「喋りたくないならいいわ」

「……………?」

「座りなさい」

おお、流石は先生だ。生徒を追い詰めるような真似はしないらしい。ゲームと酒が好きな駄目人間だと思っていたが、訂正しなくてはいけないらしい。きっと赤点も冗談なのだろう。

「ナツルちゃんの秘密のこと、もう他の娘に頼んじやったのよね」

そう言うと担任の国語教師は教室の扉を思いつきり開けた。

「どーもー、新聞部でーっす!」

満面の笑みを浮かべて現れたのは、西乃ますみであった。

「…っ!?!?」

(やっぱり悪夢だ、このクラス…)

(やっぱりこのクラスはおかしい。女子部全部もこんな感じなのだろうか)と絶望にくれながらもすみにどこかに連れられていくのだった

*

千紗の熱い抱擁 いや、ここでは拷問ということにしておこう。

彼女いない歴十数年の俺には思い出すだけでも刺激が強すぎるのだ。とりあえず、そこから雫のお陰で脱出出来たのだが、それはそれで新たな問題がドラ エのスライム並に出てきた。

一つ目は、『同じ色なのに敵という奴を騙すためだとはいえ、雫とガチで戦わなければならぬ』とのこと。

二つ目は、『俺に中立の立場になってほしい』とのこと。理由は謎。三つ目は、『理由を説明するため、南家へ』…これが最大の問題かもしれない。また雫がうちに来るのだ。

「…え？ 全然良いことじゃん！変われ！」とか思った人いたら、はい、拳手。俺が直々に説明してあげよう。分かってくれるまで…。でも、俺だってそっち側だったら「なんで！？ 女の子がうちに来たいって言うてんだぞ！変われ！」と怒鳴っているかもしれない。

まあ…それはさておき、これには幾つか問題がある。まず上げられるのは、俺の今の姿だ。男の姿に戻ってくれないと、家には入れない。そして次だが、もし男に戻ったとして雫は俺と一緒にうちに来る気なのだろうか。「別々がいい」なんて言ったら、それこそ理由を訊かれて。その後は、うん。分かって頂けると信じてるので、ここは割愛。

これが最後だが、咲希（母）は別にいいとして雫が帰るときに俺の家から出てきたことを誰かに見られないか、ということだ。見られたら男子部に俺の居場所はないだろう。雫派の男子共に見付かれれば捕獲からの尋問は間違いない。俺の回答によっては死刑。もし逃げ道があるなら教えてほしい。ハッキリ言っとくと、うちの学校には沙倉そん派か雫派のどちらかしかない。その半分に追われたら無理だろ。これぞリアル逃走中。いや、バ オハザード。

（一難去って、また一難…ってとこか……）

「さて、どうする…」

「…アイフル」

「……………」

俺の気のせいだろうか　懐かしのCMソングが流れた気がしたのだが。それも女の子の声で。回りをみるがみんな授業に集中していた。流石三年生ってとこだ。全く違うことを考えているのは、俺だけらしい。だから、幻聴が聞こえてきたのだ。

「はあ…」

「シワとシワを合わせて幸せ…なーむー　お仏壇の〜」

「……………！」

俺が何か呟く度にCMソングらしきものが聴こえてくる。これは誰かの隠謀だな。そうに違いない。それも、俺が反応すると歌うのを止めやがる。誰なのか特定出来ないではないか。

「母さん…」

授業に集中するのもいいが、誰が俺をからかっているのか突き止めることにした。

「まま、まま、ままどおる〜　ミルクたっぷり…」

「……………！」

今度はさっきより歌わせてから、素早く振り向いてみた。気分的にはダルマさんが転んだ、だ。しかし、誰なのか分からなかった。

(む…なかなか手強いなこやつ……………)

「じらっ!」

「痛っ……」

何か固い物で頭を軽く叩かれた。(なんだ?)と顔を向けると担任の女教師が立っていた。表情からして少し怒っているらしい。

「何事!??って顔してるけど、授業中ふざけている南さんがいけないのよ?」

「…はい、すみませんでした」

「俺は悪くないです」と言いたかったが、実際授業に集中してなかったことには変わらないのでここはすぐに謝った。

「ありがとうつとね…A」

「いやいや、それは関係ないでしょ」

「……………」

違う意味で教室中が静まりかえった。どうやら俺の「ツッコミ」の声が大きかったのかも。

「南さん……………」

「は、はい!」

「ここを解いてもらえるかしら」

「え……」

クラスで一番馬鹿な俺が一番集中しなくてはいけないのに、ふざけていたのが先生の勘に触ったらしい。自分としてはふざけてはいない。さつきから俺の反応を見てはCMソングを歌うやつがいけないのだ。

黒板に書かれている問題を見た。

(…うん、全く分からないな)

積分ってなんだ？ってとこ。二年で習ってないものをいきなり解けてというのが間違いなのだ。文句なら零に言ってくれ。

そんな愚痴を心の中でこぼしている時だった。

「先生」

そんなに大きな声ではないが、クラスの空気に緊張感が走ったのが分かった。まあこれもケンプファーのおかげ。男の俺だったら気付かないレベル…というより今頃爆睡中だろう。

自慢じゃないが寝る気になったら、5分で夢の国にいける。この5分ってというのは寝やすい態勢を探すのに時間がかかるからだ。

「問題文が間違ってます」

「えっ？ あ、はい そっ…ですね。すみません」

「はい」

(教師なのに生徒に敬語を使うって…どんだけ)

というより、ただの間違えの指摘なのにここまで低姿勢になるか普通。

逆にこの学校の零の立ち位置が気になってくる。生徒会長って立場

だけじゃない気がする。もしかして、学院長の娘とかではないだろうか。それなら全て合点がいく。要領が良くて頭がいいのも。そして、この権力もだ。新人教師だったら、平謝りでもし始めるんじゃないか。

急に雫がこつちを見てきた。俺は急いで目をそらす。

「楽しそうね。あとで何を考えてたのか教えて頂けるかしら？」

「……………」

誰に言っているのか分からない低を装うことにした。

「無視するの？」

まだ何か俺に対して言っているみたいだが、聞こえなかったことにした。別に無視ってわけではないとだけは言っておこう。意識はそつちいつているので。

「そう」

「……………」

(やっと引いてくれたか…)

これ以上女の俺は目立ちたくない。ホントだ。昔から目立つのはあんま好きじゃない。どちらかと言えば大人しく過ごす方がしように合うつて思ってるくらいだ。

だけど、俺の考えは甘かった。やっぱり雫は三國志に出てくる諸葛亮とか司馬懿並みに策しだった

「あら、春華さん教科書忘れたの？ 先生、見せてあげてもいいで

すか？」

「あ、はい。そうしてあげて下さい……」

「はい……？」

急な雫の申し出でまた女教師は、萎縮した。

ガタガタ、ガコ

机と机がぶつかる音がした。

「え？」

俺の頭がそれを理解するまでには時間がかかった。なんと雫か机をくっ付けてきたのだ。

周りからは“教科書を見せてあげる優しい雫”と見えるかもしれないけど、俺から言わせてもらえばこれを口実に近付いてきた尋問官にしか見えない。

雫 いや、尋問官は早速訊いてきた。紙で。

『何を考えてたの？』

「別に大したこと考えてねえよ」

前を向いたまま話す。雫は器用に板書しながら話を続ける。

「じゃあ、話せるわね」

雫はどうしても俺の考えていたことを聞きたいらしい。本当に大し

たことはないのに。

まあ、俺が頑なに話そうとしないことが原因なのだろうが。

「放課後のこととか。雫さんの権力についてかな」

「ふーん。それで私をさん付けする理由は？」

「それは　って今の話と関係なくね？」

「そうね。でも、そこだけ敬語使われるとむず痒いのよ。　いつそのこと、そこも無しにして」

「ん〜確かに敬語ってむず痒いけど…雫さんって感じなんだよね。呼び捨てとか想像つかん」

「そついうものなの？」

「まあ歳上だし、生徒会長だし。」

「それならあなたはタメ語じゃない。　それに生徒会副会長でもあるわ」

「じゃあ、敬語に統一しろと？　敬語とか疲れるんだよね…」

「統一しろと言ってるわけじゃないわ。　タメ語なのにさん付けで呼ばれるのがむず痒いの」

（ん〜雫の言ってる意味が分からん。　どう捉えても筋が通ってないというか…）

とりあえず、俺のイメージしていた彼女と違う。　何でも理論上での

話をするかと思ったら、意外と矛盾してる話をすることもあるらしい。

「勝手に理想像を作るのは好まないわね」

「はい、すみません」

どうやらまた心を読まれたらしい。表情に出さないように努力していたが、やっぱり駄目だったみたいだ。もっと意識しないと。

「ここは気合いを入れるところではないと思うけど。まあいいわ。さっきのことは忘れて」

「なんで?」

「なんでもよ」

うーん、女の子の気持ちというものだろうか。いまいち分からん。今度、ジユウサツイタチにでも訊いてみようかな。そんなこんなしているうちに数学の授業が終わった。

「ああ、疲れたあー」

(そろそろ、男子部の方に行かないと出席率がヤバそーだな)

「ん?」

ふと見ると袖が赤く光っていた。どう見てもこれは男に戻るサイン。つまり、念願の男なのだが

「このタイミングがよ…」

まだ光り始めたばかりなのか、点滅するスピードが遅い。これが速まってくると変身が解ける。だが、場所が悪い。ここは女子部だから急に男が現れたら大変なことになる。

(クソッ！…せめて生徒会のバッチがあれば…)

そう、男子または女子が相手側にいるときは通行書が必要なのだ。生徒会というなら、それがバッチだ。だけど今はない。

「とりあえず外に…」

急いで教室を出る。何人かの女の子にぶつかりそうになったが、持ち前の運動神経で回避した。

てか、「ごめんね！」と言ったのに「チッ…避けられた」ってどういうことだろう。俺は何かしたのだろうか…ちよつと不安になる。そんなことを考えている余裕があるのも目的地が決まっているからだ。今、向かっている場所は図書館。前回もここで何とかやりすごした。流石に二度目なのでもうパニックになつたりはしない。

チラッと腕輪を確認すると、まだ点滅スピードは速まっていない。

(これなら…余裕だな。スキップしてても間に合うだろう。)
と思った瞬間、パツと辺りが輝いた。眩しくて目を瞑る。

「…誰だよ、眩しいなーってな…」

鏡で太陽光を集めて光で遊ぶってやつを覚えているだろうか。よく小学校の時にふざけてやるやつだ。それをくらったとばかりに思っていたが、違った。

胸という女の子特有の双丘が段々となくなっていく。どうやら山を切り開いて、新しい住宅地でも作られるみたいだ。

それともアダムが…いやイブだったかな？とりあえず怒って俺の胸

を消し去っている途中なのだろうか。どんどん小さくなっていく。服は粒子と化して空気中に散ったあと、また俺の身体に戻ってくる。

「って、何冷静に観察してんだよ！ 今はそれどころじゃ…」

声も女の子の声から男の低い声へと変わっていく。

聞いててヘリウムガスみたいで、面白いなと思ってしまった自分が憎い。

（今はそれどころでは…）

「どうしよう、まだ女子部なのに…男に戻っちゃった……」

さっきの光は変身が解けたときのものだった

*

「では、ナツルさん。次はプライベート関係の質問いきますねー」

俺は今新聞部の部室にいる。なんで授業中にそこにいるんだ、って？それはますみに連れ出されたからだ。いや、別に合い挽き 間違えた。逢い引きで授業を抜け出したってわけではない。担任に俺は売られたのだ。因みに言葉のあやとかではなく、ガチにお金で本当にどうなっているんだこは。しかも、こいつはさも当然というツランしているし、クラスの連中も俺が連れていかれる時、笑って手を振ってやがった。

思い出せば思い出すほど、ふつふつと不満が沸いてくる。

「あー、わたしの質問聞いてますかー？」

とますみが訊いてきた。

おっと、今はインタビューの途中なのを忘れてた。なるべく早く答えないと、デタラメなことを書きそうで怖いのだ。

「ごめん …なに？」

「付き合っている人はいますかー？つてとこなんですけど、ここはてきとーに書いときますねー」

「え…ちよっ……」

「止めるってことは誰かと付き合ってるんですかー？」

「…いない」

「へえーそうなんですかー。 ナツルさんならたくさん付き合ってたそうなんですけど、違うんですかー？」

「…別に」

なるべく素っ気なく告げた。付き合っていないのは本当だ。好きな人ならいるが、ここで言ったら話しがややこしくなる。

「素っ気ないところもカッコいいですけど、それだと…何人かはいるってことになりますねー」

ますみは「メモメモ…」と呟きながら、メモ帳らしきものに何かを書き始めた。

（やばい…なんか誤解してる！）

「いや…付き合ったこと……ない」

俺は急いで訂正に入ると、彼女は「ええー！？信じらんない！それは嘘です！」

「ほ、本当に…付き合ったことはない……」

（く、くそ…こんなところでカミングアウトするなんて……）
まさかの女の姿でない歴年の数　を語るとは…穴があったら入りたい。

「じゃあ告白されたことはあるんですねー。誰ですかー？」

「……………」

（いらないうちで頭が回るな…）
ていうか、こいつはプライバシーという言葉を知らないのかもしれない。彼女ならベルリンの壁でも簡単に越えられるんじゃないだろうか、とそう思えてくる。青い猫型ロボットがいたなら、タイムマシーンを借りてその時代にデリバリーしてあげたいものだ。あつという間に壊してくれるはず。

「ふーん」

俺の反応を見たますみは、不敵に笑っていた。

（ぬ。こいつもしかして、何か知っているのか…？）

「ナツルさんって、綺麗ですよねー。女の子にモテそうなタイプって感じー？もしかして、最近女の子から告白されてませんか？」

「……………」

背中に汗が噴き出した。

この前にいる女の子は、妙に確信ありげな感じで訊いてきた。

（俺と沙倉さんのことは、紅音と会長、それにぬいぐるみたち以外は、誰も知らないはず。なのにこの態度はなんだ…？）
ただのはったりなのだろうか。

「どうなんですかー？」

「……なんのことか」

「ナツルさんが、女の子と歩いているところを、見たって人がいるんですけど　それも二回も」

「なんだと」と言おうとし、寸前で思い止まった。それこそ嘘だ。沙倉さんとのデートは誰にも見られていない。冷静に考えてみれば、女の俺が女の子と一緒に歩いてたって、別にどこもおかしくない普通のこと。ただまずみは釜をかけてるだけのはずだ。

「その女の子たちは、二年と三年らしいんですけどー」

バッチリ思い当たる節が幾つかあるが、はったりだ。これも、きつと。

「ナツルさん、復学したばっかでそんな噂が流れたら、大変なんじゃないんですかー？」

多分大変だ。委員長さんに副委員長さん、会計さんと揃って腹が黒そう。何かと弱味を突いてきそうだし、担任に至っては露骨に賄賂＝金という、方程式を完成させてせびりそう。クラスでの見方

は、弱気モードの紅音だけときている。
自分の運命を容易に想像出来るが、だからといってペラペラと喋る
のも賢くない。

「…付き合ってる女の子とかいない」

「えー、そのハスキーボイスなら、モテますよー。　　はるかさん
とかに」

「え？」と言ったあとに気付いた。俺の考えている友達の春佳とま
すみが言っている“はるか”は違っただろう。恐らく三年の春華のこ
とだ。

聞こえてないことを祈ったが、神様は俺の願いを聞いてくれなかつ
た。

「へえーやつぱり事実だったんですねー。　　高値でしたが、買つと
いて良かったですー」

「買つって…」

「売ってくれるんです。おごずかい稼ぎに」

「……………」

（おいおいおい、なんて学校だ…こんなのが普通に行われているな
んて……賭け事より立ちが悪いぞ）

誰かこいつを捕まえてくれ、と叫びたいがそんなことをしたら、逆
にネタにされそうだ。

「それよりー、誰なんですかー？　　パパッとカミングアウトしてく

ださいよー絶対一面記事にしますから」

「しなくていい」

「いや、もう内容は決まってるんです。謎の復学生瀬能ナツルは実は同性愛者だった!? って見出しで始まる茹です」

「そんなことを言った覚えは…ていうか、それだと捏造じゃ……」

「えー、なりませんよー。わたしの書いた記事が真実になるんですから」

例によって彼女の瞳は純粹であり、自分のやっていることを少しも疑ってない。

「じゃ、病気で長期療養中だったんですけど、ほてる身体を押さえきれずに復学したって、見出しはどうですかー？」

「よくない」

(どうもこうもあるか。全部でっち上げじゃないか…真実が一つも入ってない)

「まあこんな感じで書きますねー」

「ちょ…人の話を……」

「え？ まだなんか秘密があるんですかー？」

「……………」

(なんだろう…話がさっきから噛み合っていない気がする……)

「とにかく載せるのは、やめてほしい…」

「心配しないで下さいー。嘘は書かないってのが、うちの部の謳い文句ですからー」

「……………」

これにはびっくり。最初から最後まで捏造　　というか嘘なのになんだこの自信は。さっきの「わたしの書いた記事が真実になるんですよー」というのも気になるが、これこら書こうとしている記事の方が気になる。

「あ、だったらナツルさんの本当の秘密を教えてくださいるんだったら、記事を止めてもいいですよ?」

そう言つとますみはにやにやし始めた。

「く……………」

もうこの記事を止める手はこれしかないのか、と思つた瞬間だった。大きな音がして、新聞部のドアが開いた。入ってきたのは水琴だった。その後ろには紅音もいた。水琴はジロツと中を見ると、つかつかとやってくる。

「ナツルさんですね。わたし、近堂水琴っていいいます」

彼女は頭を下げた。最初は、(なんで…?) っと思つたが、そうか

女の俺とは初対面か。

水琴は一度挨拶すると、あっさりと俺を無視した。

「ちょっと、ますみ」

機嫌が悪いらしい。少し声のトーンが低い気がする。

「なにしてんのよ、またデマ記事を書くつもりでしょう」

「えー、デマじゃないよ。わたしの書いた記事が真実になるの」

「ならないわよ。それこそデマ記事じゃない。帰るわよ」

水琴はますみの腕を引っ張った。

「えー、許可貰ったのにー」

「うちの担任は怒ってるの！」

そう言いながら、さっさと連れて行く。ますみはなおも文句を言い続けていたが、やがてその声も小さくなって消えた。俺はホッとしてため息が出た。

「…大丈夫ですか？」

紅音が案じてくれる。

「まあね…それよりなんで紅音ちゃんと水琴が？」

「ナツルさんが連れて行かれて…その、どうしようかと思ってたん

です。きつと新聞部だろうと思って来てみたら、近堂さんが

「ふーん……たまたまなんだ」

「はい……。近堂さん、あたしに『手を貸してくれ』って言って、いきなりドアを」

気が短い。ホントそこは水琴らしいかった。

あと少し遅かったら、俺が百合扱いされるか秘密がバレるかのどちらかだったかもしれない。

「ありがとうの一言だな……それより、あいつらはどこに行ったかな？」

「自分の教室だと思いますけど……」

「そうか……」

自分的にはしばらく引き込みもってくれとありがたい。何しろこっちには問題が山積みなのだ。雫と戦った時に現れた新たな敵とか、俺のことを狙ってきた謎のケンプファーとか。この上校内新聞で騒がれては、目だっしてしょうがない。

紅音は心配そうにこっちを見ていた。俺はどうか身近が静かでありますようにと、世界の神々に祈った

十四章『中立』（後書き）

はい、これで原作二刊の第二章は終わりです（。 - - ）
このまま三章に入りたい…と思うところですが、次は完全オリジナル章です。

前みたい番外編って感じではないですけど、1/2って感じですよ。あのおとはもう三章なので、昨日は　って始まってしまっただよ。それだと、春佳とか雫はどうなったの!?!と気になるだろうと思っただのでこれにしました。

はしょったら勿体ないでしょこれわ（。 - - ）（笑）

では次回予告ですが…

女子部のど真ん中で変身が解けてしまった春佳の話& a m p ・雫が南家に行った話

『どっすりゃいいんだ!?!?』

『　　ここでよかったかしら?』

次回十四章と1/2『脱出と訪問』

お楽しみにー（* ^ ^ *）ノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0295v/>

けんぷファー ~もう一つの物語~

2011年11月28日23時59分発行